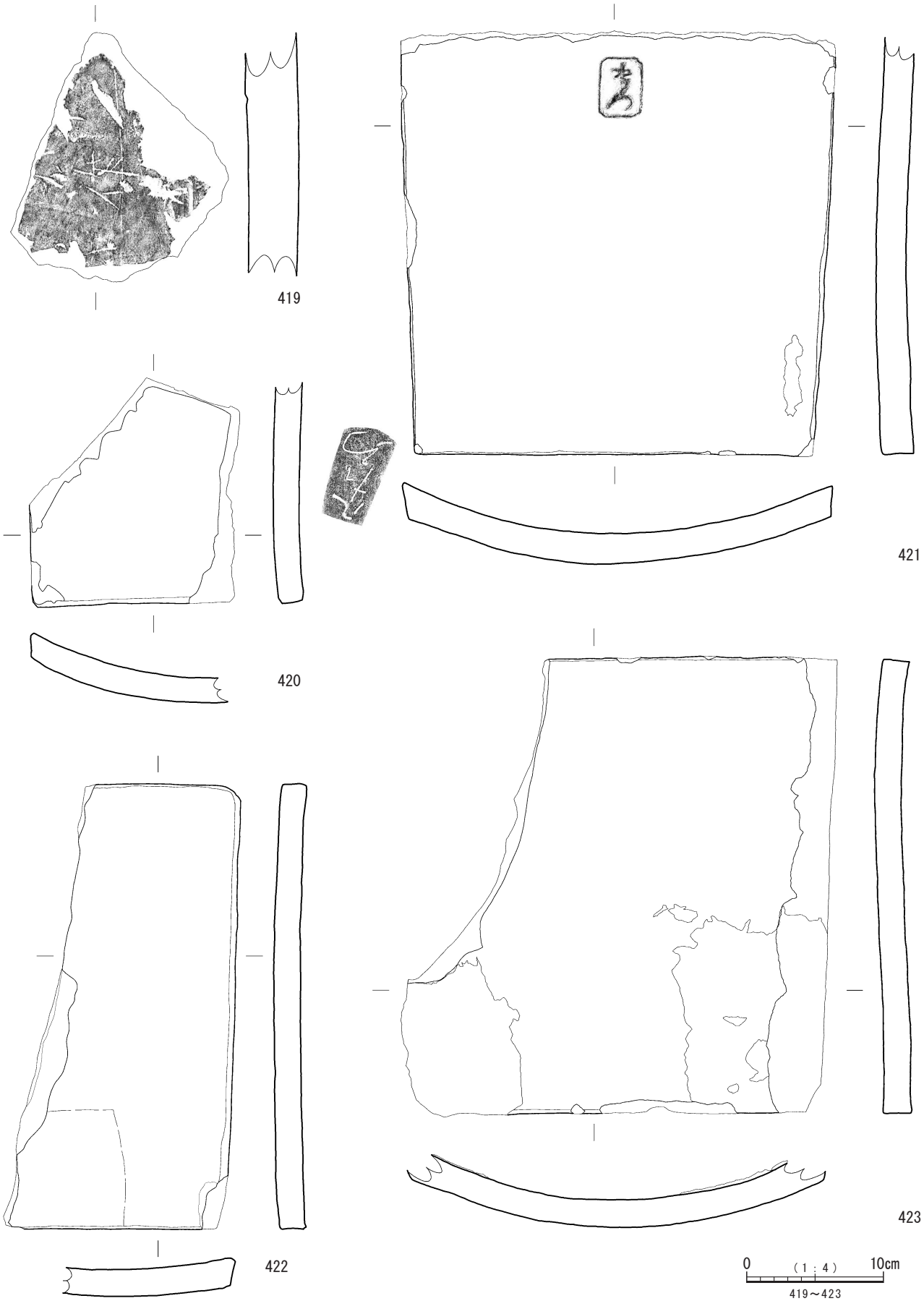
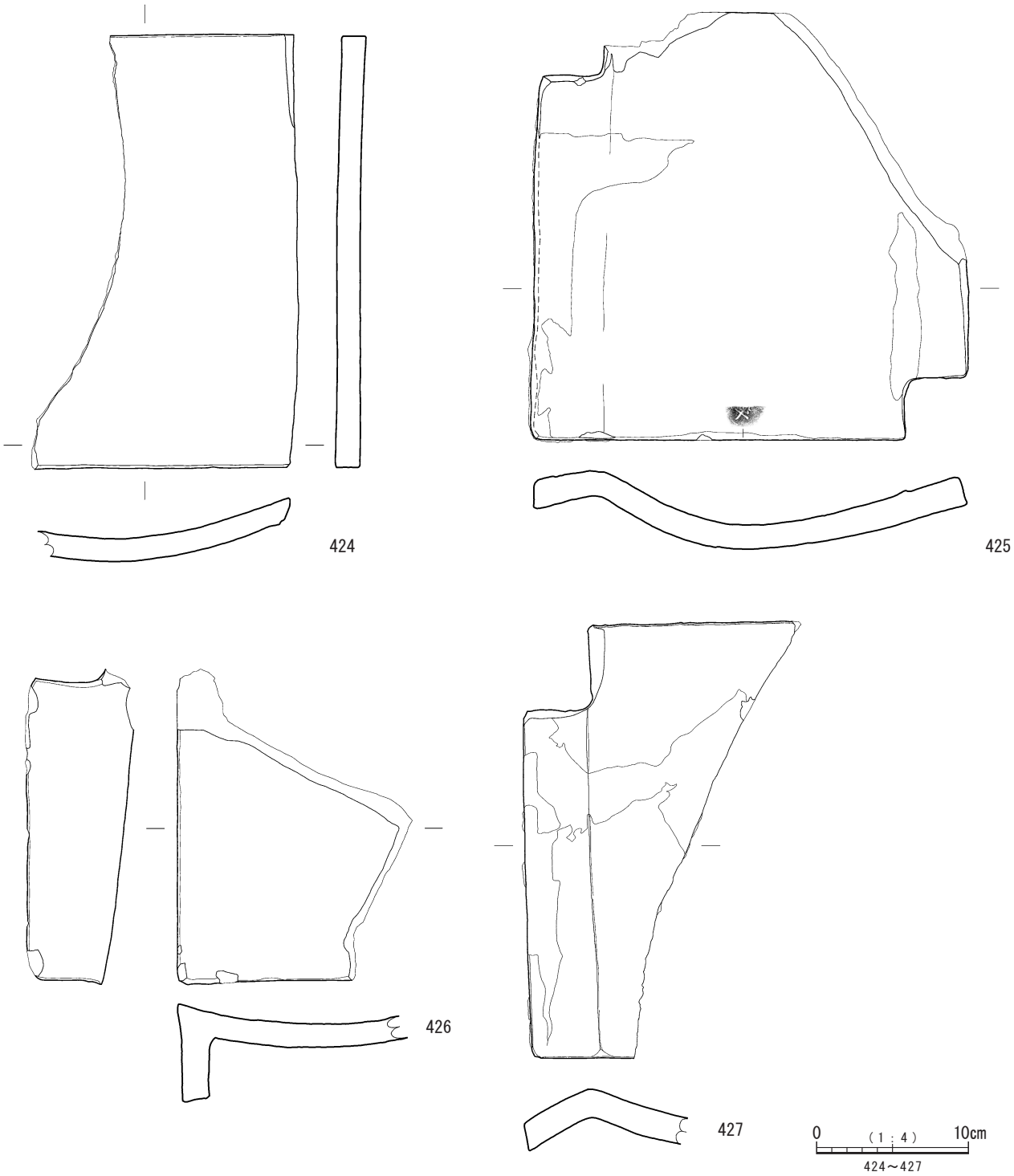
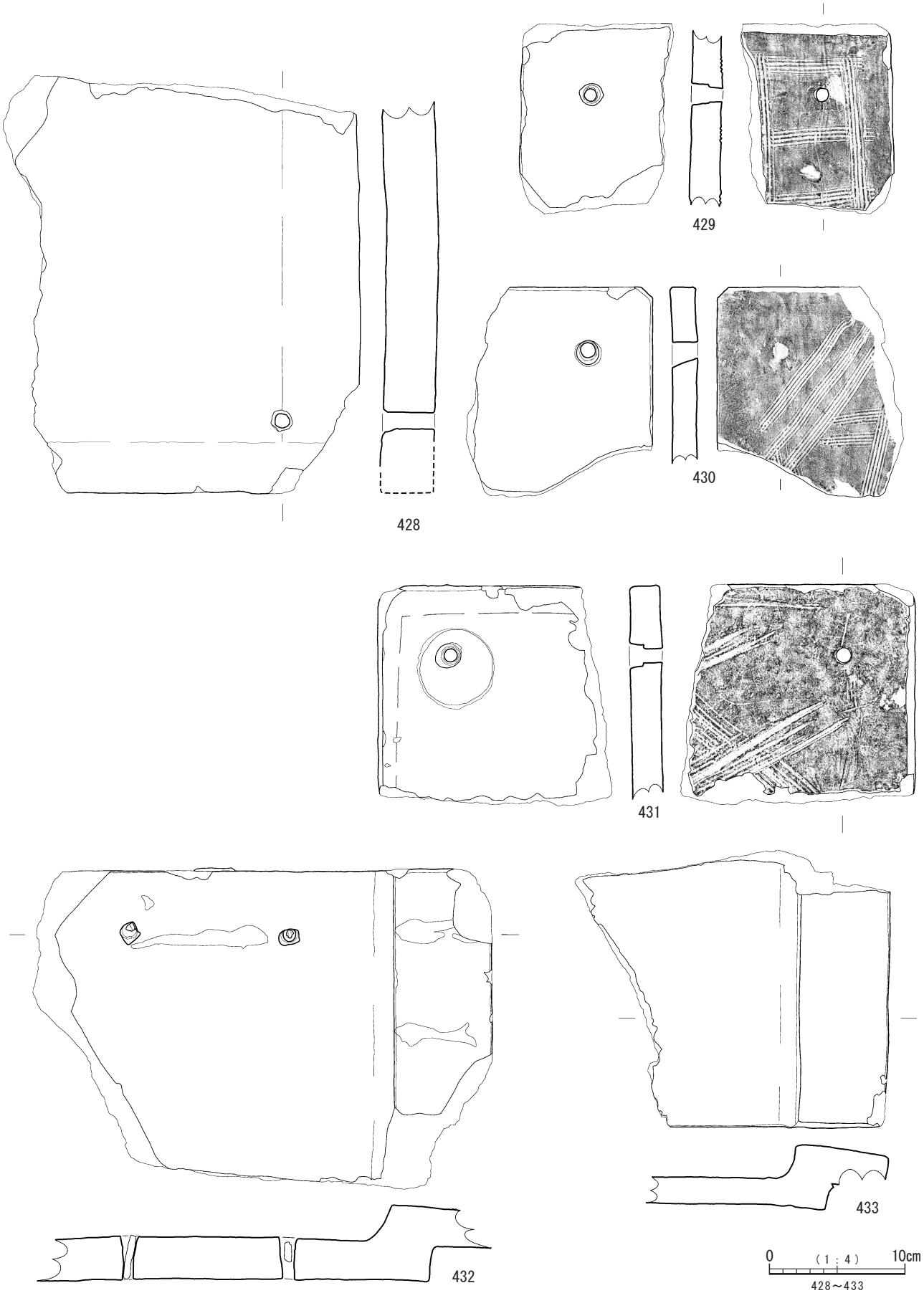


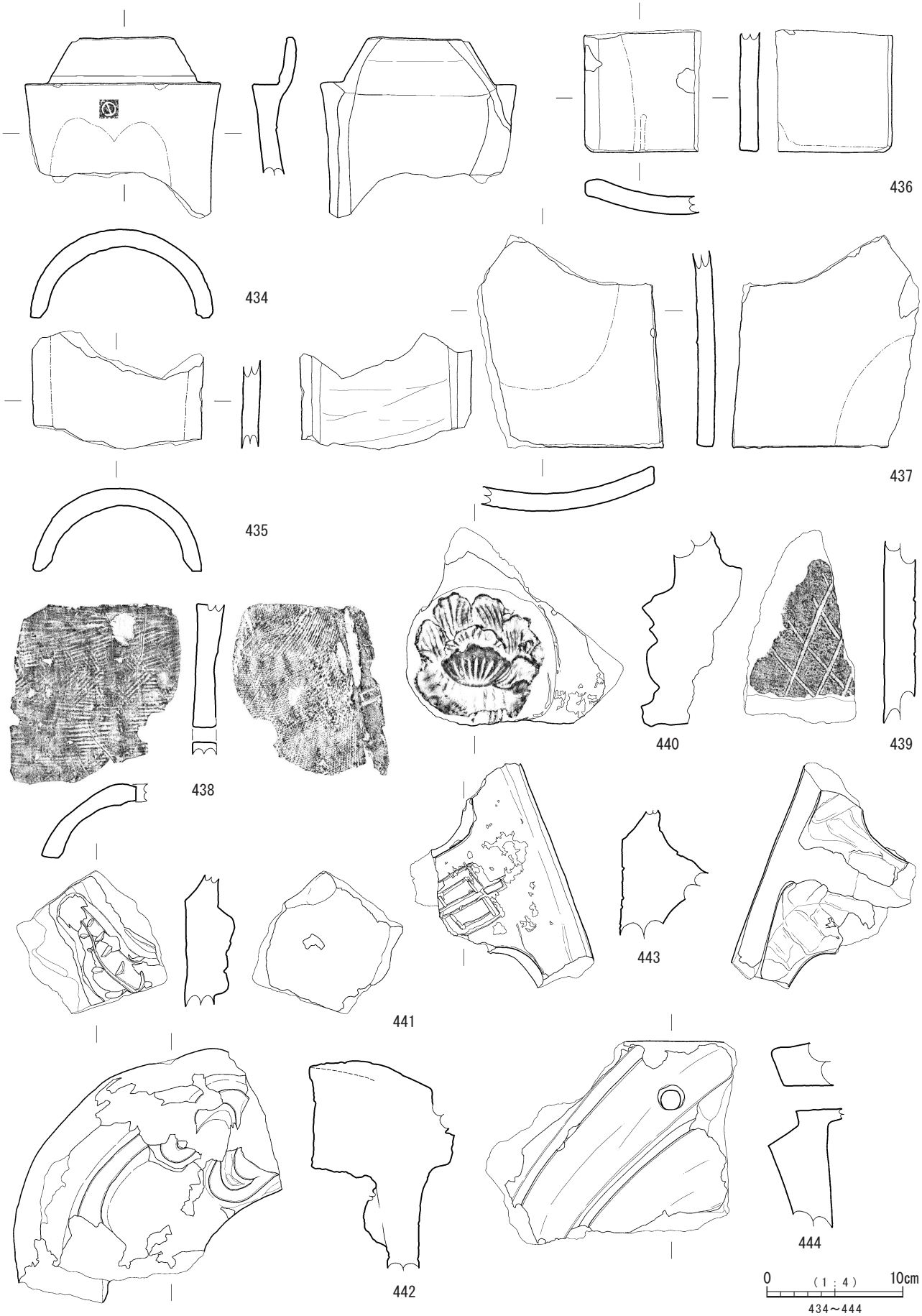
第 89 図　　御角櫓跡　出土遺物 10



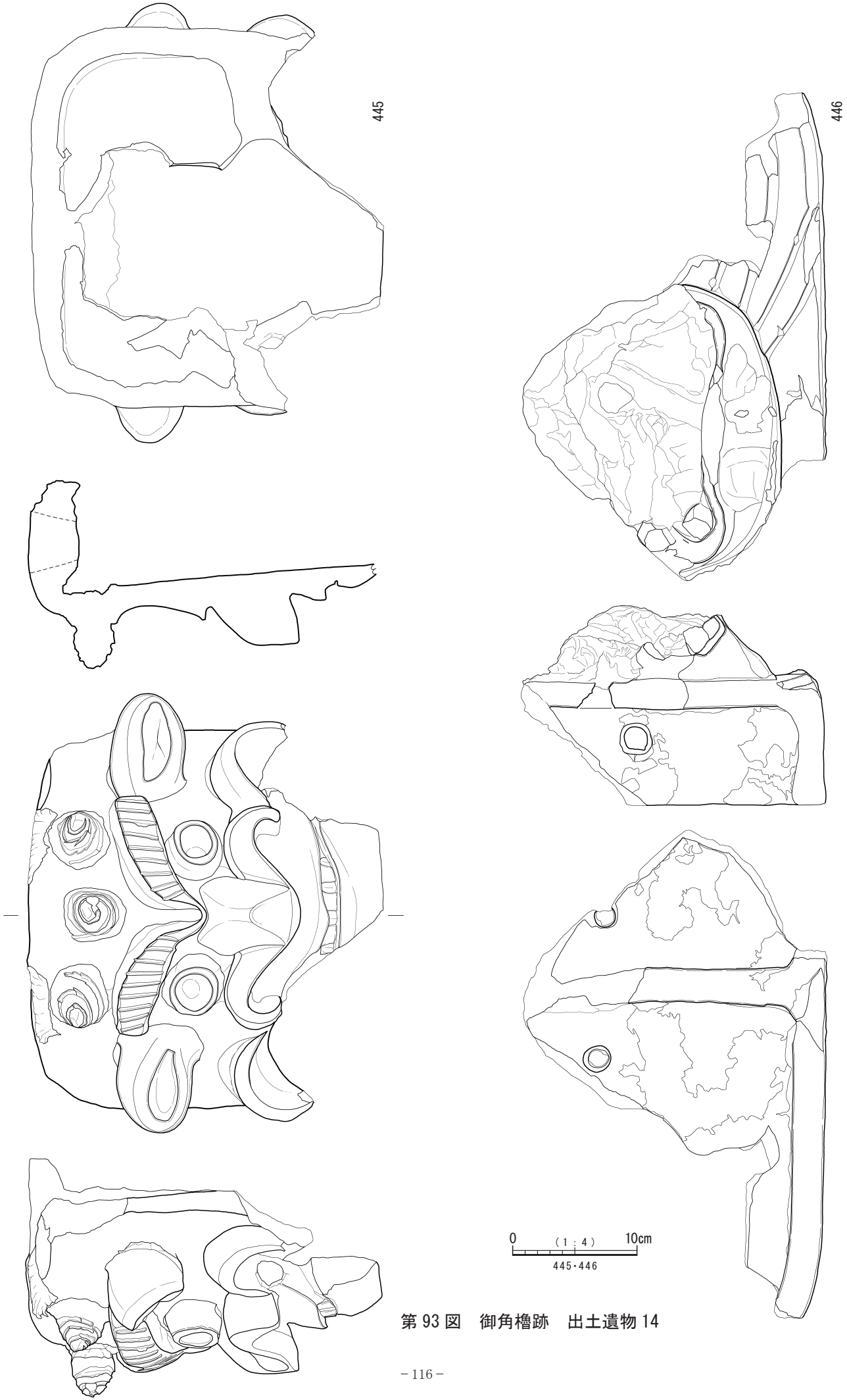
第 90 図　御角櫓跡　出土遺物 11



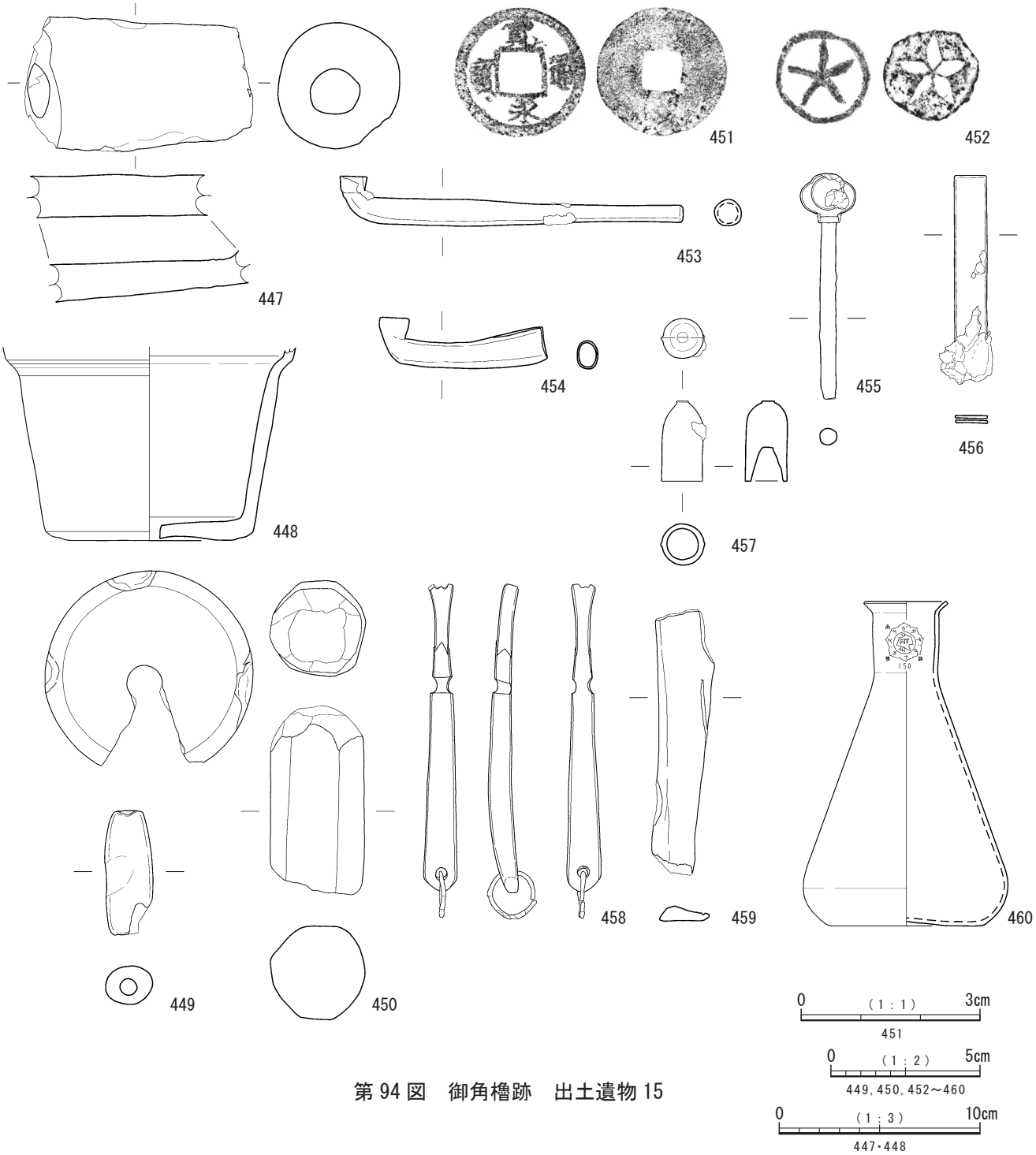
第 91 図　御角櫓跡　出土遺物 12



第 92 図　御角櫓跡　出土遺物 13



第 93 図　御角櫓跡　出土遺物 14



第 94 図　御角櫓跡　出土遺物 15

また，その周囲を巡る排水溝は，当初は周囲を排水溝②が巡っていたが，ある段階で排水溝①に付け替えられたことも確認された。この付け替えの時期に関しては，御庭が造成された天保年間（1830 ～ 1843）以降であると考えられる。また，その基礎構造の中央部が失われたのは，第七高等学校造士館時の建物建設のためであることが確認された。

この調査区でも排水溝②と排水溝③の排水溝が並んで確認され，土層から排水溝③が後から造られたことが証明された（第 74 図）。また，排水溝①～③は，その標高から，全て御楼門側から御角櫓方向に下っており，外御庭に集中して排水されていたことが確認された。また，排水溝④～⑥も外御庭に流れるようになっている。本丸跡の排水は，外御庭に集中していたようである。

排水が集中する本丸跡南側石垣では，石垣を内側から支えるために，石垣内側に石垣を設ける埋設切石積遺構が確認された。

また，御角櫓跡では 17 世紀代の陶磁器が多く出土した。瓦も，長崎で製作された花十字紋軒丸瓦（381）を含む長崎瓦（409 ～ 411）や田ノ浦窯系の陶器瓦（434 ～ 437）など 17 世紀代のものが多く出土している。鹿児島城跡では，陶器瓦や長崎瓦以外に 17 世紀代の軒瓦は，ほとんどみられないことから，これらが築城当初の瓦の中心であった可能性がある。

これは，近世の最終段階の遺構面より下を一部掘り下げており，その造成土中の遺物も含まれることに起因していると考えられる。ただし，出土した多くは近代以降の遺物包含層や遺構の埋土であり，遺構の時期決定に直接的に有効な遺物は少ない。今回は，ほとんどの地点で近世の最終段階の遺構が確認できた時点で調査を止め，下層確認を行っていないが，今後，城内の遺構下の下層確認を行えば，さらなる 17 世紀代の遺構や遺物が確認できる可能性がある。

遺物には，陶磁器や瓦に被熱したものが出土している。また鹿児島城本丸では，元禄９（1696）年の大火，明治６（1873）年の大火で建物が焼失しており，その大火に関わる可能性がある。陶磁器は，17 世紀代と考えられる多くのものが被熱しているが，これは元禄９年の大火の際に被熱した可能性がある。その後，大火の片付け層をも用いて御角櫓の建替や排水溝の設置などで周辺が造成され，これらの遺物はその造成土に紛れた可能性がある。また，瓦は 18 世紀以降と考えられる被熱したものがあり，これは明治６年の大火の可能性がある。

御角櫓跡では，薩摩の竪野系の茶入（321 ～ 340）を中心に多くの茶陶として用いられたと考えられる陶磁器が出土した。このうち，茶入は，図化したものも含めて 50 点以上出土している。薩摩茶入は，唐津と呼ばれる肥前陶器とともに慶長年間（1596 ～ 1615 年）初期から茶会記に記録があり，九州の中でも特に茶会等で用いられた茶陶である。また，高取焼と呼ばれる筑前の陶器（345 ～ 348）や肥後人吉の陶器（349）なども出土しており，茶陶が多く出土している。これらの多くは 17 世紀である。周辺が元禄９年の大火からの建物等の立替で土が動いているとは言え，もともとこの周辺に茶陶を納める，または使用する施設があった可能性がある。御角櫓跡は，明治６（1884）年「鹿児島屋形とその周辺図」では，「御角屋蔵」と書かれたものがあり，そうした茶の湯を行うか，茶陶を収納する建物であった可能性もある。茶陶と考えられるこれらの陶磁器は，大名間の贈答などで用いられたと考えられる。周辺は，能舞台や奥御所院，御庭がある藩主の私的空間であったと考えられる。これらの遺物は，上級武士の暮らしぶりを示す遺物である。

また，瓦では，牡丹紋軒丸瓦（375 ～ 379）の出土が他地点と比べて多い。屋根の上部につける鬼瓦や鳥伏間瓦にも牡丹紋を用いていることから，御角櫓に一定数牡丹紋軒丸瓦が用いられた可能性がある。

また，特徴的なものでは，ドイツ連邦共和国のラインラウト地方の塩釉炻器瓶がある。日本では出島などで近世～近代のものが出土しているが，62 は刻まれた商標からナッサウ公国（1806-1866）が製造した鉱泉の瓶であり，幕末のものである。幕末の薩摩藩の海外との繋がりの一端を示す物である。

７　御角櫓西側調査区（第 95 図～第 103 図）

概要　この調査区は，元禄９（1696）年「鹿児島城絵図控」（第 144 図②）では，調査区の石垣沿いに塀が描かれており，長さが 25 間あったこと，元禄９年の大火で焼失したことが書かれている。

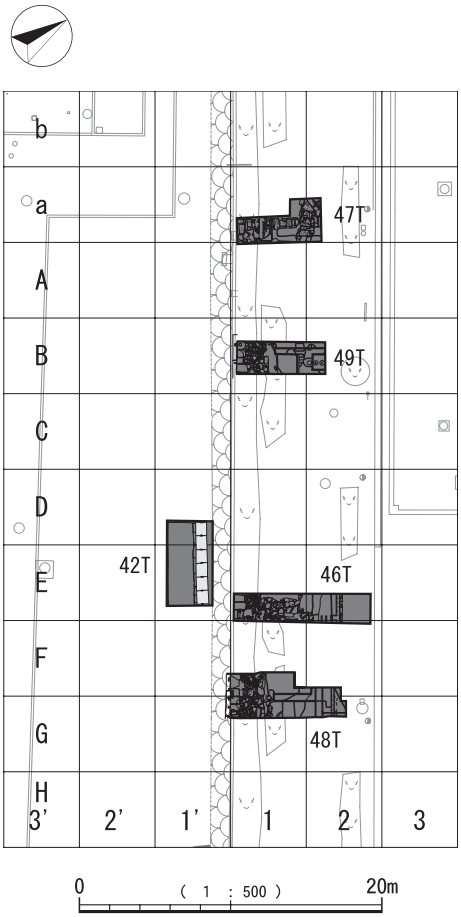
また，石垣内側には，明治５（1872）年「旧御本丸御庭之景」では，築山や御池が写っている。この池は，昭和２（1927）年第七高等学校プール建設の際に一部が鹿児島市の公会堂（現在の中央公民館）に，大部分は鴨池動物園の庭石として使用された。昭和 46（1971）年 12 月，同園が平川へ移転する際，これらの石材は黎明館の庭園用に鹿児島市から譲渡され，昭和 58（1983）年，黎明館西側に移設・復元された。

北側は，明治６（1873 年）「鹿児島城館及びその周辺図」では，本丸から二之丸に降りる階段が描かれている。

今回の調査は，本丸跡南石垣の背面構造確認を目的とし，あわせて御角櫓西側の庭園築山の確認，御庭北端部分の確認，本丸から二之丸に降りる階段上部の痕跡を探ることを目的とした。

46 トレンチ（第 96 図～第 98 図）

概要　本丸跡南石垣の背面構造確認，御角櫓西側の庭園築山の確認のためにＥ- １・２区に設定した。



第 95 図　御角櫓跡西側石垣周辺調査区トレンチ配置図

表土下位に二次的な焼成を受けた瓦溜りと散乱があり，調査区周辺が昭和 20(1945)年の空襲や昭和 27(1952)年鹿児島大学理学部全焼時の瓦礫等の処理場所になったと考えられる。

石垣背面は，第七高等学校造士館のプール建設の際に大きく攪乱を受けていた。

遺構　遺構は，近代のプールと関連遺構を確認した。

第七高等学校造士館プール（第 96 図・第 97 図）

プールは，床面にアスファルトが貼られていた。その外側には，足つきの可能性のある煉瓦が積まれており，その外側に鉄筋入りコンクリートの壁が建っていた。

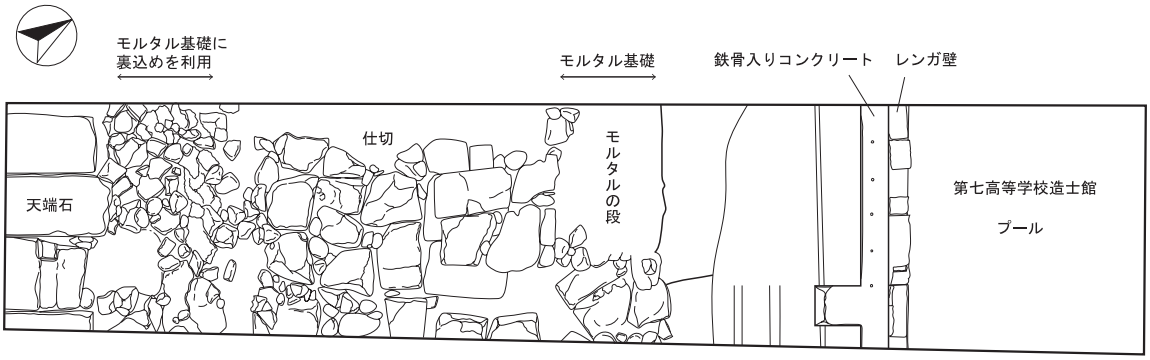
プールの外側では，栗石を入れた幅 90 ㎝のモルタル基礎が石垣と平行に検出さられた。このモルタルベルトから直角に石垣へ延びる大型の溶結凝灰岩の地業があり，裏込めに重なっている。その地業と裏込めにはベルト状にモルタルが付着している。

これらは，昭和 10（1935）年の古写真と照合すると，プール南側中央に石垣とプールを繋ぐ白いベルト状の仕切がある。その仕切は，石垣とプールと平行に走り，中央で二つに区切られている。その区切られた中央には，入口等の可能性もある東西の帯状の施設が見える。このトレンチは，位置的にもこの帯状の施設がある地点にあたると考えられ，地業はこの基礎である可能性がある。

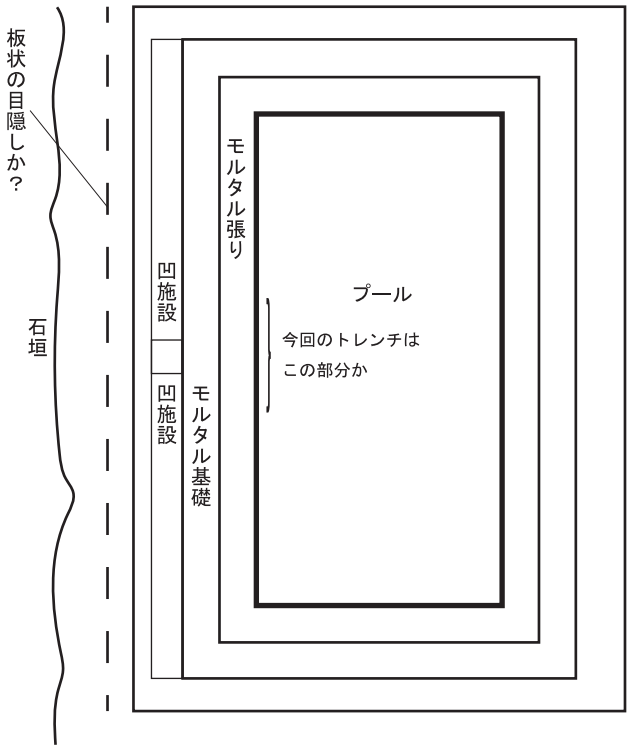
出土遺物（第 98 図 461 ～ 485）

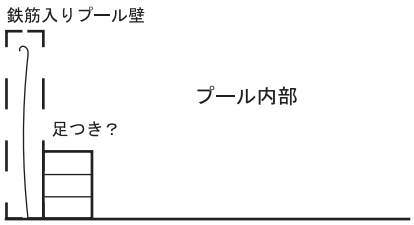
461 ～ 472 は，磁器である。461 は，中国漳州窯系の磁器皿である。碁笥底の小野分類染付皿 E 群である。内面は蛇の目釉剥ぎされる。16 世紀後半。462・463 は，薩摩磁器の碗である。形態は小広東碗。外面は暦紋，内面見込みには円の中央に虫文が描かれる。総釉で畳付は釉剥ぎされる。18 世紀末～ 19 世紀初頭。464 は，肥前系の筒型碗である。透明釉は青みがかっている。内面には貫入が目立つ。19 世紀前半～中頃。465 は，肥前系の磁器碗である。外面に扇などの文様，内面には虫文が描かれる。総釉で，畳付は釉剥ぎされる。466・467 は，肥前有田の磁器皿である。同一個体の可能性がある。外面には唐草文や○×が描かれ，高台内面には宝鼎之珍が書かれる。内面には見込みに松竹梅文，周囲に蛸唐草文などが描かれる。総釉で，畳付は釉剥ぎされる。18 世紀後半。468 は，薩摩磁器の皿である。内面には四方襷文，外面にも文様が描かれる。総釉で，畳付から高台内面は露胎。18 世紀末～ 19 世紀中頃。469 は，肥前系磁器の皿である。内面には，菊草花文，外面にも文様が描かれる。高台内面は蛇の目釉剥ぎされる。19 世紀初頭～中頃。470 は，肥前の磁器大皿である。内面には草花紋，外面にも文様が描かれる。内外面に貫入が目立つ。総釉で，畳付は釉剥ぎされる。高台は両側から削られ，やや内傾した断面三角形になる。18 世紀第 4 四半期から 19 世紀第 1 四半期。471 は，肥前の磁器大皿である。外面には唐草紋，内面には葉脈のある草花文が描かれる。総釉で，畳付は釉剥ぎされる。高台は両側から削られ，やや内傾する。18 世紀第 4 四半期から 19 世紀第 1 四半期。472 は，瀬戸美濃系の磁器端反碗である。外面には算木文，内面見込みには花文が描かれる。総釉で，畳付は釉剥ぎされる。幕末～明治・大正時代。

473 ～ 485 は陶器である。全て薩摩焼と呼ばれる薩摩の陶器である。473・474 は，堅野系の灰色陶胎の端反碗である。総釉で，畳付は面取りされる。473 は，外面に白化粧土のようなものの上に透明釉が掛かる。474 は，内面見込み中央部が窪んでいる。18 世紀～ 19 世紀。475 は，堅野系の灰色陶胎の碗である。総釉で，畳付は面取りされる。高台は小さく，胴部はやや丸みを帯びて立ち上がる。18 世紀～ 19 世紀。476 は，堅野系の宗胡録写の鉢である。外面には文様があるが，内面には文様はない。18 世紀～ 19 世紀。477 は，堅野系の三島手と呼ばれる象嵌陶器の壺か。外面には鋸歯紋などが描かれる。18 世紀～ 19 世紀。478・479 は，堅野系の茶入である。器壁は厚く付け底で，胴部内面下位には，ヘラ状の工具



第 96 図　46 トレンチ平面図　0　(1 : 60)　2m





第 97 図　昭和 10 年頃のプール想定図

によるケズリ痕が残る。左回転の糸切り底である。胴部下位で，底部から立ち上がる部分は，ヘラ状工具で押圧したと思われる細かな平坦面が残る（関分類Ⅰ -1-①）。17 世紀前半。480 は，堅野系の向付である。底部や外面は露胎だが，内面のみ施釉される。本来この上には蓋があり，組み合っていたと考えられる。料理などの内容物を内面に入れ，上から蓋をして利用したか。18 世紀後半以降。481 は，堅野系の陶器の不明品である。壺や香炉などの台であると考えられる。17 世紀。底部付近は露胎。台の内面は施釉されており，蓋物だった可能性がある。482 は，加治木・姶良系の陶器碗である。胎土に茶褐色の化粧土を掛け，その上から透明釉を掛ける。内面は蛇の目釉剥ぎされる。高台内面は露胎。大型の碗である。底部畳付付近はヘラ状工具で面取りされている。18 世紀後半以降。483 は，堅野系の陶器土瓶である。硬質で焼成は良好。外面底部付近は露胎。484 は，加治木・姶良系の龍門司三彩の鉢である。内面は口縁部付近より下は露胎。近代。485 は，苗代川系の土鍋である。ヤマジョカとも呼ばれる。内面は底部下の部分が一条釉剥ぎされる。19 世紀。

小結　第七高等学校造士館のプール遺構を確認し，その構造が明らかになった。

46 トレンチでは，薩摩磁器や薩摩焼と呼ばれる薩摩の陶器が多く出土した。堅野系の製品が多く，向付や茶入や香炉などの台など，茶陶関連の遺物が多い。この遺物の出土傾向は，御角櫓跡とも類似している。

48 トレンチ（第 99 図～第 101 図）

概要　本丸跡南石垣の背面構造確認，御角櫓西側の庭園築山の確認のために当初はG・F- 1 ・ 2 区に 8m × 2m で設定した。その後，表土下に焼け瓦が大量に敷き詰められた層が検出されため，石垣の西側へ 1 m 拡張した。

46 トレンチと同じく昭和 20（1945）年の空襲や昭和 27（1952）年鹿児島大学理学部全焼時の瓦礫等の処理場所になったと考えられる。

第 98 図　46 トレンチ　出土遺物

遺構　遺構は，近世の塀，埋設切石積の痕跡，近代のプールを確認した。

（１）近世

①　塀（地覆石）（第 99 図）

石垣天端には，幅 30 ㎝，長さ 166 ㎝の地覆石が載っている。天端には幅８～６㎝，長さ 20 ～ 12 ㎝の枘穴が，66 ㎝間隔に施されている。ただし，一部には２連になっているものがある。塀の継ぎ目である可能性がある。

また，地覆石の接合近くの内側には，40 × 20 × 20 ㎝の溶結凝灰岩の支え石がみられる。地覆石には，中央よりやや上部に，水平の線条痕がみられる。この水平の線条痕の上下では鑿の方向や調整痕が異なっている。線条痕の上は鑿調整が細かいことから地表面に露出しており，線条痕の下は加工が粗いことから地下に埋まっていたと考えられる。

②　埋設切石積遺構（第 99 図）

石垣天端より内側には，拳大～人頭大の礫の裏込めが充填され，その 2.1m 内側には，御角櫓跡で確認された埋設切石積遺構がみられた。さらにその 60m 内側には，一段低い埋設切石積遺構の下段が確認された。上段と下段の切石積み遺構の間には，裏込めが充填されていた。遺構のそれぞれの標高は，地覆石天端は標高 11.46m，石垣天端は 11.30m，上段切石積天端は標高 10.9m，下段切石天端は標高 10.1m である。

石垣の造成土は，地業の上に近世の造成土が水平に堆積している。また，近世の地表面は，地覆石にみられる水平な線条痕から 11.2m 前後であったと考えられることから，この階段状の切石積遺構は，埋土の中に造られていたことになる。

（２）近代

①　第七高等学校造士館プール（第 99 図）

46 トレンチと同様にプール確認した。その外側では，モルタル基礎が石垣と平行に検出さられた。石垣側では築石の末口の枘穴のある再利用の切り石を置き，上面及び石垣の合端にモルタルを詰め込んでいる。ここにもモルタルベルトの痕跡が伺えられる。

溶結凝灰岩の石垣末口から約 1.3m 北側には，長さ 20 ～ 40 ㎝，幅 15 ～ 20 ㎝，厚さ 10 ～ 15 ㎝の切石が積み重ねてある。この中は河原石が主体の裏込めがみられる。この裏込めには，人頭大の溶結凝灰岩もみられる。この裏込めは中央が約 15 ㎝窪んでいる。46 トレンチと本トレンチで推察すれば，昭和 10（1935）年の古写真の凹部の痕跡と考えられる

出土遺物（第 100 図・第 101 図 486 ～ 506）

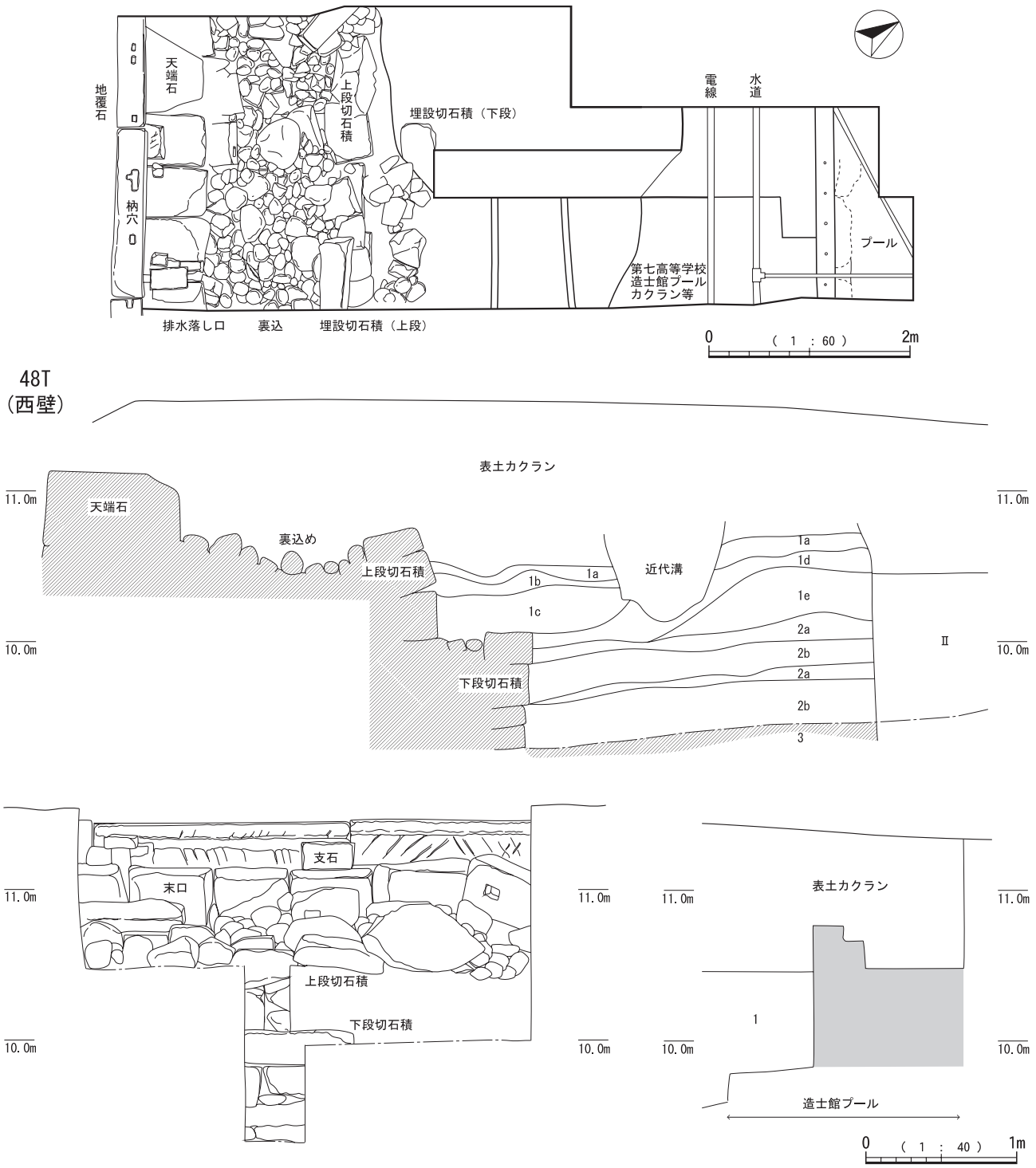
486 ～ 492 は，陶磁器である。486 は，肥前有田の磁器碗である。外面には草花文が描かれ，内面に文様はない。総釉で，畳付は面取りされる。高台は低い。18 世紀前半。487 は，加治木・姶良系の陶器碗である。灰白色の胎土に透明釉をかける。内面見込みは蛇の目釉剥ぎされる。総釉で，畳付は釉剥ぎされる。高台は高くて厚い。18 世紀後半以降か。488 は，堅野系の宗胡録写の鉢である。外面は文様が描かれるが，内面は露胎。18 世紀～ 19 世紀。489 は，堅野系の宗胡録写の土瓶蓋である。上面には，花文が描かれる。内面は露胎。18 世紀～ 19 世紀。490 は，加治木・姶良系の陶器碗である。胎土に黒褐色の化粧土をかけ，その上から透明釉を掛ける。内面見込みは蛇の目釉剥ぎされる。外面は，高台付近は露胎。18 世紀前半。491 は，加治木・姶良系の陶器皿である。薄手。胎土に黒褐色の化粧土をかけ，その上から透明釉を掛ける。内面見込みは蛇の目釉剥ぎされる。外面は総釉で，畳付は釉剥ぎされる。高台内面中央部は円形に削られている。18 世紀前半。492 は，苗代川系の甕である。口縁部を外側に折り返して，口唇部内側を高く外側を低くする。堂平窯 1b 期。17 世紀前半。

493 ～ 496 は，瓦である。493 は，牡丹紋軒丸瓦（B-013）である。瓦当周縁は厚く，文様区から高さがある。瓦当周縁の側面には，強いナデの痕が残る。494 は，連珠三巴文軒丸瓦（A 種不明）である。瓦当周縁はやや広い。瓦当裏側は，周縁に沿って強くナデられており，その部分が一段低くなっている。胎土は灰白色で，表面には雲母が目立つ。長崎で製作されたと考えられる。495 は，大坂式軒桟瓦である。鎌桟瓦である。瓦当正面は面取りされる。瓦当表面は雲母子が目立つ。496 は，大坂式軒桟瓦（A-051）である。瓦当上端は面取りされる。文様区は狭く，瓦当文様は中央に寄っている。

497 は，石製硯である。黒川分類の赤紫系で，現在の山口県下関市で製作された赤間硯と考えられる。背面は一段堀くぼめられ，その中に「乗〇」の刻書がある。

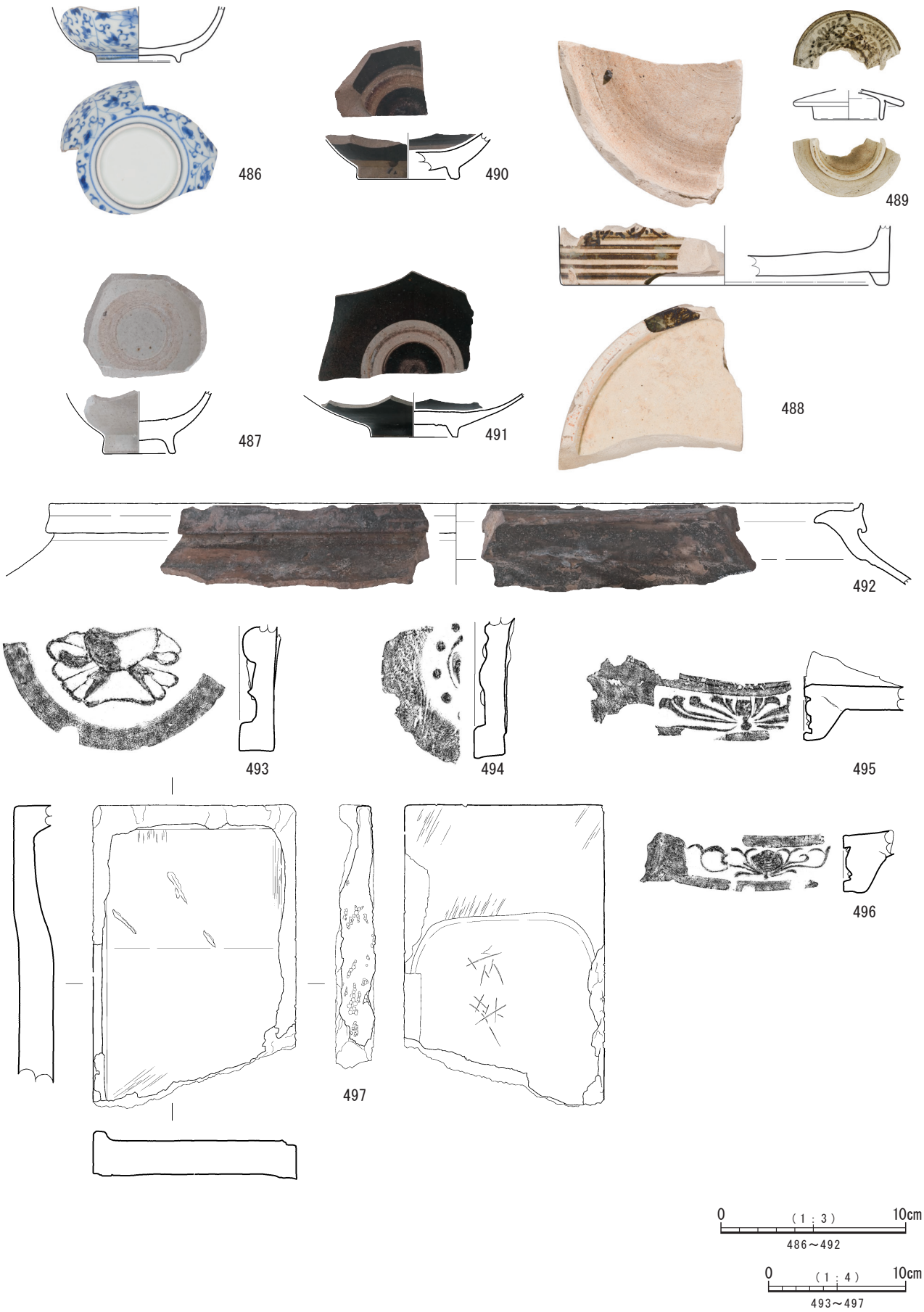
498 ～ 502 は，陶磁器である。498 は，中国福建・広東系の大皿である。内面見込みは蛇の目釉剥ぎされ，中央部には廣の字が浮彫りされている。総釉で，畳付は釉剥ぎされる。17 世紀後半～末。499 は，肥前有田の磁器色絵碗である。外面には円形の文様が巡っている。総釉で，畳付は面取りされる。高台内面には，有田焼と朱書される。近代。500 は，堅野系の茶入である。胴部下位で，底部から立ち上がる部分は，ヘラ状工具で押圧したと思われる細かな平坦面が残る。底部からはやや丸みを帯びて立ち上がる（関分類Ⅰ -1- ②か）。17 世紀前半。501 は，関西の明石系の擂鉢である。大型で，摺目は深い。口縁部下に突帯を貼り付けた二重口縁状の口縁である。19 世紀。502 は，苗代川系の陶器甕の蓋である。暗緑の釉薬が焼成不良によるものかまだらに広がっている。18 世紀後半～ 19 世紀前半。

503 ～ 506 は，瓦である。503 は，小菊瓦（K-2）である。焼成は良好。瓦当面からは三角形に後ろに伸びる。凸面には，縦方向のケズリの痕が残る。504 は，鬼板瓦である。



層	色（記号）	色名	特徴
Ⅱ	10YR4/2	灰黄褐色土	瓦，礫が多く含まれる。プール建設時掘削攪乱
石垣 1a	10YR5/3	にぶい黄褐色土	2a 層ブロック，灰白色粘質土が多く含まれる
石垣 1b	10YR3/3	暗褐色土	砂土。砂粒が粗く，均質
石垣 1c	10YR4/2	灰黄褐色土	砂質土。明黄褐色風化礫を含む。2a 層ブロックを含む。1 ～ 5 ㎜の白色軽石粒を多く含み，砂粒は粗い
石垣 1d	10YR4/2	灰黄褐色土	砂質土。2a 層ブロックを含む。1 ～ 5 ㎜の白色軽石粒を多く含み，砂粒は粗い
石垣 1e	10YR4/3	にぶい黄褐色土	J-1.2 区トレンチ西壁土層排水溝⑤ 8 層と同層。上下に鉄分の沈着が見られる
石垣 2a	10YR5/1	褐灰色土	砂土。J-1.2 区トレンチ西壁土層排水溝⑤ 6 層と同層。上下に鉄分の沈着が見られる
石垣 2b	10YR4/3	にぶい黄褐色土	砂質土。-1.2 区トレンチ西壁土層排水溝⑤ 12 層と同層。上下に鉄分の沈着が見られる
石垣 3			礫層。J-1.2 区トレンチ西壁土層排水溝⑤ 14 層と同層。上下に鉄分の沈着が見られる

第 99 図　48 トレンチ平面図・断面図・土層断面図



第 100 図　48 トレンチ　出土遺物 1

第 101 図　48 トレンチ　出土遺物２

雲や龍の鱗などを表現か。２か所に直径 1.5cm の釘穴が焼成後に穿たれる。505 は，鬼板瓦である。２か所に直径 1.5cm の釘穴が焼成後に穿たれている。組み合わせ式の瓦の脚か。506 は，タイルとして使用されたと考えられる塼瓦である。表面は，縦線･横線で文様が刻まれる。裏面は平滑である。

小結　階段状になる埋設切石積遺構を確認した。これは，排水が集中する本丸跡南石垣の背面を支えるための構造であったと考えられる。

49 トレンチ（第 102 図・第 103 図）

本丸跡南石垣の背面構造確認，御庭北端部分の確認のために，B- １～２区に２×６m で設定した。

この場所は，鹿児島大学医学部解剖学（第一・二）病理学（第二教室）の第三研究棟の東南部にあたる。

石垣の裏込めは，築石の裏まで撹乱され，裏込めの川原石等は抉られていた。石垣の内側は，鹿児島大学医学部関係の掘り込みで撹乱されていた。

遺構　遺構は，近世の塀と埋設切石積遺構を確認した。

（１）塀（地覆石）（第 102 図）

石垣天端には，幅・厚み 30 ㎝，長さ 166 ㎝の地覆石が載る。地覆石には，幅８～６㎝，長さ 20 ～ 12 ㎝の枘穴が，66 ㎝間隔に施されている。この地覆石にも，48 トレンチと同じく，近世の地表面と考えられる位置に線条痕があり，上下で加工痕・調整痕が変わっていた。また，石垣天端石の上部にも，18cm 四方の枘穴を確認した。これも塀の基礎として利用されたと考えられる。

（２）埋設切石積遺構（第 102 図）

地覆石天端から約 2.4m 内側に，標高 10.60m の高さで，石垣と平行に長さ 30 ㎝，幅 10 ㎝の厚さ 18 ㎝の溶結凝灰岩の切石４石を確認した。石垣末口から埋設切石積遺構の間には拳大～人頭大の裏込めが充填される。

このトレンチ付近の近世の地表面は，地覆石にみられる水平な線条痕から 11.5m 前後であったと考えられることから，この階段状の切石積遺構は，埋土の中に造られていたことになる。

出土遺物（第 103 図 507 ～ 518）

507 ～ 513 は，陶磁器である。507 は，肥前有田の磁器大皿である。芙蓉手の輸出用の大皿で，内面にザクロ文が描かれる。総釉で，畳付は面取りされる。高台は，内側に内傾する。18 世紀前半～第３四半期。508 は，肥前の輪花鉢である。外面は花唐草文，内面には四方襷文が描かれる。18 世紀前半～ 19 世紀初頭。509 は，肥前系の磁器皿である。透明釉は青みがかっており，薩摩磁器の可能性がある。外面には唐草文や○×の連続文，内面には見込みに松竹梅文があり，余白をはさんで文様が描かれる。高台内面は，蛇の目釉剥ぎされる。19 世紀初頭～幕末。510 は，肥前有田の鉢である。外面には鋸歯文など，内面見込みには花文が描かれる。総釉で，畳付は釉剥ぎされる。高台は高い。18 世紀後半～ 19 世紀前半。511 は，薩摩磁器蓋である。外面は格子文の中に虫文が描かれる。内面は，合わせ口の部分が釉剥ぎされる。19 世紀。512 は，白薩摩と呼ばれる堅野系の白色陶胎の碗である。高台は厚くて高く，高台内面には，巴文が削り出されている。総釉で，畳付は釉剥ぎされる。18 世紀。513 は，白薩摩と呼ばれる堅野系の白色陶胎の皿である。総釉で，内面は釉剥ぎされる。内外面に貫入が目立つ。18 世紀後半～ 19 世紀。

514 ～ 518 は，その他の遺物である。514 は，土師器坏である。底部からゆるやかに立ち上がり，腰部で折れ，垂直に立ち上がる。底部には糸切り痕。515 は，鬼板瓦である。内面は空洞になる立体的な作りである。組み合わせ式で，側面に雲文などの脚が付くと考えられる。516 は，砥石である。被熱しており，赤褐色に変色している。517 は，平瓦である。薄手で小型である。凹面にはコビキＢが残り，周縁は面取りされる。胎土は灰白色で，表面には雲母が目立つ。長崎で製作されたと考えられる。518 は，銅銭である。新寛永通寶で周縁はすり減る。

小結　階段状になる埋設切石積遺構を確認した。これは，排水が集中する本丸跡南石垣の背面を支えるための構造であったと考えられる。

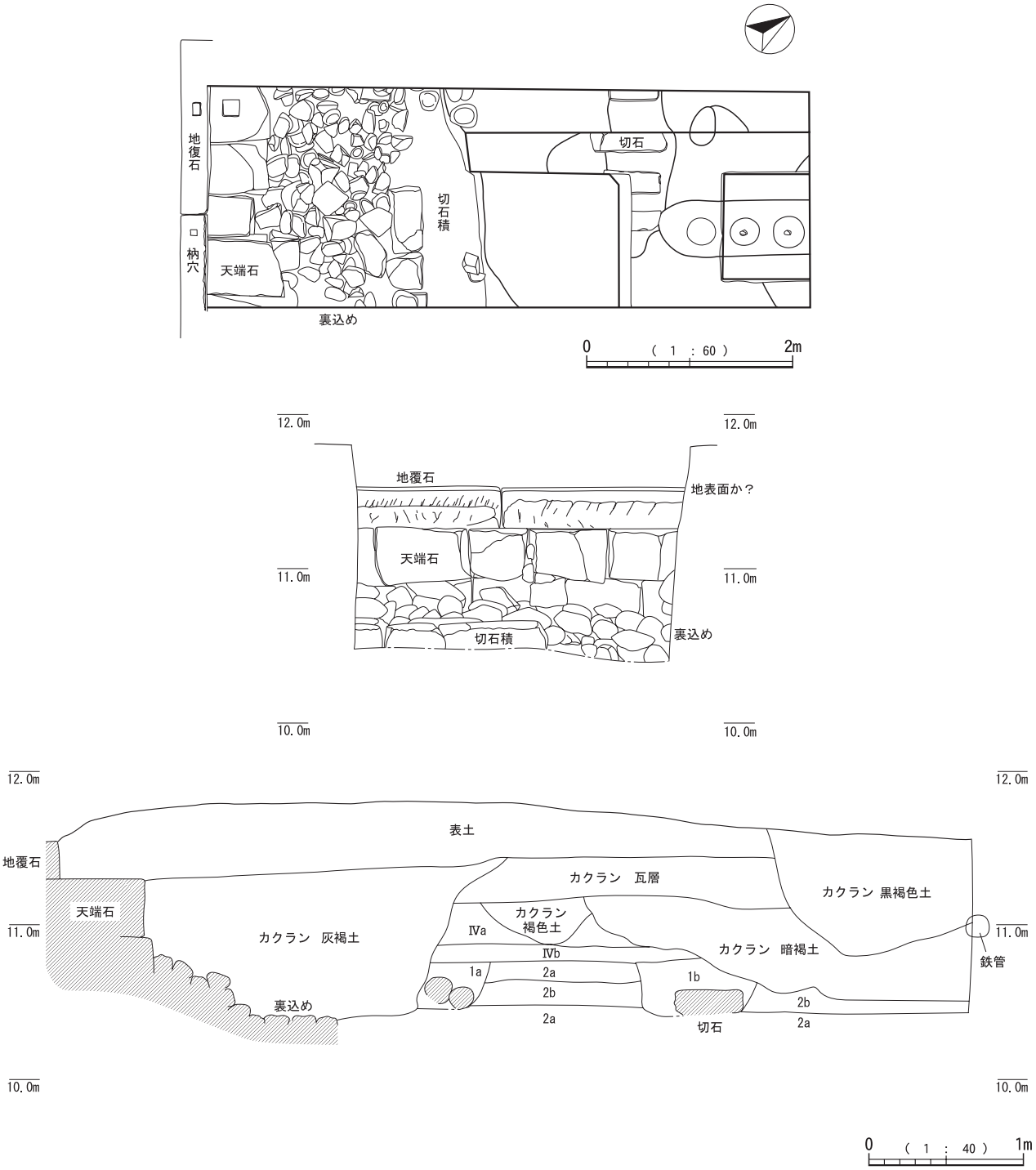
48 トレンチ（第 129 図）

概要　昭和 52 年度の二之丸跡の発掘調査の際，b- １’～４’区で石組（SX- １）の基礎石を確認した（第 104 図）。遺構は堀の一段上に築かれて，基礎石は１～ 1.5m の築石で 21 石，約 13m の距離で石垣状に築かれている。石組背後には裏込めがあり，南端には切石を横に組む。明治６（1873 年）「鹿児島城館及びその周辺図」では，この位置に階段が描かれており，その基礎の可能性がある。

今回の調査は，本丸跡南石垣の背面構造確認，本丸から二之丸に降りる階段上部の痕跡を確認するため，b- １・２区に設定した。トレンチは，5.5 × 3m で設定した。

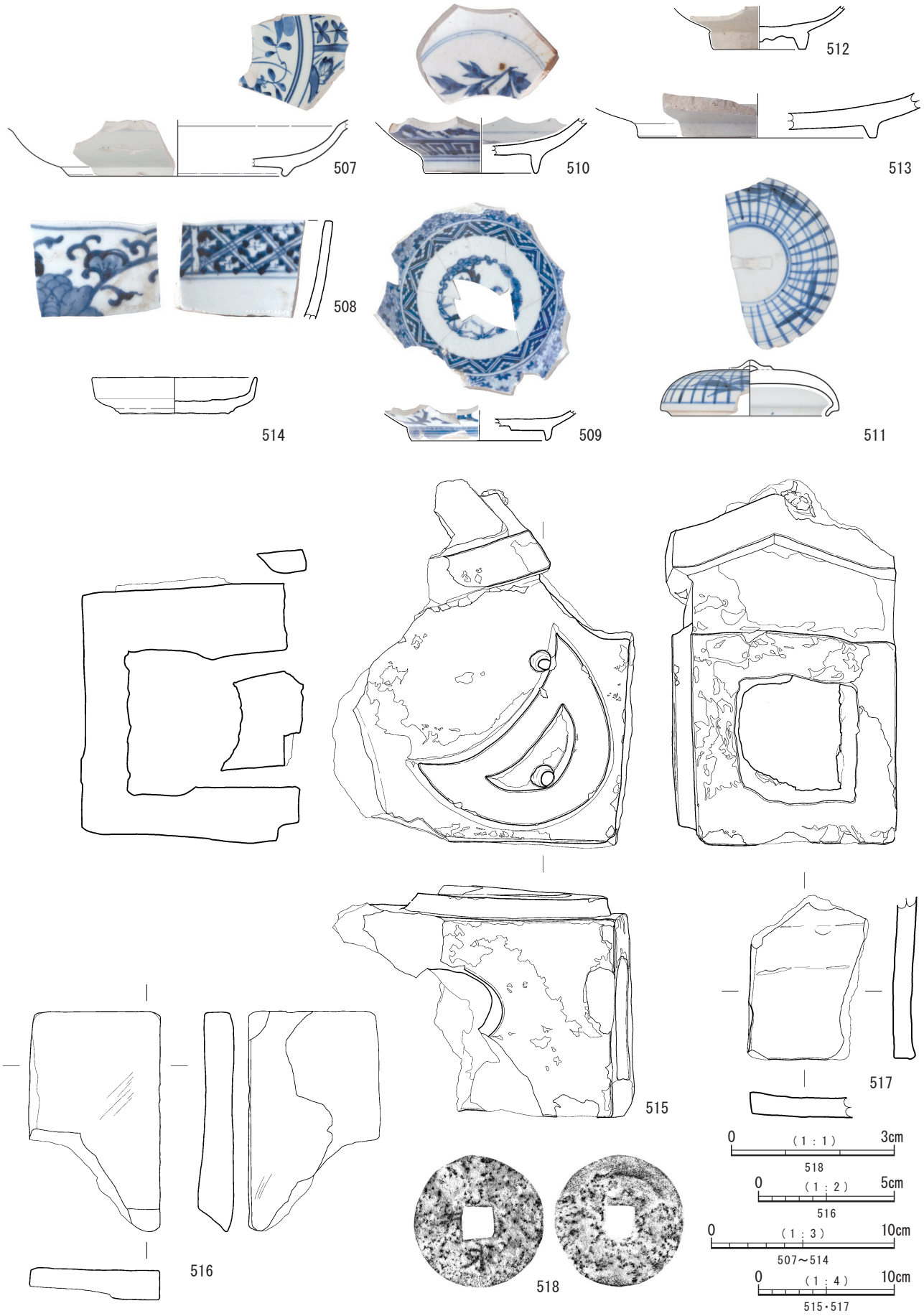
49 トレンチまでにみられた石垣天端上の枘穴付きの地覆石は，このトレンチの約 1m 東で止まっており，石垣は一段低くなり，幅の異なる石積がみられる。トレンチは，石垣が一段落ちる地点の石積の裏側に設定した。また，石垣東斜め下には排水溝①の落し口が出ている。

トレンチの埋土は，表土に植生土が全体にみられた。これは，黎明館建設時の盛土である。その下には石垣側に約１m 以上の大きな撹乱層があり，その下にモルタルが付着した切石がある。切石は，標高 10m50 ㎝で排水溝①を破壊して置かれていた。また，この付近には水道が施設される撹乱層がみられた。トレンチの中央部は上部に撹乱層があるが，近世の造成土を確認できた。トレンチ北部は南側が抉られ撹乱がみられるが，北側は近世の



層	色（記号）	色名	特徴
Ⅳa	10YR3/3	暗褐色土	明黄褐色土（10YR6/6）版築状に積土なる
Ⅳb	10YR3/2	黒褐色土	砂粒の粗い砂や桜島火山灰？などが薄く水平に互層に堆積している
石垣 1a	7.5YR4/2	灰褐色土	円礫が入り，下部では 1 cm程の礫が多く入る
石垣 1b	7.5YR3/3	暗褐色土	1 ～ 2 cm程の礫が多く入る
石垣 2a	10YR3/2	黒褐色土	褐灰色砂質（溶結凝灰岩 10YR4/1）が帯状に入る地業？ 48T 石垣 1b と同じ
石垣 2b	10YR4/3	にぶい黄褐色土	砂質土。均質土

第 102 図　49 トレンチ平面図・断面図・土層断面図



第 103 図　49 トレンチ　出土遺物

造成土がみられる。その近世の造成土の下には暗渠排水溝の蓋がみられる。そのため，この排水溝２列は，土中を通る暗渠排水溝であると考えられる。

遺構　遺構は，近世の排水溝２列，近代の修復された石垣を確認した。

（１）近世

①　排水溝①

排水溝①は，南北方向に直線的に伸びる。約５ｍを確認した。幅は内側が40㎝，側石を合わすと約60㎝になる。深さは約20㎝と浅い。石材は溶結凝灰岩である。この排水溝は，昭和53・54年度調査で確認された排水溝⑩の延長線上にあたると思われる。この排水溝は，本丸跡南石垣の落し口につながっている。

②　排水溝②

排水溝②は，排水溝①を東西に切る排水溝で，「S」字状に確認した。この排水溝は，幅約80㎝前後である。

石材は溶結凝灰岩である。

排水溝②は，排水溝①の底石を壊して接続している。その際，南側の側石はなく，排水溝②の排水が排水溝①の南側に直接流れるようになっている。北側は，排水溝②の側石が，排水溝①の北からの排水を塞いでいる。そのため，排水溝②が造られた段階で排水溝①の北側は機能を終えたと考えられる。

（２）近代

①　石垣

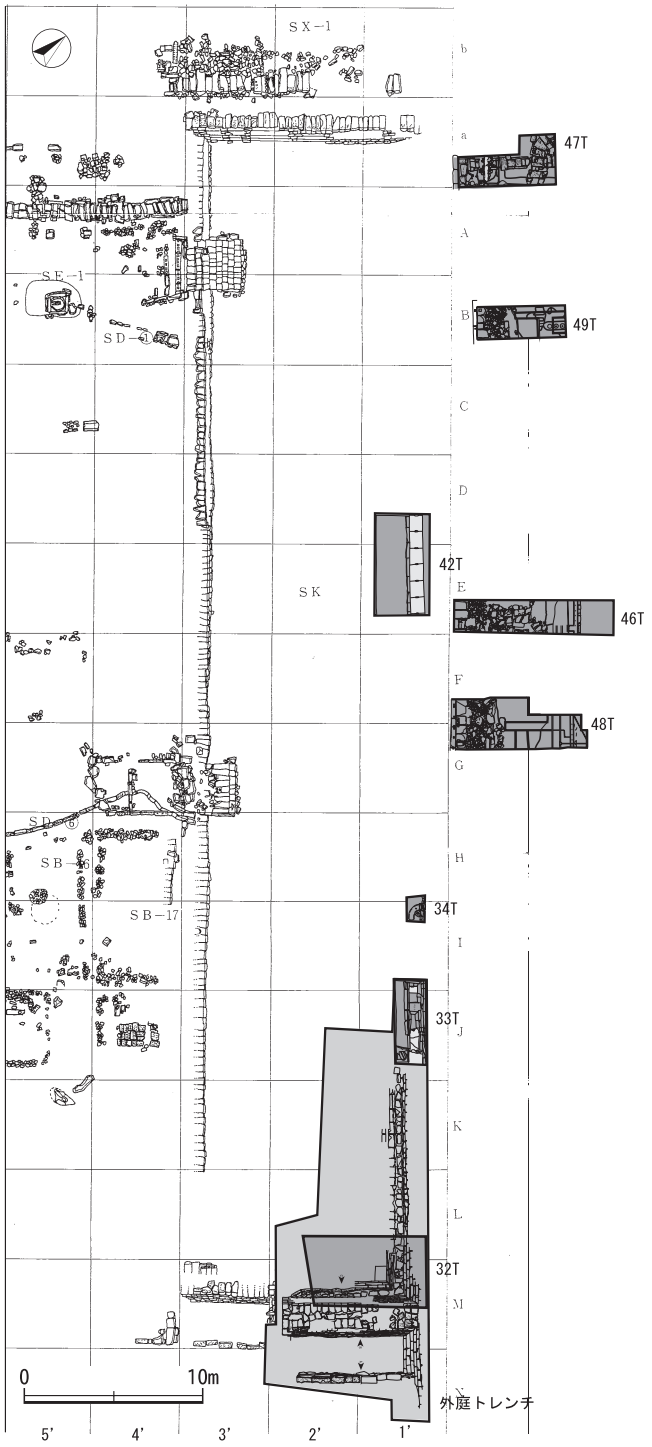
石垣円場には，地覆石は無く，モルタルで接着された切石が並んでいる。石垣天端外側の面は，通常南を向いているが，ここでは，石垣外面を本丸跡側に向けた築石も積まれていた。その下には，大きなコンクリ板が混入している。そのため，このトレンチ周辺の石垣の上段は，近代以降に積み直されたものと考えられる。

小結　昭和52年度に確認された本丸と二之丸の間の階段基礎の石組（SX-１）は，48トレンチよりも西側にある。そのため，今回は，階段は確認できなかった。

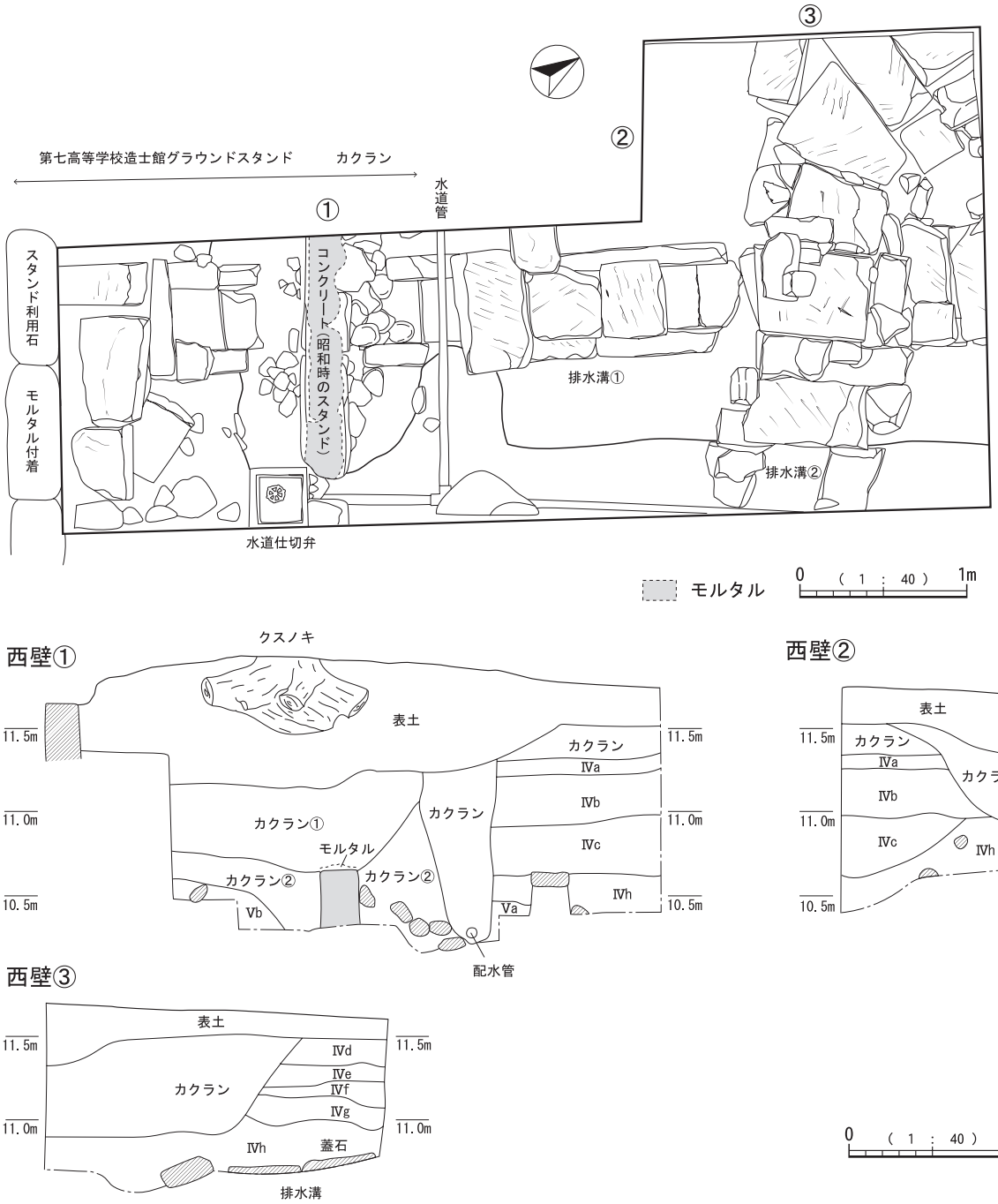
48トレンチでは，近世の排水溝①・②を確認し，排水溝の付け替えが行われたことが確認された。この排水溝の付け替えも，御楼門南側石垣周辺の排水溝の付け替えと同じように，天保年間（1830～1843）以降の御庭の造営に関連する可能性がある。

小結

この調査区では，石垣背面に階段状の埋設切石積遺構が確認された。本丸南側の排水は，外御庭の堀に集中して流れるようになっており，この石垣に集中する。また，この調査区には，御庭の築山があったため，その土圧の負荷もかかってきていたと考えられる。そのため，本丸跡南石垣の背面を支えるための埋設切石積遺構で石垣背面を支える構造になったと考えられる。



第104図　昭和53・54年度調査と今回の調査のトレンチの位置対比図



層	色（記号）	色名	特徴
Ⅳa	10YR 4/3	にぶい黄褐色土	
Ⅳb	10YR3/3	暗褐色土	明黄褐色土（10YR6/6）版築状に積土となる
Ⅳc	7.5YR3/2	黒褐色土	白色軽石粒が多く含まれる。土坑か盛土か不明
Ⅳd	10YR3/1	黒褐色土	
Ⅳe	10YR4/4	褐色土	
Ⅳf	10YR3/2	黒褐色土	
Ⅳg	10YR3/1	黒褐色土	
Ⅳh	10YR4/4	褐色土	砂質土。5㎜程の礫が多く含まれる。排水溝の再整備，再構築時の暗渠フタを覆う埋土
Ⅴa	10YR4/1	褐灰色土	黒漆喰を含む。排水溝側石裏込土
Ⅴb	10YR4/3	黄褐色土	砂質土。石粒は細かい。排水溝側石に面する所は1㎝程の礫が多い。排水溝側石裏込土

第105図　47トレンチ平面図・断面図・土層断面図

８　外御庭跡の調査（第 106 ～第 126 図）

外御庭　今回の調査区である本丸と二之丸の間には，明治６（1873）年に鹿児島城の建物配置等を詳細に描いた成尾常矩による「鹿児島城館及びその周辺図」では，「外御庭」と書かれて堀や蔵が描かれ，「鹿児島城本丸殿舎配置図」（第 145 図⑧）では，「堀」と書かれる。

現在の県立図書館付近は，当初は二之丸の中心であった。しかし，二之丸の整備を進めた第８代薩摩藩主島津重豪によってその中心が寛政４（1792）年に現在の県立美術館がある南側の御下屋敷に移ったことにより，この地に空地が生まれた。そのため，その空き地を利用して整備されたのが外御庭である。

明治６（1873）年「鹿児島城館及びその周辺図」では，「外御庭」の空地に「二之丸御厩ハ久光公御住居有テ御建築ナリ　其稽古所ハ齊彬公不時御呼出諸家武術御アランカ為二御建築也以前ハ空地」と記してあり，絵図には堀の他，「クラ」や「御稽古所」が描かれている。

明治 10（1878）年の西南戦争の際に，二之丸一帯も戦場となり，二之丸の殿舎も焼失した。

この堀は，元禄９（1696）年「鹿児島城絵図控」（第 144 図②），宝暦６（1756）年「薩藩国鹿児島城絵図」（第 144 図④）では，城山から始まり，本丸と二之丸の間を通って，「二折れ」しながら本丸東堀に至っている。堀の北側には石垣と塀が描かれている。「鹿児島城絵図控」によれば，本丸南面の石垣塀の規模は東西に「52 間」，南に「29 間」と記載されており，塀に沿っていたこの堀の長さも東西約 94m，南北約 53m と近い規模が想定される。

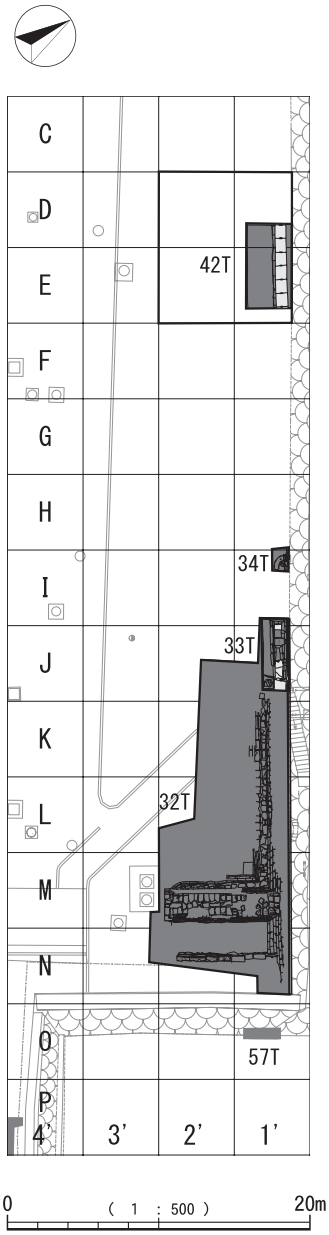
文政５（1822）年「文政五年鹿児島城絵図」（第 145 図⑤）になると，「二折れ」の堀は，折れ部から南側が地中で途切れており，その後の絵図では，この折れ部より南側はみられなくなる。

その後，前述の明治６（1873）年「鹿児島城屋形及びその周辺図」では，堀は外御庭に中で終わっており，堀の西側には本丸と二之丸を結ぶ階段と門が描かれる。絵図への記載から，18 世紀段階で，もともと城山から本丸東堀にあった堀の大部分が埋め立てられ，堀は外御庭の中だけに残ったと考えられる。

外御庭の堀は，明治 35（1902）年第七高等学校造士館の時に埋められている（太田 2021）。

その後，明治 40（1907）年頃の「第七高等学校造士館全図」では，堀自体がなく，当時存在していたと考えられる階段，石垣，石塀等の構造物を示す線が堀の西側に表現される。石垣南端はなだらかな曲線で表現される。

昭和 10（1936）年，昭和天皇の行幸時に作成された「校内御巡覧図」（第 146 図下）には，調査区に「野立所」や観覧席が記されており，黎明館駐車場東端に「昭和天皇御野立所」の記念碑が建立されている。

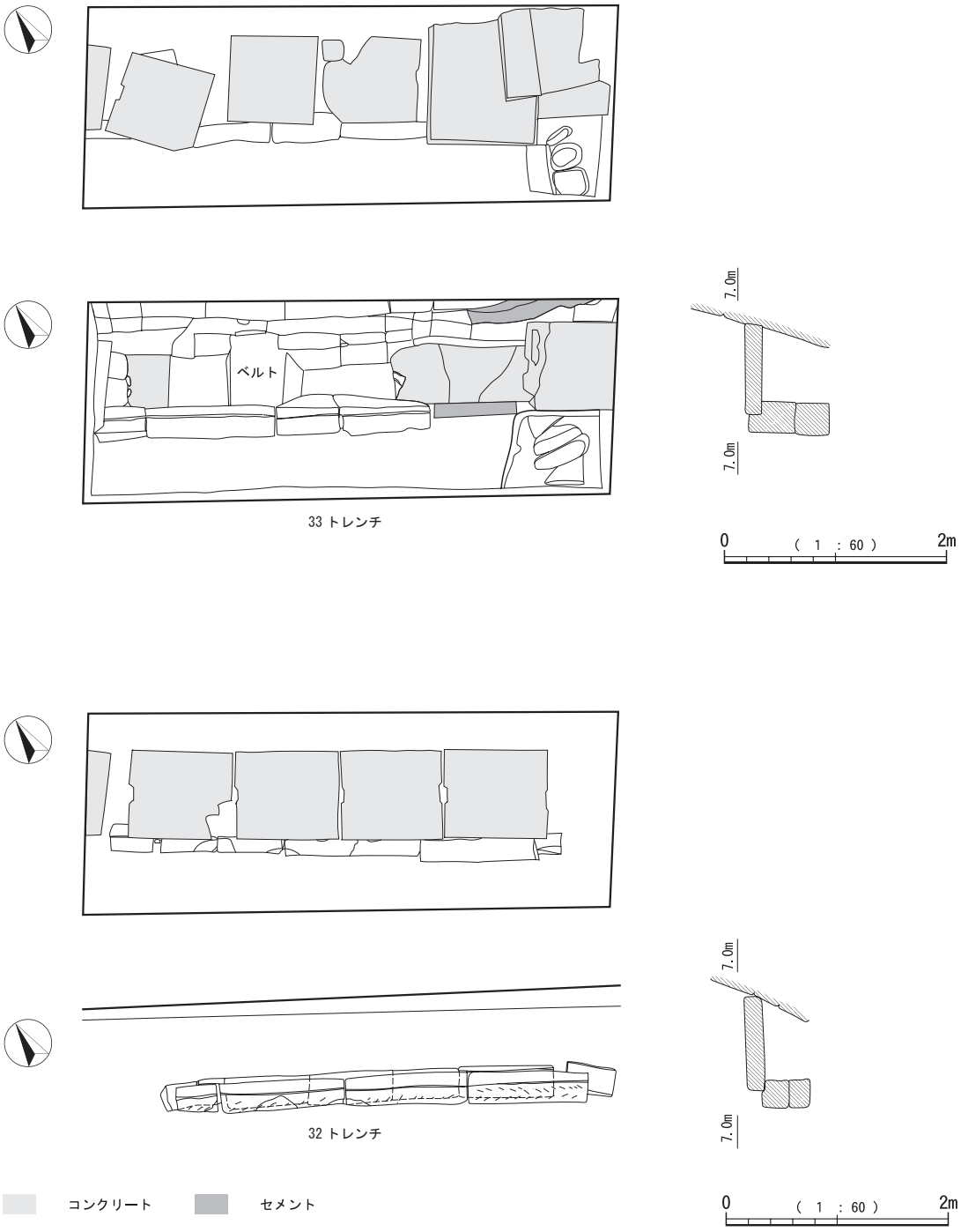


第 106 図　外御庭跡調査区トレンチ配置図

過去の調査　調査区周辺は，昭和 52 年度に県立図書館建設に伴う発掘調査が行われた。調査の結果，社殿，書蔵，外御庭茶屋，溜池などの遺構が確認された。

本丸と二之丸の間では，井堰遺構を伴う堀が確認された。堀は，長さ約 15m，高さ 3m（内犬走状石段 1m），奥行き 3m（内犬走状石段 1m）で，石垣から約 8m に井堰と水抜き穴がある。井堰遺構の閉塞部の間は，約 2m で犬走状石段は設置されていない。また，犬走状石段は，昭和 52 年度の調査では井堰から石垣側までと堀の西端近くに確認されている。堀の南側は階段が２つあり，一つは８段で造られている。犬走状石段はみられない。

概要　今回の発掘調査は，「御角櫓」下部の石垣の変形や孕みの原因や石垣と堀との関係を確認することを目的

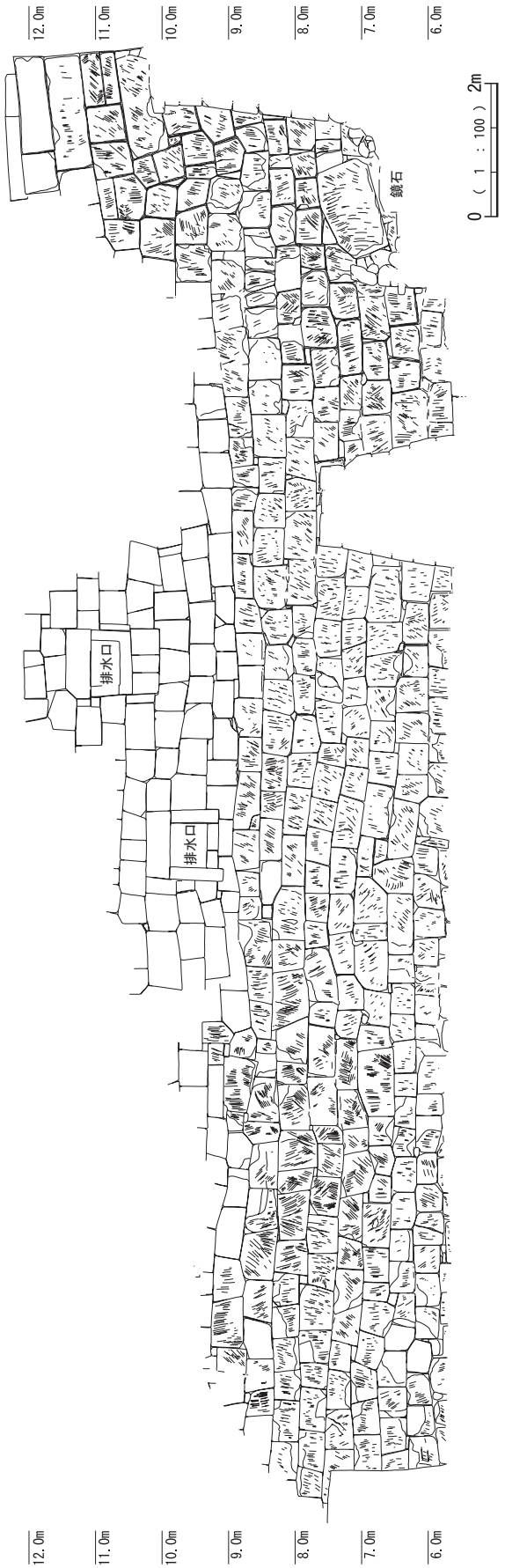


第 107 図　32・33 トレンチ平面図

とし，当初は 32 ～ 34 トレンチを設定した。

昭和 52 年度の調査では，堀の石垣側は発掘されておらず，石垣と堀との関係については確認できていなかった。しかし，トレンチ調査で，堀と石垣は一体となっており，堀の地下構造を確認することが石垣の構造及びその孕みの原因の究明につながると想定されたため，調査範囲をⅠ～N- 1’～3’まで拡張し，石垣の状状況確認と石垣下部構造確認，堀の構造確認のための調査を行った。また，石垣に影響を与える堀の排水機能を明らかにするために，昭和 52 年度の調査で確認した堀と井堰遺構との関係を探ることを目的とした。

また，御角櫓西側で確認された第七高等学校造士館の



第 108 図　33 トレンチ石垣立面図

プールの排水も外御庭跡に流れていたことがわかった。こうした近代以降の排水施設も，石垣の孕み等に影響を与えている可能性があることから，近代以降の排水施設についても調査を行った。

42 トレンチは，外御庭調査区で確認された近代の排水溝の延長と井堰以降から離れた地点での堀の下層及び埋土を確認するために調査した。

外御庭調査区

遺構　近世では，石垣の下部構造や堀と堀に伴う井堰遺構を確認し，近代では，排水溝や第七校当学校造士館プールの排水管と考えられる鋳鉄管を確認した。

（1）本丸南側石垣の下部構造（第 108 図・第 110 図）

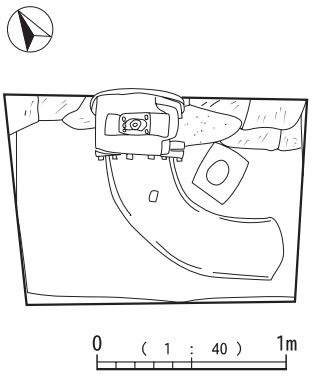
本丸跡南側石垣の高さは，御角櫓跡の角石の天端が標高 12.25m，石垣の最下段は 4.26m であった。高さは約 9m である。なお，元禄 9（1696）年「鹿児島城絵図控」では，この石垣は「此石垣高三間」と記されている。石垣が，その後に高く積直されたか，水面からの高さを記した構成もある。

石垣の積み方は，『保存活用計画』の精加工の石材の布積み②である。すなわち，「規格石材を利用し，横列に近づけるように積んでおり，横目地が通っている。完全な間知石ではない。精加工石材を利用し，多角形の石材混用した「合端」合わせ」である。石垣表面は，鑿などで丁寧に調整されている。石材は溶結凝灰岩である。地中部分の石垣の築石間には黒漆喰が詰められており，石垣内部に堀から水が浸入しないよう工夫されていた。

石垣は，M～N- 1’区の御角櫓跡の算木積より 12 石目からズレが 4 列にわたって認められたため，引き続き下部の確認調査を行った。

調査の結果，算木積石垣の上から 10 ～ 11 段目に 120 × 90 ㎝変形長方形の鏡石が斜めにはめ込まれていた。この鏡石と算木積石垣間の間詰石が欠落した部分から亀裂や石垣のズレが生じていることを把握した。

本丸東堀に面している本丸跡東側石垣では，排水口は，御楼門全面尾石橋横にしか確認できていないが，この石



第 109 図　34 トレンチ平面図

垣には，石垣中位から下位の複数箇所で排水口がみられる。また，御楼門南側石垣周辺及び御角櫓跡で確認した排水溝は，その標高値から，全てこの石垣に流れ込んだ物と考えられる。

（２）近代

①排水溝（107 図）

Ｊ～L－１’～２’区に設定した 32・33 トレンチの表土下でそれぞれ排水溝を検出した。

排水溝に面する石垣には，鹿児島大学医学部時代に設置された，現在の黎明館と県立図書館をつなぐモルタル造りの通用階段が設置されていた場所である。32 トレンチ東端と 33 トレンチ西端の接続部に通用階段の最下段がくる位置関係にあり，その基礎の下からは，礫敷の階段基礎部を確認した。

排水溝は，北側は本丸南側石垣を利用し，南側にのみ溶結凝灰岩の測石を２段積んでいる。上段には 130 × 140cm 四方，厚さ８cm のコンクリート製の蓋を被せている。中間部には持ち手用の抉りがあり，深さは約８cm である。側石の南側には，栗石が約１m 幅で敷設されていた。排水溝は K－１’区まであり，K－２’区からは，径 40 cmのヒューム（鉄製の針金を芯としたコンクリート）管が 1.5m 西側かつ上方斜めに延び，国指定に向けた調査の 63 トレンチ（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2022）へ繋がっている。標高は約７m である。この排水溝は，堀を埋めた際に，二之丸跡の排水溝として造られたものであると考えられる。

②鋳鉄管

34 トレンチは，I－１’区で鋳鉄管の排水弁が地上に半分程度露出していたことから，周囲における石垣の状態を確認するために設定した。

鋳鉄管は，本丸南面石垣の地覆石から９段目に設置されており，８段目から 10 段目の半分程度までの石垣を外しモルタルで固定している。これは，第七高等学校のプールの排水のためのものである。

（２）近世

堀（第 110 図）

昭和 52 年度の調査で確認している本丸と二之丸間の堀と井堰遺構の石垣側を確認し，井堰遺構を再調査した。堀は，昭和 52 年の調査と合わせると，東西約 70m，南北約 15m の規模となる。

北側は，本丸跡南側石垣を利用し中段には幅約 1m の石畳の犬走りが付いている。犬走りの下も石垣となっており，石垣がこの中段下から２重になる。これには，石垣の崩壊を防ぐはばき石垣のような機能があった可能性がある。

昭和 52 年度の調査を参考にすると，南側には，石垣を築いており，２箇所で堀に降りるための階段がみられる。

東側には，石垣造りの井堰遺構があり，本丸東堀に流れる水の水量を調節していたようである。本丸東堀との間には，堀と本丸東堀を区切る閉塞石垣がある。

閉塞石垣（本丸跡から二之丸跡の東側石垣の一部）（第 110 図・第 112 図，写真図版９－②，写真図版 13－②）

本丸東堀に面した御角櫓と二之丸の矢来御門や御台所御門を繋ぐ石垣である。石垣は元禄９（1696）年「鹿児島城絵図控」（第 144 図②）から見られ，石垣の上には塀が描かれている。現在は，石垣の上には，笠石をもつ石塀が石垣上に造られている。

この石垣は，本丸東堀に面した石垣であると同時に，外御庭跡の堀を塞ぐ閉塞石垣にあたる。この石垣の西側の石垣が，石垣 A である。

第 111 図は，石垣 A 上の土層図である。Ⅰ層は県立図書館建設の際の造成土で，Ⅱ層～Ⅶ層が近代以降の造成土である。Ⅷ層上面が近世の石垣 C 上の地表面で，標高は約標高約 5.4m である。

この閉塞石垣の東面にあたる本丸東堀側の石垣（写真図版９－②）は，御角櫓跡下部の石垣に接続して築かれている。石垣は本丸跡南側石垣と同じく，『保存活用計画』の精加工の石材の布積み②である。現在の石塀２段の下の築石が，塀が載っていた際の天端と考えられる。本丸東堀への排水口は，水面より若干上に設置されている。

近代以降に積まれたと考えられる石垣上段の石塀は，天部に築石２石を平行に並べて笠石としている。その下には，５～６段の築石が積まれる。この築石には，上部に正方形，下部に長方形の切石が多くみられる。表面の鑿調整痕は深く残る。

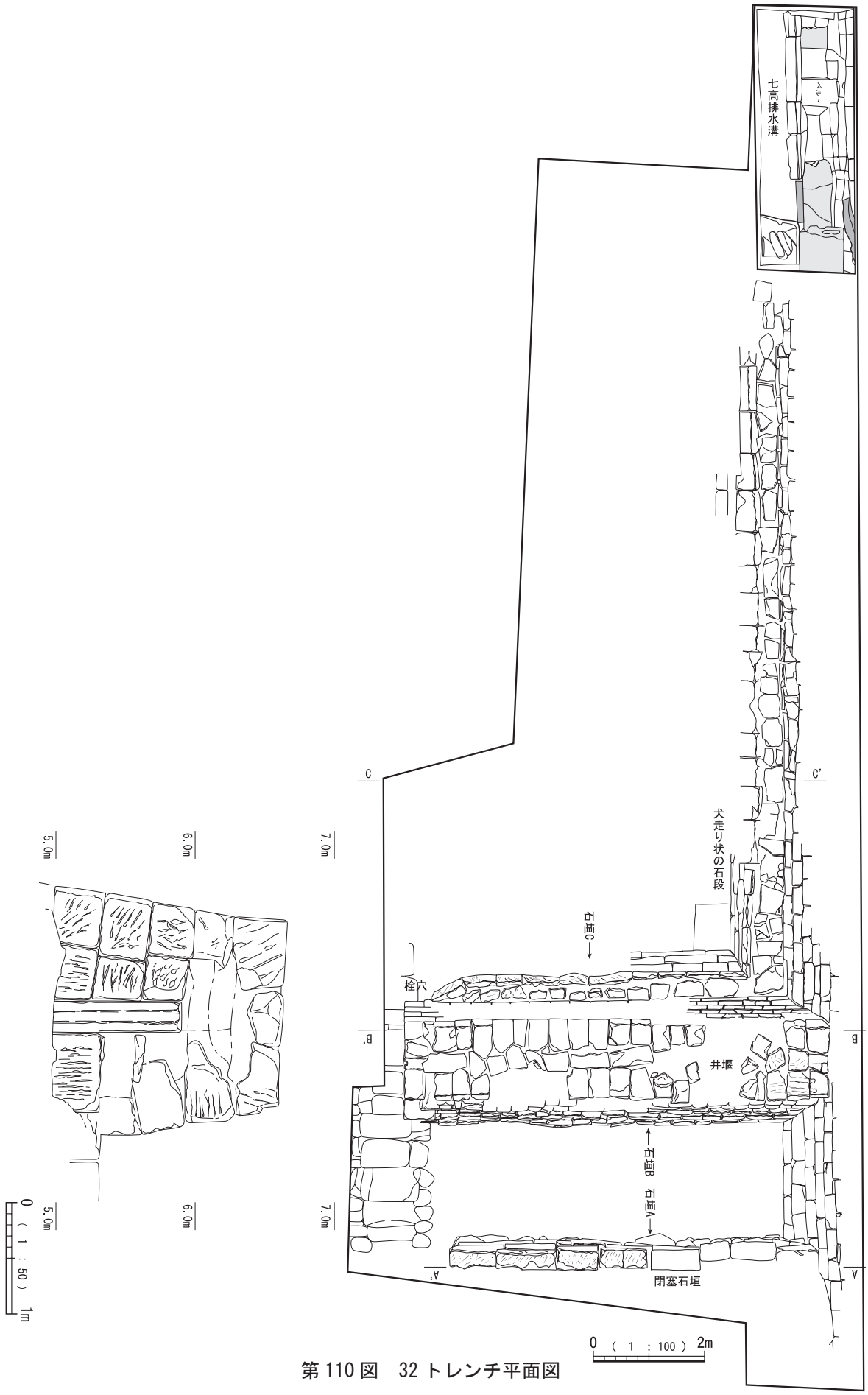
西面の石垣 A は，標高約 4m の砂地の上に，20 ～ 70 cm大の大きさの不規則な築石を５～６段積み上げた後，長さ 50 ～ 70 cm，厚さ 25 ～ 30 cmの切石を３段重ねている。石垣の裏込めは，下部に少量みられた程度で，背面に栗石を充填した痕跡は確認できなかった。標高約５m 地点の石垣表面には，鉄分が線状に付着しており，この高さが堀の水位線にあたると考えられる。

井堰遺構

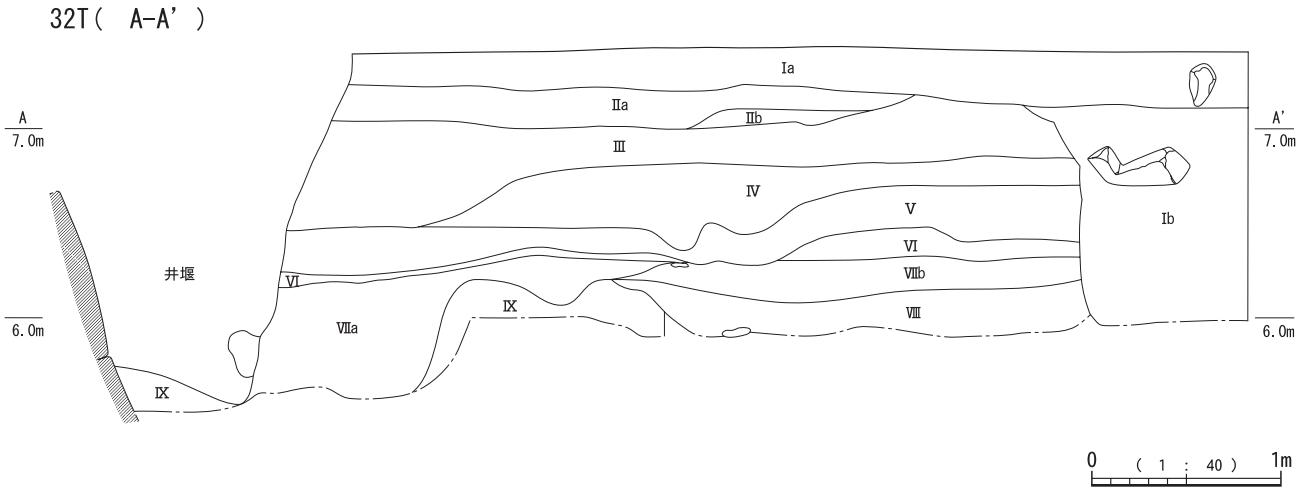
井堰遺構の調査は，堀東側のＪ～N－１’～２’区において実施し，M－１’～２’区から井堰遺構を確認した。

井堰以降は，本丸跡南側石垣から堀を横断し，二之丸につながる側面に石垣（石垣 A・B）をもつ土橋状の構築物である。中央部には約２m の水門がある。水門の下には排水溝があり，通常の排水はそこを通って本丸東堀に流れていたと考えられるが，水量が多いときは水門部分に板や鉄板等をし，本丸東堀に流れる水量を調節していたと考えられえる。

井堰遺構の石垣天端の標高は約 6.60m で，東面の石垣は８段積である。西面（石垣 C）は６段積みの石垣と犬走状の石段３段からなる。石垣は，『保存活用計画』の精加工石材の布積み①「規格性の高い，いわゆる「切石」



第 110 図　32 トレンチ平面図



層	色（記号）	色名	特徴
Ⅰa	7.5YR6/8	橙色土	植栽土
Ⅱa	7.5YR5/3	にぶい褐色土	現代の遺物含で攪乱層。粘性小。しまり小
Ⅱb	7.5YR7/8	黄橙色土	砂質，軽石含む。粘性小。しまり小
Ⅲ	7.5YR4/1	褐灰色土	粘性あり。軽石，貝殻小片を含む。しまり有り
Ⅳ	7.5YR5/4	にぶい褐色土	粘性あり。軽石，貝殻小片を含む。しまり有り
Ⅴ	7.5YR3/1	黒褐色土	粘性あり。軽石，貝殻小片を少し含む。しまり有り
Ⅰb	7.5YR4/1	褐灰色土	攪乱部，コンクリート，鉄筋 etc. 現代遺物含む。Ⅰa 層より古い
Ⅵ	7.5YR6/8	橙色土	砂質。粘性小。しまり無し
Ⅶa	7.5YR2/1	黒色土	瓦，レンガを含む。粘性やや有り。しまり小
Ⅶb	7.5YR4/3	褐色土	ガラス片を含む。砂質ブロック含む。粘性小。しまり小
Ⅷ	7.5YR3/3	暗褐色土	粘性あり。しまり有り
Ⅸ	7.5YR5/4	にぶい褐色土	粘性あり。しまり有り。井堰の埋土か？

第 111 図　32 トレンチ井堰遺構東側土層断面図（東壁）

を横列に近づけるように積んでおり，横目地が通っている。石材相互の密着性が高く，間詰石はほとんど使われない」である。石材表面は，鑿調整で平滑に整えられていた。最下段の石垣の下には，標高約４ｍの砂地の上に 15 ㎝四方の胴木が敷きこまれていた。

井堰遺構の天端には，石列が３列石畳状に貼られていた。井堰遺構の中央よりやや南側には水門が造られ，仕切板をはめるために枘筋を掘り込んだ切石が，縦に５段はめ込まれていた。さらに切石下位には，切石が２段積まれており，栓が詰められた水抜き穴を検出した。水抜き穴の周りは，黒漆喰を用いて丹念に目詰が施されていた。また，水門の東側，閉塞石垣の下にもぐる排水溝を検出した。

井堰遺構東側の石垣（石垣 B）は，西面の石垣（石垣 C）と同じく，『保存活用計画』の精加工石材の布積み①である。ただし石垣 B は丁寧な鑿調整が施され，表面が丁寧に整えられているのに対し，石垣 B は鑿調整がみられない。これは，石垣 B は本来露出しており，石垣 C は堀の水中にあったためと考えられる。

石垣 C の前面には，長さ約１ｍの切石が３段積まれていた。また，下場が約１00㎝，天端約 50 ㎝，高さ 150 ㎝の犬走状の石段が水門から本丸側石垣裾にかけて廻らされている。犬走状の石段の標高は天端で 4.50 ～ 4.56m，裾で 3.36 ～ 3.51m である。犬走状の石段は，本丸石垣の上に栗石と土を詰め込んで敷設されている。上には平石を敷き黒漆喰で目詰をしている。同様の石段は 41 トレンチでも確認された。これらは石垣の崩壊を防ぐためのはばき石垣の役割と，堀の維持管理のための通路の役割があったと考えられる。

42 トレンチ（第 115 図・第 116 図）

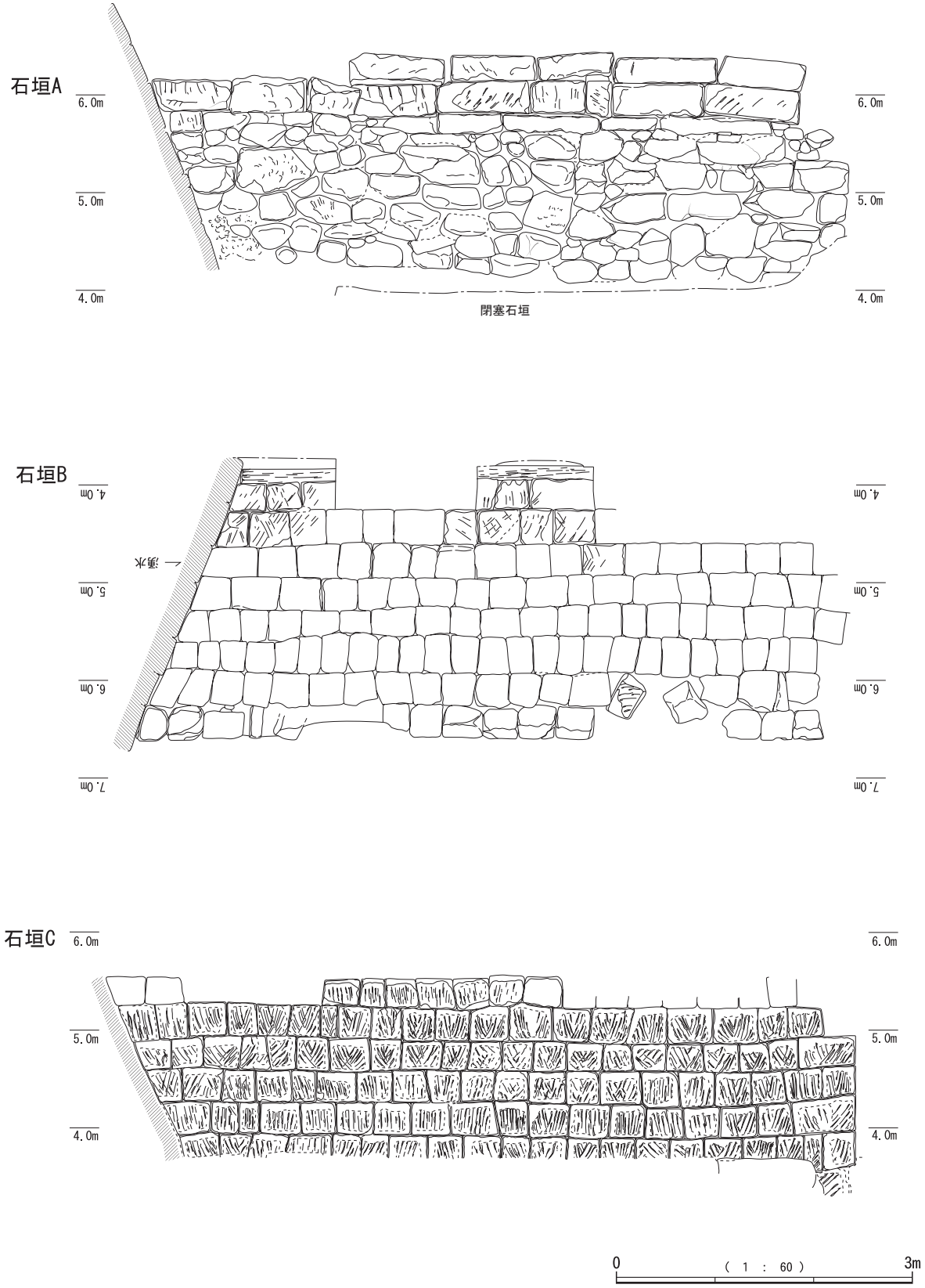
外御庭調査区で確認された近代の排水溝の延長と井堰以降から離れた地点での堀の下層及び埋土を確認するため D・E- １’区に本丸南側石垣に平行する形で設定した。当初の規模は３× 5.6m で，その後拡張した。

遺構　遺構は，近世の堀，近代の排水溝を確認した。また，堀の埋土を確認した。

（１）石垣（第 115 図）

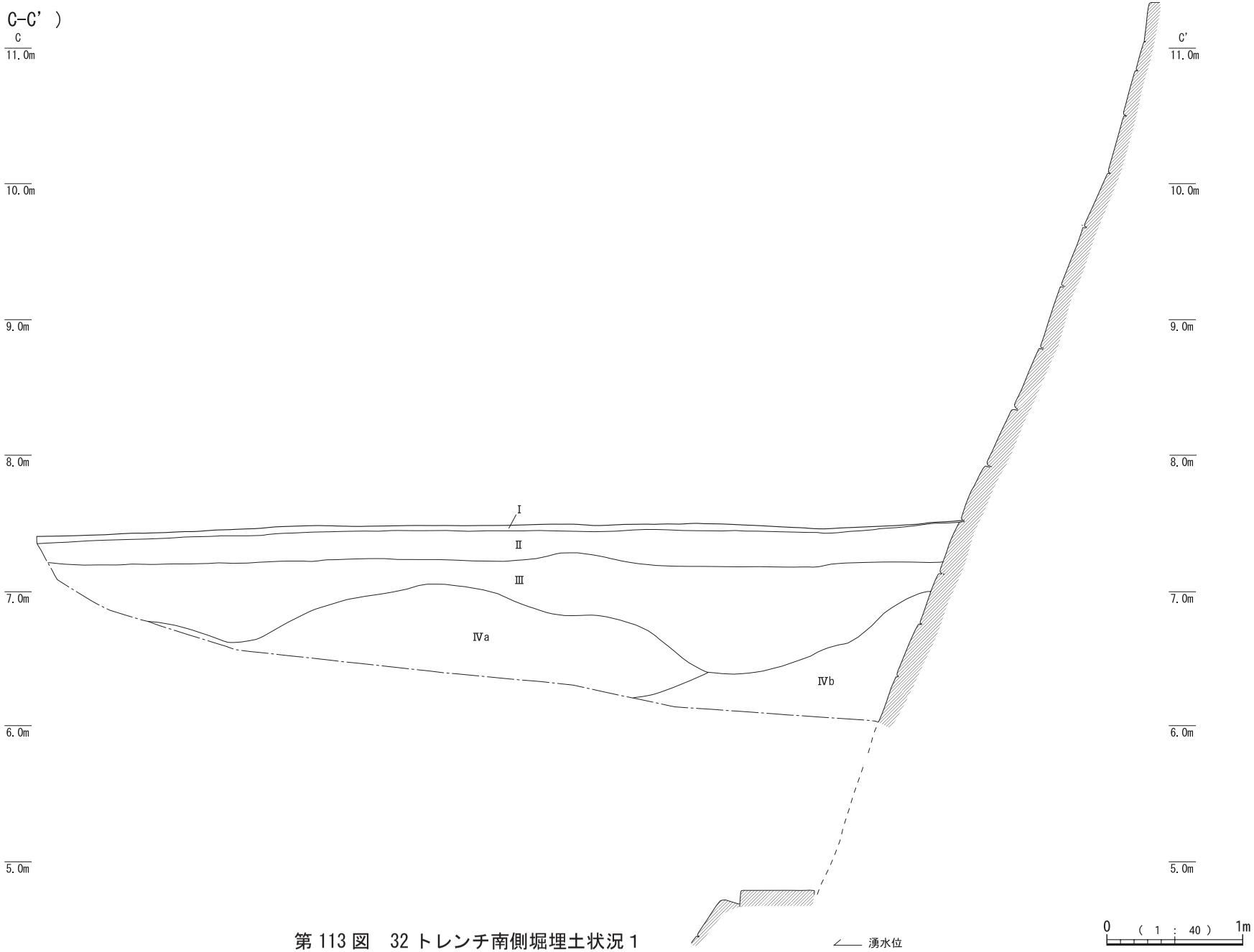
石垣の裾には，堀の犬走状が巡っている。標高 4.80m で天端，3.72m に最下段の底面となる。

石垣裾を通る犬走状の石段の４石上から９石上にかけ

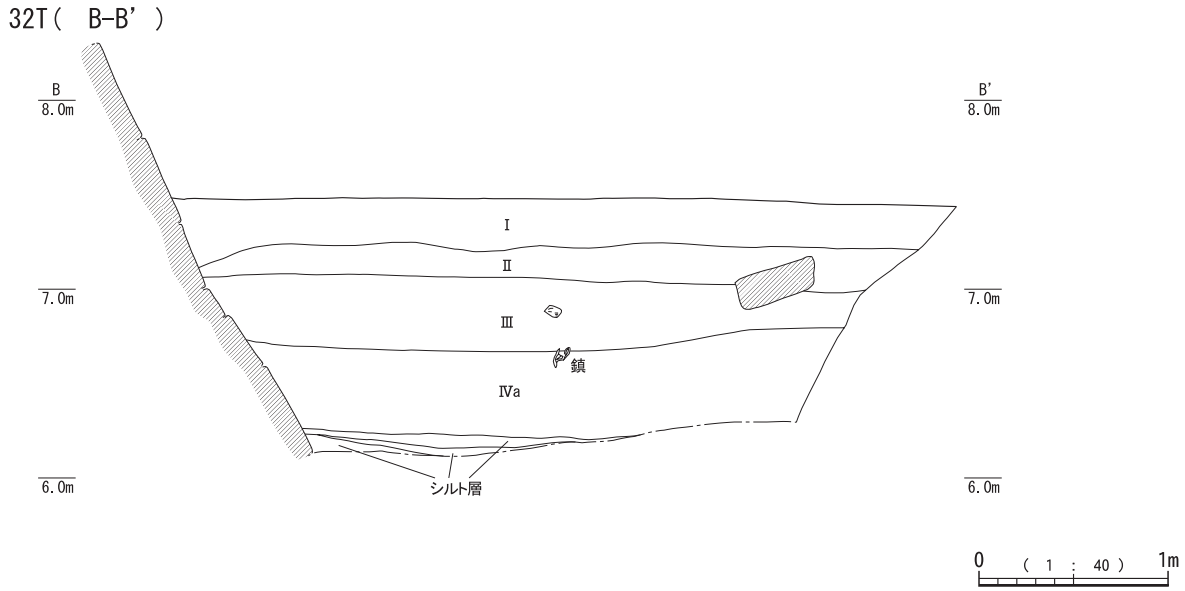


第 112 図　32 トレンチ井堰遺構　側面図

32T（ C-C’ ）



第 113 図　32 トレンチ南側堀埋土状況 1



層	色（記号）	色名	特徴
Ⅰ		暗茶褐色土	昭和 52 年次後の腐埴土
Ⅱ		褐色土	昭和 52 年次後に造園整備で盛られた層
Ⅲ		黒褐色土	昭和 52 年度調査中のカクラン層。礫や土嚢廃棄あり（漆喰混）
Ⅳ a		灰褐色土	堀の埋土。漆喰混じる
Ⅳ b		暗灰褐色土	堀の埋土。漆喰混じる

第 114 図　32 トレンチ南側堀埋土状況２

て，合端を挟み込むように，同じ高さで孔が穿たれていた。この造作は 42 トレンチでのみ確認され，同様の造作は，第七高等学校時にも使用されていた暗渠排水溝の一部で認められている。時期については明治初期以前の可能性が残るが，目的や性格など詳細は不明である。

（２）近代の排水溝（第 116 図）

33・34 トレンチでも検出された近代の排水溝である。石垣の南に沿って側石が２段積まれている。石材は溶結凝灰岩である。石垣側に側石はなく，石垣の傾斜面を利用して落とし蓋を被せる工夫がされている。上段の側石には落とし蓋を載せるために欠き込みが施され，コンクリート製の蓋がはめ込まれていた。側石の南側には，栗石が敷かれており，標高は検出面で約７m である。側石の高さは２段で52㎝あり，排水溝の内径は約50㎝を測る。

（２）堀の埋土（第 115 図）

堀を埋めていた土層の状況を確認した。

東壁では，現在の地表面である標高約８m から，標高 6.75m のⅥb 層まで，水平堆積がみられる。Ⅴ層は，暗渠排水溝の側石と同じ高さに位置する側石の安定を図る栗石部である。これは，堀を埋めた後に排水溝を敷設する際の造成土である。凝結凝灰岩の割れたものや，河原石，瓦片が同時に埋め込まれていた。Ⅵより下位は，標高 4.8m まで，石垣側から犬走状の石段の下まで，斜め方向の堆積がみられた。

また，東壁では，乱れの少ない平行層がみられる。Ⅱa 層が県立図書館整備の際の造成土で，その下が第七高等学校以降のグラウンド造成層である。Ⅶ層はやや腐植質が強く，一時草は木の茂った時期あったことを想定させる。これから判断すると，斜めに堆積するⅩⅢ層が堀を埋めた層で，平坦層が，明治 34（1901）年第七高等学校建設時の造成層と思われる。よって，この堀を埋めた時期はそれ以前と考えられる。

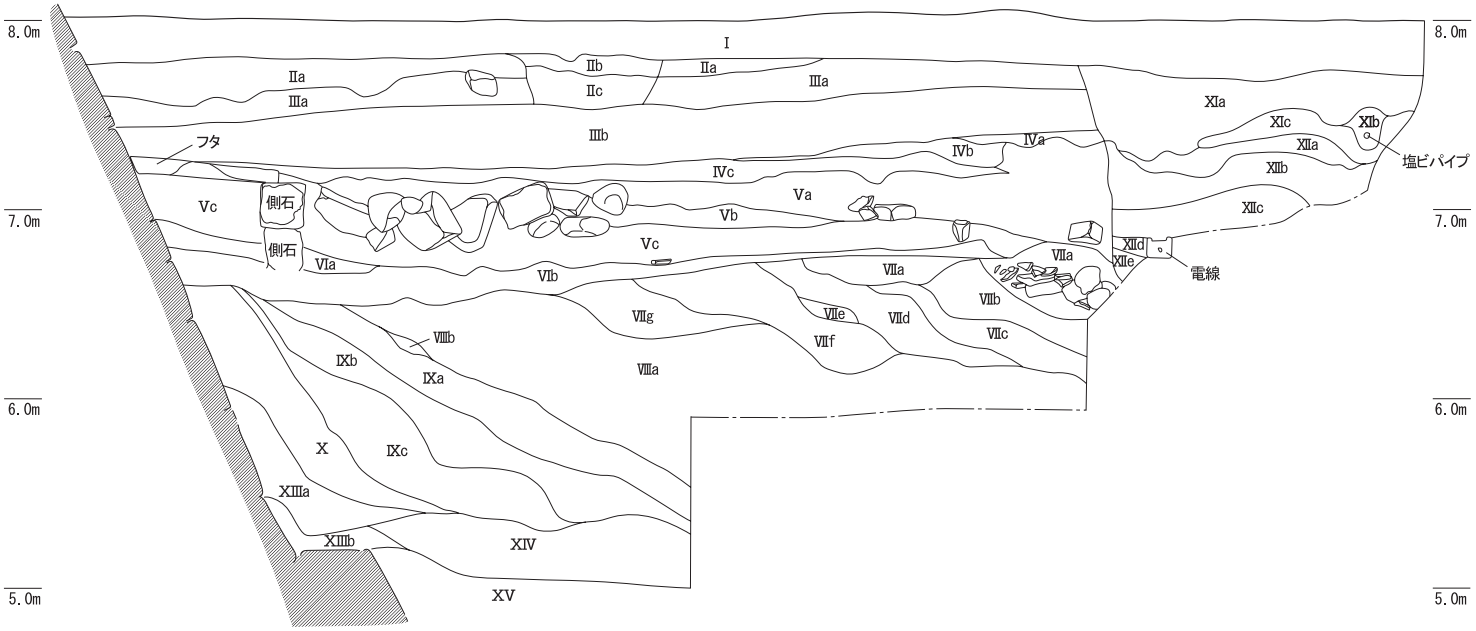
堀を埋めたⅩⅢ層は，本丸石垣側から斜めに堆積しているので，堀は石垣上から埋めたことになる。この傾向は，井堰周辺においても同様である。

下層において羽子板型鏝板，鞘取り等の木製品が出土した。水中に埋没していたため，残存状態は良好である。

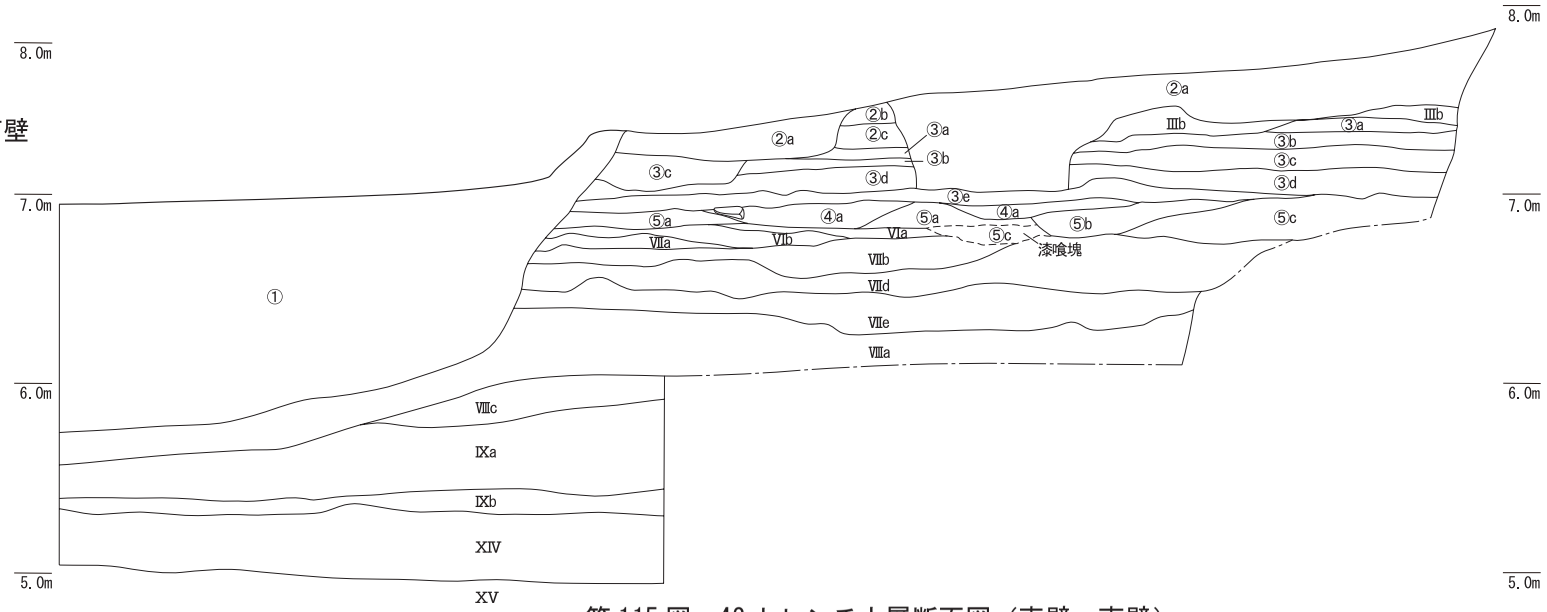
外御庭跡調査区出土遺物（第 117 図～第 123 図 519 ～ 603，611 ～ 617）

519 ～ 531 は，磁器である。519 は，龍泉窯系青磁の輪花碗である。口縁部は外反する。内面には櫛書の文様がある。14 世紀後半～ 15 世紀前半。520 は，中国漳州窯系の青花碗である。外面は高台部に二条線，内面は見込みに花文が描かれる。総釉で，畳付には籾殻が付着している。1590 年～ 17 世紀前半。521 は，肥前有田の磁

東壁



南壁

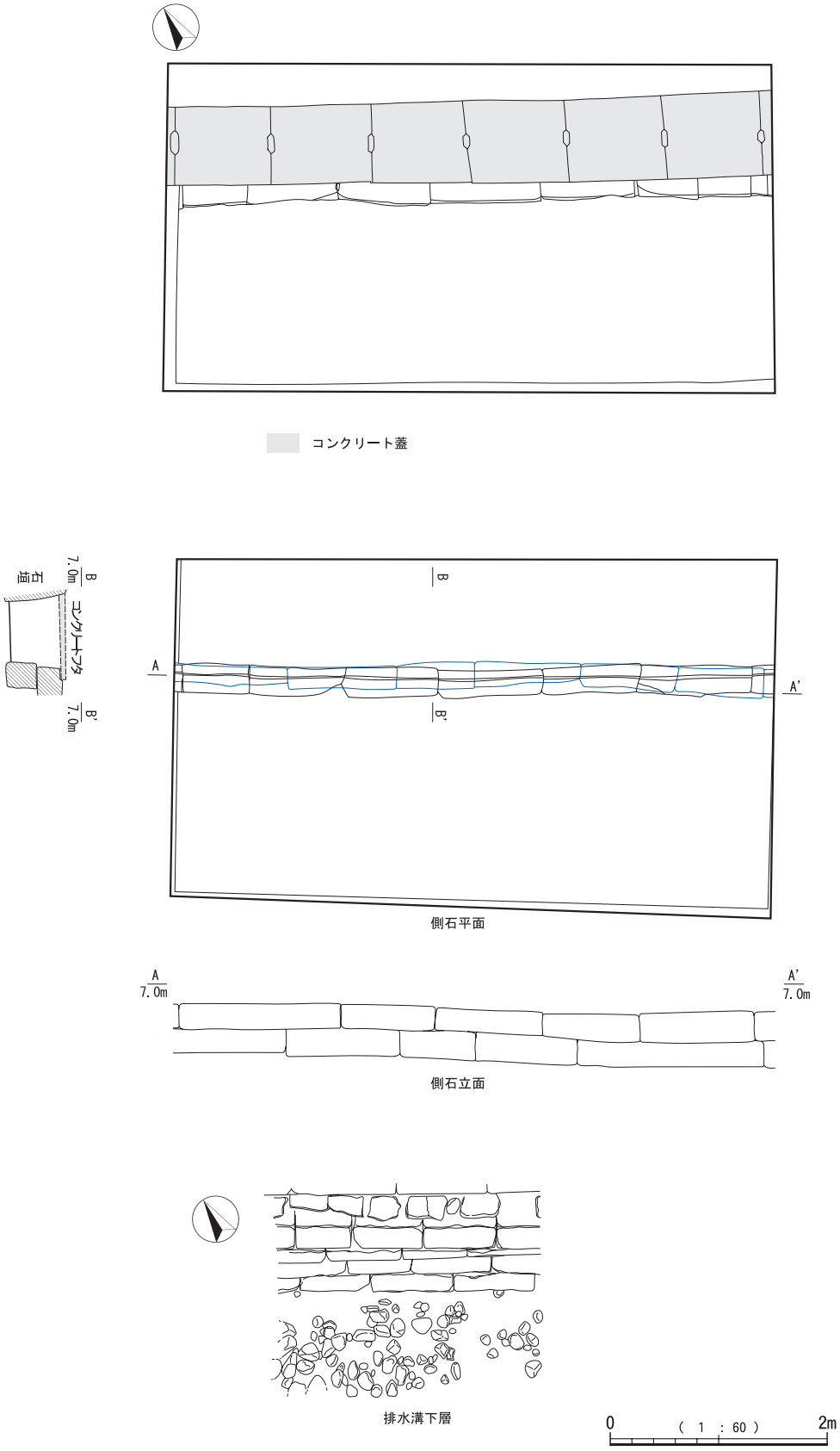


0 (1 : 40) 1m

第 115 図　42 トレンチ土層断面図（東壁・南壁）

第７表　42 トレンチ土層注記

層	色（記号）	色名	特徴
Ⅰ	7.5YR2/3	極暗褐色土	植栽土。しまりなし。粘性あり
1	7.5YR2/3	極暗褐色土	しまりなし。粘性ややあり。調査時掘削埋土
Ⅱａ	7.5YR4/1	褐灰色土	しまりあり。粘性なし
Ⅱｂ	7.5YR4/2	灰褐色土	しまりややあり。粘性あり
Ⅱｃ	7.5YR4/3	褐色土	しまりややあり。粘性あり
2a	7.5YR3/1	黒褐色土	しまりなし。粘性ややあり
2b	7.5YR4/2	灰褐色土	しまりややあり。粘性あり。Ⅱ層該当
2c	7.5YR4/3	褐色土	しまりややあり。粘性あり。Ⅱ層該当
Ⅲａ	7.5YR6/1	褐灰色土	しまりややあり。粘性なし（シラス）
Ⅲｂ	7.5YR7/1	明褐灰色土	しまりなし。粘性なし（シラス）
3a	7.5YR4/4	褐色土	しまりややあり。粘性あり
3b	7.5YR3/3	暗褐色土	しまりあり。粘性あり
3c	7.5YR4/3	褐色土	しまりあり。粘性あり
3d	7.5YR3/3	明褐色土	しまりあり。粘性あり
3e	7.5YR3/2	黒褐色土	しまりあり。粘性あり
Ⅳａ	7.5YR4/3	褐色土	しまりあり。粘性ややあり
Ⅳｂ	7.5YR4/2	灰褐色土	しまりあり。粘性ややあり
Ⅳｃ	7.5YR4/1	褐灰色土	しまりややあり。粘性あり
4	7.5YR4/3	褐色土	しまりややあり。粘性ややあり。瓦含む
Ⅴａ	7.5YR4/6	褐色土	しまりあり。粘性ややあり
Ⅴｂ	7.5YR4/1	褐灰色土	しまりあり。粘性あり
Ⅴｃ	7.5YR5/4	にぶい褐色土	しまりあり。粘性あり
5a	7.5YR5/3	にぶい褐色土	しまりあり。粘性ややあり。漆喰含む
5b	7.5YR5/3	にぶい褐色土	しまりあり。粘性ややあり。漆喰含む
5c	7.5YR5/3	にぶい褐色土	しまりあり。粘性ややあり。漆喰多い
Ⅵａ	7.5YR5/6	明褐色土	しまりややあり。粘性ややあり
Ⅵｂ	7.5YR4/1	褐灰色土	しまりややあり。粘性あり
Ⅶａ	7.5YR8/6	浅黄橙色土	しまりややあり。粘性あり（瓦溜り）
Ⅶｂ	7.5YR4/2	灰褐色土	しまりややあり。粘性ややあり
Ⅶｃ	7.5YR4/1	褐灰色土	しまりややあり。粘性ややあり
Ⅶｄ	7.5YR3/1	黒褐色土	しまりややあり。粘性ややあり
Ⅶｅ	7.5YR6/3	にぶい褐色土	しまりややあり。粘性ややあり
Ⅶｆ	7.5YR5/2	灰褐色土	しまりややあり。粘性ややあり
Ⅶｇ	7.5YR5/1	褐灰色土	しまりややあり。粘性あり
Ⅷａ	7.5YR5/4	にぶい褐色土	しまりややあり。粘性ややあり
Ⅷｂ	7.5YR6/4	にぶい橙色土	しまりややあり。粘性あり
Ⅷｃ	7.5YR2/1	黒色土	しまりややあり。粘性あり
Ⅸａ	7.5YR3/1	黒褐色土	しまりあり。粘性あり
Ⅸｂ	7.5YR4/1	褐灰色土	しまりややあり。粘性あり
Ⅸｃ	7.5YR4/2	灰褐色土	しまりややあり。粘性あり
Ⅹ	7.5YR4/1	褐灰色土	しまりややあり。粘性ややあり
Ⅺａ	7.5YR4/4	褐色土	しまりあり。粘性なし
Ⅺｂ	7.5YR3/4	明褐色土	しまりあり。粘性なし
Ⅺｃ	7.5YR4/2	灰褐色土	しまり強。粘性ややあり
Ⅻａ	7.5YR3/1	黒褐色土	しまりあり。粘性なし
Ⅻｂ	7.5YR3/2	黒褐色土	しまりあり。粘性なし
Ⅻｃ	7.5YR3/3	明褐色土	しまり強。粘性ややあり
Ⅻｄ	7.5YR4/4	褐色土	しまりあり。粘性なし
Ⅻｅ	7.5YR5/4	にぶい褐色土	しまりあり。粘性なし
ⅩⅢａ	7.5YR3/1	黒褐色土	しまりややあり。粘性あり
ⅩⅢｂ	7.5YR3/2	黒褐色土	しまりあり。粘性あり
ⅩⅣ	7.5YR3/3	暗褐色土	しまりなし。粘性なし。木クズの層
ⅩⅤ	7.5YR2/1	黒色土	しまり強。粘性特大



第 116 図　第七高等学校造士館　排水溝　平面図・断面図

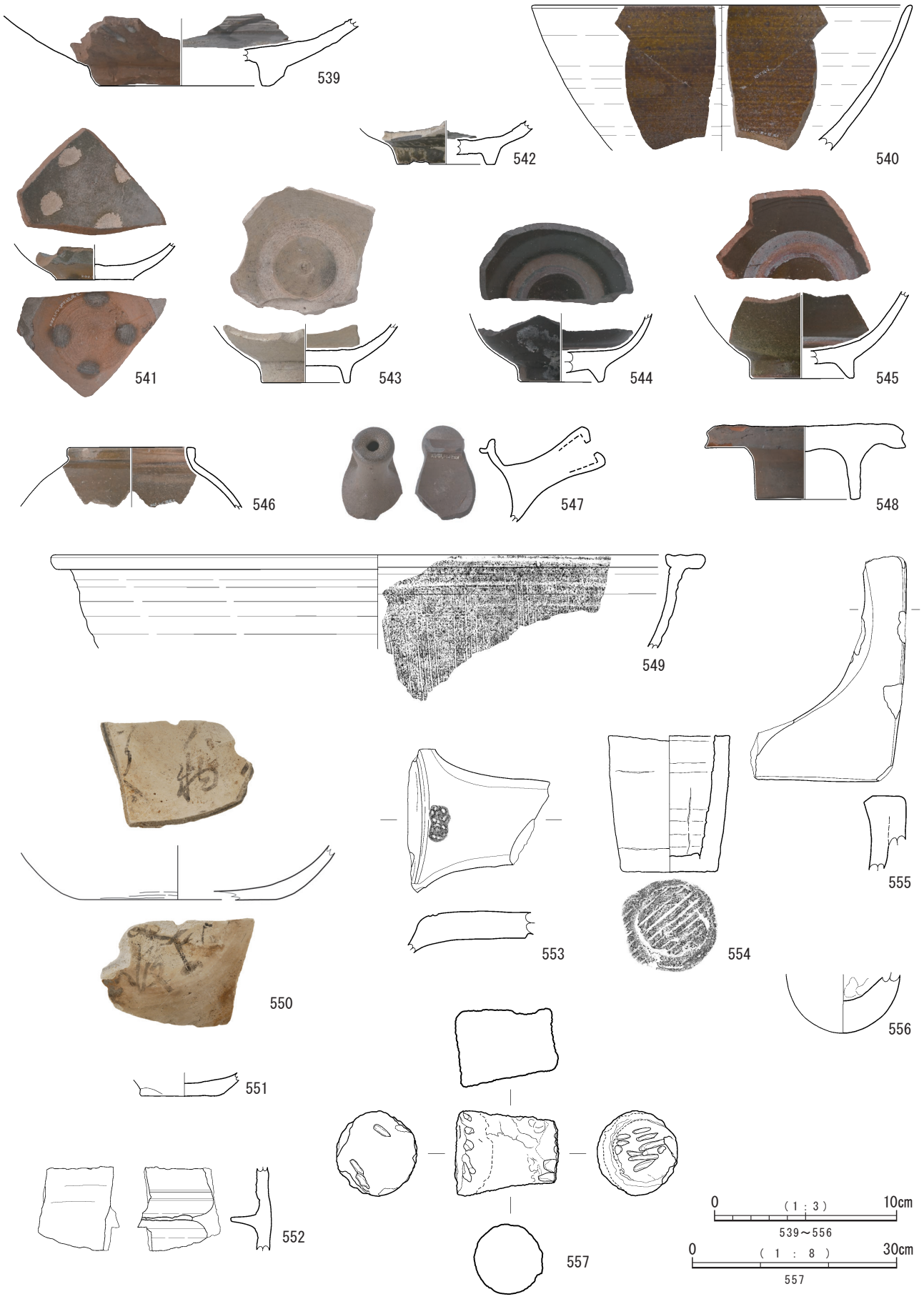
器鉢である。口縁部周辺は釉剥ぎされており，内面に文様もないため，蓋と組み合うものであったと考えられる。外面には，波文が釉薬と余白を上手く使って描かれる。総釉で，畳付は釉剥ぎされる。18 世紀後半～ 19 世紀初頭。522 は，肥前系の磁器碗である。透明釉は青みがかっており，薩摩磁器の可能性がある。外面には草花文，内面には口縁部周辺に四方襷文が描かれる。釉薬に鉄分が多いため流れやすくなっており，文様は滲んでいる。18 世紀末～ 19 世紀前半。523 は，肥前の磁器皿である。筒江窯（佐賀県武雄市）で焼かれたと考えられる。外面には胴部に唐草文，高台内面には渦福，内面には草花文が描かれる。高台内面は蛇の目釉剥ぎされる。18 世紀後半。524 は，薩摩磁器の碗である。外縁には草花文，内面は口縁部周辺に文様，欠けているが見込にも文様が描かれる。総釉で，畳付は面取りされる。19 世紀中頃。525 は，肥前有田の磁器皿である。外面には胴部に唐草文，高台内面に「冨貴長春」の銘款がある。内面には見込みに鹿子文，その周囲に草花文などが描かれる。総釉で，畳付は面取りされる。18 世紀第４四半期～ 19 世紀初頭。526 は，肥前有田の磁器皿である。初期伊万里の粗製品である。内面の文様は芙蓉手で，東南アジア向けの輸出用のものである。1650 年代。527 は，肥前有田の色絵磁器小皿である。外面は高台に４条線，内面と見込みにも文様が描かれる。周囲の型作り成形で，高台は四角形を呈する。18 世紀後半。528 は，肥前系の磁器蓋である。薬入れなどの蓋か。外面には，「肥後渡辺　馬庫○○」と書かれている。19 世紀。529 は，薩摩磁器の皿である。内面には，楼閣山水文が描かれる。高台は内傾し，高台内面は蛇の目釉剥ぎされる。19 世紀中頃。530 は，薩摩磁器の鉢である。厚手で口縁部は外反する。外面には草花文，内面には口縁部周辺に波文などが描かれる。19 世紀。531 は，肥前有田の磁器鉢である。口縁部は外反する。外面には馬が数頭，内面には二条線が描かれている。総釉で，畳付は面取りされる。19 世紀初頭～幕末。

532 ～ 538 は，薩摩焼と呼ばれる薩摩の陶器のうち白色系のものである。532 は，碗である。白薩摩と呼ばれる竪野系の白色陶胎の胎土に黒色土を混ぜ，その上に化粧土を掛け，さらにその上から透明釉を掛けている。18 世紀～ 19 世紀。533 は，加治木・姶良系の碗である。高台は厚く高い。内面は蛇の目釉剥ぎされる。外面は総釉で，畳付は釉剥ぎされる。534 は，竪野系の白薩摩と呼ばれる白色陶胎の皿の内面に，緑釉を掛け文様を描いている。高台周辺は露胎。美濃の織部焼に似せて薩摩で焼いたものか。幕末～近代。535 は，竪野系の宗胡録写の鉢である。外面には文様が描かれるが，内面にはない。上部に蓋が付く蓋物と考えられる。献上品の容器として用いられたと考えられる。総釉で，畳付は釉剥ぎされる。536・537 は，白薩摩と呼ばれる白色陶胎の鉢である。536 は三足鉢で，脚が張り付き胴部は外反する。18 ～ 19 世紀。537 は，植木鉢か。獅子面の脚がつく。貫入が目立つ。18 世紀～ 19 世紀。538 は，竪野系の三島手と呼ばれる象嵌陶器の土瓶蓋である。外面には花文が描かれる。

539 ～ 549 は陶器である。539 は，肥前の唐津系の陶器大鉢である。高台付近は露胎。内面は見込みからの立ち上がり部分に櫛書の線文が描かれる。内面見込みには，２か所の砂目が残る。17 世紀。540 は，加治木・姶良系の半陶・半磁の透明釉の碗である。轆轤目を明瞭に残す。山元窯もしくは初期龍門司窯で焼かれたと考えられる。17 世紀後半～ 18 世紀前半。541 は，加治木・姶良系の半陶・半磁の透明釉の碗である。被熱しており，釉薬はただれている。内面見込みと底部に砂目が残り，底部には糸切り痕が残る。17 世紀後半～ 18 世紀前半。542 は，白薩摩と呼ばれる竪野系の白色陶胎の胎土に黒色土を混ぜ，その上に化粧土を掛け，さらにその上から透明釉を掛けた碗である。高台は割高台で，高台内面には貝目が残る。内面見込みは，螺旋状にナデられ文様状になる。18 世紀。543 は，加治木・姶良系の半陶・半磁の透明釉の碗である。内面は，蛇の目釉剥ぎされる。被熱しており，釉薬はただれている。高台は厚く高い。初期龍門司窯で焼かれた物と考えられる。17 世紀後半～ 18 世紀前半。544 は，加治木・姶良系の陶器碗である。黒褐色系の釉薬を掛けたもので，内面見込みは蛇の目釉剥ぎされる。高台畳付から高台内面は露胎。元立院窯で焼かれたものと考えられる。18 世紀。545 は，加治木・姶良系の陶器碗である。赤褐色の胎土に緑釉を掛ける。内面は蛇の目釉剥ぎされる。高台は内傾する。18 世紀。546 は，苗代川系の陶器土瓶である。18 世紀後半以降。547 は龍門司窯の鮫肌釉の土瓶である。幕末～近代。548 は，琉球陶器の荒焼の蓋である。無釉。19 世紀。549 は，苗代川系の陶器擂鉢である。外面は横方向の工具ナデが残る。18 世紀～ 19 世紀。

550 ～ 557 は，土製品・石製品。550 は，土師器坏である。胎土は白褐色系，底部は回転ヘラ切りである。底部周縁は面取りされ，緩やかに立ち上がる。底部には「下」や「渡」，内面には「物」などの字が墨書されている。京都系土師器の模倣か。551 は，土師器小坏である。胎土は白褐色系，底部はヘラ切りである。内面は螺旋状にナデの痕が残る。京都系土師器の模倣か。552 は，土師器火鉢か。赤褐色系の胎土で，焼成は良好。553 は，焙烙の把手である。胎土は白褐色系。554 は，蛸壺か。手捏ね成形で，底部には板状圧痕が残る。胎土は赤褐色系である。555 は，不明土製品。焼成は良好で，表面は磨かれている。556 は，坩堝である。中には，溶けたガラスと考えられる内容物が充填していた。花園精錬所と関係があるものか。557 は，石製の栓である。第七高等学校造

第 117 図　外御庭跡　出土遺物 1



第 118 図　外御庭跡　出土遺物２

士館のプールの栓として用いられた可能性がある。

558 ～ 582 は,瓦である。558 ～ 562 は,軒丸瓦である。

558 は，連珠三巴文軒丸瓦（A-006）である。文様区から瓦当周縁の高さは高い。瓦当と凸面の接合部にはヨコナデ，それより尻側には縦方向のケズリの痕が残る。凹面は，コビキＢ，布袋痕が残る。559 は，連珠三巴文軒丸瓦（A-061）である。連珠は小型で数が多く，巴は平たい。胎土は灰白色で，表面には雲母が目立つ。長崎で製作されたと考えられる。560 は，連珠三巴文軒丸瓦(A-063)である。小型で,瓦当表面には雲母子が目立つ。

文様区から瓦当周縁の高さは高い。561 は，三巴文軒丸瓦（A-065）である。連珠は小型で，巴は細くて長い。瓦当周縁はやや広い。瓦当裏側は，周縁に沿って強くナデられており，その部分が一段低くなっている。胎土は灰白色で，表面には雲母が目立つ。長崎で製作されたと考えられる。562 は，牡丹紋軒丸瓦（Ｂ種不明）である。文様区から瓦当周縁までの高さは高い。瓦当と凸面の接合部にはヨコナデ，それより尻側には縦方向のケズリの痕が残る。凹面には，布袋痕がわずかに残る。

563 ～ 567 は，軒平瓦・軒桟瓦である。563 は，大坂式軒谷瓦（A-059）である。寄棟屋根や入母屋屋根の四隅などに用いられる谷瓦のうち，軒先のものである。瓦当上端は面取りされる。瓦当の左右周縁は広い。瓦当表面には雲母子が目立つ。564 は，大坂式軒桟瓦（A-033）である。鎌桟瓦である。瓦当は顎貼付け。瓦当の上端と下端は面取りされる。瓦当表面は，雲母子が目立つ。565 は,その他の軒平瓦(D-041)である。瓦当は顎貼付け。瓦当上端は面取りされる。瓦当裏面はほぼ垂直に立ち上がる。同一の瓦当文様は薩摩にはなく，薩摩以外で製作された可能性がある。566 は，その他の軒平瓦（D-005）である。瓦当は顎貼付け。瓦当上端と瓦当裏側下端を面取りされる。瓦当の周縁は広い。被熱しており，橙褐色に変色しているが，表面には雲母が目立つ。その他の長崎瓦と文様も似ていることから，長崎で製作されたと考えられる。567 は，その他の軒平瓦（D-007）である。瓦当貼付け。瓦当上端はわずかに面取りされる。瓦当裏側は垂直に立ち上がる。568 は,その他の軒平瓦（D-042）である。瓦当は顎貼り付け。瓦当上端は，幅広く面取りされる。同一の瓦当は薩摩にはなく，薩摩以外で製作された可能性がある。

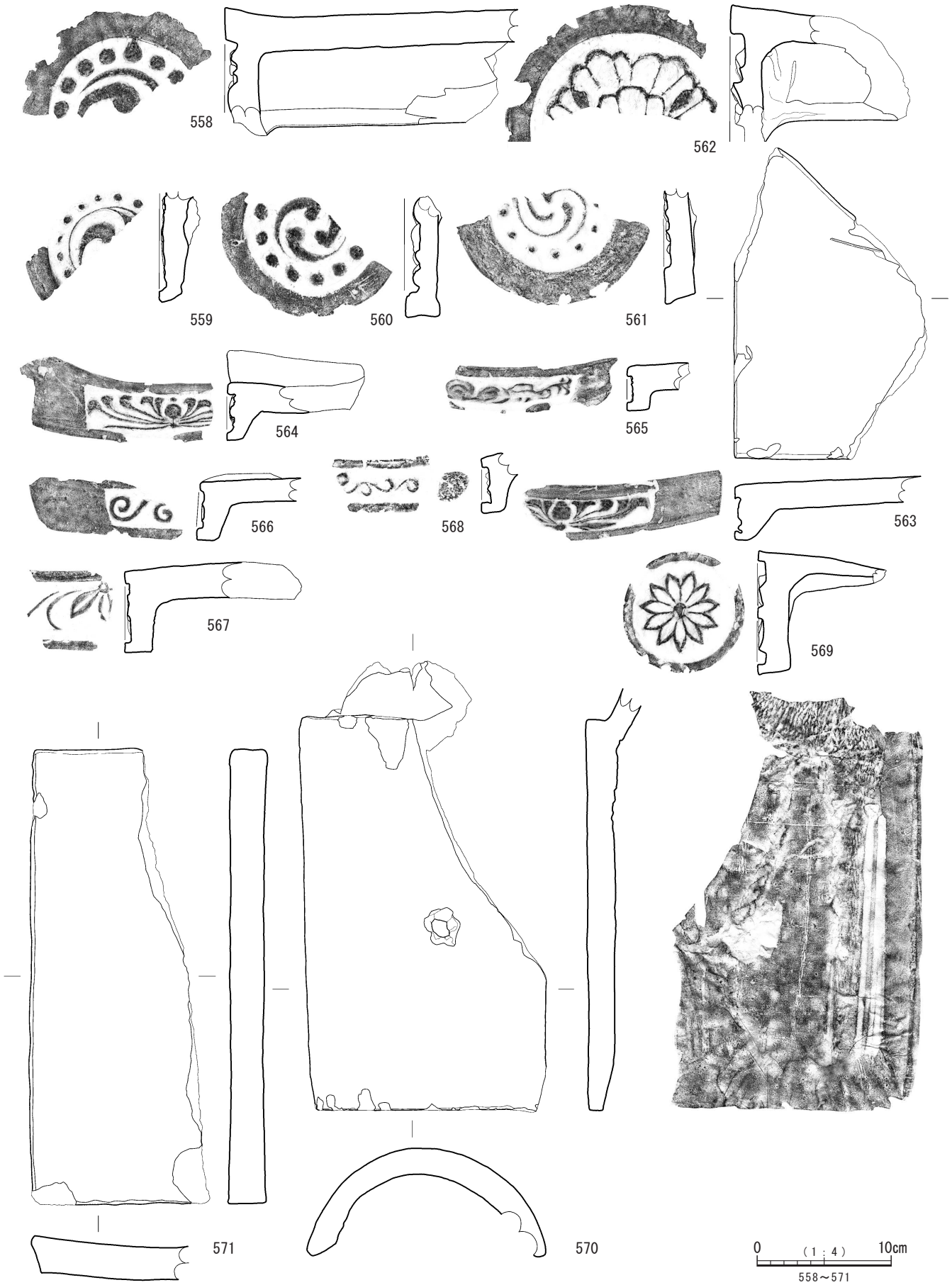
569 は，小菊瓦（K-02）である。瓦当から尻に向かってすぼまる。凸面二は，縦方向のケズリの痕が残る。

570 は，丸瓦（丸瓦Ａ）である。大型で厚手。凸面は丁寧に仕上げられ，ケズリの痕はみえない。凹面は，コビキＢと布袋痕が残る。中央部には，焼成後に直径 2cm ～ 1cm の釘穴が焼成後に穿たれる。571 は,平瓦(平瓦Ａ)である。大型で厚手。凹面の周縁は面取りされる。572 は,平瓦である。凹面周縁は面取りされる。凹面には，四角に造の刻印（刻印 069-1）がある。573 は，平瓦である。凹面周縁は面取りされる。側面には，桶巻作りの際の切り離し線が残っており，桶巻作りで製作された可能性がある。574 は,桟瓦である。頭側面に四角に前の刻印（刻印 058-1）がある。凹面の周縁は面取りされる。575 は,平瓦である。薄手で小型。焼成は良好。凹面周縁は面折りされる。胎土は灰褐色を呈し，大阪で製作された可能性がある。576 は，鬼板瓦である。雲文の一部か。577 は，海鼠瓦である。表面･裏面とも周辺は面取りされる。隅には，直径 2cm の釘穴が焼成後に穿たれる。被熱しており，橙褐色に変色している。578 は，鳥伏間瓦である凸面には，縦方向のケズリの痕が残る。凹面にはハケ状工具の調整痕がある。579 は,伏間瓦である。凸面には,縦方向のケズリの痕が残る。凹面の周縁は，角は面取りされ，丁寧に成形されている。

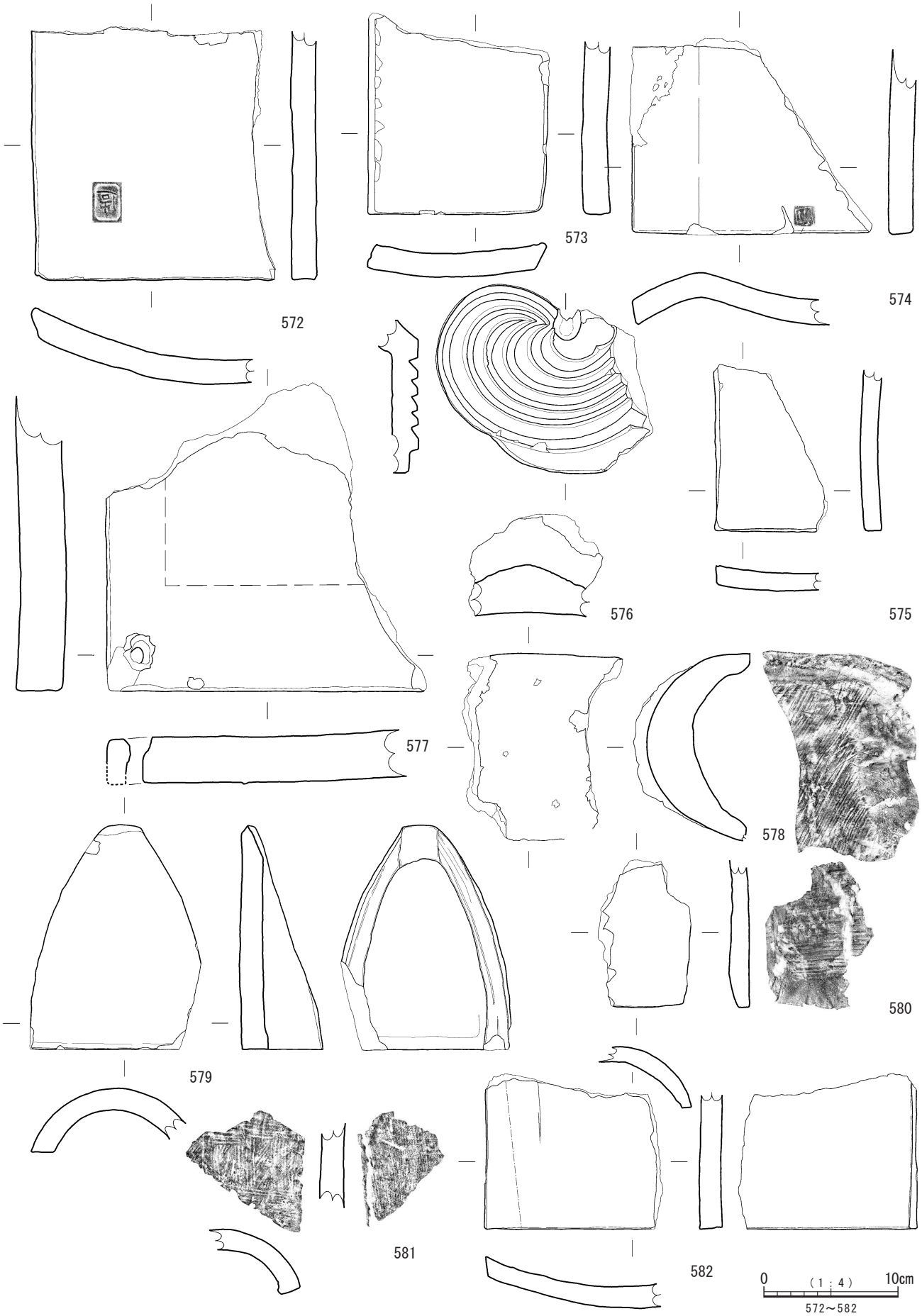
580 は，17 世紀台の古瓦の丸瓦である。凹面にはコビキＢが残る。成形は粘土紐巻き上げ技法で，凹面には,粘土紐を積み上げた部分にヨコナデ調整が残る。朝鮮系の技法で製作された瓦である。581 は，朝鮮系瓦の丸瓦である。凸面には，タタキによる幾何学文様がある。凹面には布袋痕が残る。582 は，陶器瓦の平瓦である。凹面では釉薬は全面に掛かっておらず，釉尻ハート型に掛けられた釉薬が垂れたと考えられる。で田ノ浦窯系のものと考えられる。被熱しており，釉薬はただれている。

583 ～ 592 は，近代の陶磁器である。583 ～ 588 は,薩摩磁器である。583・584 は，端反碗である。文様は型紙刷りで，外面は底部周辺に鋸歯文，その上に 583 では多様な文様が，584 では花文があり，内面には中央に松竹梅文，口縁部周辺に変形した鋸歯文がある。585 は,底部から外側に開く碗である。文様は型紙刷りで，外面は底部周辺に鋸歯文が描かれる。

586 は，皿である。型作り成形。釉薬はコバルトを使用しているが，内面・外面の文様は手書きで描かれている。平佐窯などで焼かれたか。587 は，小坏または蓋である。文様は型紙刷りで，外面には花文，内面には口縁部周辺に変形した鋸歯文がある。内面見込みは蛇の目釉剥ぎされる。588 は，皿である。高台内面は蛇の目釉剥ぎされる。文様は型紙刷りで，外面，内面に花文などの文様がある。589 は，磁器の容器蓋である。上面には「鹿印練歯磨」とかかれている。これは,明治 29（1893）年に長瀬富郎商店（現在の株式会社花王石鹸）が発売した練り歯磨きの容器である。590 は，磁器碗である。外面に「生協」と書かれている。鹿児島大学病院生協のものである。591 は，インク瓶である。上面には，コルクを指す穴が開く。内面も施釉されている。近代に丸善が常滑などで製作した陶器製のインク瓶である。形状や内面の調整が，ドイツ連邦共和国のラインラウト地方の塩釉炻器に似る。592 は，苗代川系の陶器甕である。内外



第 119 図　外御庭跡　出土遺物３



第 120 図　外御庭跡　出土遺物４

面に横方向の筋状の調整痕が残る。593は，関西もしくは堅野系の白色陶胎の壺である。堅野系にしては胎土が黄色がかる。

594は，黒色系の硯である。小型で，正方形である。硯として利用する上面だけでなく，下面も凹みがつくられる。上面の隅は掛けた部分に漆喰をいれて補強している。黒川分類の黒褐色系のものである。595は,硯である。幅広で大きい長方形硯で，黒川分類の黒褐色系のものである。596は，はGold wayと刻印された鼈甲を模したプラスチックの櫛である。戦後の物か。597は，骨製の歯ブラシの柄か。Kを盾形で囲んだ登録商標とLITTLE DAISYの刻印がある。

598～606は，木製品である。598は，杭である。全面を加工し，4面の面をつくりだす。上面は平坦に成形されており，元々がこの長さの短い杭であったと考えられる。599は，杭である。全面を加工し，複数の面を造り出す。600～606は,建築部材の一部か。600や601は,他の建築部材と組み合うようになっている。605は，外壁板材の一部か。鹿児島城で使用された可能性はあるが,近世･近代の遺物が混在して出土たため,判断できない。

611～617は，ガラス製品である。611・613は，タラ肝油の瓶である。戦前に医薬品として使用されていたと考えられる。611は，側面に「R KONISHI’S EMULSION」と「COD LIVER OIL」，下面に「菱形の枠にR」とのエンボスがある。小西利七商店（現:大日本製薬株式会社）の製品である。613は，側面に「SCOTT’S EMULSION」,「COD LIVER OIL」,「WITH LIME SODA」，下面に「B&C° 153 LTDN」とのエンボスがある。米國貿易商会が販売していたスコット乳菓の製品か。612は，薬瓶である。側面に「○KONISI&Co　○APOCHE CARY DOSHIUMUACHIOJ」とのエンボスがある。明治33年から市販された栄養剤,小西久兵衛（現：大日本製薬株式会社）の次亜燐の瓶である。大阪道修町のエンボスもある。次亜燐とは次亜リン酸カルシウムを配合したシロップ剤の商品名である。

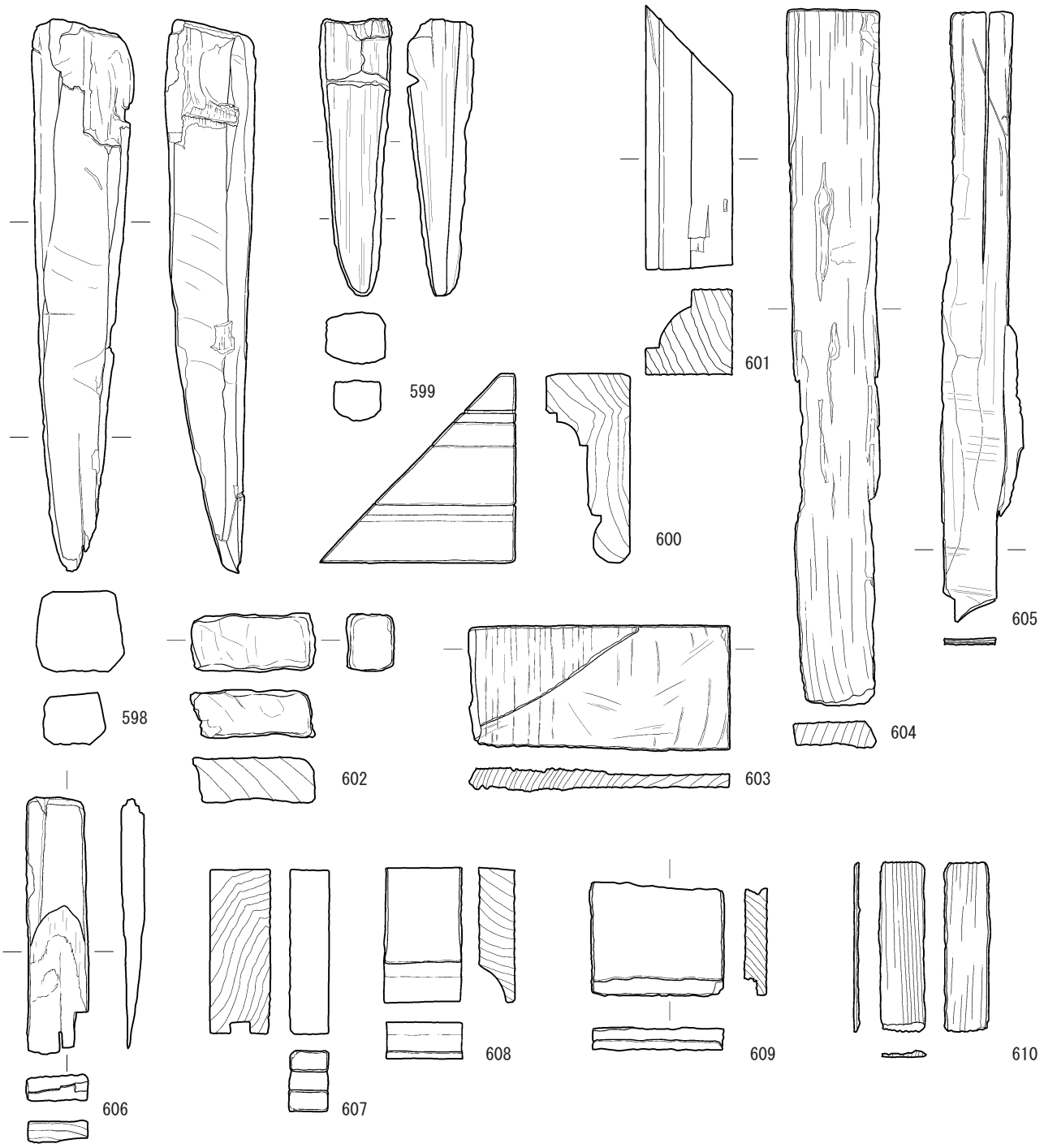
614は，牛乳瓶である。側面に「蒸気　消毒　全乳」「宮脇誠乳園」とのエンボスがある。形状から一合瓶か。615は，薬瓶である。「大坂浪速薬館本舗」「外用有効液」とのエンボスがある。616は，小型の薬瓶「大阪宇野製」のエンボスがある。当時の皮膚科で皮膚真菌症の治療薬として使用したサリチル酸コロヂウムの瓶ではないかと考えられる。現在でもサリチル酸アルコールは病原性糸状菌（水虫・たむし・はたけなど）の瘙痒性皮膚疾患治療薬として用いられている。617は，薬本である。「大坂森王林堂製」「健脳丸」とのエンボスがある。健脳丸は便秘薬である。ここでは，近代以降の大阪の薬品関係の瓶が多数出土している。

42トレンチ出土遺物（第122図607～610，第124図～126図618～664）

618～640は，陶磁器である。そのうち，618～624，626は，磁器である。618は，肥前有田の磁器皿もしく碗の蓋である。内面見込みには中央が花文の五芒星，口縁部周辺には四方襷文が，外縁は花文が絵は彼，高台内面には渦福と呼ばれる草書体の「福」の銘款がある。総釉で，畳付は釉剥ぎされる。18世紀前半。619は，肥前の磁器碗である。外青染付。筒江窯（佐賀県武雄市）で焼かれたものと考えられる。内面見込みには五芒星が描かれ，高台内面には，銘款がある。総釉で，畳付は釉剥ぎされる。18世紀後半。620は,肥前系の磁器碗である。内面は口縁部付近に格子文，外面に雲文かを描く。内面見込みは蛇の目釉剥ぎされるが，その上から透明釉薬が掛けられる。総釉で，畳付は面取りされる。1820年～1860年代。621は，肥前系の磁器皿である。内面には文様が描かれるが，呉須は滲んでいる。総釉で，畳付きは面取りされる。1780～19世紀前半。622は，肥前有田の磁器碗である。胴部が丸みを帯びて膨らむ大ぶりの碗で，外面には草花文，内面には口縁部付近に四方襷文が描かれる。18世紀前半。623は，肥前の磁器皿である。外面には唐草文，内面見込みに竹などの文様，空白を挟んでその周囲にも文様が描かれる。高台内面は釉剥ぎされる。19世紀初頭～幕末。624は,肥前の磁器蓋である。重箱などの蓋の可能性がある。外面には花文が描かれる。合せ口の部分は釉剥ぎされる。18世紀後半～19世紀初頭。626は，肥前系の磁器火鉢か。外面に文様はあるが,内面，高台内面は露胎。近代。

625，627～640は，陶器である。625は，堅野系の白薩摩と呼ばれる白色陶胎の碗である。青土の象嵌で文様が描かれる。18世紀～19世紀。627は，堅野系の陶器皿である。口縁部付近は２段階に屈曲している。628は,肥前の瓶である。大徳利であると考えられる。内野山窯跡で焼かれたと考えられる。内面は露胎。外面は，灰褐色や褐色の釉薬が掛けられる。18世紀後半～19世紀初頭。629は，加治木・姶良系の半陶半磁の透明釉の碗である。内面見込みと外面底部に目跡が残る。山元窯で焼かれたと考えられる。17世紀後半。630は，加治木・姶良系の碗である。灰褐色の胎土に透明釉が掛かる。元立院窯で焼かれた物である。高台は内傾する。総釉で，畳付は釉剥ぎされる。18世紀。631は，苗代川系の土瓶である。外面底部付近は露胎。内面は施釉されるが，被熱しており釉薬はただれている。18世紀後半以降。632は,堅野系の三島手と呼ばれる象嵌陶器の香炉か。背面には鋸歯文状の文様が描かれる。18世紀～19世紀。633は,苗代川系のヤマジョカと呼ばれる土瓶である。注口の上に把手が付く。被熱しており，釉薬はただれている。19世紀。634は，加治木・姶良系の碗である。赤褐色の胎土に黒色釉薬が掛けられる。18世紀後半以降。635は,碗である。赤褐色の胎土に緑黄色の化粧土が掛けられ,

第 121 図　外御庭跡　出土遺物５



第 122 図　外御庭跡　出土遺物６

0　（1：4）　10cm
598～610

その上から透明釉が掛けられる。龍門司窯で焼かれた物である。18 世紀後半以降。636 は，千寿碗と呼ばれる腰折碗である。赤褐色の胎土の上に白化粧土が掛けられ，その上から透明釉が掛けられる。龍門司窯で焼かれたものである。18 世紀後半以降。637 は，加治木・姶良系の蛇蝎釉の碗である。19 世紀。638 は，加治木・姶良系の灯明台である。胎土は赤褐色。外面は露胎で，底部には糸切り痕が残る。内面は透明釉が施釉される。18 世紀。639 は，苗代川系の鉢である。植木鉢と考えられる。18 世紀後半～ 19 世紀前半。640 は，苗代川系の擂鉢である。口縁は折り曲げ口縁。口縁部の内面側は露胎である。19 世紀。

641 ～ 650 は，瓦である。641 は，連珠三巴文軒丸瓦（A-061）である。小型で，瓦当表面には雲母子が目立つ。642 は，牡丹紋軒丸瓦（B-004）である。凸面から瓦当部分は反り上がる。凸面の瓦当との接合部分には，ヨコ

第 123 図　外御庭跡　出土遺物７

ナデ，尻側には縦方向のケズリの痕が残る。凹面は，ナデにより丁寧に仕上げられている。643 は，大坂式軒桟瓦（A-060）である。文様区は狭い。瓦当上面は面取りされる。瓦当は褐色で，凹面は灰褐色である。被熱によるものと考えられる。644 は，鹿児島式軒桟瓦（B 種不明）である。鎌桟瓦である。左周縁には，丸に休の刻印（刻印 039-3）がある。瓦当表面には雲母子が目立つ。645 は，丸瓦である。凸面では，玉縁とその接合部は強いヨコナデ，尻から頭にかけて縦方向のケズリの痕が残る。凹面には布袋痕が残る。凸面中央部には，刻印の一部が残るが，刻印番号は不明である。被熱しており，全体が淡褐色に変色している。特に，凹面は赤く変色している。646 は，桟瓦である。凹面の周縁は面取りされる。645 と同じく，被熱しており，全体が淡褐色に変色している。647 は，桟瓦である。凹面には滑り止めのためのカキメがくの字状に残る。頭側面には，丸にサカの刻印（刻印 067）がある。648 は，平瓦もしくは熨斗瓦。凹面には，滑り止めのためのカキメが文様状に残り，周縁は面取りされる。全体に雲母子が目立つ。近代以降。649 は，鬼板瓦である。表面は厚い板に粘土を貼り付けて文様を作る。２か所に直径 2cm の釘穴が焼成前に穿たれる。650 は，陶器瓦の丸瓦である。成形は粘土紐巻き上げ技法で，凹面には，粘土紐を積み上げた部分に強いヨコナデ調整が残る。凸面は釉薬が流し掛けされたものがたれており，田ノ浦窯系の釉薬瓦と考えられる。被熱しており，釉薬はただれている。

651 ～ 659 は，土製品である。651 は，白色系の土師器皿である。薄手。外面には墨書があるが，判読できなかった。652 は，白色系の土師器皿である。薄手。胴部は途中で屈曲する。底部に糸切り痕はなく，ヘラ切りと考えられる。653 は，白色系の土師器皿である。薄手。底部に糸切り痕はなく，ヘラ切りと考えられる。654 は，赤褐色系の土師器大皿である。内面・外面にヨコナデの痕が明瞭に残る。底部には糸切り痕が残る。655 は，白色系の土師器大皿である。胴部は途中で屈曲気味に立ち上がり，口縁部は外反する。底部に糸切り痕はなく，ヘラ切りと考えられる。底部には，炭化物が付着する。656 は，赤褐色系の土師器小皿である。内面には布目が残る。底部に糸切り痕はなく手捏ね成形である。657 は，白色系の土師器碗である。外面には４条の沈潜が巡る。658 は，赤褐色系の鉢である。口縁部は口唇部内側が一段低くなるくの字口縁で，外縁にはミガキがみられ，その部分が黒色に変色する黒色土器のような調整を行う。659 は，陶器の火鉢の焼成不良品である。17 世紀。

660 は，銅製の紙巻き煙草用のキセルである。

661 ～ 664 は，木製品である。661・662 は，羽子板型鏝板である。羽子板型鏝板とは，左官が壁に漆喰を塗る際に，漆喰などを乗せるための左官道具である。樹種同定の結果，661・662 材質は杉で，662 は，放射性炭素年代測定の結果，1806 年～ 1926 年の可能性が高いとの結果がでた。662 は大型で，推定七寸の大型。661 は，推定約５寸の小型である。663 は，同じく左官道具で，漆喰の入った桶から職人に漆喰を介添えするための鞘取りであると考えられる。建物の建築や維持管理に用いた物か。664 は，札である。「池田」と書かれており，第七高等学校造士館なでで生徒もしくは教職員の出欠表示のために用いられたものか。

第 122 図の 607 ～ 610 も，42 トレンチ出土の木製品で，建築部材の一部か。607 ～ 609 は，他の建築部材と組み合うようになっている。鹿児島城で使用された可能性はあるが，近世･近代の遺物が混じって出土しているため，判断できない。

小結

調査の結果，堀には，塀の台座や本丸・二之丸と本丸東堀を塞ぐ閉塞石垣，水量を調節する井堰が伴うことが確認された。

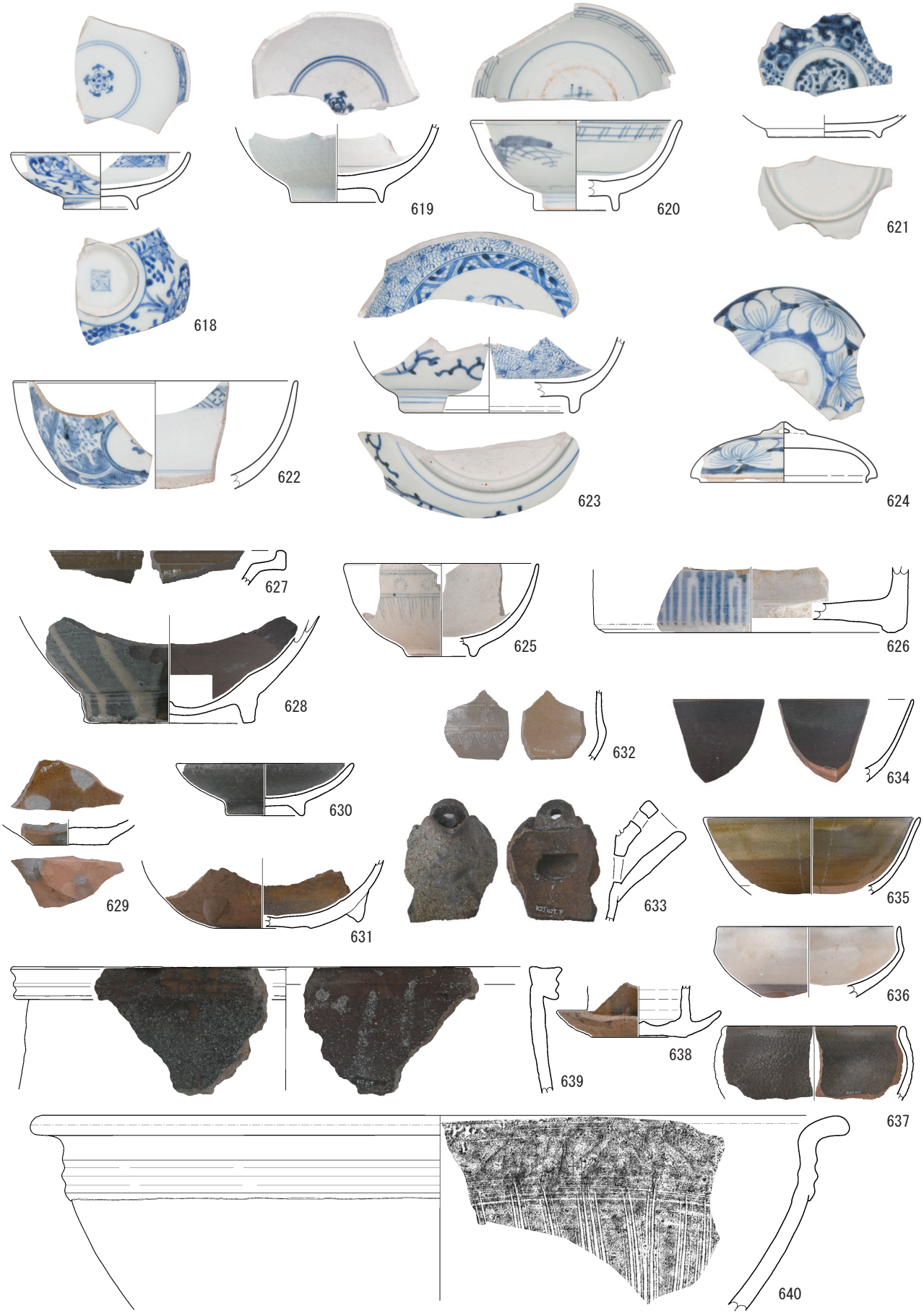
昭和 52 年度の二之丸の調査では，本丸南側石垣には犬走状の石段が巡っているが，堀の南側には，犬走り状石垣がないことが確認されている。また，堀の南側では堀の東と中央の２か所に階段を確認している。階段は，８段で幅 3.5m，丁寧な造りである。さらに，階段の南では，建物や井戸，螺旋状を呈する石畳等を検出している。

今回の調査と昭和 52 年度の調査結果をまとめた図（第 148 図）をみると，外御庭跡の堀は，本来の堀がはたすべき役割である防御，排水機能以外の目的が付加されてと考えられる。井堰や水門によって水を溜め，利用する必要があったこと，階段を設置することで堀に出入りする利便性が高められていること，南に隣接する建物・井戸・螺旋状石畳等の遺構と結びついた一体の行動がとれる場所であったこと，である。また，井堰遺構と閉塞石垣の積み方が異なることから，井堰遺構は，後世に何らかの目的で新たに造られた可能性がある。

二之丸には，嘉永６（1856）年第 11 代薩摩藩主島津斉彬によって庭中池中に「水泳場」が設置されていたとする史料（『鹿児島県史』３）がある。上記のことから考えるとこの堀が「水練場」に改造された池であった可能性がある。時期差がある石垣の積み方は，井堰遺構が，島津斉彬が藩主であった時期に「水泳場」を造るために新たに造られたことが考えられる。

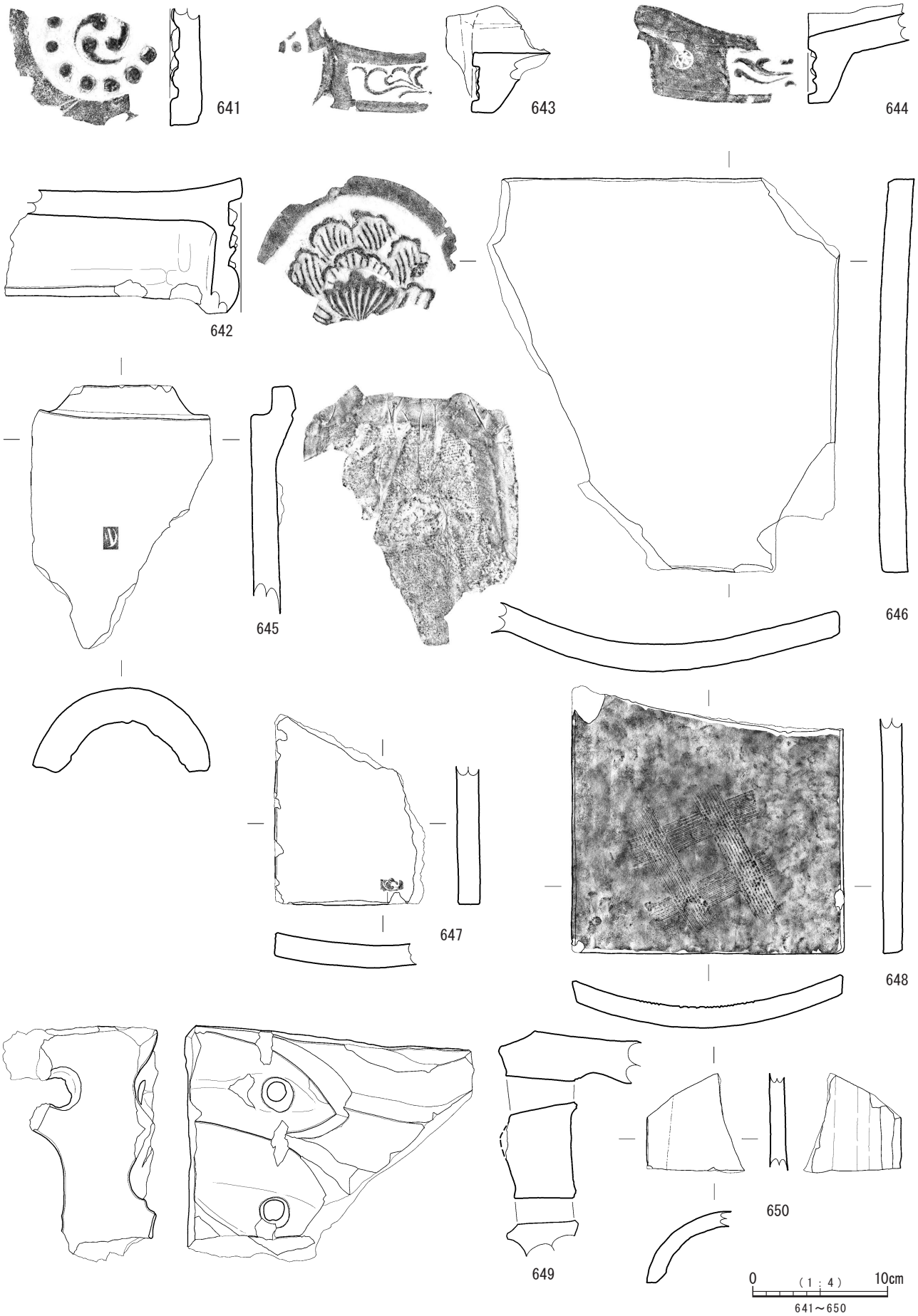
近代の排水溝は，加工した溶結凝灰岩と石垣の傾斜を組み合わせ，巧みに利用した方法は，明治・大正期にわたる近代工法の特徴を示したものといえる。

34 トレンチ付近の石垣には，明治 10（1877）年の西南戦争時の弾痕等も多くみられ，エンフィールド銃の銃弾が出土した。

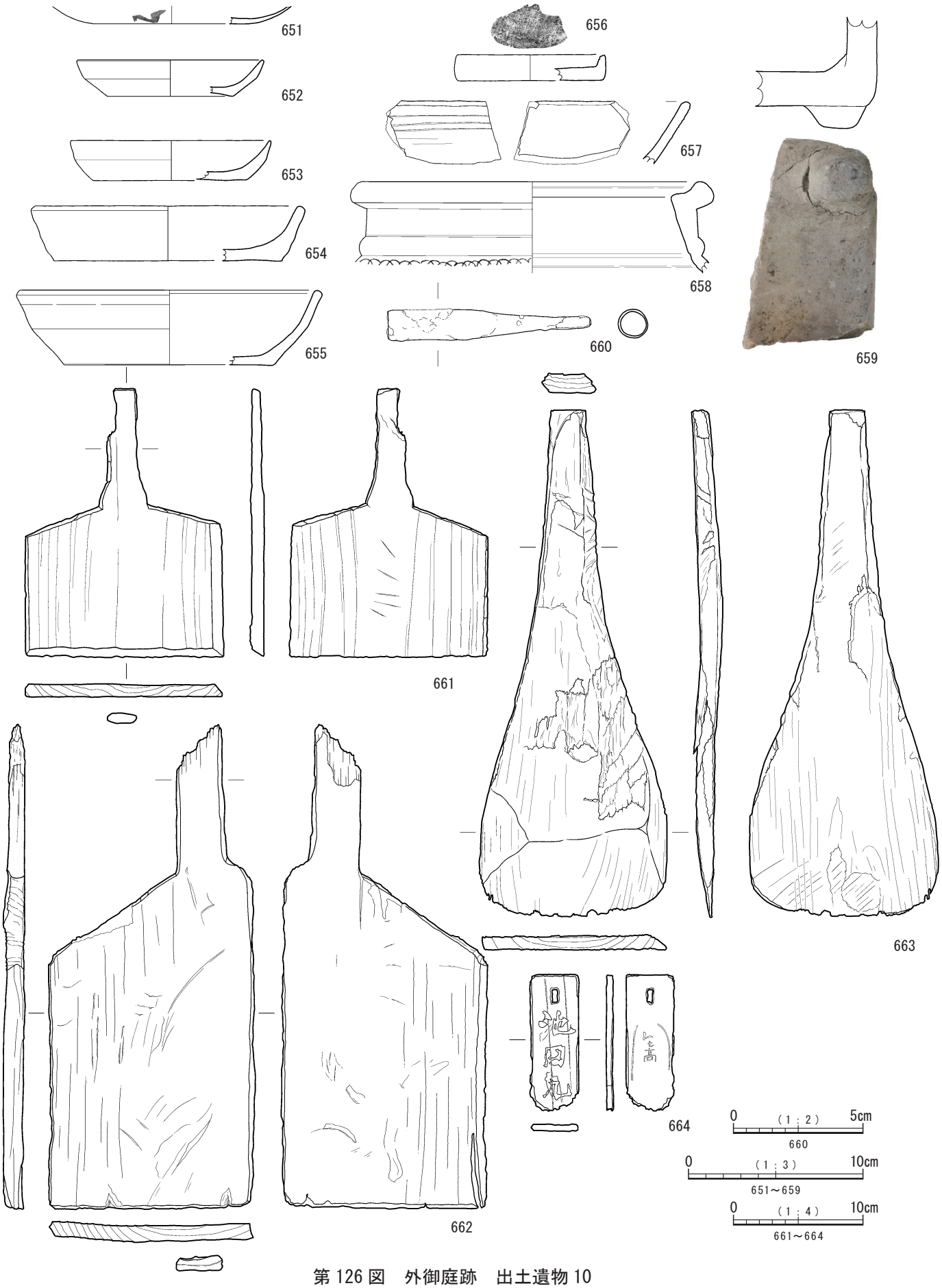


第 124 図　外御庭跡　出土遺物８

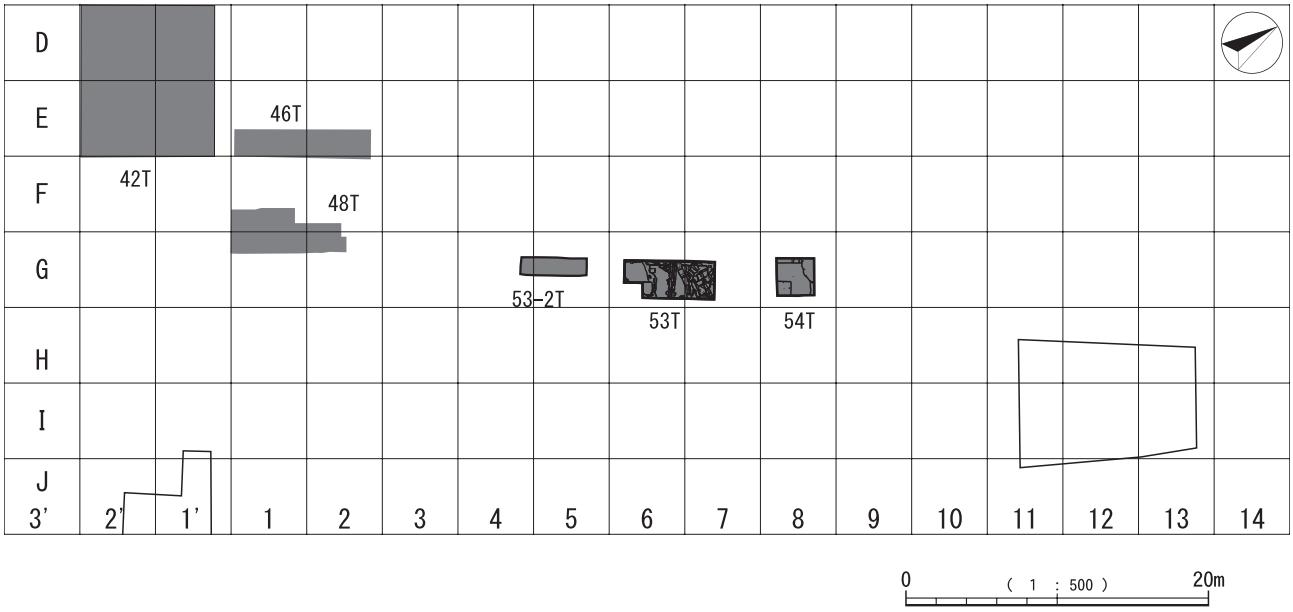
0　（1：3）　10cm
618～640



第 125 図　外御庭跡　出土遺物９



第 126 図　外御庭跡　出土遺物 10



第 127 図　御池跡調査区トレンチ配置図

９　御池跡

明治５（1872）年「島津御本丸庭園景」（第 147 図⑥）では，麒麟之間の東方向で築山と滝状の落水と御池が，同年「島津御本丸御書院景」（第 147 図④）でも御池が写っている。この御池は，第七高等学校造士館の開学された段階でもまだ本丸内に残されていたが，昭和２（1927）年のプール建設のために移設された。その後の御池の変遷については，第Ⅲ章第２節７で詳くし述べた。

調査区は，御池の北側に想定された。この調査区では，「御池」北側の遺構残存状況を確認することを目的とし，G- ４～８区に 53，53-2，54 トレンチを設定した。

53 トレンチ

概要　御池の遺構残存状況確認のために，G- ５・６区に 2.5 × 6 m で設置した。昭和 53・54 年度の本丸跡の発掘調査で石管水道が確認された地点である。

また，トレンチ南側で第七高等学校のプール建設時の掘削開始部を検出した。遺物はほとんど近代以降の造成土出土であった。53-2 トレンチとあわせて報告する。

遺構　遺構は，石管水道２列と排水溝，不明遺構を確認した。

（１）石管水道①・②

中央部を刳り貫いた長方形の築石を連ねた，主に上水道として使用された水道である。築石のつなぎ目は，漆喰で補強され，水漏れを防止していた。石材は溶結凝灰岩である。

石管水道①と石管水道②の一部は，上面が削平されており，中の刳り貫き部が露出した状態で検出された。

２列の石管水道は上下に交差しており，上位の石管水道①は，標高 10.73m で幅は約 40cm を測る。下位の石管水道②は，標高約 10.58m で幅は約 30 cmである。

昭和 53・54 年度の本丸跡の発掘調査成果より，石管水道①の延長は，41 トレンチ西の南北方向の排水溝につながり，石管水道②は，御角櫓跡の排水溝③の排水溝につながっていると考えられる。

（２）排水溝

排水溝は，幅約 15 cmの板石を配列しており，幅約 50 cm，深さ約 60 cmである。標高は，底石 9.99m，蓋石 10.62m を測る。蓋を持つ暗渠排水溝である。

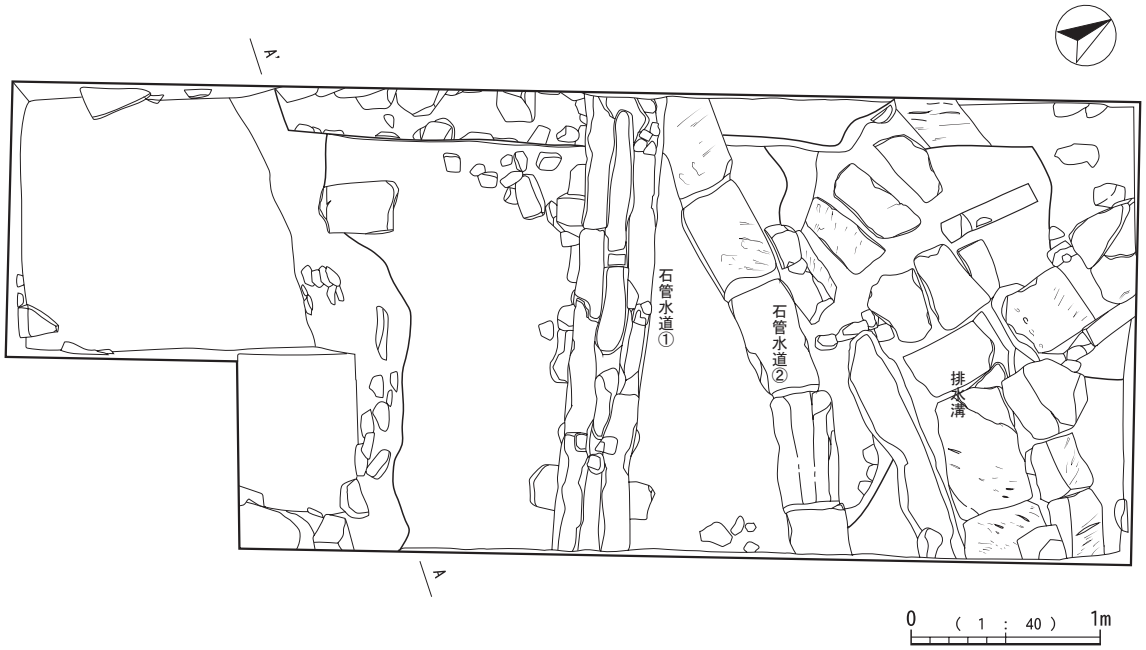
排水溝は，北側から石管水道②の手前で東方向に曲がる。この排水溝の延長は，42 トレンチ西の南北方向の排水溝につながっている。

（３）不明遺構

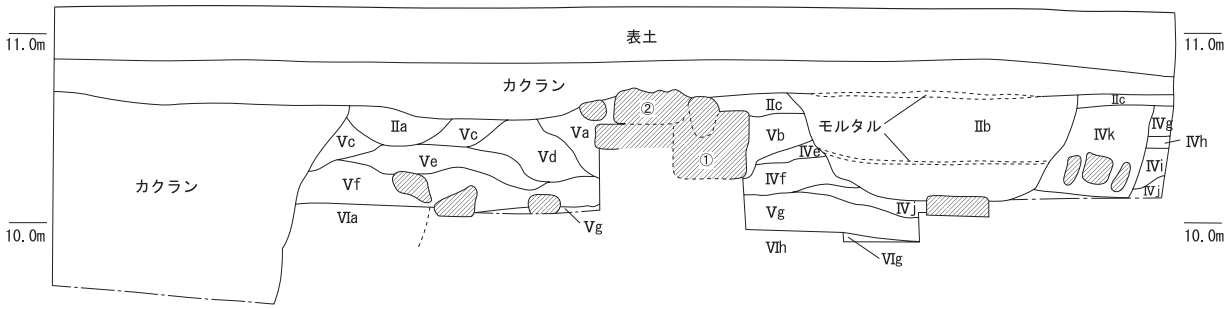
暗渠排水溝の西側には，列状をなす平石が４個出土した。平石は長辺を東西方向に並べられ，石管水道の下から北北西へ下るように配置されている。標高は 10.385m ～ 10.184m である。時期や性格は不明である。庭園などに見られる飛び石か。石材は溶結凝灰岩である。

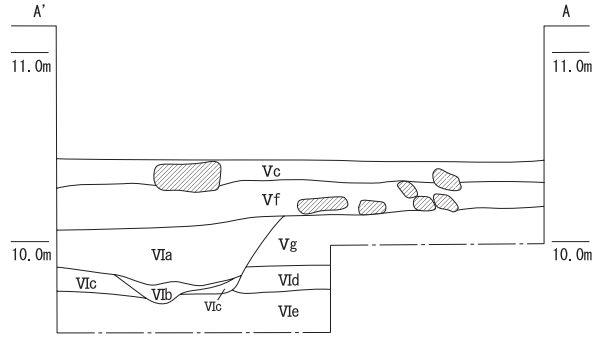
53-2 トレンチ

遺構　53 トレンチの調査結果を受け，周辺における遺構の広がりを確認するため，G- ４・５区に 2.5 × 2.5m で設定したが，遺構は確認できなかった。

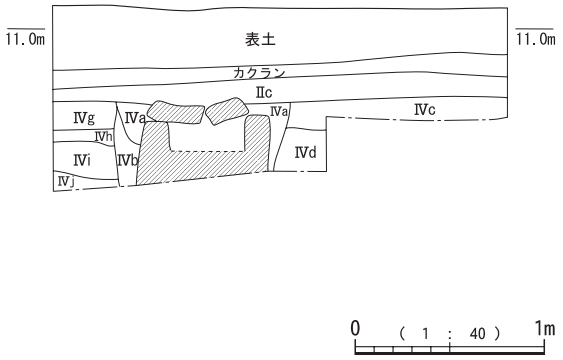


西壁





北壁



第 128 図　53 トレンチ平面図・土層断面図（西壁・北壁）

第８表 53 トレンチ土層注記

層	色（記号）	色名	特徴
Ⅱa	10YR4/1	褐灰色土	
Ⅱb	10YR5/1	褐灰色土	砂土。中位モルタル。下位灰黄褐色粘質土（10YR5/4）
Ⅱc	10YR4/3	にぶい黄褐色土	下位に桜島火山灰が堆積。昭和 54 年度発掘調査埋め戻し土
Ⅳa	10YR4/2	灰黄褐色土	5 ㎜程の白色礫（石灰岩？）が多量に含まれる。石組排水溝①設置堀込み
Ⅳb	10YR3/3	暗褐色土	砂質土。石組排水溝①設置堀込み
Ⅳc	10YR4/3	にぶい黄褐色土	凝灰岩片が多く含まれる。石組排水溝②北側側石背面土
Ⅳd	10YR4/2	灰黄褐色土	明黄褐色粘質土（10YR6/8）ブロック状混在土。石組排水溝②北側側石背面土
Ⅳe	10YR6/6	明黄褐色土	5 ㎜程の白色礫（石灰？）が多量に含まれる。
Ⅳf	10YR4/3	にぶい黄褐色土	5 ㎜程の白色礫（石灰？）が多量に含まれる。
Ⅳg	10YR4/2	灰黄褐色土	白色礫が若干含まれる
Ⅳh	10YR3/2	黒褐色土	白色礫が多く含まれ，灰色粘質土ブロックを含む
Ⅳi	7.5YR3/1	黒褐色土	砂質が強く，1 ㎜程の礫が多く含まれる。黒漆喰片も若干含む
Ⅳj	2.5Y4/2	暗灰黄色土	粘性が強く，しまりが良い
Ⅳk	10YR2/1	黒色土	2 ㎜～の礫が多く含まれしまりがない
Ⅴa	10YR3/1	黒褐色土	粘性がありしまりが良い。黄褐色～白色粒を若干含む（水道石管②敷設時？）
Ⅴb	7.5YR3/1	黒褐色土	砂質が強く 5 ㎝程の凝灰岩が若干含まれる（水道石管①敷設時？もしくは②）
Ⅴc	10YR3/2	黒褐色土	砂質土。白色 5 ㎝程の礫が含まれる
Ⅴd	10YR4/2	灰黄褐色土	明黄褐色土（2.5Y6/6）ブロック状混在土
Ⅴe	10YR4/1	褐灰色土	砂質土，粘質土が混在
Ⅴf	10YR4/3	灰黄褐色土	砂質土。砂粒が粗く 5 ㎜程の礫が多く含まれる
Ⅴg	7.5YR4/2	灰褐色土	砂質土。1~3 ㎝程の礫と砂粒の粗い砂質
Ⅵa	5Y4/1	灰色土	部分的にシルト，砂質土が薄く堆積。1 ～ 10 ㎝程の礫も多く含まれる
Ⅵb	10YR4/2	灰黄褐色土	5 ㎜程の礫が多く含まれ，しまりがない
Ⅵc	10YR3/3	暗褐色土	砂質が強く灰白色粘質土が含まれる
Ⅵd	10YR4/4	褐色土	砂質が強く風化礫を多く含む
Ⅵe	2.5Y6/6	明黄褐色土	砂質土。砂粒は粗く風化礫を多く含む
Ⅵf	10YR3/1	黒褐色土	砂質土。5 ㎝程の礫が多く含まれる
Ⅵg	10YR4/1	褐灰色土	砂土。砂粒は粗い
Ⅵh	10YR4/1	褐灰色土	黄褐色土（10YR5/6）混在土。風化礫が多く含まれしまりが良い

小結　御池の遺構は確認できなかったが，42 トレンチ西につながる石棺水道②と排水溝を確認した。

54 トレンチ

概要　調査区は，麒麟之間の一部である。この建物は，明治５(1872)年「島津御本丸庭園景」(第 147 図⑥)で写っている建物である。昭和 53･54 年度の本丸跡の調査では，当該箇所は浅く掘り込んで礫，軽石等を充填した坪地業を確認したとされる（鹿児島県教育委員会 1982)。

今回は，過去の遺構残存状況確認のために，G- ６区に 2.5 × 2.5m で設置した。

調査の結果，昭和 53・54 年に確認されたとする坪地業は確認できなかった。ただし，標高 10.58m で，1 ～ 5 ㎝の玉石が多く含まれる硬化面を確認した（１層)。この層自体が面的に広がる建物基礎である可能性がある。

遺構　遺構は，土層で不明遺構①・②を確認した。遺構内から遺物は出土していなため，時期は不明である。

（１）不明遺構①

規模は幅約 120㎝，深さ 56 ㎝の台形の掘り込みである。2a 層では，玉石や礫，炭化物が含まれる。

（２）不明以降②

幅 90㎝ 深さ 44㎝ の台形の掘り込みである。3a, 3b の堀片から，２時期もしくは，堀直しの可能性がある。

小結　１層が麒麟之間建築の際に造成された基礎構造であるとすれば，不明遺構①・②は，時期は不明だが，それ以前の遺構である。

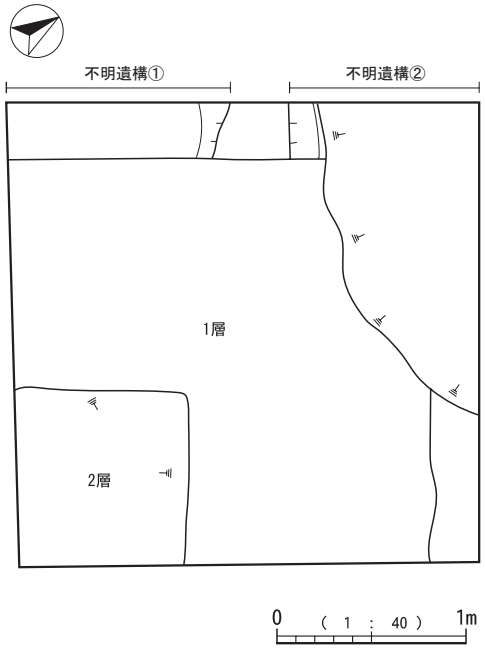
出土遺物（第 130 図 665 ～ 676）

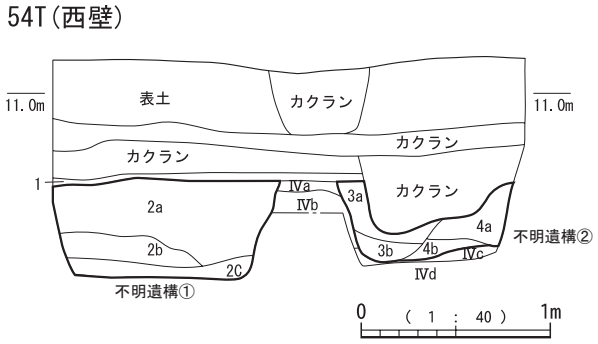
53 トレンチ，53- ２トレンチ，54 トレンチ出土遺物を合わせて報告する。

図化が可能な物は，全て瓦である。665 は，牡丹紋軒丸（B-003）である。瓦当周縁は高さがある。凸面の瓦当との接合部には，強いヨコナデの痕が残る。凹面は布袋痕がナデ消され，丁寧に仕上げられている。666 は，

大阪式軒平瓦（A 種不明）である。小型で，文様区も狭い。瓦当は顎貼り付け。瓦当上端･下端は面取りされる。667 は，その他の軒桟瓦（A-038）である。笵の状態が悪いためか，文様はあまり鮮明にはつけられていない。瓦当上端・瓦当裏面下端を面取りされる。669 は，鹿児島式軒桟瓦（B 種不明）である。鎌桟瓦である。瓦当上端･下端は面取りされる。670 は,小菊瓦（K-04）である。被熱しており，褐色に変色し，黒色化した漆喰が付着している。671 は，平瓦である。頭側面には，四角に記号の刻印（刻印 084）がある。凹面にはわずかに縦方向のケズリの痕が残り，周縁は面取りされている。672 は，桟瓦である。頭側面には，四角に上伊敷土の刻印（刻印 008）がある。凹面の周縁は面取りされる。673 は，平瓦である。凹面は周縁が面取りされ，隅部も角が落とされる。胎土は暗灰褐色で白色砂粒を多く含んでいる。薩摩以外で製作された可能性がある。674 は，塀瓦である。上面の周辺は面取りされる。被熱したためか，明褐色である。

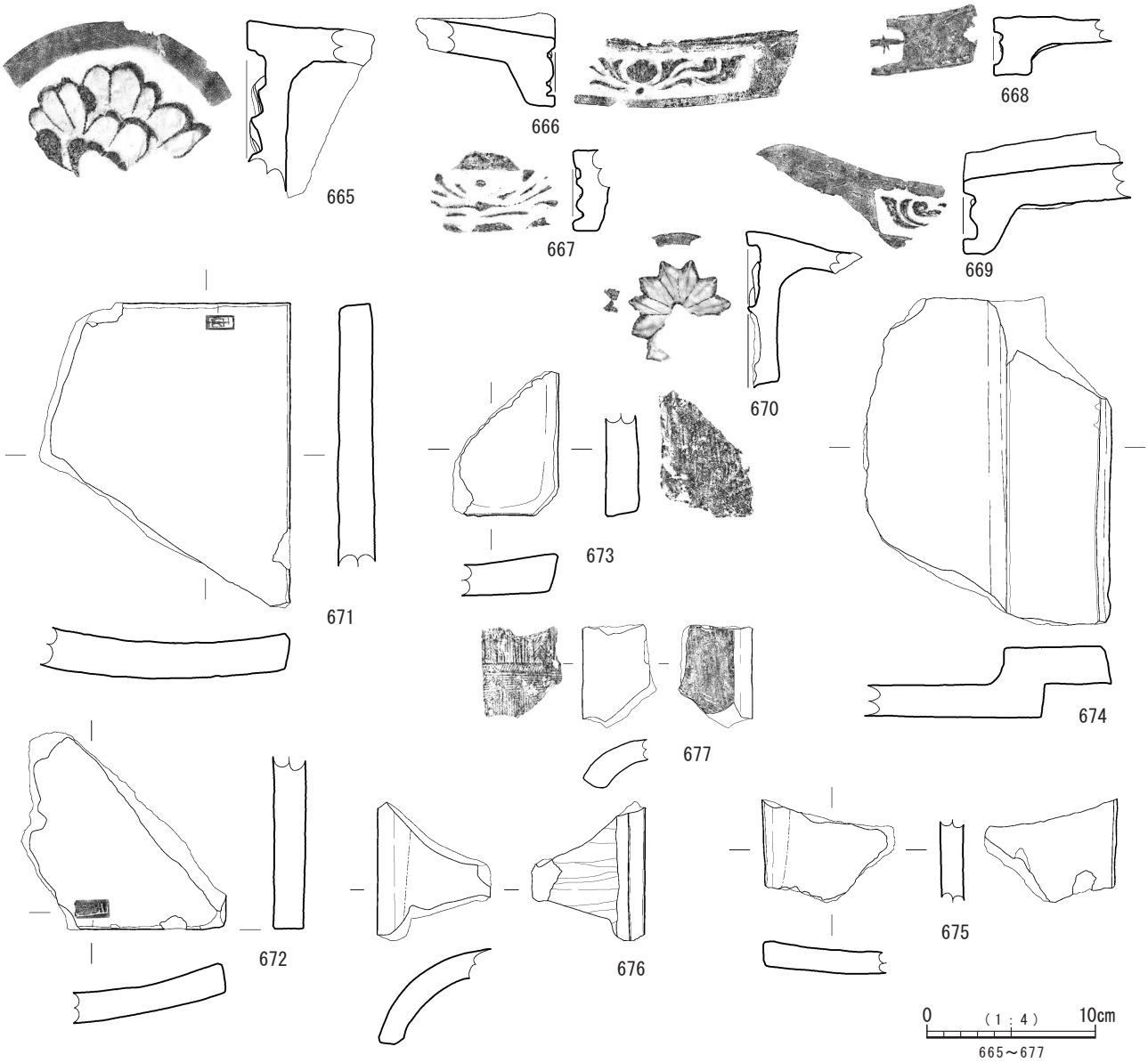
668・675・676 は，陶器瓦である。全て被熱しており，釉薬はただれている。668 は，陶器瓦のその他の軒平瓦





層	色（記号）	色名	特徴
1	10YR5/1	褐灰色土	砂質土。1～5 ㎝程の玉石が多量に含まれる。砂質の砂粒は細かく固くしまっており，上下ともに酸化し明褐色に変成。南側石垣背面の裏石垣地業と共通する層の印象
2a	10YR3/3	暗褐色土	玉石や礫が含まれ，炭化物も若干含まれる
2b	7.5YR4/1	褐灰色土	砂質土。砂土，灰色シルト，酸化マンガン等が水平に互層となっている。水成堆積層
2c	10YR4/2	灰黄褐色土	砂質土。シルト混じり。しまりがない
3a	10YR4/2	灰黄褐色土	細かい軽石粒と炭化物が含まれ，土質は密である
3b	10YR4/2	灰黄褐色土	1～3 ㎝程の黄褐色土風化礫が多く含まれる
4a	2.5Y5/2	暗灰黄褐色土	砂質土。褐色土がブロック状に入る
4b	7.5YR4/1	褐灰色土	粗い砂質。粘質土。酸化マンガンがブロック状に入る
Ⅳ a	10YR3/3	暗褐色土	1 ㎜程の白色粒が含まれる
Ⅳ b	7.5YR4/3	褐色土	均質土
Ⅳ c	2.5Y4/1	黄灰色土	砂土。砂粒は粗い
Ⅳ d	10YR7/4	にぶい黄橙色土	粘性強い。黄灰色粘質土（2.5Y5/1）ブロック状堆積土

第 129 図　54 トレンチ平面図・土層断面図（西壁）



第 130 図　御池跡　出土遺物

（D種不明）である。魚の骨のような表現の文様であることから，堂平窯跡で製作されたと考えられる。被熱しており，表面はただれている。675 は，平瓦である。凹面に釉薬が流し掛けられており，田ノ浦窯系のものと考えられる。凹面周縁は面取りされる。676 は，丸瓦である。成形は粘土紐巻き上げ技法で，凹面には，粘土紐を積み上げた部分に強いヨコナデ調整が残る。釉薬が流し掛けされており，田ノ浦窯系の釉薬瓦と考えられる。

677 は，朝鮮系瓦である。厚手。凸面にはタタキで幾何学紋様がつけられる。凹面には布袋痕が残る。

小結　この地点は，「サギ之間」「麒麟之間」等で構成される御殿の御庭にあたる。53 トレンチの排水溝は，この建物に伴う雨落溝の可能性がある。

53 トレンチの不明遺構（石列）と 54 トレンチに不明遺構①・②は，昭和 53・54 年度の本丸跡の調査や今回の他の地区の遺構検出面よりも下層から確認されている。そのため，これらの遺構は，他の遺構よりも古い時期のものである可能性がある。

42 トレンチ西には，御庭ができる以前の南北方向の排水溝も確認されており，この遺構も御庭の造成以前のものであることも想起される。

10　能舞台跡（第 131 図～第 134 図）

概要　能舞台跡は，御楼門復元工事に伴い，御楼門周辺にあった第七高等学校同窓会記念碑が移設されることとなったため，この発掘調査を実施した。調査地点は，昭和 53・54 年度に黎明館建設に伴って調査された箇所ではあったが，遺構の残存状況を確認するため，再度調査を行った。明治６（1873）年「鹿児島城本丸殿舎配置図」では，この地点に能舞台が描かれており，昭和 53・54 年度の発掘調査では，能舞台は確認されていないが，この周辺で能舞台跡に近接する麒麟之間やサキ之間，奥御書院などの建物が確認されている。

発掘調査の結果，過年度の発掘調査時に，遺構検出面まで到達していなかったことを確認し，新たに遺構を確認した。検出された遺構は，能舞台の橋掛かりとそれに平行する地業４基である。

遺構　調査区内には，近代以降の攪乱が多く，それらは近世の地業と同様に，穴を掘り，そこに礫を敷き固めたものであった。多くの礫は，近世にこの周辺にあった地業の礫が再利用されている。大半は，コンクリ－トブロック片や近代以降の陶磁器などの遺物を含んでおり，これらは近世の遺構から除外した。確認された近世の遺構は，標高約 10.5m の基本土層Ⅳ層上面で能舞台の橋掛り跡と地業４基を検出した。今回は，遺構の残存状況の確認を目的とした発掘調査であったため，遺構は平面検出に止め，半裁などによる断面の確認は行っていない。

能舞台跡（橋掛り）

橋掛りとは，「本舞台」と「鏡の間（楽屋）」を結ぶ箇所に当たり，今回はその床面を確認している。検出した橋掛りの床面は，長さ約 950cm，幅約 150cm，深さ約 30 ～ 35cm であるが，上部は後世の攪乱のために削平されていた。底面は，逆半円形の溝状の硬化面を作り，その硬化面の上に漆喰を敷き固めていた。遺構検出に止めたため，漆喰の厚さは不明である。漆喰の表面は平滑に整えられ，研磨されていた。東京大学構内遺跡医学部教育棟地点や彦根城跡で確認された能舞台も地面を一段掘りくぼめ，その上に漆喰を敷き固めており，同様の構造である。漆喰を敷固めるのは，音を反響させて響かせるという音響効果を狙ったためと考えられる。

橋掛り１～３トレンチからは，瓦が出土した。図化していないが，雲母が掛かる 18 世紀後半以降の瓦が大半であること，能舞台跡調査区で出土遺物の中には，図化したものを含め 18 世紀～ 19 世紀のものが大半を占めていることから，元禄９（1696）年の大火の以降に建てられたと考えられる。

橋掛り周辺では，３～５cm の黒色の細長い円礫が多く出土した。これらは，反射材としての白砂に利用された可能性がある。

地業１

調査区外まで広がっているため，規模は不明である。３cm ～拳大の溶結凝灰岩の角礫を敷き詰めている。

地業２

直径約 60cm の円の中に３cm ～拳大の円礫・溶結凝灰岩の角礫を敷き詰めている。

地業３

直径約 60cm のやや崩れた円形の中に，３cm ～人頭大の溶結凝灰岩の角礫を敷き詰めている。

地業４

長さ 60cm，幅 35cm の楕円形の中に３cm ～拳大の円礫・溶結凝灰岩角礫を敷き詰めている。

地業とは，円形に堀りくぼめた穴に溶結凝灰岩を充填させる南九州独特の建物の基礎構造である。地業１～４は，橋掛りに平行に並んでいる。また，地業１～４の反対には，カクラン６がある。この攪乱は，一部コンクリ－ト片などを含むため，近代以降のものと考えられるが，この攪乱のため，橋掛りの地業が削平を受けた可能性がある。地業１～４は，能舞台の橋掛りの上屋構造の基礎の可能性がある。ただし，それぞれの柱間は，約 1.8m ～ 2.1m であり，均一ではないなど，断定はできない。

出土遺物　能舞台跡調査区では，678 ～ 696 が出土した。

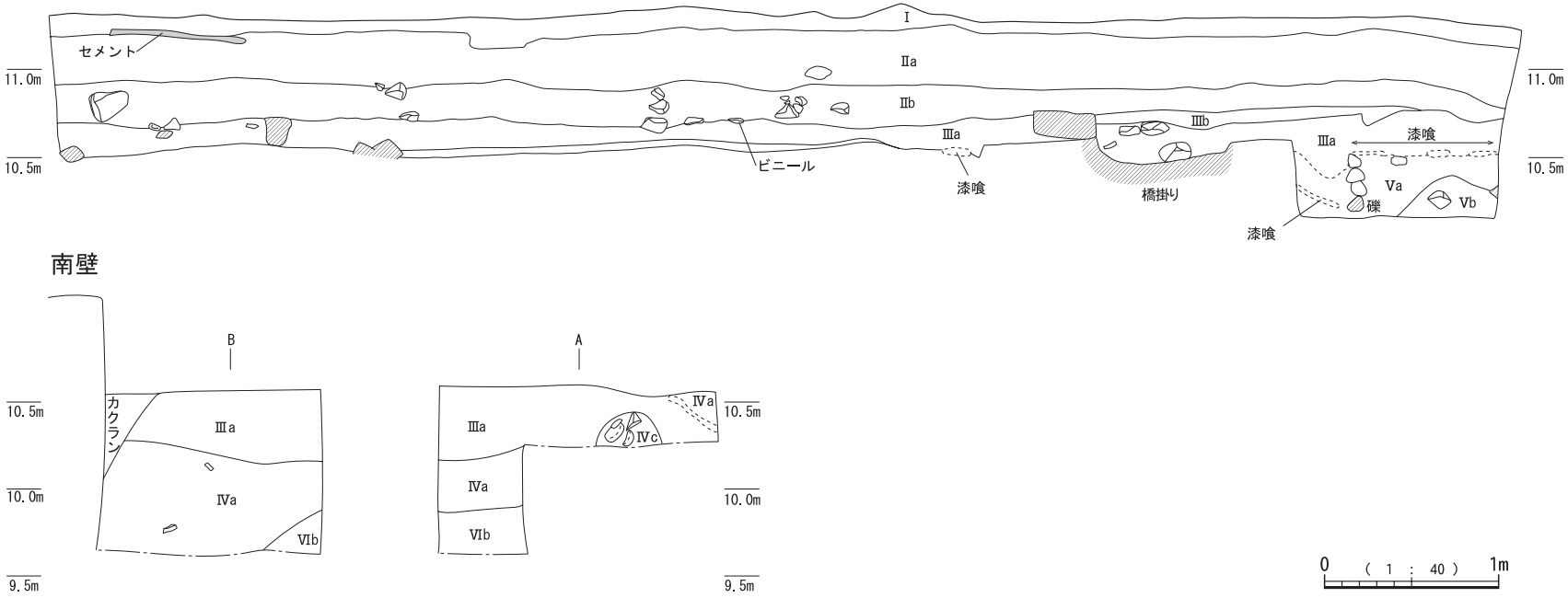
678 ～ 693 は，陶磁器である。678 ～ 680 は，磁器である。678 は，中国福建省の青花大碗である。外面には蛸唐草文などが描かれる。18 世紀。679 は，肥前系の小碗である。透明釉は青みがかっており，薩摩磁器の可能性がある。外面には文様が描かれる。総釉で，畳付きは釉剥ぎされる。18 世紀末～ 19 世紀。680 は，磁器碗である。内面見込みには，☆の中に織と銘が入る。高台内面には，扇と TRADE　MARK の商標がある。近代。

681 ～ 692・694 は，陶器である。681 は，竪野系の白薩摩と呼ばれる白色陶胎の碗もしくは壺か。高台は厚手で内傾する。18 世紀～ 19 世紀。682・684 は，竪野系の灰色陶胎の小碗である。小型。684 は，胎土に化粧土を掛け，その上から透明釉を掛けている。18 世紀～ 19 世紀。683 は，加治木・姶良系の半陶半磁の透明釉の碗である。山元窯もしくは初期龍門司窯で焼かれたと考えられる。底部付近は露胎で高台を削り出さない。底部には糸切り痕が残る。17 世紀後半～ 18 世紀前半。685 は，竪野系の白薩摩と呼ばれる白色陶胎の香炉である。被熱のため，変色している。18 世紀～ 19 世紀。686 は，竪野系の白薩摩と呼ばれる白色陶胎の袋物である。突起には花文が浮彫りされている。被熱しており，一部が赤褐色に変色している。18 世紀～ 19 世紀。687 は，竪野系の白薩摩と呼ばれる白色陶胎の土瓶蓋である。外面は貫入が目立つ。被熱しており，一部が赤褐色に変色している。18 世紀～ 19 世紀。688 は，竪野系の陶器の茶入れである。器壁が薄く，肩衝型である（関分類Ⅱ -1）。成

近代以降地業

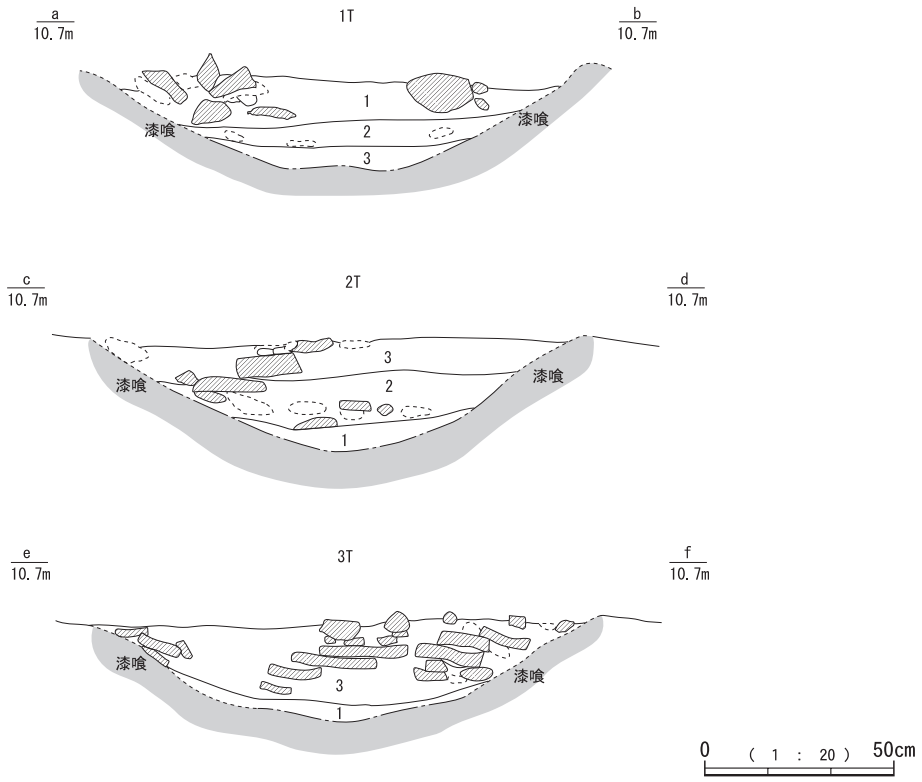
0 (1 : 60) 2m

第 131 図　能舞台跡調査区　平面図



層	色（記号）	色名	特徴
Ⅰ	7.5YR2/3	黒褐色土	ドウダンツツジの根が入り込んでいる。たい肥で黒色化した可能性がある
Ⅱa	7.5YR5/6	明褐色土	植木用にアカホヤ混じりを持ち込んでいる。公園用に盛った土
Ⅱb	7.5YR5/1	褐灰色土	小礫大礫中礫，軽石が多量に含んでいる。S54，55年度調査終了後の盛土である
Ⅲa	7.5YR5/8	明褐色土	小中大礫の上に盛った土である
Ⅲb	7.5YR8/1	灰白色土	流水状に見られ，一時水の作成があったと考えられる
Ⅴa	N3/0	暗灰色土	大礫，小礫混じりで城の造成時か？造成時に混ぜ込んだ石
Ⅴb	10YR6/8	明黄褐色土	灰，白色軽石，玉石混じりの造成土である。かたくしめてある。パミス混じり
Ⅳa	10YR5/4	にぶい黄褐色土	やや大きめの礫をしめてある。瓦も見られる。小礫も含む造成土である。パミスもない非常に均質できめの細かい土
Ⅳb	10YR7/3	にぶい黄橙色土	いわゆる城山層。粘土層である

第132図　能舞台跡　橋掛り　土層断面図



層	色（記号）	色名	特徴
橋掛り 1	10YR3/3	暗褐色土	5 ㎜大の灰白（10YR 8/1）のパミスを含む。しまりあり。自然堆積
橋掛り 2	10YR4/4	褐色土	0.5 ～ 5 ㎝大の漆喰を含む。しまりあり。水が通ったような水サビのようなものが見られる（ラミナ状）
橋掛り 3	10YR3/3	暗褐色土	礫や瓦を含む。しまりあり

第 133 図　能舞台跡　橋掛り　１，２，３トレンチ土層断面図

形は轆轤成形。17 世紀中頃。689 は，屏風立てである。前面には渦巻文，側面には花文が描かれ，内面も施釉されるが，背面は露胎である。屏風の押さえとして使用されたと考えられる。690 は，三島手と呼ばれる象嵌陶器の鉢である。植木鉢か。18 世紀～ 19 世紀。691 は，苗代川系の甕である。19 世紀。692 は，苗代川系の土瓶の蓋である。外面は施釉されるが，内面は露胎である。18 世紀後半以降。694 は，焼き締め陶器で，竪野系の擂鉢である。口縁部は折り返し口縁。17 世紀後半。

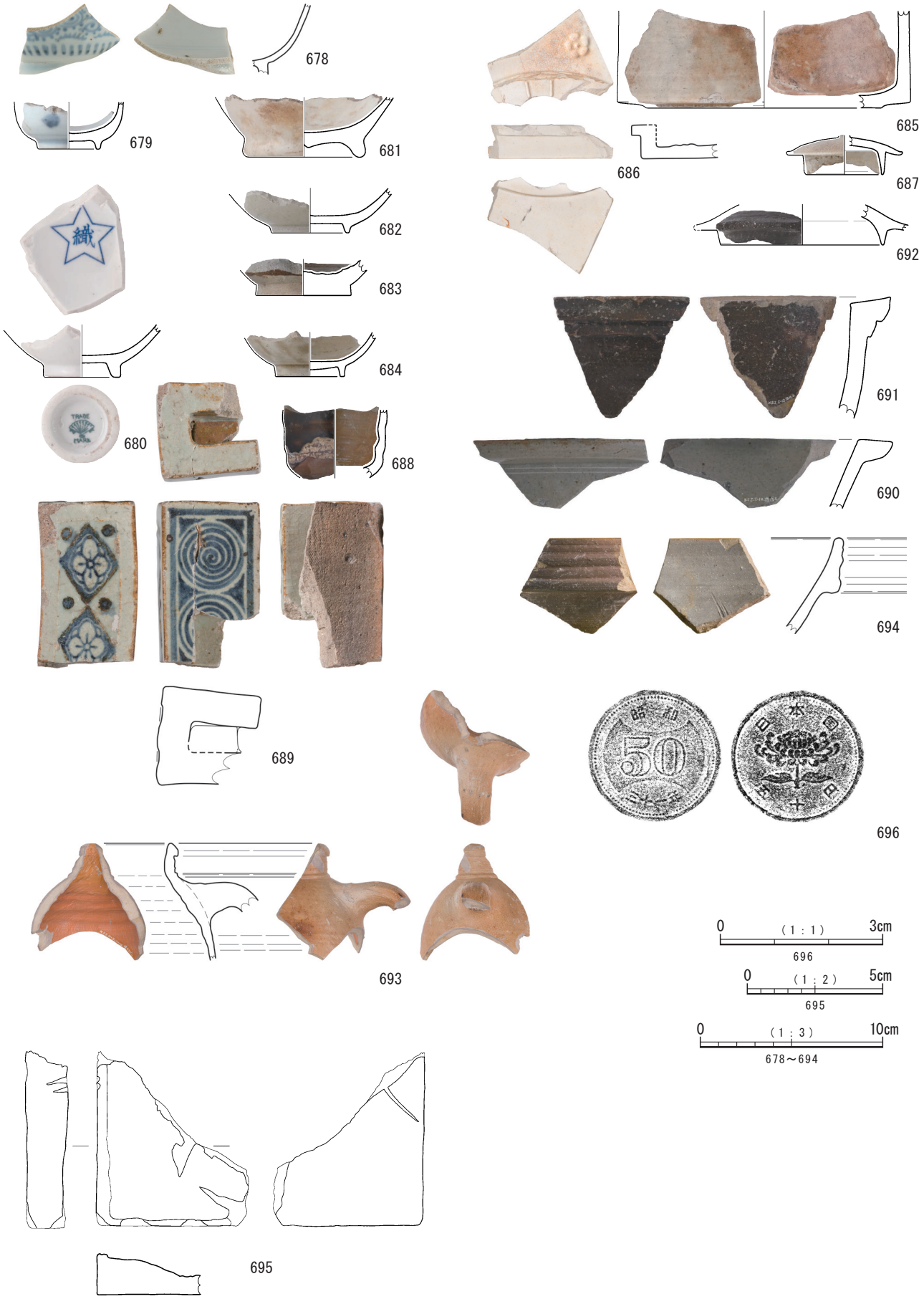
693 は，ドイツ連邦共和国のラインラウト地方の塩釉炻器瓶である。肩部に把手をもち，底部に糸切り痕が残る焼き締め炻器である。胎土が灰色できめが細かい。外面には薄く赤褐色～褐色の薄い釉薬が掛けられる。内面調整は，引き上げ痕がみられるなど粗雑である。口縁部には，コルク等で蓋をしていたと考えられる。

695・696 はその他の遺物である。695 は，硯である。黒川分類（黒川, 2019）の黒色系で, 小型。696 は, 銅銭。昭和 31（1956）年の 50 円玉である。

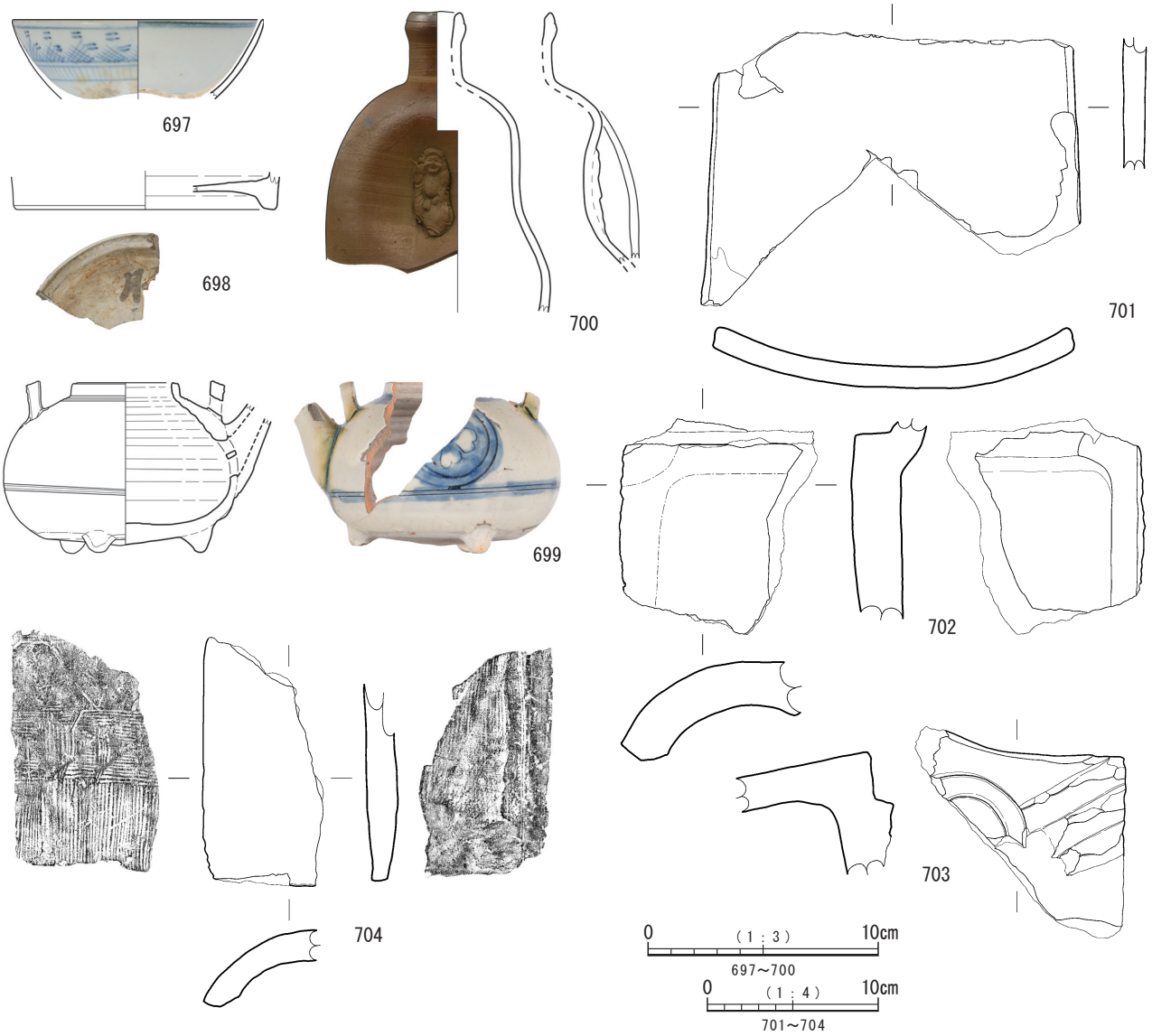
小結

この調査区では，明治６（1873）年の「鹿児島城本丸殿舎配置図」に描かれている能舞台の位置が明らかになった。今回確認された橋掛りは，断面を逆半円形に掘りくぼめ，その上から漆喰を敷き固めるなど，音響効果を意識した構造をしており，全国的に少ない近世の能舞台の構造を明らかにする上で重要な調査成果である。

出土遺物では，北御門跡周辺調査区で出土している陶器の屏風立て（689）や白薩摩と呼ばれる白色陶胎の香炉などが出土しており，上級武士の暮らしが窺える。また，御角櫓跡周辺はドイツ連邦共和国のラインラウト地方の塩釉炻器瓶が出土している。



第 134 図　能舞台跡　橋掛り　出土遺物



第 135 図　御楼門跡　出土遺物

11　御楼門跡周辺出土遺物（第 135 図）

御楼門跡周辺については，既に報告書が刊行されているが（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2020），多量の遺物のうち報告されているのはその一部である。今回は，新たに御楼門跡周辺で出土した特徴的な遺物を報告する。

出土遺物（第 135 図 697 ～ 704）

697 は薩摩磁器の碗である。外面は草花文の下に圏線が描かれる。加治木島津家が経営していた姶良市弥勒窯跡のものと考えられる。18 世紀末～ 19 世紀初頭。

698 は，竪野系の白薩摩とばれる白色陶胎の火鉢である。内面・高台内側は無釉である。高台内側には，月偏の文字が墨書されている。19 世紀。699 は琉球陶器の土瓶である。頸部および胴部花文の下には二条線が彫られ，その上を施釉している。18 世紀～ 19 世紀。700 は，備前の陶器瓶である。胴部上部の４か所を窪ませてその一か所に大黒天を貼りつけ，その上から施釉している。

701・702 は，陶器瓦である。いずれも被熱している。701 は平瓦である。凹面が釉尻ハート形に施釉される田ノ浦窯系である。凹面端部は面取りされる。702 は丸瓦である。被熱の影響で膨張している。凹面に布目痕が残る。

703 は，鬼瓦である。側面には穿孔がある。

704 は，朝鮮系瓦の丸瓦である。凸面には縦・横方向を組み合わせた幾何学文様のタタキが施され，凹面には布目痕が残る，

出土した陶磁器の年代は，697 は 18 世紀後半～ 19 世紀初頭，698 ～ 700 は 19 世紀である。瓦は，701・702・703 は 17 世紀，鬼瓦は不明である。鹿児島城は，元禄９（1696）年の大火により焼失しており，17 世紀代の 701・702・704 はその際に被熱した可能性がある。18 世紀以降の陶磁器は，その後の再建された鹿児島城で用いられたものと考えられる。

第９表 遺物１（陶磁器）

挿図No	掲載No	種別	器種	種類	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高	色名	記号	産地	年代	備考
8	1	陶磁器	皿	薩摩磁器	御進物蔵跡周辺	38T	m-36	―	造成土	14	8	3.8		―	薩摩	近代	型紙摺り高台内側蛇の目釉剥ぎ
	2	陶磁器	碗	薩摩磁器	御進物蔵跡周辺	39T	m-35	―	―	―	3.8	―		―	薩摩	18C末～19C初	総釉
	3	陶磁器	土瓶	陶器	御進物蔵跡周辺	40T	―	―	―	―	2.9	―		―	薩摩(加治木・姶良系)	18C後半～19C	
	5	陶磁器	碗	白色陶胎	御進物蔵跡周辺	52T	D-34	布基礎１		―	3.4	―	灰	10YR8/2	薩摩(竪野系)	18C～19C	総釉
	6	陶磁器	小碗	三島手(象嵌)	御進物蔵跡周辺	52T	D-33･34	石組排水溝内		5.6	―	―		―	薩摩(竪野系)	17C後～18C	
	7	陶磁器	碗		御進物蔵跡周辺	52T	D-33･34	カクラン		―	3.9	―	褐灰	7.5YR5/1	関西系	18C	
	8	陶磁器	甕	陶器	御進物蔵跡周辺	52T	D-33･34	カクラン		―	―	―		―	薩摩(苗代川系)	18C後半	
15	17	陶磁器	碗		北御門跡周辺	2T	e-38	―		―	5.8	―	灰白	5Y8/1	肥前	1780～19C前半	総釉
	18	陶磁器	碗	染付	北御門跡周辺		d-35	カクラン		7.6	―	―	灰白	10YR8/2	肥前	18C後半	総釉
	19	陶磁器	小碗		北御門跡周辺		c-36		石垣裏込め	―	3	―	灰黄	2.5Y6/2	関西系	18C	
	20	陶磁器	碗か皿		北御門跡周辺		c-36		石垣裏込め	―	3.8	―	灰白	2.5Y8/2	関西系	18C後半頃か	
	21	陶磁器	小碗	白色陶胎	北御門跡周辺		d-36	カクラン		―	4	―	淡黄	2.5YR8/3	薩摩	18C後半～19C	総釉
	22	陶磁器	皿	染付	北御門跡周辺		d-36	カクラン		―	3.9	―	灰白	5Y8/2	肥前	1690～第2四半期	
	23	陶磁器	碗	灰色陶胎	北御門跡周辺		c-36	―	造成土	10.2	3.2	5	灰黄	2.5Y7/2	薩摩(竪野系)	18C後半～19C	総釉
	24	陶磁器	碗	灰色陶胎	北御門跡周辺		d-35	カクラン		―	4.2	―	灰白	10YR7/1	薩摩(竪野系)	18C後半～19C	
	25	陶磁器	土瓶蓋	陶器	北御門跡周辺		c-35	カクラン		5.7	8.2	3.7	褐灰	7.5YR4/1	薩摩(苗代川系)	18C後半以降	
	26	陶磁器	蓋物の向付	陶器	北御門跡周辺	2T	e-38	―	Ⅰ	6	4.8	4.2	にぶい黄橙	10YR7/2	薩摩(竪野系)	18C	
	27	陶磁器	甕	陶器	北御門跡周辺		c-36	―	造成土	41.4	―	―	明赤褐	2.5YR5/6	薩摩(苗代川系)	18C～19C	
	28	陶磁器	鉢		北御門跡周辺		d-35	―	造成土	―	―	―	灰白	5Y8/1		近代	
	29	陶磁器	鉢		北御門跡周辺		c-36	カクラン	―	―	12	―	灰白	2.5YR8/1	肥前系	近代	
	30	陶磁器	便器か	陶器	北御門跡周辺		c-36	カクラン		―	―	16	灰黄	2.5Y7/2	信楽系	近代	
	31	陶磁器	皿	薩摩磁器	北御門跡周辺		C-36	―	造成土	14	8.4	3.8	灰白	2.5YR8/1	肥前系	明治・大正	型紙摺り。高台内面は蛇の目釉剥ぎ
	32	陶磁器	小皿か小鉢	青磁	北御門跡周辺		c-36	―	造成土	―	―	―	灰白	2.5Y8/1	肥前系	昭和以降	
	33	陶磁器	碗	統制食器	北御門跡周辺		C-35	カクラン		11.2	4.2	4.8	灰白	5Y8/1	肥前系	昭和戦前・戦時中	総釉
30	78	陶磁器	碗	青花	北御門跡　石垣修復		a･b-38･39		Ⅴ･Ⅵ層	―	―	―	灰白	2.5Y8/1	景徳鎮窯系	16C末～17C第1四半期	
	79	陶磁器	小碗		北御門跡　石垣修復		a･b-38･39		Ⅴ･Ⅵ層	6.1	3	3.1	灰白	2.5Y8/1	瀬戸美濃		総釉
	80	陶磁器	壺	陶器	北御門跡　石垣修復		a･b-38･39		Ⅴ･Ⅵ層	―	5.4	―	にぶい橙	7.5YR7/4	筑前	近代	
	84	陶磁器	小碗	染付	北御門跡　石垣修復		a･b-38･39	―	Ⅹ層	―	―	―	灰白	N8/0	肥前系	19C前半～中頃	
	86	陶磁器	皿	白色陶胎	北御門跡　石垣修復		a･b-38･39		Ⅹ層	―	7.2	―	灰白	5Y7/1	薩摩(竪野系)	18C後半～19C	総釉
38	109	陶磁器	碗	染付	御兵具所跡	51T	L-34･35	―	表土	―	4.2	―	灰白	10Y8/1	肥前系	1770～1810年	
	110	陶磁器	鉢	陶器	御兵具所跡	51T	D-33･34	カクラン		19.6	―	―	褐	7.5YR4/3	薩摩(加治木・姶良系)	近代	
	111	陶磁器	擂鉢	陶器	御兵具所跡	51T	K･L-34･35	―	表土	28.2	―	―	にぶい赤褐	2.5YR4/3	薩摩(苗代川系)	18C後半	
	114	陶磁器	碗	統制食器	御兵具所跡	50T	M･N-31･32	―	表土	16	6	7	灰白	2.5Y8/1	瀬戸美濃	第二次世界対戦中	
	116	陶磁器	碗	統制食器	御兵具所跡	50T	M･N-31･32	―	表土	―	4.2	―	灰白	N8/0	肥前	第二次世界対戦中	
	117	陶磁器	碗	薩摩磁器	御兵具所跡	58T	―	SX－1		7.1	3.7	5.7	灰白	N8/0	薩摩	18C末～19C初頭	
	120	陶磁器	擂鉢		御兵具所跡	58T	―	―		34.6	―	―	にぶい赤褐	2.5YR4/4	薩摩(苗代川系)	18C後半	
43	121	陶磁器	皿	陶器	御楼門跡南側石垣周辺	43T	M･N-17	―	造成土	―	―	―	明赤褐	2.5YR5/8	肥前(武雄)	17C後半～18C初頭	
	122	陶磁器	碗または鉢	白色陶胎	御楼門跡南側石垣周辺	43T	M･N-17	―	―	―	―	―	灰白	2.5Y8/2	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	123	陶磁器	風炉	宋胡録写	御楼門跡南側石垣周辺	43T	M･N-17	―	表土	―	―	―	灰白	2.5Y8/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	124	陶磁器	碗	陶器	御楼門跡南側石垣周辺	43T	M･N-17	瓦溜り	―	―	4.4	―	暗赤褐	5YR3/4	薩摩(加治木・姶良系)	18C後半	内面蛇の目釉剥ぎ

第 10 表　遺物２（陶磁器）

挿図No	掲載No	種別	器種	種類	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高	色名	記号	産地	年代	備考
43	125	陶磁器	碗	陶器	御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り		―	―	―	浅黄橙	10YR8/3	薩摩(加治木・姶良系)	18C前半	内面蛇の目釉剥ぎ
	126	陶磁器	碗	陶器	御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り		―	4.4	―	にぶい赤褐	5YR4/3	薩摩(加治木・姶良系)	18C後半	内面蛇の目釉剥ぎ
	127	陶磁器	鉢	陶器	御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り	―	―	―	―	にぶい赤褐	2.5YR4/4	琉球		
	128	陶磁器	土瓶蓋	陶器	御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り	―	4.6	庇径6.9	3.1	赤褐	10R4/4	薩摩(苗代川系)	18C後半以降	外面のみ釉薬
48	161	陶磁器	皿	青花	御楼門跡南側石垣周辺		M-14	カクラン		―	3.5	―	灰白	7.5YR8/2	景徳鎮窯系	16C前～中	
	162	陶磁器	皿か鉢	染付	御楼門跡南側石垣周辺	36T	M-15	―	―	―	―	―	灰白	5Y8/1	肥前系	19C初頭～幕末	
	163	陶磁器	小碗	染付	御楼門跡南側石垣周辺	36T	M-15	―	Ⅵ.Ⅶ	―	―	―	灰白	5Y8/1	肥前	明治・大正時代	型紙摺り
	164	陶磁器	碗	白色陶胎	御楼門跡南側石垣周辺	36T	N-15	―	造成土	―	―	―	灰白	2.5Y8/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	165	陶磁器	小碗	灰色陶胎	御楼門跡南側石垣周辺	36T	―	―	―	9.4	3.8	5.9	淡黄	2.5Y8/3	薩摩(竪野系)	18C～19C	総釉
	166	陶磁器	碗	統制食器	御楼門跡南側石垣周辺	36T	N-13・14	―	表土	7.2	―	―	灰白	2.5Y8/1	瀬戸美濃	昭和前半	
	167	陶磁器	小碗	灰色陶胎	御楼門跡南側石垣周辺	36T	―	―	造成土	―	3.8	―	灰白	10YR7/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	総釉
	168	陶磁器	小碗	陶器	御楼門跡南側石垣周辺		M-14	―	造成土	―	3.9	―	褐灰	10YR4/1	薩摩(加治木・姶良系)	18C後半以降	内面見込み蛇の目釉剥ぎ
	169	陶磁器	屏風立て	陶器	御楼門跡南側石垣周辺	36T	―	―	―	―	―	6.3	灰白	5Y7/1			
	170	陶磁器	甕	陶器	御楼門跡南側石垣周辺	36T	―	―	―	64	―	―	灰黄褐	10YR5/2	薩摩(苗代川系)		
51	177	陶磁器	碗	青花	御楼門跡南側石垣周辺	44T	M-12	―	―	―	3.8	―	灰白	10Y8/1	景徳鎮窯系	17C末～19C	
	178	陶磁器	壺		御楼門跡南側石垣周辺	44T	N-12	カクラン		―	―	―	灰白	N8/1		1975年から1974年	
	179	陶磁器	碗	染付	御楼門跡南側石垣周辺	44T	M-12	カクラン		15.2	―	―	褐灰	7.5YR4/1		18C～19C	
	180	陶磁器	小碗	染付	御楼門跡南側石垣周辺	44T	M-12	―	―	―	2.8	―	にぶい黄橙	10YR7/2	薩摩	18C～19C	総釉
	181	陶磁器	皿か碗	白色陶胎	御楼門跡南側石垣周辺	44T	―	―	―	―	4.6	―	灰白	7.5Y8/1	薩摩(竪野系)	18C後半以降	総釉
	182	陶磁器	碗	宋胡録写	御楼門跡南側石垣周辺	44T	M-12	―	―	―	―	―	明赤灰	10R7/1	薩摩	18C後半～19C	
	183	陶磁器	茶入	陶器	御楼門跡南側石垣周辺	44T		瓦溜り		―	―	―	灰黄褐	10YR6/2	薩摩(竪野系)	17C前半	
	184	陶磁器	碗	陶器	御楼門跡南側石垣周辺	44T	M-12	―	Ⅲ	13.6	―	―	にぶい黄褐	10YR4/3	薩摩(加治木・姶良系)	18C後半以降	
	185	陶磁器	鉢	陶器	御楼門跡南側石垣周辺	44T	M-12	カクラン		―	―	―	にぶい赤褐	2.5YR5/4	薩摩(苗代川系)	18C	
	186	陶磁器	甕	陶器	御楼門跡南側石垣周辺	44T	N-13	カクラン		―	―	―	橙	7.5YR7/6		近代	
	187	陶磁器	甕	陶器	御楼門跡南側石垣周辺	44T	N-13	カクラン		―	―	―	にぶい橙	5YR6/4		近代	
56	214	陶磁器	壺	青磁	御楼門跡南側石垣周辺	37T	M-10	―	造成土	―	―	―	灰白	5Y7/1	龍泉窯系	14C後半～15C中頃	
	215	陶磁器	碗	陶器	御楼門跡南側石垣周辺	37T	M・N-11	カクラン		―	4.4	―	にぶい赤褐	5YR4/3	薩摩(加治木・姶良系)	18C後半以降	内面見込み蛇の目釉剥ぎ
	216	陶磁器	皿	染付	御楼門跡南側石垣周辺		N-10・11	―	土管下	―	14	―	灰白	7.5Y8/1	肥前(有田)	1820～1860年代	
	217	陶磁器	鉢	陶器	御楼門跡南側石垣周辺	37T	M・N-11	―	造成土	19	―	―	にぶい赤褐	5YR4/4		19C	
62	230	陶磁器	皿	青花	御楼門跡南側石垣周辺	41T	M-8	カクラン		―	―	―	灰白	2.5Y8/1	漳州窯系	16C末～17C前半	
	231	陶磁器	碗	青花	御楼門跡南側石垣周辺	41T	M-8	カクラン		―	―	―	灰白	7.5Y8/1	漳州窯系	16C後半	
	232	陶磁器	碗	薩摩磁器	御楼門跡南側石垣周辺	41T	K-9	カクラン		7.2	―	―	灰白	7.5Y8/1	肥前系	1780年～1810年	
	233	陶磁器	小碗	染付	御楼門跡南側石垣周辺	41T	K-8・9	―	造成土	4.8	1.9	2.6	灰白	5Y8/1	肥前(有田)	18C後半～19C初頭	総釉
	234	陶磁器	ポット	染付	御楼門跡南側石垣周辺	41T	M-8	カクラン		―	11.5	―	灰白	7.5Y8/1	肥前系	近代	
	235	陶磁器	蓋	染付	御楼門跡南側石垣周辺	41T	M-8	カクラン		9.8	―	3.1	灰白	N8/0	肥前系		
	236	陶磁器	碗	統制食器	御楼門跡南側石垣周辺	41T	K-9	―	造成土	―	3.8	―	灰白	N8/0	瀬戸	近代	

第 11 表　遺物３（陶磁器）

挿図No	掲載No	種別	器種	種類	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高	色名	記号	産地	年代	備考
62	237	陶磁器	壺	白色陶胎	御楼門跡南側石垣周辺	41T	M-8	カクラン		—	5	—	灰白	2.5YR8/2	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	238	陶磁器	花入	白色陶胎	御楼門跡南側石垣周辺	41T	—	—	—	—	—	—	灰白	2.5Y8/2	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	239	陶磁器	碗または鉢	陶器	御楼門跡南側石垣周辺	41T	—	—	—	—	5.6	—	にぶい橙	7.5YR6/4	薩摩(加治木・姶良系)	18C	内面見込み蛇の目釉剥ぎ。外面総釉
	240	陶磁器	火入れ灰落としもしくは火入れ	陶器	御楼門跡南側石垣周辺	41T	M-8	—	—	9.2	8.6	4.9	褐灰	10YR5/1		18C	
	241	陶磁器	灯明皿		御楼門跡南側石垣周辺	41T	—	カクラン		7.2	6.2	5.6	にぶい赤褐	5YR4/4	薩摩(加治木・姶良系)	18C	
	242	陶磁器	鉢	陶器	御楼門跡南側石垣周辺	41T	M-8	カクラン		28	—	—	明赤褐	2.5YR5/8	薩摩(苗代川系)	近代	
	243	陶磁器	大鉢	琉球陶器	御楼門跡南側石垣周辺	41T	M-7	—	Ⅲ層	48	21.8	28.8	赤褐	2.5YR4/6	琉球	18C中心	
80	254	陶磁器	碗	青磁	御角櫓跡	14T	—	—	造成土	—	—	—	灰白	2.5Y7/1	龍泉窯系	14C後半～15C前半	
	255	陶磁器	碗	青磁	御角櫓跡		L-1	カクラン②		—	—	—	灰白	2.5Y7/1	龍泉窯系		
	256	陶磁器	瓶	青磁	御角櫓跡		L-2	カクラン		—	—	—	灰白	10Y8/1	龍泉窯系	14C後半～16C前半	
	257	陶磁器	瓶	青磁	御角櫓跡		L-1・3	カクラン①		—	—	—	灰白	7.5Y8/1	龍泉窯系	16C	
	258	陶磁器	碗	青花	御角櫓跡		L-2	—	造成土	12	—	—	灰白	10Y8/1	景徳鎮窯系	18C清朝	
	259	陶磁器	皿	青花	御角櫓跡		M-2	排水溝②	埋土	13.8	8.2	3.2	灰白	2.5GY8/1	景徳鎮窯系	17C前半	総釉
	260	陶磁器	碗	青花	御角櫓跡		K・L-1	—	造成土	14.2	6.4	4.6	灰白	N8/0	景徳鎮窯系	1630～1640	
	261	陶磁器	小碗	青花	御角櫓跡		M-1	排水溝②	埋土	9	—	—	灰白	N8/0	景徳鎮窯系	17C前半	
	262	陶磁器	小碗	青花	御角櫓跡		L-3	カクラン①		—	—	—	灰白	N8/0	景徳鎮窯系	17C前半	
	263	陶磁器	小碗	青花	御角櫓跡		A～C-1～4	—	造成土	—	2.8	—	灰白	10Y8/1	景徳鎮窯系	16C第4四半期	
	264	陶磁器	小碗	青花	御角櫓跡		L-1	—	造成土	—	—	—	浅黄橙	10YR8/4	景徳鎮窯系	16C末～17C第1四半期	
	265	陶磁器	碗	青花	御角櫓跡	11T	M・N-1	—	造成土	—	—	—	灰白	10YR8/1	景徳鎮窯系	16C前半～中	
	266	陶磁器	碗	磁器	御角櫓跡		J-1・2	瓦溜り		—	—	—	灰白	5Y8/1	肥前系	18C後半	総釉
	267	陶磁器	碗	磁器	御角櫓跡		J-1・2	瓦溜り		12.3	—	—	灰白	10Y8/1	肥前系(有田か)	1820～1860	
	268	陶磁器	皿	磁器	御角櫓跡		J-1・2	瓦溜り		11	6.4	2.5	灰白	10Y8/1	肥前系(有田)	1780～1820	総釉
	269	陶磁器	皿	磁器	御角櫓跡		A～C-1～4	—	造成土	—	—	—	灰白	5Y8/1	肥前系	1780～1820	総釉
	270	陶磁器	碗	磁器	御角櫓跡		K・L-2	—	造成土	10	3.6	5.2	灰白	2.5Y8/1	肥前	1820～1860	内面見込みは蛇の目釉剥ぎ
	271	陶磁器	小碗	染付	御角櫓跡		I-1・2	瓦溜り	—	—	3.5	—	灰白	5Y8/1	肥前系	1780～19C第1四半期	総釉
	272	陶磁器	皿	染付	御角櫓跡		I-1・2	瓦溜り	—	10.4	5.8	2.4	灰白	2.5Y8/1	肥前系	18C後半	
	273	陶磁器	鉢	磁器	御角櫓跡		A～C-1～4	—	造成土	17	7.8	7.7	灰白	7.5YR8/1	肥前(有田)	1780～19C前半	総釉
	274	陶磁器	蓋	磁器	御角櫓跡		J-1・2	瓦溜り		9.4	—	2.9	灰白	5Y8/1	肥前系	1820～1860年代	
	275	陶磁器	蓋	磁器	御角櫓跡		—	—	—	17.6	—	4.6	灰白	5Y8/1	肥前(有田)	19C初～幕末	
	276	陶磁器	碗	磁器	御角櫓跡			—	—	—	—	—	灰白	N8/0	肥前(有田)	18C末～19C前半	総釉。型打ち成形
	277	陶磁器	火入	磁器	御角櫓跡		—	—	—	12	—	—	灰白	2.5Y8/1	肥前	18C後半～19C前半	
	278	陶磁器	火入	磁器	御角櫓跡		—	—	—	—	9.6	—	灰白	2.5Y8/1	肥前	19C	
81	279	陶磁器	皿	薩摩磁器	御角櫓跡		L-1	—	造成土	—	4.6	—	灰白	10YR8/1	薩摩	18C末～19C中	総釉
	280	陶磁器	大皿	薩摩磁器	御角櫓跡		K・L-2	—	造成土	—	16.4	—	にぶい黄橙	10YR7/2	薩摩？	18C～19C	
	281	陶磁器	大皿	薩摩磁器	御角櫓跡		A～C-1～4	—	造成土	—	—	—	灰白	7.5Y8/1	肥前系	1780～19C中	280と同類。型打ち成形
	282	陶磁器	碗	薩摩磁器	御角櫓跡		I-1・2	瓦溜り	—	12	4.8	3.4	灰白	2.5Y8/1	薩摩	19C～幕末	総釉，内面蛇の目釉剥ぎ
	283	陶磁器	鉢	外青染付	御角櫓跡		M-1	—	造成土	—	13.4	—	灰白	2.5Y8/1	肥前	18C後半	高台内面は蛇の目釉剥ぎ
	284	陶磁器	火入	薩摩磁器	御角櫓跡		—	—	—	—	10.4	—	灰白	2.5Y8/1	肥前	19C	
	285	陶磁器	碗	白色陶胎	御角櫓跡		M-2	排水溝②	埋土	11	—	—	淡黄	5Y8/3	薩摩(竪野系)	17C～18C前半	
	286	陶磁器	碗	白色陶胎	御角櫓跡		M-1	排水溝②	埋土	—	5.2	—	灰白	2.5Y8/2	肥前系	16C末～17C前半	
	287	陶磁器	碗	灰色陶胎	御角櫓跡		L-2	カクラン		—	4.9	—	灰白	10YR8/1	薩摩(竪野系)	18C	総釉
	288	陶磁器	碗	白色陶胎	御角櫓跡		L-1	—	造成土	—	5.2	—	灰白	10YR8/2	薩摩(竪野系)	18C～19C	総釉

第 12 表　遺物４（陶磁器）

挿図No	掲載No	種別	器種	種類	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高	色名	記号	産地	年代	備考
81	289	陶磁器	碗	白色陶胎	御角櫓跡		L-1	―	―	―	4	―	灰白	2.5Y8/2	薩摩(竪野系)	18C～19C	総釉
	290	陶磁器	碗	白色陶胎	御角櫓跡		M-2	排水溝②	埋土	―	3.4	―	灰白	2.5Y8/2	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	291	陶磁器	碗か皿	白色陶胎	御角櫓跡		L-1	―	造成土	―	7.8	―	灰白	5Y8/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	総釉
	292	陶磁器	皿	白色陶胎	御角櫓跡		A～C-1～4	―	造成土	―	―	―	灰白	2.5Y8/2	薩摩(竪野系)	17C後半以降	型打ち成形
	293	陶磁器	皿	白色陶胎	御角櫓跡		―	―	表土	―	―	―	灰白	2.5Y8/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	型打ち成形
	294	陶磁器	碗か皿	白色陶胎	御角櫓跡		M-1	排水溝②	埋土	―	―	―	灰白	2.5Y8/2	薩摩(竪野系)	17C末～18C	型打ち成形
	295	陶磁器	小杯	白色陶胎	御角櫓跡		L-1	―	造成土	―	3.4	―	灰白	2.5Y8/2	薩摩(竪野系)	18C	総釉
	296	陶磁器	香炉	白色陶胎	御角櫓跡		A～C-1～4	―	造成土	―	7	―	灰白	2.5Y8/2	薩摩(竪野系)	18C～19C	総釉
	297	陶磁器	鉢	白色陶胎	御角櫓跡		M-2	排水溝②	埋土	10.4	―	―	灰白	5Y8/1	薩摩(竪野系)	近代	
	298	陶磁器	水注	白色陶胎	御角櫓跡		K･L-1	―	造成土	―	―	―	灰白	7.5YR8/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	299	陶磁器	香炉の脚	白色陶胎	御角櫓跡		L-1	―	造成土	―	―	―	灰白	7.5Y8/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	300	陶磁器	土瓶	宋胡録写	御角櫓跡		K･L-1	―	造成土	―	―	―	淡黄	2.5Y8/3	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	301	陶磁器	鉢	宋胡録写	御角櫓跡		L-2	カクラン		―	―	―	灰黄	2.5Y7/2	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	302	陶磁器	鉢か	宋胡録写	御角櫓跡		I-1･2	瓦溜り	―	―	―	―	灰黄	2.5Y7/2	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	303	陶磁器	水注	三島手 (象嵌)	御角櫓跡		I-1･2	瓦溜り	―	―	―	―	灰白	2.5Y7/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	
82	304	陶磁器	大皿		御角櫓跡		L-1	―	造成土	21.4	13.2	2.9	灰白	2.5Y8/1	肥前系		総釉。型紙摺り
	305	陶磁器	碗	薩摩磁器	御角櫓跡		M-1	―	造成土	11	4	4.9	灰白	10YR8/1	肥前系		総釉。型紙摺り
	306	陶磁器	碗		御角櫓跡		A～C-1～4	―	造成土	9	4.4	5.1	灰白	2.5Y8/1	肥前系	近代	総釉
	307	陶磁器	蓋	薩摩磁器	御角櫓跡		M-1	排水溝②	埋土	7.4	―	2.2	灰白	N8/0	肥前系	近代	総釉。型紙摺り
	308	陶磁器	小碗	白色陶胎	御角櫓跡		L-1	―	造成土	―	4	―	灰白	5Y8/1	薩摩(竪野)	近代	総釉
	309	陶磁器	工業製品の 蓋か		御角櫓跡		L-2	―	造成土	6.4	1	4	灰白	N8/0	瀬戸美濃系	近代	
	310	陶磁器	火鉢		御角櫓跡		M･N-1･2	―	造成土	21.4	―	―	灰白	N8/0	肥前系	明治～ 大正後半	
	311	陶磁器	碗	統制食器	御角櫓跡		L-1	―	造成土	11.2	5	5.9	灰白	2.5Y8/1		近代	
	312	陶磁器	擂鉢	薩摩磁器	御角櫓跡		L-1	―	造成土	37.9	17.4	16.3	褐灰	5YR4/1	石見焼窯	近代	総釉
	313	陶磁器	皿	統制食器	御角櫓跡		L-2	―	造成土	18.4	11.8	3.2	灰白	N8/0		近代	総釉
	314	陶磁器	小碗	統制食器	御角櫓跡		L-1	―	造成土	7.2	3.6	5.1	灰白	N8/0		近代	
83	315	陶磁器	碗	陶器	御角櫓跡		M-1	排水溝②	埋土	13	―	―	黄灰	2.5Y6/1	薩摩 (苗代川系)		
	316	陶磁器	碗		御角櫓跡		A～C-1～4	―	造成土	―	―	―	灰黄	2.5Y7/2	薩摩(加治木･ 姶良系)	17C後半	
	317	陶磁器	碗		御角櫓跡		L-1	カクラン ①		―	4	―	褐灰	10YR6/1	薩摩(加治木･ 姶良系)	18C代	総釉
	318	陶磁器	花入か		御角櫓跡		M-2	排水溝②	埋土	8.8	―	―	にぶい黄	2.5Y6/3	薩摩(竪野系)	17C	
	319	陶磁器	花入か		御角櫓跡		M-2	排水溝②	埋土	10.4	―	―	にぶい黄橙	10YR6/4	薩摩(竪野系)	17Cくらい	
	320	陶磁器	碗		御角櫓跡		L-2	カクラン		―	3.8	―	灰白	2.5Y7/1	薩摩(加治木･ 姶良系)	18C代	総釉　見込み 蛇の目釉剥ぎ
	321	陶磁器	茶入		御角櫓跡		A～C-1～4	―	―	2.8	―	―	灰	7.5Y5/1	薩摩(竪野系)	17C中頃	糸切り
	322	陶磁器	茶入		御角櫓跡		L-3	カクラン		3	―	―	褐灰	7.5YR5/1	薩摩(竪野系)	17C中頃	
	323	陶磁器	茶入		御角櫓跡		M-2	排水溝②	埋土	3	―	―	黄灰	2.5Y6/1	薩摩(竪野系)	17C中頃	
	324	陶磁器	茶入		御角櫓跡		M-1	排水溝②	埋土	3.7	―	―	褐灰	10YR5/1	薩摩(竪野系)	17C中頃	
	325	陶磁器	茶入		御角櫓跡		M-2	排水溝②	埋土	3.2	―	―	黄灰	2.5Y5/1	薩摩(竪野系)	17C中頃	
	326	陶磁器	茶入		御角櫓跡		A～C-1～4	―	―	3.3	―	―	灰黄	2.5Y7/2	薩摩(竪野系)	17C	
	327	陶磁器	茶入		御角櫓跡		M-2	排水溝②		2.7	―	―	黄灰	10YR6/1	薩摩(竪野系)	17C中頃	
	328	陶磁器	茶入		御角櫓跡		M-2	排水溝②		―	―	―	灰	5Y4/1	薩摩(竪野系)	17C中頃	
	329	陶磁器	茶入		御角櫓跡		J-1･2	―	―	―	4	―	灰黄褐	10YR6/2	薩摩(竪野系)	17前半～中頃	
	330	陶磁器	茶入		御角櫓跡		L-3	―	―	―	3	―	黄灰	2.5Y5/1	薩摩(竪野系)	17C前半～中頃	
	331	陶磁器	茶入		御角櫓跡		M-2	排水溝②		―	3.8	―	にぶい黄橙	10YR6/3	薩摩(竪野系)	17C	
	332	陶磁器	茶入		御角櫓跡		M-2	排水溝②		―	3.5	―	暗灰黄	2.5Y5/2	薩摩(竪野系)	17前半～中頃	
	333	陶磁器	茶入		御角櫓跡		M-2	排水溝②		―	3.7	―	灰黄	2.5Y7/2	薩摩(竪野系)	17前半～中頃	回転糸切痕
	334	陶磁器	茶入		御角櫓跡		A～C-1～4	―	―	―	4	―	褐灰	10YR6/1	薩摩(竪野系)	17前半～中頃	
	335	陶磁器	茶入		御角櫓跡		M-2	排水溝②		―	4.6	―	灰黄褐	10YR5/2	薩摩(竪野系)	17C	
	336	陶磁器	茶入		御角櫓跡		―	―		―	5	―	灰黄	2.5Y7/2	薩摩(竪野系)	17C	
	337	陶磁器	茶入		御角櫓跡		M-2	排水溝②		―	4	―	にぶい黄橙	10YR6/3	薩摩(竪野系)	17C	
	338	陶磁器	茶入		御角櫓跡		M-2	排水溝②		―	3.6	―	褐灰	10YR5/1	薩摩(竪野系)	17C	
	339	陶磁器	茶入		御角櫓跡		L･M-1	排水溝②		―	4	―	黄灰	2.5Y6/1	薩摩(竪野系)	17C中頃	

第 13 表　遺物５（陶磁器）

挿図No	掲載No	種別	器種	種類	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高	色名	記号	産地	年代	備考
83	340	陶磁器	茶入		御角櫓跡		K-1	基礎階段		―	4.2	―	褐灰	10YR6/1	薩摩(竪野系)	17C中頃	
	341	陶磁器	壺		御角櫓跡		L-1	排水溝③		―	―	―	灰褐	5YR6/2	福建省	16C～17C	
	342	陶磁器	碗		御角櫓跡		M-2	排水溝②		11.4	―	―	褐	7.5YR4/4	肥前(唐津)	1590～ 1610年代	
	343	陶磁器	皿		御角櫓跡	11T	O-1	―	―	―	―	―	にぶい褐	7.5YR5/3	肥前(唐津)	17C後半～ 18C前半	
	344	陶磁器	碗		御角櫓跡		A～C-1～4	―	造成土	―	4.2	―	にぶい橙	2.5YR6/4	肥前(唐津)	1590～ 1610年代	
	345	陶磁器	水指か		御角櫓跡		L･M-2	排水溝②	床着	12.4	―	―	にぶい黄	2.5Y6/3	筑前	17C	
	346	陶磁器	壺か甕		御角櫓跡		A～C-1～4	―	造成土	18.3	―	―	灰黄	2.5Y6/2		17C～	
	347	陶磁器	甕か壺		御角櫓跡		L-1	―	造成土	16	―	―	浅黄	2.5Y7/3	筑前	17C	
	348	陶磁器	茶入		御角櫓跡		A～C-1～4	―	造成土	―	4.4	―	灰黄	2.5Y6/2		17～18C	
	349	陶磁器	壺か甕		御角櫓跡		M-2	排水溝②	造成土	―	13.4	―	にぶい黄橙	10YR6/4	人吉	17C	
	350	陶磁器	碗		御角櫓跡		A～C-1～4	―	造成土	―	4.8	―	黄灰,灰黄	2.5Y5/1. 2.5Y6/2	薩摩(竪野系) か(苗代系)	17C後半か	
	351	陶磁器	土瓶		御角櫓跡		A～C-1～4	―	造成土	―	―	―	にぶい黄橙	10YR6/4	琉球	18C	
84	352	陶磁器	甕		御角櫓跡		A～C-1～4	―	造成土	32.1	―	―	橙	2.5YR6/8	薩摩(苗代系)	19C	
	353	陶磁器	擂鉢		御角櫓跡		L-2	―	造成土	―	―	―	褐灰	7.5YR5/1	薩摩(苗代系)	17C後半～ 18C前	
	354	陶磁器	土瓶蓋		御角櫓跡		I-1･2	瓦溜まり	―	5.5	7.6	3	にぶい橙	5YR6/4	薩摩(苗代系)	18C後半以降	
	355	陶磁器	土瓶		御角櫓跡		L-2	―	造成土	―	―	―	褐灰	7.5YR5/1	薩摩(苗代系)	17C後半	
	356	陶磁器	鉢		御角櫓跡		M-1･2	カクラン		―	―	―	赤灰	2.5YR6/1	薩摩(苗代系)	17C後半～18C 前半	
	357	陶磁器	甕		御角櫓跡		I-11	カクラン		―	21.2	―	にぶい赤褐	5YR4/4	薩摩(苗代系)	18C～19C	
	358	陶磁器	鉢か擂鉢		御角櫓跡		L-2	―	造成土	―	―	―	にぶい赤褐	5YR4/4	薩摩(苗代系)	19C	
	359	陶磁器	擂鉢		御角櫓跡		H-2	―	造成土	29	―	―	明赤褐	2.5YR5/6	薩摩(苗代系)	19C	
	360	陶磁器	瓶	塩釉炻器	御角櫓跡		L-1	カクラン ①		―	7	―	灰白	10YR8/1	ドイツ	19C第1～ 第3四半期	
	361	陶磁器	瓶	塩釉炻器	御角櫓跡		K･L-1 L-2	―	造成土	長さ ―	幅 7.0	厚み 0.3	明紫灰	5RP7/1	ドイツ	19C第1～ 第3四半期	
	362	陶磁器	瓶	塩釉炻器	御角櫓跡		M-1	排水溝②	埋土	長さ 21.8	幅 7.8	厚み 0.3	灰白	2.5Y8/2	ドイツ	19C第1～ 第3四半期	
98	461	陶磁器	皿	青花	御角櫓跡西側 石垣周辺	46T	E-1	瓦溜り①	―	―	4.4	―	灰黄	2.5Y7/2	漳州窯系	16C後半	内面蛇の目 釉剥ぎ
	462	陶磁器	碗	薩摩磁器	御角櫓跡西側 石垣周辺	46T	E-1	―	表土	9.6	4.1	5.5	灰白	5Y8/1	薩摩	18C末～ 19C初頭	総釉
	463	陶磁器	碗	薩摩磁器	御角櫓跡西側 石垣周辺	46T	E-1	―	表土	10	4	5.1	灰白	N8/0	薩摩	18C末～ 19C初頭	総釉
	464	陶磁器	碗	染付	御角櫓跡西側 石垣周辺	46T	E-1	―	表土	―	3.6	―	淡黄	2.5Y8/3	肥前系	19Ｃ前半～ 中頃	
	465	陶磁器	碗	染付	御角櫓跡西側 石垣周辺	46T	E-1･2	―	表土	―	4	―	灰白	7.5YR8/1	肥前系	18Ｃ後～ 19Ｃ初	総釉
	466	陶磁器	皿	染付	御角櫓跡西側 石垣周辺	46T	E-2	―	造成土	―	6.4	―	灰白	5Y8/1	肥前(有田)	18Ｃ後半	総釉
	467	陶磁器	皿	染付	御角櫓跡西側 石垣周辺	46T	E-2	―	表土	―	6	―	灰白	5Y8/1	肥前(有田)	18Ｃ後半	総釉
	468	陶磁器	皿	薩摩磁器	御角櫓跡西側 石垣周辺	46T	―	瓦溜り		―	7.1	―	灰白	2.5Y8/2	薩摩	18C末～ 19C中頃	総釉
	469	陶磁器	皿	染付	御角櫓跡西側 石垣周辺	46T	E-1	―	表土	―	7.8	―	灰白	5Y8/1	肥前系	19C初頭～中頃	高台内面蛇の目 釉剥ぎ
	470	陶磁器	大皿	染付	御角櫓跡西側 石垣周辺	46T	E-2	―	表土	―	13.6	―	灰白	2.5Y8/1	肥前	18C第4四半期 ～ 19C第1四半期	総釉
	471	陶磁器	大皿	染付	御角櫓跡西側 石垣周辺	46T	E-2	―	表土	―	14	―	灰白	N8/0	肥前	18C第4四半期 ～ 19C第1四半期	総釉
	472	陶磁器	碗	染付	御角櫓跡西側 石垣周辺	46T	E-1	―	表土	9.4	3.6	5	灰白	10Y8/1	瀬戸美濃系	幕末～ 明治･大正	総釉
	473	陶磁器	碗	灰色陶胎	御角櫓跡西側 石垣周辺	46T	E-1	―	表土	11.1	4.3	5.7	灰白	10YR8/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	総釉
	474	陶磁器	碗	灰色陶胎	御角櫓跡西側 石垣周辺	46T	E-1	―	表土	9.6	3.5	5.5	灰黄	2.5Y7/2	薩摩(竪野系)	18C～19C	総釉
	475	陶磁器	碗	灰色陶胎	御角櫓跡西側 石垣周辺	46T	E-1	―	表土	―	3.2	―	灰白	2.5Y8/2	薩摩(竪野系)	18C～19C	総釉
	476	陶磁器	鉢	宋胡録	御角櫓跡西側 石垣周辺	46T	E-1	―	表土	22	―	―	灰白	7.5YR8/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	477	陶磁器	壺	三島手(象嵌)	御角櫓跡西側 石垣周辺	46T	E-1	瓦溜り	―	―	―	―	灰黄	2.5Y7/2	薩摩(竪野系)	18C～19C	

第 14 表　遺物６（陶磁器）

挿図No	掲載No	種別	器種	種類	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高	色名	記号	産地	年代	備考
98	478	陶磁器	茶入	陶器	御角櫓跡西側石垣周辺	46T	E-17	―	―	―	3.6	―	褐灰	7.5YR6/1	薩摩(竪野系)	17C前半	
	479	陶磁器	茶入	陶器	御角櫓跡西側石垣周辺	46T	E-1	―	―	―	4	―	褐灰	10YR6/1	薩摩(竪野系)	17C前半	
	480	陶磁器	向付	陶器	御角櫓跡西側石垣周辺	46T	E-1	―	表土	―	7.8	―	灰白	2.5Y8/2	薩摩(竪野系)	18C後半以降	
	481	陶磁器	不明品	陶器	御角櫓跡西側石垣周辺	46T	E-1	―	表土	16.3	―	―	浅黄	2.5Y7/3	薩摩(竪野系)	17C	
	482	陶磁器	碗	陶器	御角櫓跡西側石垣周辺	46T	E-1	―	造成土	―	7.8	―	にぶい橙	5YR6/4	薩摩(加治木・姶良系)	18C後半以降	内面蛇の目釉剝ぎ
	483	陶磁器	土瓶	陶器	御角櫓跡西側石垣周辺	46T	E-1	―	表土	―	4.8	―	灰黄	2.5Y7/2	薩摩(竪野系)		
	484	陶磁器	鉢	陶器	御角櫓跡西側石垣周辺	46T	E-1	―	表土	11.2	―	―	にぶい橙	7.5YR6/4	薩摩(加治木・姶良系)	近代	
	485	陶磁器	土鍋	陶器	御角櫓跡西側石垣周辺	46T	E-1	堀		13.2	―	―	にぶい赤褐	2.5YR5/4	薩摩(苗代川系)	19C	
100	486	陶磁器	碗	染付	御角櫓跡西側石垣周辺	48T	F･G-1･2	―	造成土	―	4.4	―	灰白	2.5Y8/1	肥前(有田)	18C前半	総釉
	487	陶磁器	碗	陶器	御角櫓跡西側石垣周辺	48T	G-1･2	―	造成土	―	4	―	灰白	2.5Y8/1	薩摩(加治木・姶良系)	18C後半以降か	総釉.内面蛇の目釉剝ぎ
	488	陶磁器	鉢	宋胡録	御角櫓跡西側石垣周辺	48T	F･G-2	配管	造成土	―	17.7	―	灰白	2.5Y8/2	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	489	陶磁器	土瓶蓋	宋胡録	御角櫓跡西側石垣周辺	48T	F･G-2	配管	造成土	3.6	庇径6	―	灰白	2.5Y8/2	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	490	陶磁器	碗	陶器	御角櫓跡西側石垣周辺	48T	F･G-2	―	―	―	5.6	―	にぶい褐	7.5YR5/3	薩摩(加治木・姶良系)	18C前半	内面見込み蛇の目釉剝ぎ
	491	陶磁器	皿	陶器	御角櫓跡西側石垣周辺	48T	F･G-1･2	―	表土	―	4.8	―	灰白	2.5Y8/1	薩摩(加治木・姶良系)	18C前半	総釉.内面見込み蛇の目釉剝ぎ
	492	陶磁器	甕	陶器	御角櫓跡西側石垣周辺	48T	―	瓦溜り	―	44.4	―	―	灰赤	7.5R4/2	薩摩(苗代川系)	17C前半	
101	498	陶磁器	大皿	青花	御角櫓跡西側石垣周辺	48T	―	―	造成土	―	―	―	にぶい橙	7.5YR7/4	福建広東系	17C後半～17C末	総釉.内面見込み蛇の目釉剝ぎ
	499	陶磁器	碗	染付	御角櫓跡西側石垣周辺	48T	b-1･2	カクラン		11.6	4	6.1	灰白	7.5Y8/1	肥前(有田)	近代	総釉
	500	陶磁器	茶入	陶器	御角櫓跡西側石垣周辺	48T	b-1･2	―	―	―	3.7	―	灰赤	7.5YR4/2	薩摩(竪野系)	17C前半	
	501	陶磁器	擂鉢	陶器	御角櫓跡西側石垣周辺	48T	E-1	―	造成土	41	―	―	明赤褐	2.5YR5/6	関西(明石系)	19C	
	502	陶磁器	甕の蓋	陶器	御角櫓跡西側石垣周辺	48T	E-1	―	表土	23.6	庇径27.2	4.6	褐灰	10YR4/1	薩摩(苗代川系)	18C後半～19C前半	
103	507	陶磁器	大皿	染付	御角櫓跡西側石垣周辺	49T	B-2	―	灰色砂質土	―	23.6	―	灰白	2.5Y8/1	肥前(有田)	18C前半～第3四半期	総釉
	508	陶磁器	鉢	染付	御角櫓跡西側石垣周辺	49T	B-2	―	灰色砂質土	―	―	―	灰白	N8/0	肥前	18Ｃ前半～19Ｃ初頭	
	509	陶磁器	皿	染付	御角櫓跡西側石垣周辺	49T	B-2	―	灰色砂質土	―	7.6	―	灰白	N8/0	肥前系	19Ｃ初頭～幕末	高台内面蛇の目釉剝ぎ
	510	陶磁器	鉢	染付	御角櫓跡西側石垣周辺	49T	B-2	―	表土	―	6.2	―	灰白	5Y8/1	肥前(有田)	18C後半～19C前半	総釉
	511	陶磁器	蓋	薩摩磁器	御角櫓跡西側石垣周辺	49T	B-2	―	灰色砂質土	8.6	庇径9.8	3.1	灰白	2.5Y8/1	薩摩	19C	
	512	陶磁器	碗	白色陶胎	御角櫓跡西側石垣周辺	49T	F･G-1･2		造成土	―	5.2	―	灰白	5Y8/1	薩摩(竪野系)	18C	総釉
	513	陶磁器	皿	白色陶胎	御角櫓跡西側石垣周辺	49T	―	―	造成土	―	13	―	灰白	7.5Y8/1	薩摩(竪野系)	18Ｃ後半～19Ｃ	総釉
117	519	陶磁器	碗	青磁	外御庭跡		J･K-1'	基礎階段		―	―	―	灰白	10Y8/1	龍泉窯系	14C後半～15C前半	
	520	陶磁器	碗	青花	外御庭跡		L-1'	―	造成土	―	4.3	―	灰白	5Y8/1	漳州窯系	1590年～17C前半	総釉
	521	陶磁器	鉢	染付	外御庭跡		E-1'	堀		―	12	―	灰白	2.5Y8/1	肥前(有田)	18C後半～19C初頭	総釉
	522	陶磁器	碗	染付	外御庭跡		M-1'	排水溝内		10.2	―	―	灰白	N8/0	肥前系	18C末～19C前半	
	523	陶磁器	皿	染付	外御庭跡		E-1'	堀		13.8	9.6	4.5	灰白	5Y8/1	肥前	18C後半	高台内面蛇の目釉剝ぎ
	524	陶磁器	碗	薩摩磁器	外御庭跡		M-1'	排水溝②		10.4	4.2	5.9	灰白	5Y8/1	薩摩	19C中頃	総釉
	525	陶磁器	皿	染付	外御庭跡		E-1'	堀		―	―	6.2	灰白	5Y8/1	肥前(有田)	18C第4四半期～19C初頭	総釉
	526	陶磁器	皿	染付	外御庭跡		N-1'	石垣		―	―	―	灰白	10Y7/1	肥前(有田)	1650年代	
	527	陶磁器	小皿	染付	外御庭跡		J-1'･2'	瓦溜り①	―	―	―	―	灰白	N8/0	肥前(有田)	18C後半	
	528	陶磁器	蓋	染付	外御庭跡		M-1'	―	造成土	5.7	―	1	灰白	N8/0	肥前系	19C	

第 15 表　遺物７（陶磁器）

挿図No	掲載No	種別	器種	種類	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高	色名	記号	産地	年代	備考
117	529	陶磁器	皿	薩摩磁器	外御庭跡		M-1'	―	造成土	12.5	6.3	3	灰白	2.5Y8/1	薩摩	19C中頃	高台内面蛇の目釉剥ぎ
	530	陶磁器	鉢	薩摩磁器	外御庭跡		M-3'	―	―	18.6	―	―	灰白	10Y7/1	薩摩	19C代	
	531	陶磁器	鉢	染付	外御庭跡		M-1'	―	造成土	17.6	7	6.9	灰白	5Y8/1	肥前(有田)	19C初頭～幕末	総釉
	532	陶磁器	碗	白色陶胎	外御庭跡		M-1'	排水溝②		―	―	―	灰白	10YR8/2	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	533	陶磁器	碗	白色陶胎	外御庭跡		M-2'	―	Ⅱ	―	5.6	―	淡黄	2.5Y8/3	薩摩(加治木・姶良系)	18C前半	総釉,内面蛇の目釉剥ぎ
	534	陶磁器	皿	白色陶胎	外御庭跡		M-1'	―	造成土	2.2	7.5	4	灰白	10YR8/1	薩摩(竪野系)	幕末～近代か	
	535	陶磁器	鉢	宋胡録写	外御庭跡		J・K-1'	基礎階段		―	19.4	―	灰白	2.5Y8/2	薩摩(竪野系)		総釉
	536	陶磁器	鉢	白色陶胎	外御庭跡		K・L-1'	―	造成土	―	―	―	灰白	2.5Y8/2	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	537	陶磁器	鉢	白色陶胎	外御庭跡		E-1'	堀		―	―	―	灰白	10YR8/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	538	陶磁器	蓋	三島手(象嵌)	外御庭跡		M-1'	―	造成土	5.4	庇径7.9	4	灰白	10YR8/2	薩摩(竪野系)		
118	539	陶磁器	大鉢	陶器	外御庭跡		M-1'	―	造成土	―	9.4	―	にぶい橙	5YR6/4	肥前(唐津)	17C	
	540	陶磁器	碗	陶器	外御庭跡		N-1'	―	―	21.2	―	―	浅黄	2.5Y7/3	薩摩(加治木・姶良系)	17C後半～18C前半	
	541	陶磁器	碗	陶器	外御庭跡	33T	L・M-1'	―	造成土	―	4.4	―	褐	7.5YR4/4	薩摩(加治木・姶良系)	17C後半～18C前半	
	542	陶磁器	碗	白色陶胎	外御庭跡		J-1'	暗渠堀方	―	―	5.4	―	浅黄橙	10YR8/3	薩摩(竪野系)	18C	
	543	陶磁器	碗	陶器	外御庭跡		H・N-1'・2'		造成土	―	4.8	―	浅黄	2.5Y7/3	薩摩(加治木・姶良系)	17C後半～18C前半	内面蛇の目釉剥ぎ
	544	陶磁器	碗	陶器	外御庭跡		E-1'	堀		―	4.4	―	褐灰	5YR4/1	薩摩(加治木・姶良系)	18C	内面見込み蛇の目釉剥ぎ
	545	陶磁器	碗	陶器	外御庭跡		E-1'	堀		―	5.6	―	にぶい赤褐	5YR5/4	薩摩(加治木・姶良系)	18C	内面蛇の目釉剥ぎ
	546	陶磁器	土瓶	陶器	外御庭跡		L-1'	―	造成土	7.1	―	―	明褐灰	7.5YR7/2	薩摩(苗代川系)	18C後半以降	
	547	陶磁器	土瓶	陶器	外御庭跡		M-1'	―	造成土	―	―	―	暗青灰	5PB4/1	薩摩(加治木・姶良系)	幕末～近代	
	548	陶磁器	蓋	琉球陶器	外御庭跡		E-1'	堀		5.8	庇径11.1	4	赤褐	5YR4/8	琉球	19C	無釉
	549	陶磁器	擂鉢	陶器	外御庭跡		E-1'	堀		36.2	―	―	にぶい赤褐	2.5YR4/4	薩摩(苗代川系)	18C～19C	
	554	土製品	蛸壺か		外御庭跡		M-1'	―	造成土	7.2	5.4	7.5	橙	7.5YR6/6			
121	583	陶磁器	碗	薩摩磁器	外御庭跡		M-1'	―	造成土	9.8	4	5.9	灰白	N8/0	薩摩	近代	型紙摺り
	584	陶磁器	碗	薩摩磁器	外御庭跡		M-1'	―	造成土	9.6	3.9	5.6	灰白	5Y8/1	薩摩	近代	型紙摺り
	585	陶磁器	碗	薩摩磁器	外御庭跡		L-1'	―	造成土	11	3.6	4.4	灰白	N8/0	薩摩	近代	型紙摺り
	586	陶磁器	皿	薩摩磁器	外御庭跡		M-1'	―	造成土	10.4	4.3	2.8	灰白	N8/0	薩摩	近代	
	587	陶磁器	小杯または蓋	薩摩磁器	外御庭跡		M-1'	―	造成土	8.6	3.4	2.4	灰白	N8/0	薩摩	近代	内面見込み蛇の目釉剥ぎ。型紙摺り
	588	陶磁器	皿	薩摩磁器	外御庭跡		M-1'	―	造成土	15.4	8	4	灰白	5Y8/1	薩摩	近代	高台内面蛇の目釉剥ぎ。型紙摺り
	589	陶磁器	蓋		外御庭跡		L-1'	―	造成土	6.7	―	2.3	灰白	N8/0		近代	
	590	陶磁器	碗		外御庭跡		―	二の丸	Ⅱ	9.2	3.8	5.5	灰白	N8/0		近代	
	591	陶磁器	瓶	陶器	外御庭跡		K-1'	―	―	―	幅7.6	厚み0.8	灰白	2.5Y7/1	常滑	幕末	
	592	陶磁器	甕	陶器	外御庭跡		M-1'	―	造成土	57.2	―	―	にぶい赤褐	5YR4/4	薩摩(苗代川系)	近代	
	593	陶磁器	壺	白色陶胎	外御庭跡		M-1'	排水溝②		10.8	―	―	灰白	7.5Y8/1	関西系もしくは薩摩(竪野系)		
124	618	陶磁器	蓋	染付	外御庭跡	42T	―	―	―	9.9	4	3.1	灰白	5Y8/1	肥前(有田)	18C前半	総釉
	619	陶磁器	碗	染付	外御庭跡	42T	―	―	―	―	5	―	灰白	5Y8/1	肥前	18C後半	総釉
	620	陶磁器	碗	染付	外御庭跡	42T	D・E-1'	堀		11.6	4.4	4.9	灰白	N8/0	肥前系	1820年～1860年代	総釉,内面見込み蛇の目釉剥ぎ
	621	陶磁器	皿	染付	外御庭跡	42T	―	―	―	―	6.1	―	灰白	N8/0	肥前系	1780～19C前半	総釉
	622	陶磁器	碗	染付	外御庭跡	42T	―	―	―	15.7	―	―	灰白	5Y8/1	肥前(有田)	18C前半	
	623	陶磁器	皿	染付	外御庭跡	42T	―	―	―	―	9.2	―	灰白	7.5Y8/1	肥前	19C初頭～幕末	
	624	陶磁器	蓋	染付	外御庭跡	42T	D-1'	堀		9	9.1	3.3	灰白	5Y8/1	肥前	18C後半～19C初頭	
	625	陶磁器	碗	白色陶胎	外御庭跡	42T	D-1'	堀		10.6	3.6	5.1	灰白	2.5Y8/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	626	陶磁器	火鉢	染付	外御庭跡	42T	D-1'	堀		―	15.8	―	灰白	2.5Y8/1	肥前系	近代	
	627	陶磁器	皿	陶器	外御庭跡	42T	―	―	―	―	―	―	褐灰	7.5YR5/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	

第 16 表　遺物８（陶磁器）

挿図No	掲載No	種別	器種	種類	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高	色名	記号	産地	年代	備考
124	628	陶磁器	瓶	陶器	外御庭跡	42T	―	―	―	―	9.3	―	灰赤	10R4/2	肥前	18C後半～19C初頭	
	629	陶磁器	碗	陶器	外御庭跡	42T	―	―	造成土	―	4.2	―	明赤褐	5YR5/6	薩摩(加治木・姶良系)	17C後半	
	630	陶磁器	碗	陶器	外御庭跡	42T	―	―	―	9.8	4.4	2.9	褐灰	10YR6/1	薩摩(加治木・姶良系)	18C	総釉
	631	陶磁器	土瓶	陶器	外御庭跡	42T	―	―	―	―	5.4	―	橙	2.5YR6/6	薩摩(苗代川系)	18C後半以降	
	632	陶磁器	香炉	三島手(象嵌)	外御庭跡	42T	―	―	造成土	―	―	―	灰白	2.5Y7/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	633	陶磁器	土瓶	陶器	外御庭跡	42T	―	―	造成土	―	―	―	褐灰	7.5YR5/1	薩摩(苗代川系)	19C	
	634	陶磁器	碗	陶器	外御庭跡	42T	―	―	―	―	―	―	褐灰	7.5YR6/1	薩摩(加治木・姶良系)	18C後半以降	
	635	陶磁器	碗	陶器	外御庭跡	42T	―	―	―	11.9	―	―	にぶい橙	5RY6/4	薩摩(加治木・姶良系)	18C後半以降	
	636	陶磁器	碗	陶器	外御庭跡	42T	D・E-1'	堀		9.9	―	―	にぶい赤褐	5YR5/4	薩摩(加治木・姶良系)	18C後半以降	
	637	陶磁器	碗	陶器	外御庭跡	42T	―	―	―	9.8	―	―	にぶい橙	5YR7/4	薩摩(加治木・姶良系)	19C	
	638	陶磁器	灯明台	陶器	外御庭跡	42T	―	―	―	9	5.2	―	にぶい黄橙	10YR7/4	薩摩(加治木・姶良系)	18C	
	639	陶磁器	鉢	陶器	外御庭跡	42T	―	―	―	30.2	―	―	にぶい褐	7.5YR5/4	薩摩(苗代川系)	18C後半～19C前半	
	640	陶磁器	擂鉢	陶器	外御庭跡	42T	E-1'	―	―	45	―	―	にぶい赤褐	5YR4/3	薩摩(苗代川系)	19C	
126	659	陶磁器	火鉢		外御庭跡	42T	E-1'	―	―	―	―	―	灰白	10YR8/1	薩摩	17C	
134	678	陶磁器	大碗	青花	能舞台跡		H-11	―	造成土	―	―	―	灰白	2.5Y7/1	福建省	18C	
	679	陶磁器	小碗	薩摩磁器	能舞台跡		I-12	―	造成土	―	3.4	―	灰白	2.5Y8/1	肥前系	18C末～19C中	総釉
	680	陶磁器	碗		能舞台跡		I-12	―	造成土	―	4	―	灰白	N8/0		近代	
	681	陶磁器	碗か壺	白色陶胎	能舞台跡		H～J-11～13	―	造成土	―	6.4	―	灰白	2.5Y8/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	682	陶磁器	小碗	白色陶胎	能舞台跡		I-12	―	造成土	―	4.2	―	灰白	5Y7/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	683	陶磁器	碗	陶器	能舞台跡		I-12	―	―	―	5.2	―	灰白	2.5Y8/1	薩摩(加治木・姶良系)	17C後半～18C前半	
	684	陶磁器	小碗	灰色陶胎	能舞台跡		I-11	―	橋がかり	―	3.8	―	灰白	5Y8/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	685	陶磁器	香炉	白色陶胎	能舞台跡		H・I-12	―	造成土	―	13	―	灰白	5Y8/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	686	陶磁器	袋物	白色陶胎	能舞台跡		I-12	―	造成土	―	―	1.9	灰白	2.5Y8/2	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	687	陶磁器	土瓶蓋	白色陶胎	能舞台跡		I-12	―	造成土	4.2	庇径6.4	―	灰白	7.5Y8/1	薩摩(竪野系)	18C～19C	
	688	陶磁器	茶入	陶器	能舞台跡		I-12	―	造成土	―	―	―	灰黄褐	10YR6/2	薩摩(竪野系)	17C中頃	
	689	陶磁器	屏風立て	陶器	能舞台跡		―	―	―	―	―	5.4	灰	5Y6/1			
	690	陶磁器	鉢	三島手(象嵌)	能舞台跡		I-12	―	造成土	―	―	―	灰	5Y6/1		18C～19C	
	691	陶磁器	甕		能舞台跡		I-12	―	造成土	―	―	―	にぶい黄橙	10YR7/2	薩摩(苗代川系)	19C	
	692	陶磁器	蓋		能舞台跡		H・I-12	―	造成土	9	―	―	黒	7.5YR2/1	薩摩(苗代川系)	18C後半以降	
	693	陶磁器	塩釉炉器瓶	炻器	能舞台跡		H～J-11～13	―	造成土	―	―	―	灰黄	2.5Y7/2	ドイツラインラウト地方		
	694	陶磁器	擂鉢	陶器	能舞台跡		I-11	―	造成土	―	―	―	にぶい赤褐	5YR5/3	薩摩(竪野系)	17C後半	
135	697	陶磁器	碗	薩摩磁器	御楼門跡	1T	M-20	排水溝内	―	11	―	―	灰白	5Y8/2	薩摩	18C末～19C初頭	
	698	陶磁器	火鉢	白色陶胎	御楼門跡	45T	J-29	カクラン		―	11.4	―	黄灰	2.5Y6/1	薩摩(竪野系)	19C	
	699	陶磁器	土瓶	琉球陶器	御楼門跡		I-27	―	造成土	7.5	4.2	6.8	橙	7.5YR6/8	琉球	18C～19C	
	700	陶磁器	瓶	陶器	御楼門跡	34T	―	東側楠木根廻し	Ⅰ_Ⅴ	―	9.6	0.6	にぶい赤褐	5YR5/3	備前	19C	
図版24	706	陶磁器	―		外御庭跡		M-1'	―	造成土	8	4	4	灰白	5Y8/1			
	707	陶磁器	―		外御庭跡		M-1'	―	造成土	7.9	3.8	4.2	灰白	5Y8/1			
	708	陶磁器	ガイシ		御楼門跡南側石垣周辺	36T	M-15	瓦溜り①	―	写真のみ	写真のみ	写真のみ	写真のみ	写真のみ		近代	Yのマークあり
	705	陶磁器	―		外御庭跡		M-1'		造成土	7.9	3.8	4.2	灰白	5Y8/1			
	706	陶磁器	ガイシ		御楼門跡南側石垣周辺	36T	M-15	瓦溜まり①	写真のみ	写真のみ	写真のみ	写真のみ	写真のみ		近代	Yのマークあり	

第 17 表　遺物９（土製品・土器・石製品）

挿図 No	掲載 No	種別	器種	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	長さ（口径）	幅（底径）	厚さ（器高）	備考
21	65	土製品	環状土製品	北御門跡周辺		d-35	―	造成土	―	―	―	
	66	土製品	坩堝	北御門跡周辺		d-35	―	造成土	―	―	―	
38	113	石製品	硯	御御兵具所跡		―	―	―	5.2	3.5	2	
56	218	土器	坏	御楼門跡南側石垣周辺	37T	M-10	排水溝		(11.8)	(8.4)	(2.2)	土師器
57	227	石製品	硯	御楼門跡南側石垣周辺	37T	N-1	―	―	15.5	7.6	2.5	
62	244	土器		御楼門跡南側石垣周辺	41T	K-8	―	造成土	(6.8)	(6.4)	―	土師器
	245	土器		御楼門跡南側石垣周辺	41T	L・M-8	カクラン		―	―	―	土師器
94	447	土製品	鞴羽口	御角櫓跡		N-1	―	焼土層	―	―	―	
	448	土器	植木鉢	御角櫓跡		L-1	―	造成土	―	―	―	
	450	石製品		御角櫓跡		I-1	カクラン		6.3	3.2	3.2	
100	497	石製品	硯	御角櫓跡西側石垣周辺	48T	F・G-2	―	造成土	―	―	―	
103	514	土製品	坏	御角櫓跡西側石垣周辺	49T	―	―	表土	(9.1)	(5.9)	(2.0)	土師器
	516	石製品	砥石	御角櫓跡西側石垣周辺	49T	―	―	表土	8.1	4.8	1.7	
118	550	土製品	杯	外御庭跡		L-1'	―	造成土	―	―	―	灰白 10YR8/2 底部は回転ヘラ切り土師器
	551	土製品	小坏	外御庭跡		M-2'	―	―	―	(4.3)	―	土師器
	552	土製品	火鉢か	外御庭跡		M-1'	―	―	―	―	―	土師器
	553	土製品	焙烙	外御庭跡		M-1'	―	―	―	―	―	
	554	土製品	蛸壺か	外御庭跡		M-1'	―	―	―	―	―	
	555	土製品	不明	外御庭跡		E-1'	―	―	―	―	―	
	556	土製品	坩堝	外御庭跡		N-1'	―	―	―	―	―	
	557	石製品	栓	外御庭跡		M-2'	堀		―	―	―	
121	594	石製品	硯	外御庭跡		M-1'	―	―	9.1	6.1	2.4	
	595	石製品	硯	外御庭跡		M-1'	―	―	12.3	7.8	1.8	
126	651	土製品	皿	外御庭跡	42T	―	―	―	―	(9.0)	―	土師器
	652	土製品	皿	外御庭跡	42T	―	―	―	(10.6)	(7.0)	(2.2)	土師器
	653	土製品	皿	外御庭跡	42T	D-1'	―	―	(11.6)	(9.0)	(2.4)	土師器
	654	土製品	大皿	外御庭跡	42T	―	―	―	(15.8)	(13.0)	(3.2)	土師器
	655	土製品	大皿	外御庭跡	42T	D-1'	―	―	(17.6)	(12.0)	(4.4)	土師器
	656	土製品	小皿	外御庭跡	42T	―	―	―	(8.6)	(8.2)	(1.5)	土師器
	657	土製品	埦	外御庭跡	42T	―	―	―	―	―	―	土師器
	658	土製品	鉢	外御庭跡	42T	―	―	―	(21.0)	―	―	
134	695	石製品	硯	能舞台跡		I-12	―	造成土	6.5	5.5	1.6	

第 18 表　遺物 10（木製品）

挿図 No	掲載 No	種別	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	長さ	幅	厚さ	備考
30	85	木製品	北御門跡　石垣修復		A・B-38・39	―	Ⅹ層	23.0	11.4	3.9	下駄
32	106	木製品	北御門跡　石垣修復		a・b-38・39	―	ⅩⅢp 層	5.4	5.4	2.9	栓
122	598	木製品	外御庭跡		M-1'	―	―	36.0	6.7	5.3	杭（大）
	599	木製品	外御庭跡		M-1'	―	―	18.0	4.7	3.8	杭（小）
	600	木製品	外御庭跡		M-2' ③	堀		12.3	12.8	5.5	建築部材（三角形）
	601	木製品	外御庭跡		M-2' ④	堀		17.2	5.7	5.6	建築部材
	602	木製品	外御庭跡		L-1'	堀		8.1	3.1	3.2	建築部材
	603	木製品	外御庭跡		L-1'	堀		17.0	8.1	1.4	建築部材
	604	木製品	外御庭跡		L-1'	堀		45.3	6.0	1.8	建築部材
	605	木製品	外御庭跡		L-1'	堀		39.7	5.4	0.4	板材
	606	木製品	外御庭跡		L-1'	堀		16.8	4.1	1.8	杭？
	607	木製品	外御庭跡	42T	―	―	造成土	10.8	2.6	4.0	建築部材
	608	木製品	外御庭跡	42T	―	―	造成土	8.6	5.0	2.4	建築部材
	609	木製品	外御庭跡	42T	―	―	造成土	7.3	8.6	1.5	建築部材
	610	木製品	外御庭跡	42T	―	―	造成土	11.0	3.0	0.5	建築部材
126	661	木製品	外御庭跡	42T	―	―	造成土	20.7	15.3	1.1	羽子板形　鏝板
	662	木製品	外御庭跡	42T	―	―	造成土	37.4	15.8	1.4	羽子板形　鏝板
	663	木製品	外御庭跡	42T	E-1'	―	―	39.1	14.5	1.4	鞘取り
	664	木製品	外御庭跡	42T	―	―	造成土	10.5	3.7	0.6	札

第 19 表　遺物 11（ガラス製品・骨製品・金属製品）

挿図 No	掲載 NO	種別	器種	長さ	幅	厚さ	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	備考
21	67	金属製品	銅銭	拓本のみ	拓本のみ	拓本のみ	北御門跡周辺		d-35	排水溝	Ⅰ層	琉球通寶
	68	金属製品	銅銭	拓本のみ	拓本のみ	拓本のみ	北御門跡周辺		d-35	排水溝	Ⅰ層	
	69	骨製品	歯ブラシの柄	13	1.3	0.9	北御門跡周辺		d-36	石垣裏込め		
	70	骨製品	歯ブラシの柄	9.5	1.1	0.6	北御門跡周辺		o-36	―	造成土	
	71	ガラス製品	瓶	9	3.8	0.4	北御門跡周辺		―	―	表土	
	72	ガラス製品	瓶	7.7	3.5	0.3	北御門跡周辺		―	―	表土	
	73	ガラス製品	瓶	5.9	2.6	0.4	北御門跡周辺		c-36	―	造成土	
	74	ガラス製品	瓶	7.2	2.8	0.6	北御門跡周辺		c-36	―	造成土	
	75	ガラス製品	瓶	7.2	2.7	0.3	北御門跡周辺		d-36	―	造成土	
	76	ガラス製品	瓶	5.3	3.4	0.2	北御門跡周辺		―	石垣排水溝		
	77	ガラス製品	瓶	15.1	4	0.5	北御門跡周辺		c-36	―	造成土	
38	115	ガラス製品	瓶	8.9	3.6	0.3	御兵具所跡	50T	M・N-31・32	―	表土	
43	129	その他					御楼門跡 南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り①		
45	160	その他	エンフィールド式銃弾	2.7	1.4	―	御楼門跡 南側石垣周辺	43T	M-17	ミニトレンチ		
48	175	金属製品	銅銭	拓本のみ	拓本のみ	拓本のみ	御楼門跡 南側石垣周辺	36T	N-13・14	―	造成土	
	176	金属製品	皿	10.2	3	1.5	御楼門跡 南側石垣周辺	36T	M-15	―	Ⅲ層	
53	211	その他		―	5.1	2.5	御楼門跡 南側石垣周辺	44T	M・N-12・13	瓦溜り①		
	212	金属製品	銅銭	拓本のみ	拓本のみ	拓本のみ	御楼門跡 南側石垣周辺	44T	M-12	カクラン		
	213	ガラス製品	注射器	13.7	2.6	―	御楼門跡 南側石垣周辺	44T	N-13	―	表土	
57	228	ガラス製品	注射器	15.2	2.7	―	御楼門跡 南側石垣周辺	37T	M-10	七高埋土		
	229	ガラス製品	瓶	10.9	6.1	0.7	御楼門跡 南側石垣周辺	37T	M-10	―	造成土	
94	449	その他	土鐘	4.1	1.6	0.4	御角櫓跡		L-1	―	造成土一括	
	451	金属製品	銅銭	拓本のみ	拓本のみ	拓本のみ	御角櫓跡		K-2	―	表土	新寛永通寶
	452	その他	釦	拓本のみ	拓本のみ	拓本のみ	御角櫓跡		I-1・2	瓦溜り		
	453	金属製品	キセル	11.5	0.9	0.1	御角櫓跡	14T	M・N-3	―	造成土	
	454	金属製品	キセル	5.8	1.2	0.1	御角櫓跡		L-1	―	造成土	
	455	金属製品	銅製の金具	7.6	0.6	―	御角櫓跡	14T	M・N-3	―	造成土	
	456	金属製品	銅製の金具	7	1.1	―	御角櫓跡		L-1	―	造成土	
	457	金属製品	エンフェルト銃	2.7	1.4	1.4	御角櫓跡		M-1	―	造成土	
	460	ガラス製品	三角フラスコ	10.9	6.8	0.3	御角櫓跡		L-1	―	造成土一括	
103	518	金属製品	銅銭	拓本のみ	拓本のみ	拓本のみ	御角櫓跡 西側石垣周辺	49T	B-1	カクラン		新寛永通寶
121	596	骨製品	櫛	10.2	2.6	0.3	外御庭跡		N-1'	―	―	
	597	骨製品	歯ブラシ	―	1.1	1	外御庭跡		N-1'	―	―	
123	611	ガラス製品	瓶	23.1	7.5	0.6	外御庭跡		K-1'	―	―	
	612	ガラス製品	瓶	―	6.9	1	外御庭跡		L-1'	―	―	
	613	ガラス製品	瓶	19.2	5.7	0.7	外御庭跡		M-1'	―	―	
	614	ガラス製品	瓶	外御庭跡		K－1'	―	―	―	5.4	0.4	

第 20 表　遺物 12（ガラス製品・金属製品）

挿図 No	掲載 NO	種別	器種	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	長さ	幅	厚さ	備考
123	615	ガラス製品	瓶	外御庭跡		M－1'	－	－	7.1	2.6	0.5	
	616	ガラス製品	瓶	外御庭跡		?	－	－	6.4	3	0.3	
	617	ガラス製品	瓶	外御庭跡		M－1'	－	－	6.2	5	0.3	
126	660	その他	パイプ	外御庭跡	42T	－	－		7.9	1.9	0.1	
134	696	金属製品	銅銭	能舞台跡		I－12	－	造成土	拓本のみ	拓本のみ	拓本のみ	50 円

第 21 表　遺物 13（瓦）

挿図 No	掲載 No	種別	瓦種	種類	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	長さ	幅	厚さ	分類	備考
8	4	瓦	丸	陶器瓦	御進物蔵跡周辺	39T	m-35	－	造成土	(7.4)	(7.8)	2.0		
	9	瓦	軒丸		御進物蔵跡周辺	52T	O-33・34	カクラン		－	－	－	A024	
	10	瓦	軒桟		御進物蔵跡周辺	52T	－	－	表土	－	－	－	不明	
	11	瓦	軒桟		御進物蔵跡周辺	52T	O-33・34	カクラン		－	－	－	B057	
	12	瓦	丸	古瓦	御進物蔵跡周辺	－	－	－	－	(8.7)	(7.5)	1.8		
	13	瓦	平	陶器瓦	御進物蔵跡周辺	52T	O-34	布基礎		(11.8)	(8.3)	1.3		田ノ浦窯系
	14	瓦	平	古瓦	御進物蔵跡周辺		－	－	－	(9.4)	(8.8)	1.7	－	
	15	瓦	袖		御進物蔵跡周辺	52T	O-33・34	カクラン		7.4	(17.4)	1.9	－	
	16	瓦	塀		御進物蔵跡周辺	52T	O-33・34	－	－	49.7	12.9	4.6	2 類	
16	34	瓦	軒丸		北御門跡周辺		c・d-36	石垣側排水溝		－	－	－	A009	
	35	瓦	軒丸		北御門跡周辺		－	石垣背面		－	－	－	A012	
	36	瓦	軒丸		北御門跡周辺		c-36	－	造成土	－	－	－	A016	
	37	瓦	軒丸		北御門跡周辺	土橋 3T	－	堀		－	－	－	A031	
	38	瓦	軒丸	長崎瓦	北御門跡周辺		－	－	東壁 3 段Ⅸ層	－	－	－	不明	
	39	瓦	軒丸		北御門跡周辺	3T	－	堀		－	－	－	不明	
	40	瓦	軒平		北御門跡周辺		－	石垣排水溝		－	－	－	A045	刻印 No001
	41	瓦	軒平		北御門跡周辺		－	石垣排水溝		－	－	－	A045	
	42	瓦	軒桟		北御門跡周辺		d-35	カクラン		－	－	－	A058	
	43	瓦	軒桟		北御門跡周辺		c-35	カクラン		－	－	－	D045	
	44	瓦	軒桟		北御門跡周辺		d-36	カクラン		－	－	－	不明	
	45	瓦	小菊		北御門跡周辺		d-35	カクラン		－	－	－	K02	
17	46	瓦	軒丸		北御門跡周辺		c・d-36	石垣内排水溝		(32.4)	16.1	2.3		
	47	瓦	軒丸		北御門跡周辺		c-36	－	造成土	(19.0)	16.5	1.9	－	刻印 No46-6
	48	瓦	海鼠		北御門跡周辺		c-35	カクラン		(35.7)	(30.0)	3.0	2 類	
18	49	瓦	丸		北御門跡周辺		c・d-36	石垣側排水溝	－	36.6	18.4	2.2	－	刻印 No003
	50	瓦	丸		北御門跡周辺		c-36	カクラン		(22.8)	17.1	2.9	－	
	51	瓦	丸	古瓦	北御門跡周辺		c-34・35	中央 T		(9.7)	(8.6)	2.2	－	
19	52	瓦	平		北御門跡周辺		d-35	カクラン		29.8	27.1	2.2	－	
	53	瓦	平		北御門跡周辺		c・d-36	石垣内排水溝		29.4	26.9	2.1	－	
	54	瓦	平		北御門跡周辺		c-35	カクラン		28.8	(27.5)	2.1	－	
	55	瓦	平	古瓦	北御門跡周辺		c-34・35	中央 T		(13.1)	(9.2)	1.4	－	
	56	瓦	平	長崎瓦	北御門跡周辺	58T	－	SX1 No2	－	(10.2)	(11.6)	1.7	－	
20	57	瓦	平		北御門跡周辺		c・d-35	石垣排水構		(17.3)	30.7	2.8	－	刻印 No005
	58	瓦	平		北御門跡周辺		－	石垣排水構		(26.8)	(23.6)	2.6	－	刻印 No039-3
	59	瓦	桟		北御門跡周辺		c・d-36	石垣排水構		15.0	17.3	2.1	－	刻印 No052
	60	瓦	海鼠		北御門跡周辺		d-36	カクラン		(14.1)	(11.8)	2.3	－	
	61	瓦	桟		北御門跡周辺		－	石垣排水溝		(12.4)	(8.4)	1.6	－	刻印 No180
	62	瓦	平		北御門跡周辺		－	石垣排水溝		(18.3)	(16.3)	2.0	－	
	63	瓦	平	陶器瓦	北御門跡周辺		d-36	カクラン		7.6	11.9	1.6	－	
	64	瓦	平	陶器瓦	北御門跡周辺		－	石垣排水溝		13.9	9.6	1.5	－	

第 22 表　遺物 14（瓦）

挿図 No	掲載 No	種別	瓦種	種類	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	長さ	幅	厚さ	分類	備考
30	81	瓦	軒平	長崎瓦	北御門跡 石垣修復		a・b-38・39		Ⅴ・Ⅵ層	—	—	—	D044	
	82	瓦	平	陶器瓦	北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	Ⅴ・Ⅵ層	(17.6)	(11.2)	1.8	—	
	83	瓦	桟		北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	Ⅴ・Ⅵ層	(13.3)	(11.6)	1.5	—	
	87	瓦	軒丸		北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	Ⅹ層	—	—	—	A 種不明	
	88	瓦	塀		北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	Ⅹ層	(28.5)	(23.4)	6.2	Ⅰ類	
31	89	瓦	軒丸	長崎瓦	北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	ⅩⅢp 層	—	—	—	A049	
	90	瓦	丸	古瓦	北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	ⅩⅢp 層	(24.2)	14.1	2.1	—	
	91	瓦	丸	古瓦	北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	ⅩⅢp 層	(20.5)	12.6	1.7	—	
	92	瓦	丸	長崎瓦	北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	ⅩⅢp 層	(14.8)	(9.6)	1.9	—	
	93	瓦	平	長崎瓦	北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	ⅩⅢp 層	(15.1)	(12.4)	1.5	—	
	94	瓦	平	古瓦	北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	ⅩⅢp 層	(14.8)	(11.1)	1.8	—	
	95	瓦	平	古瓦	北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	ⅩⅢp 層	(9.7)	(14.2)	1.7	—	
	96	瓦	丸	朝鮮系瓦	北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	ⅩⅢp 層	(7.7)	(8.7)	1.8	—	
32	97	瓦	軒丸	陶器瓦	北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	ⅩⅢp 層	—	—	—	C012	
	98	瓦	軒平	陶器瓦	北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	ⅩⅢp 層	—	—	—	D037	
	99	瓦	丸	陶器瓦	北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	ⅩⅢp 層	(19.1)	13.3	1.7	—	
	100	瓦	丸	陶器瓦	北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	ⅩⅢp 層	(14.1)	(8.9)	1.4	—	
	101	瓦	丸	陶器瓦	北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	ⅩⅢp 層	(9.3)	(8.2)	1.7	—	
	102	瓦	平	陶器瓦	北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	ⅩⅢp 層	(14.2)	(11.8)	1.7	—	
	103	瓦	丸	古瓦	北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	ⅩⅢp 層	(21.9)	(7.9)	1.6	—	
	104	瓦	平	古瓦	北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	ⅩⅢp 層	(18.7)	(14.6)	2.0	—	
	105	瓦	平		北御門跡 石垣修復		a・b-38・39	—	ⅩⅢp 層	(10.1)	(15.0)	1.6	—	
33	107	瓦	丸	長崎瓦	北御門跡 石垣修復		—	—	ⅩⅣ層	(20.7)	13.1	1.6	—	
	108	瓦	丸	陶器瓦	北御門跡 石垣修復		—	—	ⅩⅣ層	(21.1)	13.1	1.6	—	
38	112	瓦	軒平		御御兵具所跡	51T	K・L-34・35	—	表土	—	—	—	A011	
	118	瓦	平		御御兵具所跡	58T	—	—	暗茶土	(20.2)	(22.2)	1.4	—	
	119	瓦	平	長崎瓦	御御兵具所跡	58T	J・K-31	カクラン		(9.8)	(13.2)	2.5	—	
43	130	瓦	軒丸		御楼門跡南側石垣 周辺	43T	N-17	七高瓦溜り		—	—	—	A001	
	131	瓦	軒丸		御楼門跡南側石垣 周辺	43T	M・N-17	瓦溜り		—	—	—	A011	
	132	瓦	軒丸		御楼門跡南側石垣 周辺	43T	N-17	七高瓦溜り①		—	—	—	A012	
	133	瓦	軒丸		御楼門跡南側石垣 周辺	43T	N-17	七高瓦溜り①		—	—	—	A046	
	134	瓦	軒丸		御楼門跡南側石垣 周辺	43T	N-17	七高瓦溜り①		—	—	—	A014	
	135	瓦	軒丸		御楼門跡南側石垣 周辺	43T	N-17	七高瓦溜り①		—	—	—	A019	
44	136	瓦	軒丸		御楼門跡南側石垣 周辺	43T	N-17	七高瓦溜り①		—	—	—	B004	
	137	瓦	軒丸		御楼門跡南側石垣 周辺	43T	N-17	七高瓦溜り①		—	—	—	C014	

第 23 表　遺物 15（瓦）

挿図 No	掲載 No	種別	瓦種	種類	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	長さ	幅	厚さ	分類	備考
44	138	瓦	軒平		御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り①		—	—	—	A040	
	139	瓦	軒桟		御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り①		—	—	—	A026	
	140	瓦	軒桟		御楼門跡南側石垣周辺	43T		—		—	—	—	A051	
	141	瓦	軒桟		御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り①		—	—	—	A044	
	142	瓦	軒桟		御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り①		—	—	—	A049	刻印 No040-7
	143	瓦	軒桟		御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り①		—	—	—	A054	刻印 No085
	144	瓦	軒桟		御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り①		—	—	—	A056	
	145	瓦	軒桟		御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り		—	—	—	A040	
	146	瓦	軒桟		御楼門跡南側石垣周辺		N-17	七高瓦溜り	—	—	—	—	A053	
	147	瓦	軒桟		御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り		—	—	—	A052	
45	148	瓦	軒平		御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り①		—	—	—	C005	
	149	瓦	軒平		御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り①		—	—	—	C005	
	150	瓦	軒平	長崎瓦	御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り		—	—	—	D005	
	151	瓦	軒平	古瓦	御楼門跡南側石垣周辺	43T	M・N-17	七高造成土		—	—	—	D034	
	152	瓦	軒平	長崎瓦	御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り		—	—	—	D003	
	153	瓦	軒桟		御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り		—	—	—	B023	
	154	瓦	軒桟		御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り①		—	—	—	B — 023	刻印 No040-8
	155	瓦	軒桟		御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り		—	—	—	D035	
	156	瓦	軒桟		御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り①		—	—	—	D035	
	157	瓦	小菊		御楼門跡南側石垣周辺	43T	N17	七高瓦溜り②		—	—	—	K07	
	158	瓦	小菊		御楼門跡南側石垣周辺	43T	N17	七高瓦溜り①		—	—	—	K04	
	159	瓦	丸	陶器瓦	御楼門跡南側石垣周辺	43T	N-17	七高瓦溜り①		(14.4)	10.8	1.8	—	
48	171	瓦	軒平		御楼門跡南側石垣周辺	36T	M-15	瓦溜り③		—	—	—	B 種	
	172	瓦	塼		御楼門跡南側石垣周辺	36T	N-15	—	造成土	10.8	9.0	3.7	—	
	173	瓦	平	古瓦	御楼門跡南側石垣周辺	36T	N-15	—	造成土	(10.0)	(9.5)	2.2	—	
	174	瓦	塼		御楼門跡南側石垣周辺	36T	M-15	—	造成土	29.4	17.9	4.2	不明	
51	188	瓦	軒丸		御楼門跡南側石垣周辺	44T	M・N-12・13	瓦廃棄土坑		—	—	—	A024	
	189	瓦	軒丸		御楼門跡南側石垣周辺	44T	M・N-12・13	瓦廃棄土坑		—	—	—	A058	
	190	瓦	軒丸		御楼門跡南側石垣周辺	44T	M・N-12・13	瓦廃棄土坑		—	—	—	A057	
	191	瓦	軒丸		御楼門跡南側石垣周辺	44T		—		—	—	—	A059	
	192	瓦	軒丸		御楼門跡南側石垣周辺	44T	M・N-12・13	瓦廃棄土坑		—	—	—	A058	
	193	瓦	軒丸	長崎瓦	御楼門跡南側石垣周辺	44T	M・N-12・13	瓦溜り		—	—	—	A064	
	194	瓦	軒丸		御楼門跡南側石垣周辺	44T	M・N-12・13	瓦廃棄土坑		—	—	—	A060	
	195	瓦	軒丸		御楼門跡南側石垣周辺	44T	M-12	カクラン		—	—	—	B003	

第 24 表　遺物 16（瓦）

挿図 No	掲載 No	種別	瓦種	種類	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	長さ	幅	厚さ	分類	備考
52	196	瓦	軒平		御楼門跡南側石垣周辺	44T	M・N-12・13	瓦廃棄土坑		—	—	—	B016	
	197	瓦	軒平		御楼門跡南側石垣周辺	44T	M・N-12・13	瓦溜り①		—	—	—	C003	
	198	瓦	軒平	長崎瓦	御楼門跡南側石垣周辺	44T	M・N-12・13	瓦廃棄土坑		—	—	—	D003	
	199	瓦	軒平		御楼門跡南側石垣周辺	44T	M-12		Ⅲ層	—	—	—	D039	
	200	瓦	軒平		御楼門跡南側石垣周辺	44T	N-13	—		—	—	—	不明	
	201	瓦	軒桟		御楼門跡南側石垣周辺	44T	M・N-12・13	瓦廃棄土坑		—	—	—	B008	
	202	瓦	軒桟		御楼門跡南側石垣周辺	44T	M・N-12・13	瓦廃棄土坑		—	—	—	B008	
	203	瓦	平		御楼門跡南側石垣周辺	44T	N-13	—	表土	(23.5)	29.7	1.9	—	
	204	瓦	平	陶器瓦	御楼門跡南側石垣周辺	44T	M・N-12・13	瓦廃棄土坑		(15.6)	(10.6)	1.3	—	
	205	瓦	丸	朝鮮系瓦	御楼門跡南側石垣周辺	44T	M-13	カクラン		(18.3)	(12.0)	2.2	—	
	206	瓦	鬼		御楼門跡南側石垣周辺	44T	M・N-12・13	瓦廃棄土坑		(13.2)	(14.6)	(5.5)	—	
53	207	瓦	丸		御楼門跡南側石垣周辺	44T	M・N-12・13	瓦廃棄土坑		(14.6)	16.7	1.9	—	刻印 No025
	208	瓦	丸		御楼門跡南側石垣周辺	44T	M・N-12・13	瓦廃棄土坑	—	(12.8)	(12.3)	2.7	—	刻印 No172-1
	209	瓦	平		御楼門跡南側石垣周辺	44T	M-13	排水溝内埋土		33.8	(18.6)	2.1	—	刻印 No026-2
	210	瓦	輪ちがい		御楼門跡南側石垣周辺	44T	M・N-12	—	Ⅳ～Ⅸ	15.4	15.8	2.0	—	刻印 No07056
	219	瓦	軒丸		御楼門跡南側石垣周辺	37T	N-10・11	—	造成土	—	—	—	B008	
	220	瓦	軒丸	長崎瓦	御楼門跡南側石垣周辺	37T	N-11	カクラン		—	—	—	A021	
	221	瓦	軒桟		御楼門跡南側石垣周辺	37T	M-11	—		—	—	—	A054	刻印 No052
	222	瓦	軒谷		御楼門跡南側石垣周辺	37T	N-11	カクラン		—	—	—	A050	刻印 No043-1
	223	瓦	塀		御楼門跡南側石垣周辺	37T	N-11	瓦溜り①		25.3	23.8	4.9	2 類	
	224	瓦	平		御楼門跡南側石垣周辺	37T	N-11	—	黒色土層	(8.8)	(7.6)	1.9	—	
	225	瓦	丸		御楼門跡南側石垣周辺	37T	M-10・11	土坑①	—	(24.0)	(11.7)	2.4	—	刻印 No027-3
57	226	瓦	鬼		御楼門跡南側石垣周辺	37T	M・N-11	カクラン		(16.2)	(14.3)	16.1	—	
63	246	瓦	軒丸	陶器瓦	御楼門跡南側石垣周辺	41T	K-9	カクラン		—	—	—	C012	
	247	瓦	軒桟		御楼門跡南側石垣周辺	41T	M-8	カクラン		—	—	—	A055	刻印 No020
	248	瓦	軒平		御楼門跡南側石垣周辺		—	—	—	—	—	—	A043	
	249	瓦	軒平	肥後瓦	御楼門跡南側石垣周辺	41T	M-8	—	造成土	—	—	—	D023	
	250	瓦	軒桟		御楼門跡南側石垣周辺	41T	M-8	カクラン		—	—	—	D039	刻印 No037-1
	251	瓦	桟		御楼門跡南側石垣周辺	41T	M-8	カクラン		(21.8)	(23.6)	1.6	—	
	252	瓦	丸	朝鮮系瓦	御楼門跡南側石垣周辺	41T	M-8	築山		(8.2)	(16.3)	1.8	—	
	253	瓦	鬼		御楼門跡南側石垣周辺	41T	M-9	築山		29.5	(32.2)	7.2	—	刻印 No040-2
85	363	瓦	鳥伏間		御角櫓跡		—	平成 11 年度御角櫓		—	—	—	A014	
	364	瓦	軒丸	陶器瓦	御角櫓跡		L・M-3	排水溝③		—	—	—	A029	
	365	瓦	鳥伏間		御角櫓跡		M-1	排水溝③		長軸：12.5	短軸：11.0	—	A067	
	366	瓦	軒丸	長崎瓦	御角櫓跡	11 ～ 14T	L-3	—		—	—	—	A021	

第 25 表　遺物 17（瓦）

挿図 No	掲載 No	種別	瓦種	種類	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	長さ	幅	厚さ	分類	備考
85	367	瓦	鳥伏間		御角櫓跡		―	平成 11 年度御角櫓		―	―	―	A022	
	368	瓦	軒丸	長崎瓦	御角櫓跡		L-1・2	―	造成土	―	―	―	A029	
	369	瓦	軒丸		御角櫓跡		L・M-3	カクラン		―	―	―	A058	
	370	瓦	軒丸		御角櫓跡		―	平成 11 年度御角櫓		18.2	3.3	2.2	A032	
	371	瓦	軒丸	長崎瓦	御角櫓跡		L-3	カクラン		―	―	―	A066	
	372	瓦	軒丸	長崎瓦	御角櫓跡		?	―	―	―	―	―	不明	
	373	瓦	軒丸	長崎瓦	御角櫓跡		L-2	カクラン		―	―	―	不明	
	374	瓦	軒丸	古瓦	御角櫓跡		L-3		Ⅲ層	―	―	―	不明	
	375	瓦	鳥伏間		御角櫓跡		―	平成 11 年度御角櫓		―	―	―	B016	
	376	瓦	軒丸		御角櫓跡		M-1	排水溝②		―	―	―	未分類	
	377	瓦	軒丸		御角櫓跡		―	平成 11 年度御角櫓	平成 11 年度御角櫓一括	18.8	3.1	2.4	B007	
	378	瓦	軒丸		御角櫓跡		L-1	排水溝③	造成土	―	―	―	B015	
	379	瓦	軒丸		御角櫓跡		M-1	排水溝①		―	―	―	B001	
	380	瓦	軒丸		御角櫓跡		L-1	―	造成土	―	―	―	C015	
	381	瓦	軒丸	長崎瓦	御角櫓跡		M-1	排水溝②		―	―	―	C009	
86	382	瓦	軒谷		御角櫓跡		―	平成 11 年度御角櫓		―	―	―	A005	
	383	瓦	軒袖		御角櫓跡	11T	M・N-1	―	Ⅰ層	―	―	―	A013	
	384	瓦	軒桟		御角櫓跡		L-1		造成土	―	―	―	A047	
	385	瓦	軒平		御角櫓跡		L-1		造成土	―	―	―	A046	
	386	瓦	軒桟		御角櫓跡		M-1・2	排水溝③	造成土	―	―	―	A048	
	387	瓦	軒桟		御角櫓跡		A ～ C-1 ～ 4	―	造成土	―	―	―	A061	
	388	瓦	軒桟		御角櫓跡		I-1・2	瓦溜り		―	―	―	A062	
	389	瓦	軒桟		御角櫓跡		I-1・2	瓦溜り		―	―	―	A065	
	390	瓦	軒桟		御角櫓跡		I-1・2	瓦溜り		―	―	―	A051	刻印 No084
	391	瓦	軒平		御角櫓跡		I-1・2	瓦溜り		―	―	―	B012	刻印 No039-1
	392	瓦	軒桟		御角櫓跡		M-1	排水溝②		―	―	―	B015	刻印 No039-2
	393	瓦	軒桟		御角櫓跡		L-1	―	造成土	―	―	―	B015	
	394	瓦	軒桟		御角櫓跡		I-1・2	瓦溜り		―	―	―	B017	
	395	瓦	軒桟		御角櫓跡		L-1	―	造成土	―	―	―	B017	
	396	瓦	軒桟		御角櫓跡		M-2	―	造成土	―	―	―	B020	
	397	瓦	軒桟		御角櫓跡		M-1	排水溝③		―	―	―	B026	
	398	瓦	軒桟		御角櫓跡		I-1・2	プール配管		―	―	―	B024	
	399	瓦	軒桟		御角櫓跡		L-1・2	―	造成土	―	―	―	B018	
	400	瓦	軒桟		御角櫓跡		―	―	―	―	―	―	B019	
87	401	瓦	軒平		御角櫓跡	11T	M・N-1	―	Ⅰ層	―	―	―	C004	
	402	瓦	軒平		御角櫓跡		―	平成 11 年度御角櫓		―	―	―	C006	
	403	瓦	軒平		御角櫓跡		M-1	排水溝③		―	―	―	C006	
	404	瓦	軒平		御角櫓跡		M-1	―	造成土	―	―	―	C005	
	405	瓦	軒平		御角櫓跡		L-1・2	―	造成土	―	―	―	C007	
	406	瓦	軒平		御角櫓跡		―	平成 11 年度御角櫓		―	―	―	C008	
	407	瓦	軒平		御角櫓跡		M-1	―	造成土	―	―	―	C007	
	408	瓦	軒平		御角櫓跡		L-1	―	造成土	―	―	―	D002	
	409	瓦	軒平	長崎瓦	御角櫓跡		M-1	排水溝②		―	―	―	D003	
	410	瓦	軒平	長崎瓦	御角櫓跡		L-1	―	造成土	―	―	―	D005	
	411	瓦	軒平	肥後瓦	御角櫓跡		L-2	排水溝③		―	―	―	D005	
	412	瓦	軒桟		御角櫓跡		A ～ C-1 ～ 4	―	造成土	―	―	―	D009	
	413	瓦	小菊		御角櫓跡		―	平成 11 年度御角櫓		―	―	―	K02	
	414	瓦	小菊		御角櫓跡		M-1	排水溝②		―	―	―	K01	
	415	瓦	小菊		御角櫓跡		J-1・2	瓦溜り		―	―	―	K17	

第 26 表　遺物 18（瓦）

挿図 No	掲載 No	種別	瓦種	種類	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	長さ	幅	厚さ	分類	備考
88	416	瓦	丸		御角櫓跡		M-1	排水溝②		37.7	16.3	2.0	—	
	417	瓦	丸		御角櫓跡		L-2	排水溝③		28.1	(8.3)	1.7	—	
	418	瓦	丸		御角櫓跡		A ～ C-1 ～ 4	—	造成土	36.9	19.4	2.7	—	
89	419	瓦	海鼠		御角櫓跡		L-1	—	造成土	(18.2)	(15.9)	3.8	不明	
	420	瓦	平		御角櫓跡		I-1・2	瓦溜り		(16.8)	(15.4)	2.0	—	
	421	瓦	平		御角櫓跡		L・M-1	排水溝		(31.1)	31.8	2.3	—	刻印 No026-6
	422	瓦	平		御角櫓跡		L-1・2	瓦溜り		32.6	(17.2)	2.0	—	
	423	瓦	平		御角櫓跡		M-1	排水溝②	—	33.7	31.9	2.0	—	
90	424	瓦	平		御角櫓跡	11T	M・N-1	—	造成土	28.6	(17.0)	1.6	—	
	425	瓦	桟		御角櫓跡		L-1・2	—	造成土	28.2	28.9	1.6	—	刻印 No059
	426	瓦	袖		御角櫓跡		L-1・2	—	造成土	20.8	15.5	1.7	—	
	427	瓦	桟		御角櫓跡		A ～ C-1 ～ 4	—	造成土	28.6	18.3	1.9	—	
91	428	瓦	塀		御角櫓跡		J-1・2	瓦溜り		30.8	26.2	3.9	3 類	
	429	瓦	海鼠		御角櫓跡		J-1・2	瓦溜り①		(14.0)	(11.3)	2.2	7 類	
	430	瓦	海鼠		御角櫓跡		I-1・2	カクラン		(15.4)	(13.8)	1.9	7 類	
	431	瓦	海鼠		御角櫓跡		J・K-1	カクラン		(16.2)	(17.2)	2.5	7 類	
	432	瓦	塀		御角櫓跡		J-1・2	カクラン		23.6	33.8	3.2	2 類	
	433	瓦	塀		御角櫓跡		K・L-1	—	造成土	20.6	23.3	4.8	不明	
92	434	瓦	丸	陶器瓦	御角櫓跡	14T	L・M-3	—	—	(13.3)	14.4	1.3	—	刻印 No089-1
	435	瓦	丸	陶器瓦	御角櫓跡		L-1	排水溝③		(8.8)	12.7	1.3	—	
	436	瓦	平	陶器瓦	御角櫓跡		L-3	カクラン		9.0	8.6	1.4	—	
	437	瓦	平	陶器瓦	御角櫓跡		J-1・2	カクラン		(15.6)	(13.6)	1.3	—	
	438	瓦	丸	朝鮮系瓦	御角櫓跡		L-3	カクラン		13.7	10.0	1.6	—	
	439	瓦	鯱		御角櫓跡	14T	M・N-3	カクラン		(14.2)	(8.2)	2.4		
	440	瓦	鬼		御角櫓跡		J-1・2	瓦溜り		(14.5)	(15.9)	(7.3)	—	
	441	瓦	鬼		御角櫓跡		L-1	排水溝③		(10.5)	(11.2)	3.6	—	
	442	瓦	鬼		御角櫓跡		—	—	—	(18.7)	(19.8)	10.7	—	
	443	瓦	鬼		御角櫓跡		I-1・2	瓦溜り		(16.5)	(13.5)	(9.4)	—	
	444	瓦	鬼		御角櫓跡		I-1・2	カクラン		(15.0)	(18.2)	4.4	—	
93	445	瓦	鬼		御角櫓跡		M-1	排水溝②		28.5	35.4	19.1	—	
	446	瓦	鬼		御角櫓跡		M-1	—	造成土	(24.4)	(39.1)	16.0	—	
100	493	瓦	軒丸		御角櫓跡西側石垣周辺	48T	F・G-1	瓦溜り		—	—	—	B013	
	494	瓦	軒丸	長崎瓦	御角櫓跡西側石垣周辺	48T	F・G-1・2	—	造成土	—	—	—	不明	
	495	瓦	軒桟		御角櫓跡西側石垣周辺	48T	F・G-1・2	瓦溜り		—	—	—	A064	
	496	瓦	軒桟		御角櫓跡西側石垣周辺	48T	F・G-1・2	カクラン		—	—	—	A051	
101	503	瓦	小菊		御角櫓跡西側石垣周辺	48T	E-2	—	造成土	—	—	—	K02	
	504	瓦	鬼		御角櫓跡西側石垣周辺	48T	E-1	瓦溜り		(19.2)	(24.3)	4.0	—	
	505	瓦	鬼		御角櫓跡西側石垣周辺	48T	E-2	—	造成土	(13.0)	(22.5)	(16.1)	—	
	506	瓦	塼		御角櫓跡西側石垣周辺	48T	E-2	—	造成土	(13.9)	(9.7)	1.9	—	
103	515	瓦	鬼		御角櫓跡西側石垣周辺	49T	—	—	表土	(26.7)	(21.9)	19.6	—	
	517	瓦	平	長崎瓦	御角櫓跡西側石垣周辺	49T	F・G-2	—	造成土	(12.1)	(8.9)	1.5	—	
119	558	瓦	軒丸		外御庭跡		L-1'	堀		—	—	—	A006	
	559	瓦	軒丸	長崎瓦	外御庭跡		N-1'	—	造成土	—	—	—	A061	
	560	瓦	軒丸		外御庭跡		L-1'	—	造成土	—	—	—	A063	
	561	瓦	軒丸	長崎瓦	外御庭跡		N-1'	—	造成土	—	—	—	A065	

第 27 表　遺物 19（瓦）

挿図 No	掲載 No	種別	瓦種	種類	地区	トレンチ	グリッド	遺構	層位	長さ	幅	厚さ	分類	備考
119	562	瓦	軒丸		外御庭跡		L-1'	堀		—	—	—	B 種不明	
	563	瓦	軒谷		外御庭跡		M-1'	—	造成土	—	—	—	A059	
	564	瓦	軒桟		外御庭跡		M-1'	—	造成土	—	—	—	A033	
	565	瓦	軒平		外御庭跡		N-2'	堀		—	—	—	D041	
	566	瓦	軒平	長崎瓦	外御庭跡		M-2'	堀		—	—	—	D005	
	567	瓦	軒平		外御庭跡		M-2'	堀		—	—	—	D007	
	568	瓦	軒平		外御庭跡		K-1'	—	層	—	—	—	D042	
	569	瓦	小菊		外御庭跡		M-1'	—	造成土	—	—	—	K02	
	570	瓦	丸		外御庭跡		L-1'	瓦溜り		(33.6)	18.5	2.0	—	
	571	瓦	平		外御庭跡		L-1'	堀		34.1	(13.5)	2.6	—	
120	572	瓦	平		外御庭跡		L-1'	—	埋土	(18.8)	(18.3)	1.8	—	刻印 No069-1
	573	瓦	平		外御庭跡		L-1'	—	造成土	(15.0)	13.5	1.9	—	
	574	瓦	桟		外御庭跡		N-1'	—	石垣	(14.6)	(18.0)	1.9	—	刻印 No058-1
	575	瓦	平	大坂瓦	外御庭跡		L-1'	—	造成土	(12.5)	(8.5)	1.4	—	
	576	瓦	鬼		外御庭跡		L・M-1'	カクラン		(14.3)	(16.2)	3.0	—	
	577	瓦	海鼠		外御庭跡		M・N-1'・2'	—	造成土	(24.0)	(23.0)	3.5	8 類	
	578	瓦	鳥伏間		外御庭跡		L-1'	—	造成土	11.9	13.9	3.6	不明	
	579	瓦	伏間		外御庭跡		J・K-1'	カクラン		16.8	(12.7)	1.8	—	
	580	瓦	丸	古瓦	外御庭跡		N-1'	—	造成土	(11.0)	(6.9)	1.4	—	
	581	瓦	丸	朝鮮系瓦	外御庭跡		N-1'	—	石垣	(9.7)	(7.0)	1.7	—	
	582	瓦	平	陶器瓦	外御庭跡		K-1'	堀		(11.5)	(13.3)	1.7	—	
125	641	瓦	軒丸		外御庭跡	42T	D・E-1'	堀		—	—	—	A061	
	642	瓦	軒丸		外御庭跡	42T	E-1'	堀		—	—	—	B004	
	643	瓦	軒桟		外御庭跡	42T	E-1'	—	—	—	—	—	A060	
	644	瓦	軒桟		外御庭跡	42T	—	—	造成土	—	—	—	B 種不明	刻印 No039-3
	645	瓦	丸		外御庭跡	42T	D・E-1'	堀		(19.5)	13.5	2.5	—	刻印不明
	646	瓦	桟		外御庭跡	42T	—	—	—	29.2	26.1	2.0	—	
	647	瓦	桟		外御庭跡	42T	E-1'	堀		(14.2)	(11.1)	1.7	—	刻印 No067
	648	瓦	平か熨斗		外御庭跡	42T	D・E-1'	堀		(19.8)	20.2	1.6	—	
	649	瓦	鬼		外御庭跡	42T	—	—	造成土	(17.5)	(21.3)	—	—	
	650	瓦	丸	陶器瓦	外御庭跡	42T	E-1'	堀		(7.4)	(7.3)	1.2	—	
130	665	瓦	軒丸		御池跡	53T	I-12	橋掛り		—	—	—	B003	
	666	瓦	軒平		御池跡	53T	I-12	橋掛り		—	—	—	A 種不明	
	667	瓦	軒桟		御池跡	53T	H・I-12	—		—	—	—	A038	
	668	瓦	軒平	陶器瓦	御池跡	53T	H-9	—	—	—	—	—	D 種不明	
	669	瓦	軒桟		御池跡	53T	H-11	—	—	—	—	—	B 種不明	
	670	瓦	小菊		御池跡	53T	H-12	—	—	—	—	—	K04	
	671	瓦	平		御池跡	53T	I-12	橋掛り		18.1	14.9	2.1	—	刻印 No. 084
	672	瓦	桟		御池跡	53T	I-12	橋掛り		11.7	12.2	1.9	—	刻印 No. 087
	673	瓦	平		御池跡	53T	—	—	—	8.6	6.3	2.0	—	
	674	瓦	塀		御池跡	53T	I-11	—	造成土	(19.5)	(14.7)	4.2	不明	
	675	瓦	平	陶器瓦	御池跡	53T	H-13	—	—	6.2	7.7	1.4	—	
	676	瓦	丸	陶器瓦	御池跡	53T	I-12	—	—	8.1	6.7	1.6	—	
	677	瓦	丸	朝鮮系瓦	御池跡	53T	I-11	—	造成土	8.4	6.2	2.1	—	
135	701	瓦	平	陶器瓦	御楼門跡	45T	J-29	カクラン		(16.0)	22.2	1.3	—	
	702	瓦	丸	陶器瓦	御楼門跡	45T	J-29	カクラン		(11.5)	(12.7)	3.0	—	
	703	瓦	鬼		御楼門跡		J-22	—		(10.5)	(12.3)	(11.2)	—	
	704	瓦	丸	朝鮮系瓦	御楼門跡	45T	J-28	カクラン		(14.6)	(7.0)	1.8	—	
図版 19	705	瓦	塀		外御庭跡		N-1'	カクラン		(10.2)	(16.0)	4.5	不明	

第Ⅳ章　自然科学分析

はじめに

鹿児島城跡から出土した遺物について，自然科学分析を実施した。分析内容は①木片及び木製品８点の樹種同定と放射性炭素年代測定，②堀内堆積層１点の花粉分析及び植物珪酸対分析，③土製品及び鞴の羽口２点の胎土分析（蛍光Ｘ線分析または薄片顕微鏡観察），④瓦６点の胎土分析（蛍光Ｘ線分析及び薄片顕微鏡観察）である。①～③については株式会社古環境研究センター，④についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に分析を依頼した。以下に結果を示す。

第１節　木片及び木製品８点の分析

１　分析試料

分析試料については第 28 表に示す。

第 28 表　分析した木片及び木製品

分析№	年度	出土地点等	種別	実施分析	
				樹種同定	δ１４C
1	R2	A・B，a・b38～39区	堀内炭化木片		○
2	R1-01	M-1’	杭	○	
3	R1-02	E-1’　42T	鍑板状木製品	○	
4	R1-03	E-1’　42T最下層	鍑板状木製品	○	○
5	R2	琉球館跡P2　Ⅳa層	杭	○	○
6	R2	鹿児島城跡（大手口）	炭化木		○
7	R2	火除地跡（比較用）	杭	○	○
8	R2	北御門跡	下駄	○	

２　分析方法

１）樹種同定について

木材は，セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり,解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから，比較的近隣の森林植生の推定が可能であり，遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

樹種同定の手順は以下の通りである。

１）試料を洗浄して付着した異物を除去

２）カミソリで木材の基本的三断面（横断面：木口，放射断面：柾目，接線断面：板目）の切片を作成

３）生物顕微鏡（40 ～ 1000 倍）で観察し，木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定

２）放射性炭素年代測定について

放射性炭素年代測定は，光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体，骨，貝殻，土器付着炭化物などが測定対象となり，約５万年前までの年代測定が可能である（中村，2003）。

試料の前処理として，分析№２～４については超音波洗浄，有機溶剤処理（アセトン使用），また，すべての資料で酸－アルカリ－酸処理（AAA 処理）を行い，測定は加速器質量分析法（AMS 法）で行った。

AMS 法によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い，放射性炭素（^{14}C）年代および暦年代（較正年代）を算出した。

試料の測定 $^{14}C/^{12}C$ 比を補正するための炭素安定同位体比（$^{13}C/^{12}C$）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料の δ ^{13}C 値を -25(‰) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

放射性炭素（^{14}C）年代を実際の年代値に近づけるために，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動や ^{14}C の半減期の違いを較正している。暦年代較正には，年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値，福井県水月湖の年縞堆積物データ，サンゴの U/Th（ウラン / トリウム）年代と ^{14}C 年代の比較などにより作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 20，較正プログラムは OxCal 4.3 である。

暦年代（較正年代）は，^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し，OxCal の確率法により１シグマ σ（68.2％確率）と２σ（95.4％確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では，複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

３　結果

１）樹種同定について

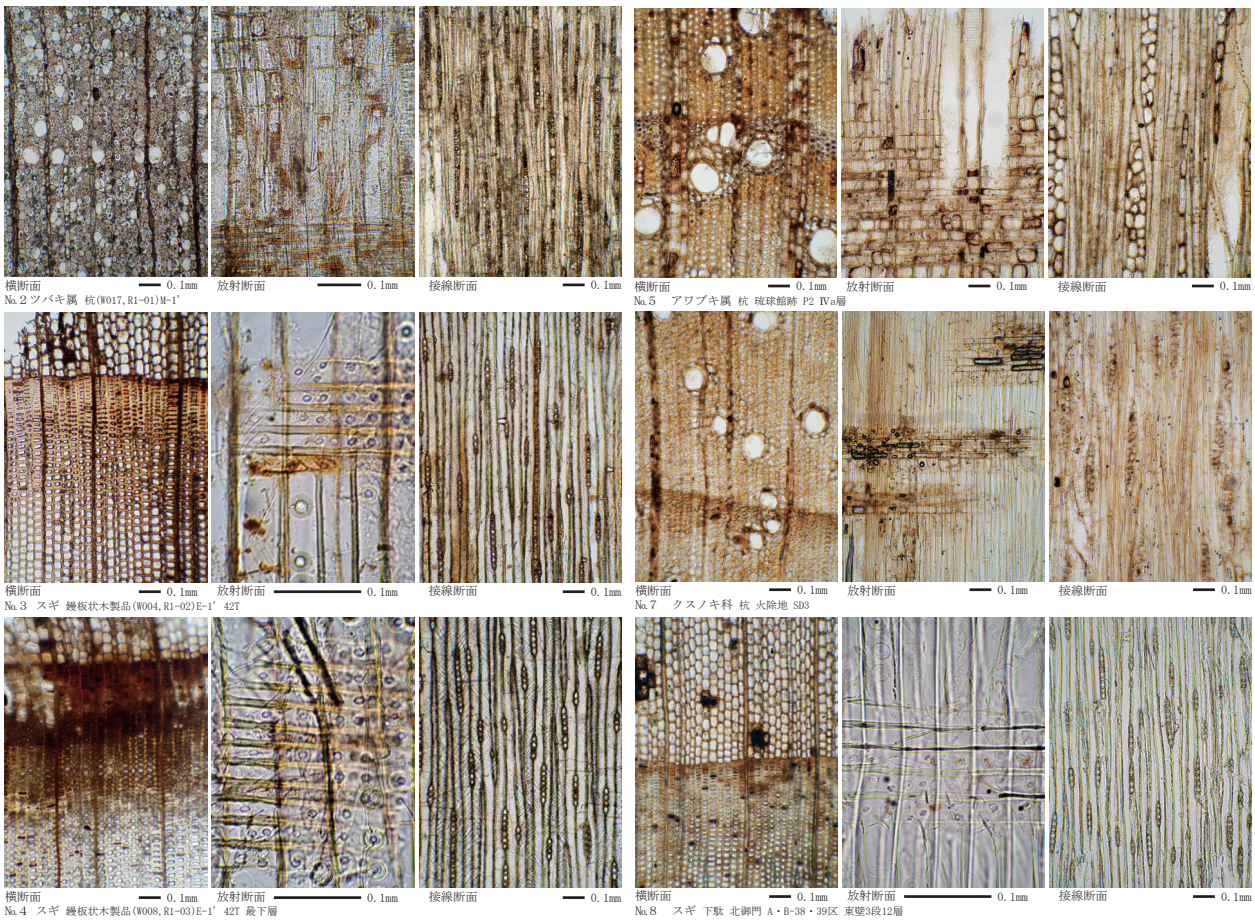
第 29 表に同定結果を示し，第 136 図に各分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった木材構造の特徴を示す。

第 29 表　樹種同定結果

分析№	年度	出土地点等	種別	結果（学名／和名）	
2	R1-01	M-1’	杭	*Camellia*	ツバキ科
3	R1-02	E-1’　42T	鍑板状木製品	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
4	R1-03	E-1’　42T最下層	鍑板状木製品	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
5	R2	琉球館跡P2　Ⅳa層	杭	*Meliosma*	アワブキ科
7	R2	火除地跡（比較用）	杭	Lauraceae	クスノキ科
8	R2	北御門	下駄	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ

①　スギ　Cryptomeria　japonica　D.Don　スギ科

仮道管，樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で，晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で，１分野に２個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で１～ 14 細胞高である。



第 136 図　鹿児島城跡の木材

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州，四国，九州，屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ 40m，径２m に達する。

②　ツバキ属　Camellia　ツバキ科

小型でやや角張った道管が単独ないし２～３個複合して散在する散孔材である。道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で，階段の数は８～ 30 本ぐらいである。放射組織は異性放射組織型で１～３細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものがあり，結晶細胞が見られる。

以上の特徴からツバキ属に同定される。ツバキ属にはヤブツバキ，サザンカなどがあり，本州，四国，九州に分布する。常緑の高木で，通常高さ５～ 10m，径 20 ～ 30cm である。

③　アワブキ属　Meliosma　アワブキ科

小型の道管が単独ないしその複合部に１～２個の柔細胞をはさんで放射方向にむかって２～４個複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で，階段の数は少なく 10 本前後である。放射組織は異性放射組織型で１～４細胞幅である。

以上の特徴からアワブキ属に同定される。アワブキ，ヤマビワ，ミヤマホウソなどがあり，落葉または常緑の低木から高木である。アワブキ属は本州，四国，九州に分布し，アワブキは九州に多い。

④　クスノキ科　Lauraceae

中型から小型の道管が，単独および２～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる異性放射組織型で１～３細胞幅である。

以上の特徴からクスノキ科に同定される。クスノキ科には，クスノキ，ヤブニッケイ，タブノキ，カゴノキ，シロダモなどがあり，道管径の大きさ，多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが，道管径以外の点が不明瞭なためクスノキ科の同定にとどめた。

２）放射性炭素年代測定について

結果については第 30 表に示す。較正年代の詳細グラフについては第 137 図に示す。なお，樹木による年代測定結果は，樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており，樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は，考古学的所見（遺構の年代）よりも古い年代値となることがある。

第２節　堀内堆積物の花粉分析

１　分析試料

分析を行った資料は A･B a･b 38 ～ 39 区の堀内堆積層（東壁３段 12 層）である。

２　分析方法

花粉分析は，一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており，遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの有機質遺体は，水成堆積物では保存状況が良好であるが，乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

花粉の分離抽出は，中村（1967）の方法をもとに，以下の手順で行った。

１）試料から１cm3 を秤量

２）0.5%リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加えて 15 分間湯煎

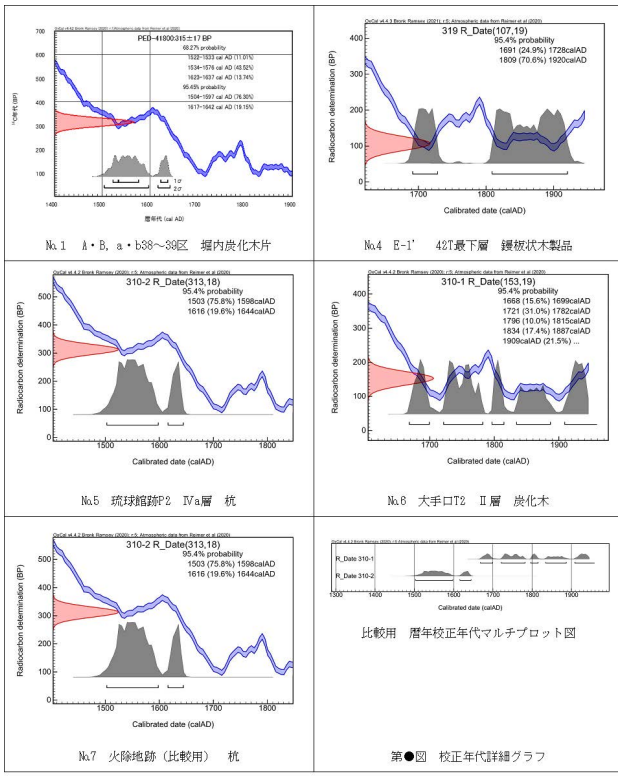
３）水洗処理の後，0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法で砂粒を除去

４）25%フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置

５）水洗処理の後，氷酢酸によって脱水し，アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す

６）再び氷酢酸を加えて水洗処理

７）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し，グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成



第 137 図　　年代詳細グラフ

８）検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍で行った。花粉の同定は，島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして，所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類し，複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

３．結果

（１）分類群

検出された分類群は，樹木花粉 11，樹木花粉と草本花粉を含むもの２，草本花粉８，シダ植物胞子２形態の

第 30 表　放射性炭素年代測定結果

分析 No.	年度	出土地点等	種別	δ13C (‰)	14C年代 (年BP)	暦年比較用年代 (年BP)	暦年代（較正年代） 1 σ（68.2%確率）	暦年代（較正年代） 2 σ（95.2%確率）
1	R2	A・B，a・b38～39区	堀内炭化木片	-27.14±0.25	315±15	315±17	cal AD 1522-1533 (11.01%) cal AD 1534-1576 (43.52%) cal AD 1623-1637 (13.74%)	cal AD 1504-1597 (76.30%) cal AD 1617-1642 (19.15%)
4	R1-03	E-1'　42T最下層	鍓板状木製品	-26.98±0.13	120±15	120±17	AD 1693-1706 (9.0%) AD 1720-1726 (4.1%) AD 1810-1818 (4.6%) AD 1833-1891 (42.7%) AD 1907-1918 (8.0%)	AD 1686-1731 (23.6%) AD 1806-1926 (71.9%)
5	R2	琉球館跡P2　Ⅳa層	杭	-28.91±0.22	105±20	107±19	cal AD 1696-1724 (21.5%) cal AD 1812-1838 (19.4%) cal AD 1878-1915 (27.4%)	cal AD 1691-1728 (24.9%) cal AD 1808-1920 (70.6%)
6	R2	鹿児島城跡（大手口）	炭化木	-26.68±0.17	155±20	153±19	cal AD 1674-1694 (13.5%) cal AD 1726-1766 (25.3%) cal AD 1773-1776 (1.4%) cal AD 1798-1812 (9.2%) cal AD 1916-1942 (18.8%)	cal AD 1668-1699 (15.6%) cal AD 1721-1782 (31.0%) cal AD 1796-1814 (10.0%) cal AD 1834-1886 (17.4%) cal AD 1908-... (21.5%)
7	R2	火除地跡（比較用）	杭	-31.44±0.19	315±20	313±18	cal AD 1522-1575 (56.2%) cal AD 1625-1638 (12.1%)	cal AD 1502-1598 (75.8%) cal AD 1616-1644 (19.6%)

計 23 分類群である。分析結果を第 31 表に示し，花粉数が 100 個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した（第 138 図）。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属，スギ，カバノキ属，ハシバミ属，クリ，シイ属－マテバシイ属，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，エノキ属－ムクノキ，ウルシ属，ツツジ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

マメ科，ニワトコ属－ガマズミ属

〔草本花粉〕

イネ科，イネ属型，カヤツリグサ科，タデ属，タデ属サナエタデ節，セリ亜科，キク亜科，ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子，三条溝胞子

（２）花粉群集の特徴

堀内堆積層（東壁３段 12 層）では，樹木花粉の占める割合が 39%，樹木・草本花粉が１%，草本花粉が 28%，シダ植物胞子が 32%である。樹木花粉では，シイ属－マテバシイ属，コナラ属アカガシ亜属が優勢で，クリ，コナラ属コナラ亜属，マツ属複維管束亜属，スギなどが伴われる。草本花粉では，イネ科（イネ属型を含む）が優勢で，カヤツリグサ科，キク亜科，ヨモギ属，セリ亜科などが伴われる。

植物珪酸体分析（参考分析：第 136 図）では，イネ，ヨシ属，キビ族型，ススキ属型，ジュズダマ属型，ネザサ節型，および樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属）などが検出された。イネの密度は 3,000 個 /g であり，稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている 5,000 個 /g（状況により 3,000 個 /g とする場合もある）に近い値である。

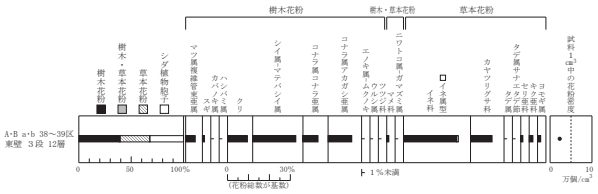
４．考察

花粉分析および植物珪酸体分析（参考分析）の結果から，堀内堆積層（東壁３段 12 層）の堆積当時は，イネ科（ヨシ属など）やカヤツリグサ科をはじめ，セリ亜科，ジュズダマ属なども生育する湿潤な環境であったと考えられ，周辺の比較的乾燥したところにはキク亜科，ヨモギ属，ススキ属などの草本類が生育していたと推定される。イネ属型の花粉およびイネの植物珪酸体が一定量検出されることから，周辺における稲作の可能性が示唆されるが，堀内堆積層の試料であることから，ここで検出されたイネについては周辺で利用された稲藁に由来する可能性も考えられる。稲藁の利用としては，藁製品（俵，縄，ムシロ，草履など），建物の屋根材や壁材など多様な用途が想定される。

当時の調査区周辺には，シイ類（シイ属－マテバシイ属），カシ類（コナラ属アカガシ亜属），クスノキ科，イスノキ属などの照葉樹林をはじめ，二次林もしくは植栽とみられるナラ類（コナラ属コナラ亜属），クリ，マツ属複維管束亜属（クロマツ，アカマツ）などが分布していたと推定される。このうち，シイ類やクリは花粉散布性が低いことから，比較的近隣に生育していた可能性が考えられる。なお詳細結果については第 31 表に，観察した花粉類については第 31 表に，花粉ダイヤグラムについては第 138 図に示す。

第 31 表　観察された花粉類

分類群 学名	和名	A･B a･b 38-39区 東壁 3段12層
Arboreal pollen	樹木花粉	
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	18
Cryptomeria japonica	スギ	4
Betula	カバノキ属	2
Corylus	ハシバミ属	1
Castanea crenata	クリ	37
Castanopsis-Pasania	シイ属-マテバシイ属	80
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	28
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	44
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	3
Rhus	ウルシ属	3
Ericaceae	ツツジ科	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	
Leguminosae	マメ科	4
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	
Gramineae	イネ科	99
Oryza type	イネ属型	3
Cyperaceae	カヤツリグサ科	40
Polygonum	タデ属	1
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節	3
Apioideae	セリ亜科	4
Asteroideae	キク亜科	7
Artemisia	ヨモギ属	6
Arboreal pollen	樹木花粉	221
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	5
Nonarboreal pollen	草本花粉	163
Total pollen	花粉総数	389
Pollen frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の花粉密度	2.3 ×10^4
Unknown pollen	未同定花粉	4
Fern spore	シダ植物胞子	
Monolate type spore	単条溝胞子	180
Trilate type spore	三条溝胞子	5
Total Fern spore	シダ植物胞子総数	185
Parasite eggs	寄生虫卵	(-)
Stone cell	石細胞	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(+)
微細植物遺体(Charcoal・woods fragments)	(×10^5)	
未分解遺体片		0.9
分解質遺体片		16.9
炭化遺体片(微粒炭)		



第 138 図　花粉ダイヤグラム

第３節　土製品及び鞴の羽口の胎土分析

１　分析試料

分析試料については第 32 表に示す。

第 32 表　胎土分析の分析試料

分析№	年度	出土地点等	種別	分析内容
10	R1-05	d-35 造成土	土製品の充填物	蛍光X線分析
11	R2-06	地点№452，N-1，焼土層の下	鞴の羽口	薄片顕微鏡観察

２　分析方法

１）蛍光Ｘ線分析について

物質にＸ線を照射すると，その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光Ｘ線）が放出され，この蛍光Ｘ線を分光して波長と強度を測定することで，物質に含まれる元素の種類や量を調べることができる。

この方法を用いて，考古学分野では朱やベンガラなどの顔料分析，金属製品やガラスの材質分析，リン－カルシウム分析などが行われている。また，指標となる特定の元素の検出パターンの比較から，須恵器の生産地推定や黒曜石の産地推定なども行われている。

分析対象は，№10（d-35 造成土から出土した土製品，R1-05）内の充填物である。充填物は黒色のガラス状物質であり,ガラスの素材である可能性が指摘されている。分析試料として，充填物の一部から小片を採取した。

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（SEA1200VX）を用いて，元素の同定とファンダメンタルパラメータ法（FP 法）による定量分析を行った。装置のＸ線管は最大 50kV，1000 μ A のロジウム（Rh）ターゲット，Ｘ線照射径は１mm，Ｘ線検出器は SDD 検出器である。測定条件は,管電圧･一次フィルタの組み合わせが 15kV（一次フィルタ無し）・50kV（一次フィルタ Pb 測定用・Cd 測定用）の計３条件で測定時間は各 500 ～ 1500s，管電流自動設定射径１mm，試料室内真空である。

なお，ガラス製遺物は透明で風化がないように見える箇所でも風化が進んでおり，ナトリウム（Na02）やカリウム（K20）の減少など化学組成に変化が生じている（肥塚，1997）。人為的に露出させた新鮮面でない場合は，解釈の際に風化の影響を考慮する必要がある。

２）薄片顕微鏡観察について

鞴の羽口について,薄片を作成して顕微鏡観察を行い，鉱物片，岩石片，微化石類，その他の混和物等の特徴により素材の給源について検討を行った。

胎土分析を行った鞴羽口は，№11（R2-06，地点№452，N-1，焼土層の下）である。

羽口の一部を岩石カッターで採取して整形し，全体にエポキシ系樹脂を含浸させて固化処理を行った。精密岩石薄片作製機および研磨フィルムを用いて試料を研磨して厚さ 0.02mm 前後の薄片を作製し，コーティング剤を塗布した。観察は,偏光顕微鏡(300 ～ 1500 倍)を用いて，薄片全面に含まれる鉱物片，岩石片，微化石類（放散虫化石，珪藻化石，植物珪酸体化石，骨針化石など），その他の混和物等について行った。

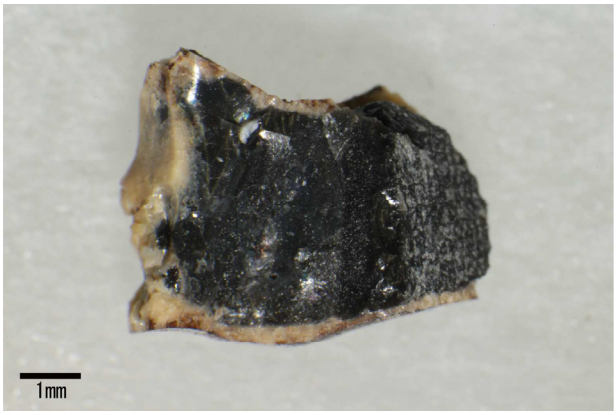
３　結果及び考察

１）蛍光Ｘ線分析

蛍光Ｘ線分析の結果，№10 の充填物ではマグネシウム（MgO），アルミニウム（Al203），ケイ素（SiO2），カリウム（K20），カルシウム（CaO），チタン（TiO2），マンガン（MnO），鉄（Fe203），亜鉛（ZnO），ストロンチウム（SrO），スズ（SnO2），アンチモン（Sb203），バリウム（BaO），鉛（PbO）の 14 元素が検出された。第 33 表にに各元素の定量分析結果（wt％）を示す。なお，定量分析結果は慣例により代表的な酸化物名で表記した。

第 33 表　蛍光Ｘ線分析における各元素の定量分析結果

試料	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	ZnO	SrO	SnO_2	Sb_2O_3	BaO	PbO
№10	2.94	4.36	47.26	0.43	9.85	0.38	0.92	5.55	0.15	0.11	0.02	0.02	4.42	23.59



第 139 図　Ｘ線分析試料写真

№10（土製品，R1-05）内の充填物（黒色のガラス状物質）について蛍光Ｘ線分析を行った。その結果，ケイ素（SiO2）の含量が 47.3％，鉛（PbO）が 23.6％，カルシウム（CaO）が 9.9％，鉄（Fe203）が 5.6％，アルミニウム（Al203）が 4.4％，バリウム（BaO）が 4.4％，マグネシウム（MgO）が 2.9％,マンガン（MnO）が 0.9％などであり，ケイ素（SiO2）が主成分で鉛（PbO）の含量も高い。また，ガラスの原料となる金属鉛の溶融の際に鉛の滓を除去するために少量添加するとされる亜鉛（ZnO）も 0.2％検出されることから，№10 の充填物はガラス（鉛ガラス）の素材に関連する物質である可能性が示唆される。

なお，薩摩切子の蛍光Ｘ線分析結果（尚古集成館所蔵 25 点，鹿児島市立美術館所蔵４点）では，すべてがカリ鉛ガラスであり，江戸時代から明治初期にかけて製作されたガラス器も，ほとんどがカリ鉛ガラスとされている（中井ほか，2020 など）。今回の分析では，カリウム（K20）の含量は 0.4％とわずかであり，江戸時代の一般

的なガラスにはあまり含まれないマグネシウム（MgO），アルミニウム（Al2O3），カルシウム（CaO），鉄（Fe2O3），バリウム（BaO）などが一定量検出された。これらのことから，№.10 の充填物については金属素材としての鉛の精錬や溶解時に付着した金属滓に由来する可能性なども考えられる。

２）薄片顕微鏡観察

（１）砂粒物岩石・鉱物組成

バブル型の火山ガラスが特徴的に検出され，軽石型火山ガラスも認められた。また，№.11 は鉱物や岩石起源の砂粒物が極めて少ない。

火山ガラス（バブル型・軽石型）＞＞石英・長石類，斜長石（双晶・累帯），砂岩質，凝灰岩質，石灰質類角閃石類，雲母類

（２）微化石類の特徴

湖沼沼沢湿地指標種群の Aulacoseira pusilla が特徴的に検出され，淡水種の Aulacoseira 属や Pinnularia 属なども認められた。とくに，№.11 は珪藻化石が多く，不明種破片も多産する。湖沼沼沢湿地指標種群（N）は，湖沼（水深が約 1.5m 以上）における浮遊生種および沼沢湿地（水深１m 内外）における付着生種であり，湖沼・沼沢湿地の環境を指標する種群である（安藤，1990）。湖沼沼沢湿地指標種群の珪藻化石が特徴的に検出されることから，いずれも湖沼沼沢湿地成の堆積物（淡水成粘土）と考えられる。

珪藻化石（湖沼沼沢湿地 Aulacoseira pusilla 多産，淡水種 Cocconeis placentula，Pinnularia 属多い，Aulacoseira 属多産，Achnanthes 属，Nitzschia 属，不明種破片多産），胞子化石多い，植物珪酸体化石

薄片顕微鏡観察の結果，鞴の羽口（№.11）は火山ガラス（主にバブル型）が極めて多く含まれ，湖沼沼沢湿地指標種群の珪藻化石が特徴的に認められた。火山ガラスの給源は，シラスとよばれる姶良入戸火砕流堆積物（A-Ito，約３万年前）に由来すると考えられ，湖沼沼沢湿地に二次堆積して淡水成粘土となったものが羽口の素材として利用された可能性が考えられる。

第 34 表　観察された鉱物組成

No.	砂粒									鉱物							粘土							植物珪酸体	その他の特徴
	分類	A-a 片岩類	B-b 深成岩類	C-c 堆積岩類	D-d 火山岩類	E-e 凝灰岩類	F-f 流紋岩類	G-g ラフラ	H-h 石灰岩類	石英	斜長石（双晶・累帯）	カリ長石（パーサイト）	ジルコン	角閃石類	輝石類	雲母類	種類	放散虫化石	海水種珪藻化石	淡水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	胞子化石		
11	6	－	－	△	－	△	－	●	△	△	△	－	－	△	－	△	淡水成	－	－	●	●	－	◎	△	鉱物および岩石起源の砂粒が極めて少ない

第 35 表　観察された微化石・砂粒物の特徴

№.	種別	粒度	最大粒径	砂粒物岩石・鉱物組成	微化石類の特徴
11	鞴の羽口（R2-06）	70 ～ 220μm	3.1mm	火山ガラス（バブル型・軽石型）》石英・長石類、斜長石（双晶・累帯）、砂岩質、凝灰岩質、石灰質類角閃石類、雲母類	珪藻化石（湖沼沼沢湿地*Aulacoseira pusilla* 多産、淡水種*Cocconeis placentula*、*Pinnularia* 属多い、*Aulacoseira* 属多産、*Achnanthes* 属、*Nitzschia* 属、不明種破片多産）、胞子化石多い、植物珪酸体化石

第４節　瓦の胎土分析

はじめに

本報告では，瓦の材質（胎土）の特性を明らかにすることにより，地質との関連性やこれまでの瓦の胎土分析結果との類似性あるいは異質性を検討し，瓦の生産に係る資料を作成する。

１．試料

試料は，鹿児島城跡から出土した瓦片 6 点である。試料には試料 No.12 ～ 17 までの試料番号が付されている。これらのうち，試料 No.12 と 13 は軒丸瓦，試料 No.14 と 15 は軒平瓦，試料 No.16 と 17 は軒桟瓦である。

各試料の詳細を一覧にして第 36 表に示す。

第 36 表　試料一覧

試料No.	掲載番号	種類	採取した地点や遺構等
12	377	軒丸瓦	平成11年御角櫓一括
13	665	軒丸瓦	橋掛り　ウ層
14	196	軒平瓦	M･N-12･13　瓦廃棄土坑
15	404	軒平瓦	M-1　造成土一括
16	202	軒桟瓦	M･N-12･13　44T　瓦廃棄土坑
17	155	軒桟瓦	N-17　七高瓦溜り

２．分析方法

これまでの分析では　薄片作製観察と蛍光 X 線分析を併用した。本分析でも同様の方法を用いる。以下に各分析方法を述べる。

(1) 薄片作製観察

薄片は，試料の一部をダイアモンドカッターで切断，正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い，胎土中に含まれる鉱物片,岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

ここでは薄片観察結果を松田ほか (1999) の方法に従って表記する。これは，胎土中の砂粒について，中粒シルトから細礫までを対象とし，粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では，胎土中における砂の含量や粒径組成により，土器の製作技法の違いを見出すことができるために，同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。以下にその手順を述べる。

砂粒の計数は，メカニカルステージを用いて 0.5mm 間隔で移動させ，細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパラート全面で行った。なお，径 0.5mm 以上の粗粒砂以上の粒子については，ポイント数ではなく粒数を計数した。また，同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から，各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の 3 次元棒グラフ，砂粒の粒径組成ヒストグラム，孔隙・砂粒・基質の割合を示

す棒グラフを呈示する。

(2) 蛍光 X 線分析

リガク製波長分散型蛍光 X 線分析装置（ZSX Primus Ⅲ+）を用い，ガラスビード法により分析を実施した。測定用のプログラムは，定量アプリケーションプログラムの FP 定量法を使用し，SiO2,TiO2,Al2O3,Fe2O3,MnO,MgO,CaO,Na2O,K2O,P2O5 の主要 10 元素および Rb,Sr,Y,Zr,Ba の微量 5 元素について定量分析を実施した。なお，標準試料には独立行政法人産業技術総合研究所の地球化学標準試料（JA-1,JA-2,JA-3,JB-1a,JB-2,JB-3,JCh-1,JF-1,JF-2,JG-1a,JG-2,JG-3,JGb-1,JGb-2,JH-1,JLk-1,JR-1,JR-2,JR-3,JSd-1,JSd-2,JSd-3,JSl-1,JSl-2,JSy-1）を用いた。

１）装置

（株）リガク製 走査型蛍光 X 線分析装置 ZSX Primus Ⅲ+(FP 定量法アプリケーション）

２）試料作製

第 37 表　ガラスビード作製条件

溶融装置	リガク製卓上型高周波ビードサンプラ(3091A001)
融剤及び希釈率	融剤(Li2B4O7)5.000g:試料0.500g
剥離剤	LiI
溶融温度,時間	1200℃,600sec

機械乾燥（110℃）した試料を，振動ミル（平工製作所製 TI100；10ml 容タングステンカーバイト容器）で粉砕・混合し，ガラスビードを表 2 の条件で作製した。

３）測定条件

上記作成したガラスビードを専用ホルダーにセットし，走査型蛍光 X 線分析装置（（株）リガク製 ZSX Primus Ⅲ+）を用い，表 3，表 4 の条件で測定を実施した。

第 38 表　蛍光 X 線装置条件

ターゲット	Rh
管電圧(kV)	50
管電流(mA)	50
試料マスク	30mmφ
試料スピン	ON
ダイアフラム	30mmφ
測定雰囲気	真空

３．結果

(1) 薄片作製観察

観察結果を第 40 表，第 140 ～ 143 図に示す。以下に，鉱物・岩石組成，粒径組成，砕屑物・基質・孔隙の順に特徴を述べる。

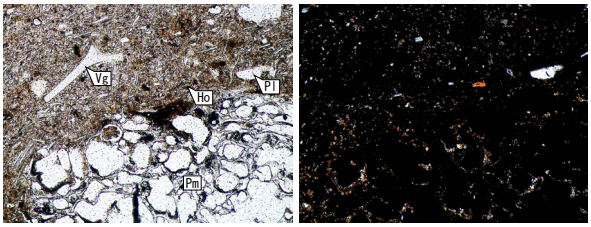
１）鉱物・岩石組成

6 点の試料は，いずれも多量の火山ガラスを含む。火山ガラスの形態は平板状のバブル型を主体とし，少量の軽石型も混在する。火山ガラス以外の砕屑物は，いずれの試料においても斜長石の鉱物片が少量または微量含まれ，石英の鉱物片が微量含まれる。また，試料 No.12 以外の 5 点の試料には，斜方輝石および単斜輝石の両輝石の鉱物片が極めて微量含まれ，試料 No.12 には黒雲母が極めて微量含まれる。岩石片は，各試料に流紋岩・デイサイトおよび安山岩といった火山岩類が含まれる。詳細にみれば，試料 No.12 以外の 5 点の試料には安山岩が微量含まれるが，試料 No.12 に安山岩は認められない。

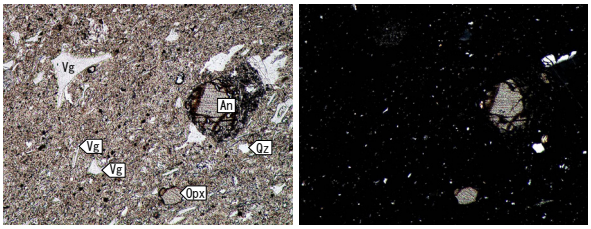
なお，結果表の備考欄に記載したように，試料 No.12 の基質には炭酸塩鉱物が含まれるが，他の 5 点の試料の基質には炭酸塩鉱物は認められない。

２）粒径組成

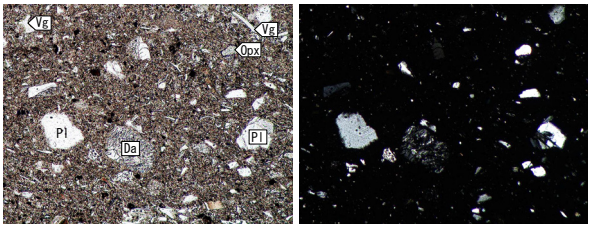
試料 No.13，14，15，17 の 4 点は細粒砂から粗粒シルトまでの粒径が同程度に多い組成を示す。試料 No.12 は極細粒砂が他の粒径に比べて明瞭に多く，次いで細粒砂が多い。試料 No.16 は細粒砂が明瞭に多く，次いで極細粒砂の多い組成である。



1.試料No.12(1160　軒丸瓦　平成11年御角櫓一括)



2.試料No.14(1123　軒平瓦　M・N-12・13)



3.試料No.17(1136　軒桟瓦　N-17　七高瓦溜り)

Qz:石英．Pl:斜長石．Opx:斜方輝石．Ho:角閃石．Pm:軽石．Da:デイサイト．
An:安山岩．Vg:火山ガラス．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

第 140 図　瓦顕微鏡下観察結果

2) 蛍光 X 線分析

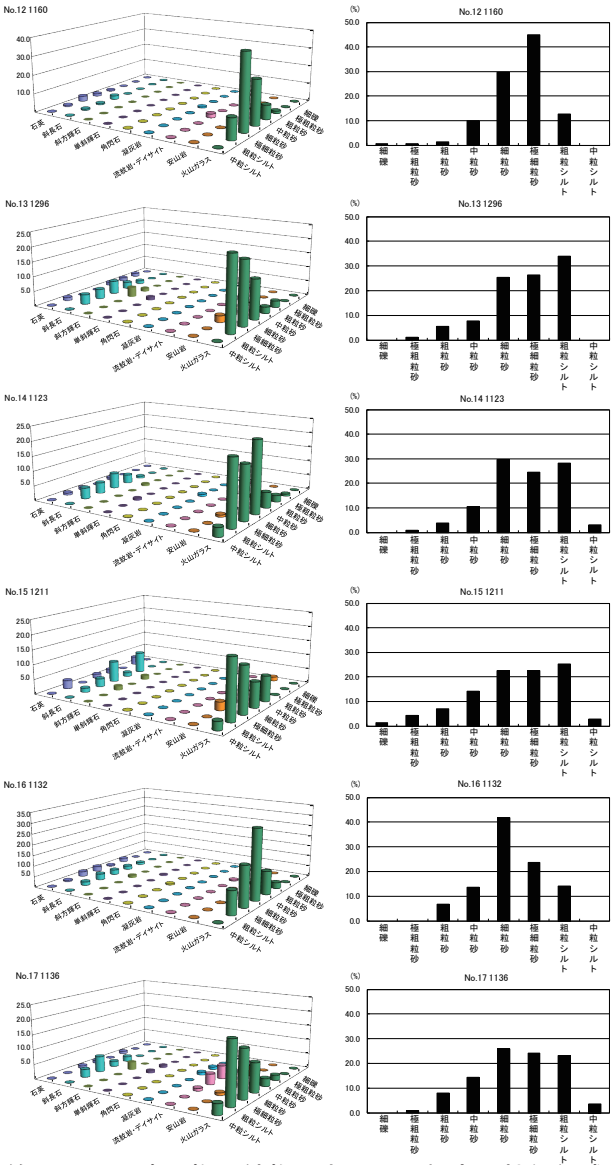
結果を第 39 表に示す。ここでは試料間の組成を比較する方法として，以下に示す元素を選択し，それらの値を縦軸・横軸とした散布図を作成した。

１）化学組成中で最も主要な元素（SiO2，Al2O3）

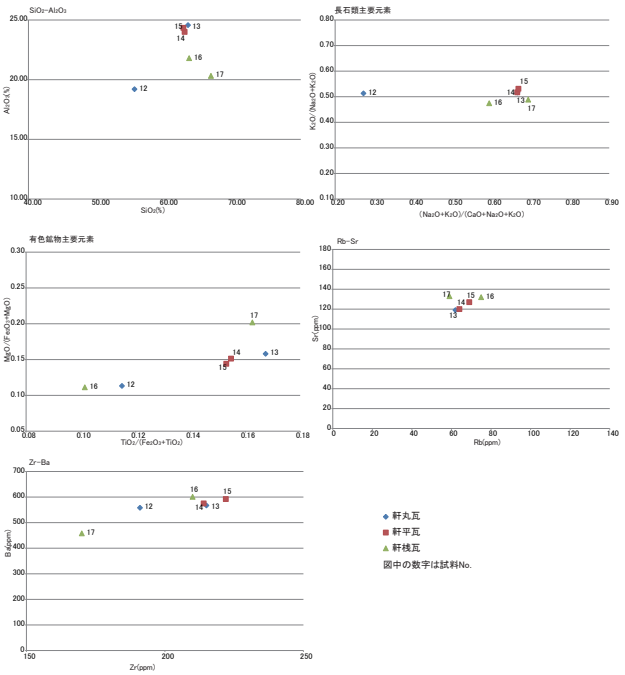
本図では，鉱物や岩石および粘土を構成する化学組成の中で最も主要な元素である SiO2 と Al2O3 を選択し，これらを横軸と縦軸とした散布図を作成した。

２）長石類主要元素（CaO，Na2O，K2O）

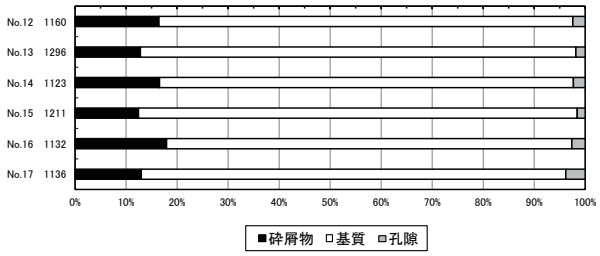
粘土の母材を考える上で長石類（主にカリ長石，斜長石）の種類構成は重要である。このことから，本図では，指標として長石類の主要元素である CaO，Na2O，K2O の 3 者を選択し，長石全体におけるアルカリ長石およびカ



第 141 図　砕屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成



第 142 図　胎土化学組成散布図



第 143 図　砕屑物・基質・孔隙の割合

第 39 表　蛍光 X 線定量測定条件

測定元素	測定スペクトル	1次フィルタ	アッテネータ	スリット	分光結晶	検出器	PHA		角度(deg)			計測時間(s)	
							LL	UL	Peak	+BG	-BG	Peak	BG
SiO_2	Si-Kα	OUT	OUT	S4	PET	PC	120	300	109.030	105.00	113.00	40	20
TiO_2	Ti-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	80	340	86.140	84.50	88.50	60	60
Al_2O_3	Al-Kα	OUT	OUT	S4	PET	PC	110	300	144.770	138.00	–	40	20
Fe_2O_3	Fe-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	90	320	57.494	55.50	60.00	40	20
MnO	Mn-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	90	20	62.966	62.00	63.68	60	20
MgO	Mg-Kα	OUT	OUT	S4	RX25	PC	110	420	39.596	37.00-37.50 (0.10step)	41.50-42.50 (0.20step)	60	20
CaO	Ca-Kα	OUT	OUT	S4	LIF(200)	PC	120	290	113.124	110.20	115.90	40	20
Na_2O	Na-Kα	OUT	OUT	S4	RX25	PC	120	300	48.134	45.90	50.30	60	20
K_2O	K-Kα	OUT	OUT	S4	LIF(200)	PC	120	280	136.674	–	142.00	40	20
P_2O_5	P-Kα	OUT	OUT	S4	GE	PC	150	270	141.096	138.10	143.20	60	20
Rb	Rb-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	26.598	25.60-25.80 (0.10step)	27.06-27.14 (0.04step)	120	40
Sr	Sr-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	25.134	24.40-24.70 (0.10step)	25.60-25.80 (0.10step)	120	40
Y	Y-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	23.758	23.04-23.16 (0.06step)	24.30-24.50 (0.10step)	120	40
Zr	Zr-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	310	22.536	22.16	23.04	120	60
Ba	Ba-Lα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	290	87.164	84.50	88.50	120	60

リ長石の割合を定性的に見る。実際には，長石類全体におけるアルカリ長石の割合（Na20 ＋ K20）/（CaO ＋ Na20 ＋ K20）を横軸とし，アルカリ長石におけるカリ長石の割合 K20/（Na20 ＋ K20）を縦軸とする。

３）有色鉱物主要元素（Ti02，Fe203，MgO）

本図では，輝石類や黒雲母，角閃石などの有色鉱物において，その特性を決める上で重要な元素である Ti02，Fe203，MgO を選択し，Fe203 を分母とした Ti02，MgO の割合を見る。

第 40 表　薄片観察結果

（遺物番号）試料No.	砂粒区分		砂粒の種類構成														合計
			鉱物片								岩石片					その他	
			石英	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	軽石	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	火山ガラス		
No.12 (1160)	砂	細礫									1						1
		極粗粒砂									1						1
		粗粒砂														2	2
		中粒砂	1						1			1				11	14
		細粒砂	2	3									3			34	42
		極細粒砂	4	1												59	64
		粗粒シルト	1	1												16	18
		中粒シルト															0
	基質																700
	孔隙																21
	備考		基質は火山灰質で非晶質な粘土と炭酸塩鉱物から構成される。火山ガラスはバブルウォール型が主体で、軽石型も混じる。角閃石あり。														
No.13 (1296)	砂	細礫															0
		極粗粒砂	1														1
		粗粒砂	1	1									1			2	5
		中粒砂	1	2	1									1		2	7
		細粒砂		4	3	1								3		12	23
		極細粒砂		3										2		19	24
		粗粒シルト	1	3						5						22	31
		中粒シルト															0
	基質																607
	孔隙																13
	備考		基質は火山灰質で非晶質な粘土から構成される。火山ガラスはバブルウォール型が主体で、軽石型も混じる。														
No.14 (1123)	砂	細礫															0
		極粗粒砂														1	1
		粗粒砂		1										1		3	5
		中粒砂	1	4	1							1				7	14
		細粒砂		7										1		32	40
		極細粒砂	1	5		1				1				1		24	33
		粗粒シルト	1	5						3						29	38
		中粒シルト														4	4
	基質																661
	孔隙																19
	備考		基質は火山灰質で非晶質な粘土から構成される。火山ガラスはバブルウォール型が主体で、軽石型も混じる。														
No.15 (1211)	砂	細礫												1			1
		極粗粒砂	2										1				3
		粗粒砂		5													5
		中粒砂	1	1	1									1		6	10
		細粒砂	1	5										4		6	16
		極細粒砂		2	1									2		11	16
		粗粒シルト	2	1						1						14	18
		中粒シルト														2	2
	基質																491
	孔隙																9
	備考		基質は火山灰質で非晶質な粘土から構成される。火山ガラスはバブルウォール型が主体で、軽石型も混じる。														

（遺物番号）試料No.	砂粒区分		砂粒の種類構成														合計
			鉱物片								岩石片					その他	
			石英	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	軽石	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	火山ガラス		
No.16 (1132)	砂	細礫															0
		極粗粒砂															0
		粗粒砂	3	2									1	1	5	12
		中粒砂	1	3		1									19	24
		細粒砂	4	4	2		1							6	57	74
		極細粒砂	4	5											33	42
		粗粒シルト	1	3				1		1					19	25
		中粒シルト															0
	基質																784
	孔隙																26
	備考		基質は火山灰質で非晶質な粘土から構成される。火山ガラスはバブルウォール型が主体で、軽石型も混じる。														
No.17 (1136)	砂	細礫															0
		極粗粒砂									1						1
		粗粒砂	1									1	1	4	2		9
		中粒砂		2		1						1	5	4	3		16
		細粒砂	1	2	3	1							4	7	11		29
		極細粒砂	1	6									1	1	18		27
		粗粒シルト		3											23		26
		中粒シルト													4		4
	基質																718
	孔隙																33
	備考		基質は火山灰質で非晶質な粘土から構成される。火山ガラスはバブルウォール型が主体で、軽石型も混じる。														

４）微量元素（Rb，Sr，Zr，Ba）

各微量元素を選択する。組み合わせは，Rb-Sr と Zr-Ba とする。これら 4 元素は，ほとんどの珪酸塩鉱物中に含まれており，Ca や Na などの元素と挙動を共にすることから，鉱物組成にも連動し，胎土の特性を把握する上で有効な微量元素である。

以上述べた視点による 5 種類の散布図を第 142 図に示す。薄片観察では 6 点ともに火山ガラスを多く含むという共通性が認められたが，化学組成では，6 点の試料間の位置関係により，試料間で化学組成が有意に異なることが看取される。

6 点の試料のうち，試料 No. 13，14，15 の 3 点はいずれの図においても互いに近接した位置にある。これに対して試料 No. 12 はいずれの図においても他の試料からは大きく離れた位置にある。特に Rb の値は突出して高いため，Rb-Sr の散布図には入れていない。また，試料 No. 16 と 17 も他の試料からは離れた位置にあり，かつ試料 No. 16 と 17 が近接しているわけでもない。

４．考察

これまでの報告でも述べてきたように，瓦胎土中の砂粒における鉱物片および岩石片の種類構成は，瓦の材料となった砂や粘土などの堆積物が採取された場所の地質学的背景を示唆している。今回の 6 点の試料の胎土の第一の特徴は，多量に含まれる火山ガラスである。火山ガラスの形態がバブル型を主体とすることと鹿児島城の立地を考慮すれば，その由来は，鹿児島県に広く分布する火砕流堆積物いわゆるシラス（鹿児島県，1990）である可能性が高い。さらに，試料 No. 12 を除く 5 点の試料では，斜長石の比較的多いことや輝石類を含むこと，流紋岩・デイサイトや安山岩を含むことなどからも，火山ガラスがシラスに由来することが示唆される。

試料 No. 12 についても，多量に含まれる火山ガラスは，他の試料と同様にバブル型を主体とすることから，シラスに由来すると考えられる。ただし，薄片観察では基質に炭酸塩鉱物が認められ，また，化学組成では他の試料とはカルシウムや Sr の含有量において大きく異なることが指摘された。基質中の炭酸塩鉱物や胎土中のカルシウムの由来については，現時点では特定することはできないが，一般的には，岩石ならば石灰岩，未固結の砕屑物ならばサンゴや貝殻などがその由来としてあげることができる。シラス由来の火山ガラスと共伴することから，石灰岩に由来する可能性は低いと考えられる。想定される地質学的背景は，例えばシラスの下位に堆積する貝層あるいはサンゴ層が深い谷底に露出しているような場所である。鹿児島市周辺では，鹿児島県の文化財として指定されている吉田貝化石層などの例が知られている。

これまでの鹿児島城跡出土瓦の胎土分析では，比較的

多数の試料に認められてきた火山ガラスを多く含む胎土であるが，地質学的なスケールにおいても，背景の異なる複数の地域の堆積物に由来する可能性が高いと判断された。今後のさらなる分析事例の蓄積と検討が必要であろう。

参考文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-110.

中村純（1974）イネ科花粉について，とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」．日本第四紀学会，p.3-20.

中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と暦年代較正．環境考古学マニュアル．同成社，p.301-322.

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

Paula J Reimer et al.,（2020）The IntCal 20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 kcal BP). Radiocarbon, 62(4), p.1-33,

井上曉子・中根総子・松本 諒・村串まどか・新井沙季・中井 泉（2020）薩摩切子の技法・様式と化学組成．日本文化財科学会第37回大会研究発表要旨集，p.164-165.

肥塚隆保（1997）日本で出土した古代ガラスの歴史的変遷に関する科学的研究．132p，東京藝術大学博士学位論文.

中井 泉・沼子千弥・細野秀雄・山崎一雄（1999）薩摩切子の研究―銅赤ガラスの赤色の起源について．日本文化財科学会第16回大会要旨集，p.24-25.

中井 泉・井上曉子・松本 諒・村串まどか・中根総子（2020）化学組成から見た薩摩切子．日本文化財科学会第37回大会研究発表要旨集，p.86-87.

作花済夫・境野照雄・高橋克明編（1975）ガラスハンドブック．1072p，朝倉書店.

棚橋淳二（1989）江戸時代の技法によるガラス素地の製造．松蔭女子学院大学研究紀要，31，p.15-66.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，p.73-88.

地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）増補改訂 地学事典．1612p，平凡社.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1-20.

町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス．336p，東京大学出版会.

伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学．出土木製品用材データベース．海青社，449p.

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．文永堂出版，290p.

島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，296p.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史．植生史研究特別１号．植生史研究会，242p.

鹿児島県地質図編集委員会，1990，鹿児島県地質図 縮尺10万分の1．鹿児島県．

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高，1999，瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－．日本文化財科学会第16回大会発表要旨集，120-121.

第Ⅴ章　総括

第１節　絵図、古写真にみる本丸，外御庭（第144図～146図）

本節では，本丸跡と外御庭跡の各遺構に関連する文献・古写真を時代ごとにまとめ，その記載内容を示す。

（１）絵図（以下、絵図①～⑩）

①寛文10（1670）年「薩藩御城下絵図」

鹿児島城（上山城）を背にして，北側曲輪を「大隅守殿居宅」，南側曲輪を「薩摩守殿居宅」としている。本丸・二之丸の記載はない。ただし，「鹿児島城」の記載は，城山に書かれており，城の中心が城山だったことがうかがえる。堀は東側のみで，薩摩守殿居宅の東堀側に面して北から多聞櫓，御楼門，塀，御角櫓が描かれている。北側堀には，窓３か所の多聞櫓か塀があり，後の北御門は描かれていない。北御門の土橋も描かれておらず，山裾と多聞櫓か塀の間に出入り部がみられる。

②元禄９（1696）年「鹿児島城絵図控」

③正徳３（1713）年「　　」

④宝暦６（1756）年「薩摩国鹿児島城絵図」

絵図②では北側曲輪を「居所」，南側曲輪を「修理大夫居所」としている。絵図③では北側曲輪が「薩摩守殿居宅」，南側曲輪が「嫡子部屋住之居」としている。絵図④では，北側曲輪に「又三郎居宅」，南側曲輪に「嫡子部屋栖之内居宅当分大隅守罷居候」とある。絵図②・④では，本丸・二之丸は城山山頂に，大手口は城山の麓にあり，城山が城の中心である，という意識がみえる。

堀は北・東・本丸南側にある。本丸南側の堀は，山手で２回折れている。堀の前面には土塀を乗せた閉塞石垣が描かれている。石垣は前面に描かれ，建物は御楼門，唐御門，御角櫓，本丸跡東側石垣に面した御兵具所の位置に多聞櫓，櫓門（北門）と御能方・御買物所・御進物蔵の位置には多聞櫓が描かれる。この時点では，本丸跡北側石垣に面した御兵具所跡は塀である。

これらの絵図は，元禄９年の大火で燃えた建物を描いた絵図③を元にして描かれている。元禄９年の大火後は，本丸の建物は建て替えられており，絵図③・④の絵図とは合致しない可能性がある。

⑤文政５（1822）年「文政五年鹿児島城絵図」

絵図④と絵図⑤の間の天明７（1787）年以降は，二之丸が薩摩藩第８代藩主島津重豪によって整備拡大が図られ，寛政４（1792）年に移徒の儀が行われる等，中心を御下屋敷門に移している。また，中心が移ったことで，それまでの二之丸御門を矢来御門，御台所御門を両口御門へと呼称を改めている。二之丸は，島津重豪による二之丸殿舎造営により明確にされ，その後の絵図の記載につながっていくものと考えられる。

絵図⑤では，城山山頂の曲輪は描かれている。本丸南側の堀の２回の折れがみられなくなり，北御門が，北側の多聞櫓から独立して描かれる。また，御兵具所の本丸跡北側石垣に面した部分は塀のままのようにみえる。

⑥天保14（1843）年「天保年間鹿児島城下絵図」

北側曲輪が「御本丸」，南側曲輪に「二之丸」と記されており，山城部には名称の記載がない。この段階では既に，城の中心は認識の上でも麓の館部分に移ったと考えられる。堀は，東・北側にある。外御庭部分は木が描かれ，本丸南側の堀は描かれていない。多聞櫓が御楼門から北御門まで延び，北御門は，東西の多聞櫓と一体となった建物として描かれる。

⑦明治６（1873）年「鹿児島屋形及びその周辺図」

⑧明治６（1873）年「鹿児島城本丸殿舎配置図」

本丸は，山を背に堀に囲まれた曲輪にあたるが，二之丸については明瞭な境界を示すものがない。ただし，二之丸には「御台所」と「下屋敷」があり対内的公称であったと考えられる。堀は北・東・南にある。本丸南側堀は２度の折れがなくなって短くなり，先に階段が描かれている。絵図⑦では，御楼門跡南側石垣周辺に築山が描かれる。絵図⑧では，二之丸南端には，御勘定奉所，代官所，御宗門建物，御楼門，唐御門，御角櫓，北及び東側の御兵具所，北御門，御能方・御買物所・御進物蔵，御納戸，御納戸長屋が図化されている。これらの配置は，昭和53・54年度と今回の発掘調査で確認された遺構配置とほぼ同じである。

⑨明治40（1907）年頃「第七高等学校造士館全図」

本丸は明治６（1873）年，二之丸は明治10（1877）年の火災により焼失している。その後，明治17（1884）年に鹿児島県立尋常中学校造士館，明治34（1901）年に官立第七高等学校造士館等が設立されている。御楼門も含めた建物は焼けているため描かれていない。また，外御庭の堀も明治35（1902）年に埋められているため，描かれていない。ただし，この頃は，天保年間（1830～1843年）以降に造営された御庭の築山や御池が残っている。

⑩昭和11年（1936）年『行幸記念誌』附図

昭和10（1935）年には，昭和天皇による西国巡幸の一環として鹿児島への行幸があり，グラウンドの拡張や観客スタンド建設等の対策が行われている。二之丸と本丸の間にあった石垣はなくなっている。昭和52年度の発掘調査では，このグラウンドの拡張部分では遺構は確認されていない。この時に石垣と本丸の一部が削平されたためと考えられる。また，この頃にはプールが建設され，御庭はなくなっている。

（２）古写真（第147図，以下古写真①～⑥）

①明治５（1872）年　島津御本丸前面景

②明治５（1873）年　明治初年の鶴丸城

③明治５(1873)年　『旧鹿児島写真』「鶴丸城　北ノ御門」

絵図①は手前から御兵具所（多聞櫓），御楼門，塀，御角櫓，絵図②は御楼門正面と御角櫓，絵図③は御兵具所（多聞櫓）が写っている。御楼門手前には，段差があり，現在の国道10号よりも南側は，一段低くなっており，写真では，御楼門は斜め下から見上げるような角度で写っている。一段段があることで，石垣は現在よりも高く見えたと考えられる。また，御楼門前と外御庭堀の閉塞石垣のみにある本丸東堀二面下の石垣下部にある排水口は，見えないようになっている。

第２節　近世の遺構（第148図・第149図）

各地区で確認された遺構の詳細，歴史的環境については第Ⅲ章にゆずり，本節では，発掘調査成果と絵図・古写真の変遷との比較をとおして，近世遺構の位置付けを行う。

（１）今回確認された遺構の時期

遺構は，絵図⑦と絵図⑧に描かれた建物配置とほぼ一致する形で確認できた。

今回の調査では，石垣背面の状況及び石垣周辺の遺構の確認を目的としているため，掘削は一部を除き基本的には近代以降の造成土を取り除き，遺構は検出及び部分調査に止めている。そのため，今回確認した遺構は，本丸は明治６（1873）年，外御庭は明治10（1877）年に焼失した際の遺構を確認していると考えられる。

①本丸跡の近世の遺構面（基本土層Ⅳ層）の形成時期

鹿児島城は，度々火災に見舞われているが，特に，元禄９（1696）年の大火は鹿児島城に大きな影響を及ぼした。『鹿児島県史料　旧記雑録（追録）』1-2614では，「鹿児島上濱町で出火し城まで類焼。居所・櫓・塀・門・橋が焼失，石垣も焼け崩れる。石垣の築直し，楼門の新築，塀・橋の修復許可」とあり，大きな被害を受けたことがわかる。その被害箇所は，絵図②に詳細に書かれている。『鹿大玉里文庫，「古記」-宝永４年４月18日条』では，「本丸新作事終了。御座所を御下屋敷より本丸へ移す」とあり，宝永４（1707）年になってようやく本丸の作事が終わっている。鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）では，焼土を多量に含むこの時の火災の片付け層が確認され，被熱した遺物が出土した（鹿児島県立埋蔵文化財センター2021）。石垣や建物といった構築物を含めて本丸は，この火災により大きく変化したと考えられる。今回の調査では，近世の遺構面より上の造成土や遺構の埋土から出土する遺物のほとんどが18世紀以降のものであること，御角櫓で遺構面より地下に潜る排水溝③・④確認のため掘り下げた，遺構面（Ⅳ層）より下位の造成土中から被熱した遺物を含む17世紀代の遺物が出土していることから，遺構面（基本土層Ⅳ層）と大半の遺構は，元禄９（1696）年の大火以降のものであると考えられる。また，天保年間（1830～1843）年以降の御庭の造成によって排水溝が付け替えられているなど，遺構面は混成を通じてその後の建て替えの際には維持されていたようである。

②本丸跡の元禄９（1696）年に大火以前の遺構

部分的にではあるが，元禄９（1696）年の火災以前の遺構が確認された。北御門跡周辺石垣修復調査区では，17世紀代に遡ると考えられる石垣構築前段階の堀が確認された。本丸北堀は，本来は現在のものよりも浅かったと考えられる。北御門跡石垣周辺調査区で確認された，本丸跡北側石垣に沿う塀の雨落ち溝と考えられる排水溝１（絵図②～④の多聞櫓になる前の塀），53トレンチの不明遺構（石列）と54トレンチの不明遺構①・②もこの遺構である可能性がある。これらの遺構は，次の時期の遺構とあまり変わらない標高で確認されていることから，石垣と遺構面の高さは，さほど変わっていないようである。

②本丸跡の元禄９（1696）年の大火～天保年間（1830～1843）以降の御庭造営以前の遺構

確認した近世の遺構面（基本土層Ⅳ層）は，この時期に造成されたと考えられる。そのため，昭和53・54年度に確認された遺構を含めて，各地点の排水溝や御進物蔵，御兵具所（本丸跡北側石垣から東側石垣までＬ字に曲がる多聞櫓），御角櫓跡の埋設切石積遺構，能舞台の橋掛り跡など本丸跡で確認された遺構の大半がこの時期のものであると考えられる。遺構面が造成されたのは元禄９(1696)年の大火直後と考えられるが，享保20(1735)年には，御角櫓が「島津継豊の鹿児島の居宅内にある櫓に虫が付いて危ないため，材木の取替と修補を願い出る」（『鹿児島県史料　旧記雑録（追録）』4-784）として建て替えられている。また，天明７（1787）年頃からの第８代薩摩藩主島津重豪による二之丸改造以降，文化７(1810)年の御楼門橋の石橋への立て替え，天保14(1843)年に終了する御楼門の立て替えなど，城内の整備が進んでおり，この時期以降に整備された遺構も含まれる可能性がある。

③天保年間（1830～1843）以降の御庭造営以後の遺構

御庭（築山・小池・池）が造成される。それに伴い，御楼門跡南側石垣周辺の南北方向の排水溝が，それまで御角櫓跡の排水溝②に向かって直進していたものから，37トレンチで築山西側を巡って御角櫓跡の排水溝③に向かうように曲げられている。この際，御角櫓跡の雨落ち溝である排水溝①が付け替えられ，御角櫓跡の入り口も排水溝②を渡り石で渡るものから排水溝①をまたぐようになる。また，御楼門跡南側石垣周辺の41トレンチでも東西方向の排水溝を途中に弁を設けて堰き止め，付け替えられた南北方向の排水溝に排水が向かうように改築されている。また，御角櫓跡でも，排水溝⑤が壊され，その排水口部分を利用して排水溝⑥に付け替えられている。

以上，本丸跡では少なくとも３時期以上の遺構が確認

された。各遺構の詳細な時期やさらなる下層遺構の確認については今後の課題である。

（２）石垣の背面構造

今回は，各調査区で石垣の背面構造を確認した。本丸跡対岸の北御門跡石垣修復調査区では，それぞれ異なる石垣の背面構造とその構築過程を確認した。この地区では，石垣構築前段階の堀上面から掘り込み，円礫の裏込めをもち垂直に立ち上がる布崩し積み石垣（石垣Ａ）を構築し，裏込めをもたない傾斜する布崩し積み石垣（石垣Ｂ）を築いていることが確認された。その後，北御門跡土橋側には，谷崩し積みの石垣（石垣Ｄ）が築かれ，石垣Ａ・Ｂと接合されている。

本丸跡の石垣背面構造は，背後の建物構造によっても異なるが，基本的には石垣背面に２ｍ～３ｍの裏込めが充填され，その背後には排水溝が築かれる。御兵具所の一部が確認された北御門跡石垣周辺地区では，背後の排水溝やその内側の石列が裏込めの抑えとしても機能し，石列は建物石垣内側の基礎としても利用されている。また，御楼門跡周辺では，裏込めの上面には漆喰面があり，裏込めへの水の浸透を防いでいた。石垣天端石の上には，地覆石が載っておりその上には枘穴が穿たれる。この地覆石が，塀や御兵具所，御角櫓などの建物の石垣側の基礎にもなっている。

本丸跡内の排水が集中し，御庭の築山の土圧がかかる本丸跡南側石垣周辺（御角櫓跡調査区と御角櫓跡西側石垣周辺調査区）では，石垣を支えるために，裏込めを充填した２段の階段状石積みである埋設切石積み遺構が築かれていた。

（３）御進物蔵，御兵具所

御進物蔵跡では，52 トレンチ -S で，石垣と併行する石列と排水溝を確認した。この石列は，御進物蔵外側の礎石列である石列，建物雨落ち溝の役割としての役割ももつ排水溝であったと考えられる。石垣天端から石列までの幅は約６ｍであったことから，これが絵図⑦・⑧の御能方，御買物所，御進物蔵が入る多聞櫓型式の建物（調査区は御進物蔵）の幅であったと考えられる。

北御門跡石垣周辺調査区と御兵具所跡では，本丸跡北側石垣から東側石垣までＬ字に曲がる多聞櫓型式の建物である御兵具所が確認された。北御門跡石垣周辺調査区では，石垣背面から石列が，その外側には排水溝１が確認された。これらは，御兵具所外側の礎石列である石列，建物雨落ち溝の役割としての役割ももつ排水溝であったと考えられる。石垣天端から石列までの幅は約６ｍであったことから，これが御兵具所の建物幅であったと考えられる。北御門を挟んで同規模の多聞櫓型式の建物が東西に建っていたことになる。

本丸跡東側石垣に面した御兵具所の遺構は，平成 27 年度の調査で御兵具所の南端部分にあたる布基礎上の基礎石列と坪地業に載った礎石，その周囲の排水溝が確認されている（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2020）。今回は，御兵具所跡の 50 トレンチで建物内部の布地業が確認され，51 トレンチで建物基礎の坪地業と建物外側の基礎である石列，建物外側を巡る排水溝が確認された。石垣天端から石列までの幅は約８ｍであり，この幅は，平成 27 年度確認された御兵具所跡の石垣天端から石列までの幅と同じである。この長さが御兵具所の幅であると考えられる。北御門跡周辺調査区で確認された御兵具所の幅は約６ｍであり，本丸跡東側石垣側の多聞櫓型式の建物と梁桁の幅は異なっている。

御兵具所は，古写真③でも，東側の建物が北側建物よりも大きいようにみえる。また，その写真では，東側の建物外壁は海鼠瓦で荘厳されているが，北側建物の外壁には海鼠瓦がみられない。本丸東堀から北堀に曲がる地点には，多くの絵図で塀や番所が描かれており，本丸跡北側石垣は本来城下からあまりみえなかった可能性がある。鹿児島城は，城下からはみえない場所よりも御楼門が建つ城としての正面を重視していたことが窺える。

（４）庭園遺構

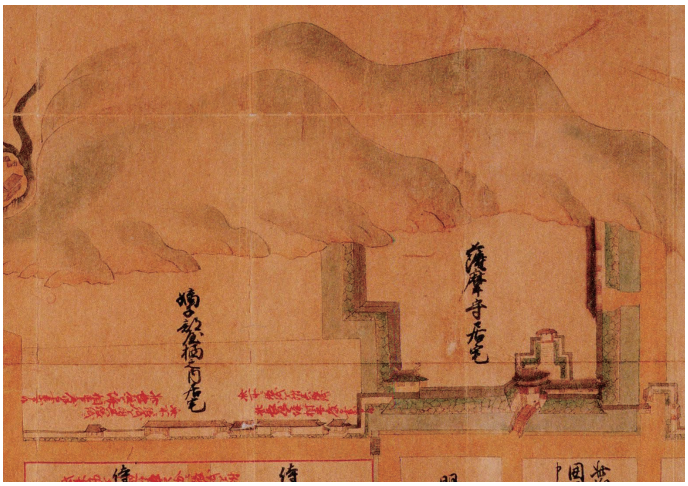
御楼門跡南側石垣周辺の 41 トレンチ周辺では，古写真⑤では池と築山が写り，絵図⑧では御池と書かれている。明治初期の古写真図④・⑥には，奥御所院や麒麟之間，御池や築山がある庭園が描かれている。麒麟之間の奥の築山には，滝状の落水が写っておりその前面には落水の水受けに用いられた水溜（滝壷）と思われる小池が写っている。この庭園は，昭和３（1928）年「薩藩庭園調査覚書」によると，天保年間（1830 ～ 1843）以降に造営されたと考えられる。

41 トレンチ東では御池の築山を，41 トレンチ西では池を確認した。築山は，範囲は不明だが，地表面から 1.8m 以上の高さがあり，その周囲には荘厳と土留めの意味をもつ立石が巡っていた。古写真で築山前面に写る滝状の落水は，石管水道で高枡に水を引き，最高部の大悲水の石碑から水を流しこみ，舌状に平石を置き落水を造っていること，一旦その前面の小池に水を溜め，そこから御池に水を注ぎ込む施設であったことを確認した。また，42 トレンチ西では，御池と考えられる池の床面と池に立っていた立石の抜き跡を確認した。ただし，絵図⑨と遺構の位置を重ね合わせた図では，御池とこの遺構の位置が合わない。絵図⑧では，御池はこの図よりも大きく描かれ，形状も異なることから，この池は，滝状の落水から水を受ける小池の一部であったか，御池が御庭造営時よりも狭くなっており，狭くなる以前の御池の一部である可能性がある。

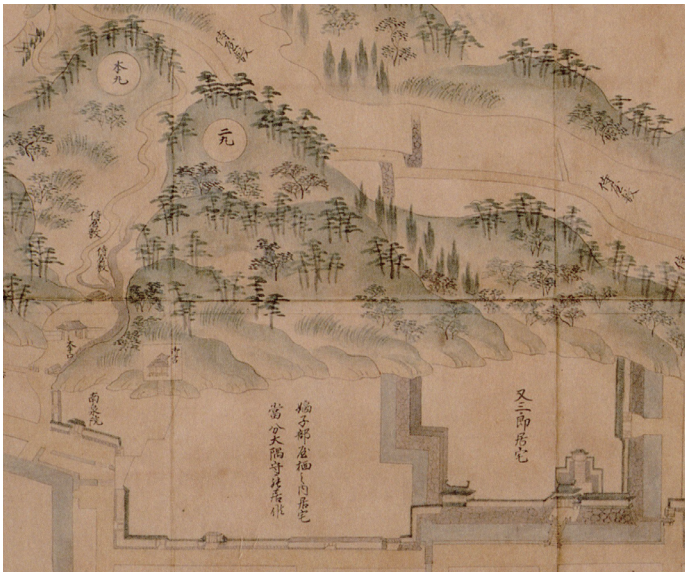
築山・御池は，鹿児島城廃城後もそのまま残っていた（第 149 図）。昭和初期，第七高等学校プール建設の際に御池は壊され，御池の石の一部が鹿児島市の公会堂（現

①寛政10（1670）年頃
「薩藩御城下絵図（鹿児島）」（部分）鹿児島県立図書館蔵

②元禄９（1696）年
「鹿児島城絵図控」（部分）東京大学史料編纂所蔵



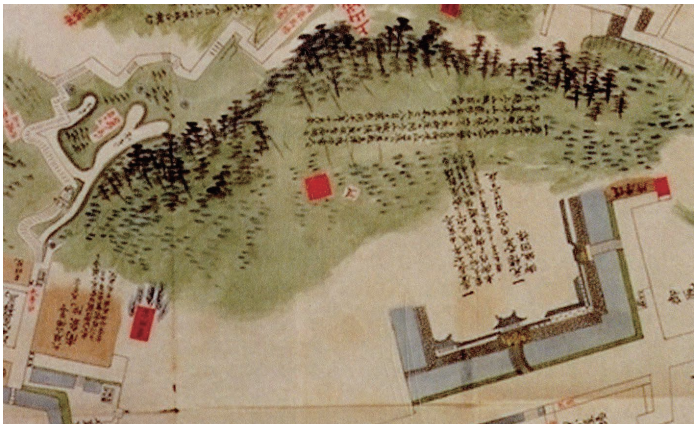
③正徳３（1713）年
「鹿児島城絵図差出一件」（部分）東京大学史料編纂所蔵



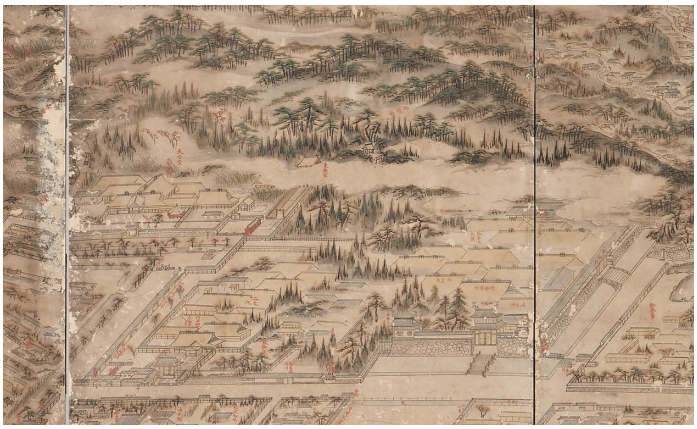
④宝暦６（1756）年
「薩摩国鹿児島城絵図」（部分）東京大学史料編纂所蔵

第 144 図　鹿児島城跡　絵図①

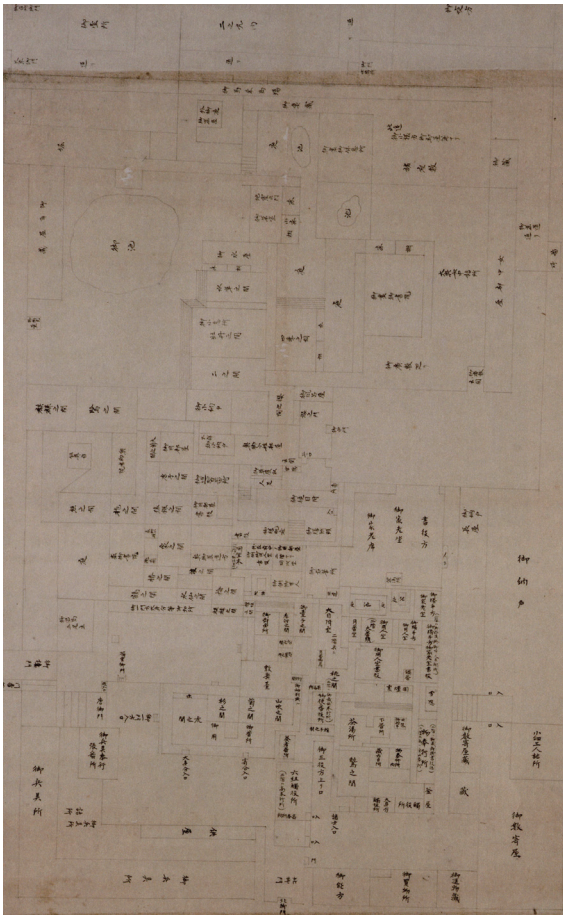
⑦明治６（1873）年「鹿児島屋形及びその周辺図」（部分）鹿児島市立美術館蔵



⑤文政５（1822）年　玉里文庫・番外の部
「文政五年鹿児島城絵図」（部分）鹿児島大学附属図書館蔵

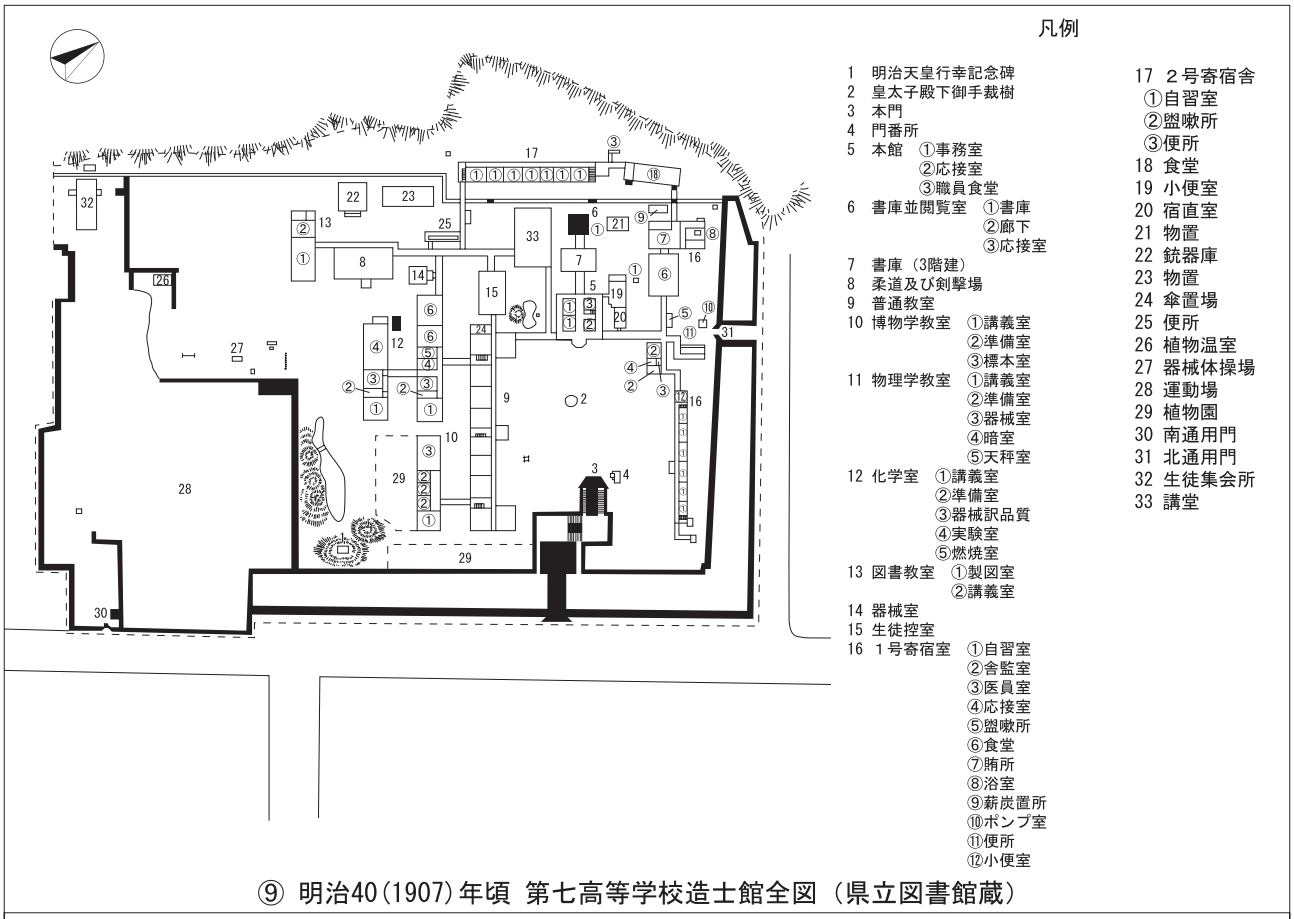


⑥天保14（1843）年
「天保年間鹿児島城下絵図」（部分）鹿児島市立美術館蔵

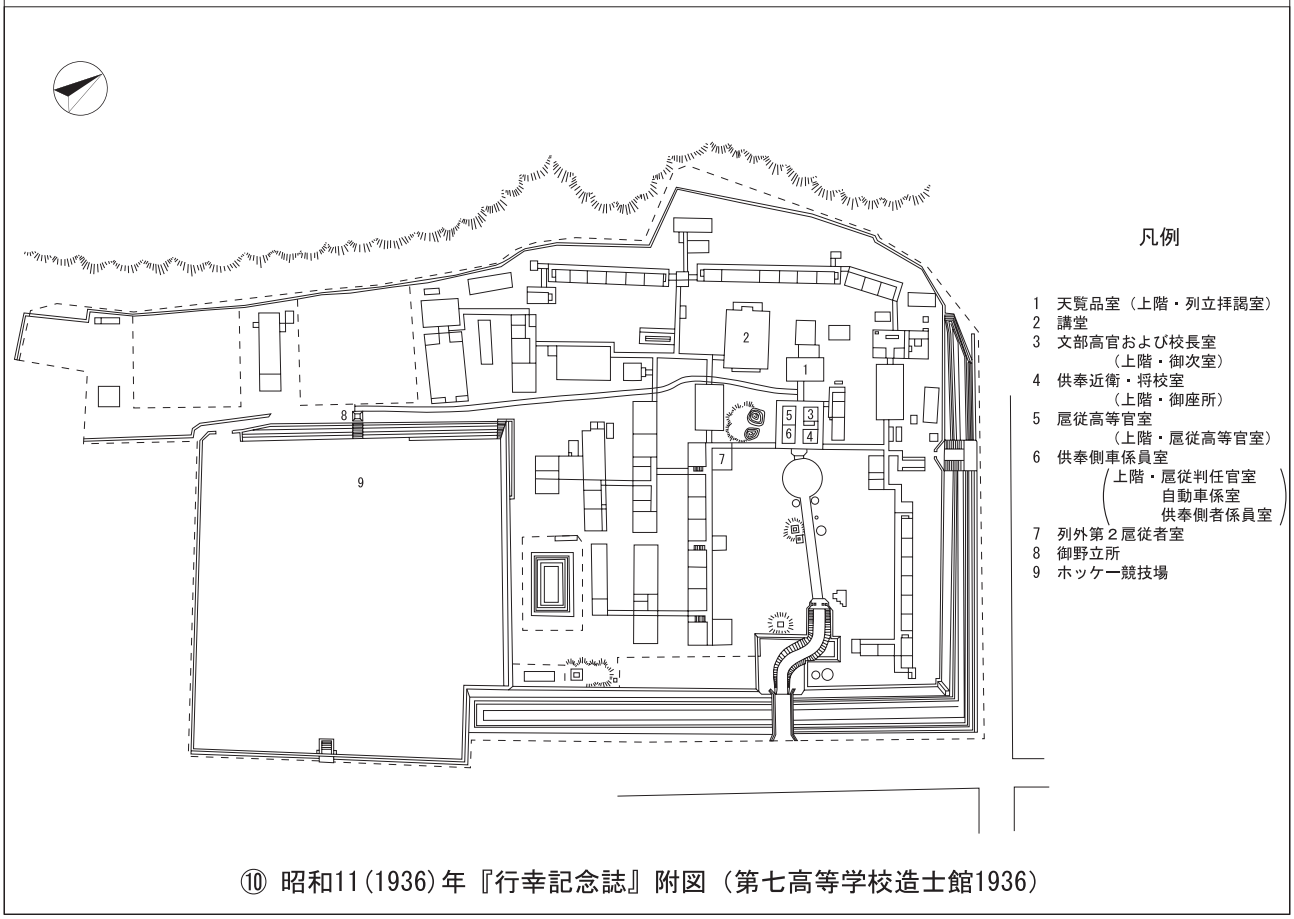


⑧明治６（1873）年
「鹿児島城本丸殿舎配置図」（部分）鹿児島市立美術館蔵

第 145 図　鹿児島城跡　絵図②



⑨ 明治40(1907)年頃 第七高等学校造士館全図（県立図書館蔵）



⑩ 昭和11(1936)年『行幸記念誌』附図（第七高等学校造士館1936）

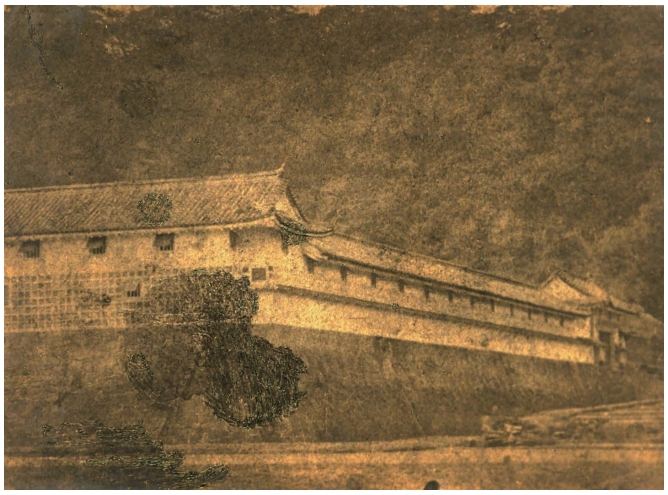
第146図 第七高等学校造士館配置図

①明治５（1872）年　島津御本丸前面景（県立図書館蔵）

④明治５（1872）年　島津御本丸御書院景（県立図書館蔵）

②明治６（1872）年　明治初年の鶴丸城（県立図書館蔵）

⑤明治５（1872）年　島津御本丸池畦景（県立図書館蔵）



③『旧鹿児島写真』「鶴丸城　北ノ御門」
（東京大学史料編纂所蔵）

⑥明治５（1872）年　島津御本丸庭園景（県立図書館蔵）

第 147 図　鹿児島城跡古写真

在の中央公民館）に，大部分は鴨池動物園の庭石として使用された。昭和46(1971）年12月，同園が平川へ移転する際，これらの石材は黎明館の庭園用に鹿児島市から譲渡され，昭和58（1983）年，黎明館西側に移設・復元された。

（５）御角櫓

御角櫓は，本丸南東にあった櫓である。今回の発掘調査で確認された御角櫓跡の遺構は，享保20（1735）年以降に建てられたものと考えられる。古写真②では，石垣と一体になった多層式の櫓であり，本瓦葺きで外面は海鼠瓦で荘厳されている。

平成11年度の発掘調査で，御角櫓跡基礎石列や排水溝が確認されている。今回は，それらの遺構の延長部と新たな遺構が確認された。御角櫓は，固くしまった造成土上に栗石を敷き，その上に長方形の切石を２または３段積み重ねている。切石は石列状に並べられ，その上には漆喰が貼られていた。その外側には犬走りがあり，さらにその外側には建物雨落ちの意味があると考えられる排水溝①が通っていた。平成11年度に確認された基礎石列と今回確認された基礎石列，石垣天端石上の地覆石の枘穴の範囲から御角櫓の建物は，南北が約18.6m，東西が5.6mの規模であったと考えられる。

また，犬走りと雨落ち排水溝が巡らされていることが確認された。犬走り及び雨落溝である排水溝①を含めると，御角櫓の規模は，南北約21.6m，東西約7.2mで，その規模は絵図②に書かれた規模と一致する。この規模は，雨落ち溝が天保年間（1830～43年）以降に御庭ができる以前の排水溝②だった段階でもほとんど変わらない。今回，御角櫓の基礎構造の中央部が失われていることが確認されたが，これは，第七高等学校造士館の建物建設のためである。さらに，軒柱礎石から，御角櫓入り口の位置が確認できた。この入り口については，本来は排水溝②を渡石で渡って入っていたことも確認された。

御角櫓跡では，17世紀代に薩摩焼と呼ばれる薩摩の陶器のうち，竪野系の茶入を中心に高取焼と呼ばれる筑前の陶器や肥後人吉の陶器など，茶陶として用いられたと考えられる多くの陶磁器が出土した。御角櫓跡は，絵図⑧では「御角屋蔵」と書かれており，そうした茶の湯を行うか，茶陶を収納する建物であった可能性もある。周辺は，能舞台や奥御所院，御庭がある藩主の私的空間であったと考えられることから，これらの遺物は上級武士の暮らしぶりを示している。

また，瓦では，牡丹紋軒丸瓦（B種）の出土が他地点と比べて多い。屋根の上部につける鬼瓦や鳥伏間瓦にも牡丹紋を用いていることから，御角櫓に一定数牡丹紋軒丸瓦が用いられた可能性がある。

（６）本丸跡の排水構造

今回は，すべての調査区で排水溝が調査された。また，それらの成果と既存の発掘調査成果と合わせると，鹿児島城本丸の排水構造を確認した。

確認された排水溝は，40cm四方の石材を底石，両側側壁に組み合わせた石組み排水溝である。また，中央部を刳り貫いた長方形石材をつなぎ合わせる石管水道も確認された。排水溝は排水のためのものだが，石管水道は上水道として機能し，その水は上水として使われており，余った水が本丸跡東側石垣の排水溝につながって排水される。

城山側から流れてきた排水は，御進物蔵跡調査区西側の南北方向の排水溝から本丸北堀に排水されている。その水は，土橋のトンネルを通って本丸東堀に向かう。また，60トレンチ付近で確認された排水は，本丸大奥跡西側で確認された排水溝を通って二之丸方向に流れている。城山からは，石管水道も本丸内部に延びており，鷺之間の南側では，高桝によって引き上げられている。石管水道はそのまま東に延びている。

本丸北堀付近では，御進物蔵跡52-S・Nトレンチや北御門跡石垣周辺トレンチの排水は，北御門跡土橋調査区の排水溝に合流し，堀ではなく，そのまま本丸外側に流れる。また，御兵具所跡付近の排水の一部は御楼門側に流れ，御楼門跡枡形，御楼門地下を通って本丸東側に注ぐ。御兵具所の雨落ち溝を兼ねる排水溝の排水は，本丸東堀ではなく，御兵具所の外側を巡り，本丸北堀への排水口から本丸北堀に水を流しながら，最後は北御門跡土橋の排水溝まで流れる。

本丸内部北側の排水は，東西方向の排水溝を通って，本丸東側石垣に沿う南北方向の排水溝に合流する。これらの排水は，御楼門背面の石垣上部で南北方向に分かれ，北側に分かれた排水は，御楼門の枡形内を通り，最後は御楼門の地下を抜けて本丸東堀に注ぐ。南側に分岐した排水は，本丸東堀からは外には排出されず，御楼門跡南側周辺から御角櫓跡の排水口を通って，外御庭に注ぐ。

本丸南側の水は，東西方向の排水溝を通って御楼門跡南側石垣周辺の排水溝に合流するか，本丸跡南側石垣に向かう排水溝に流れ，外御庭跡の堀に合流する。

外御庭跡も堀で二之丸のものと合流した排水は，井堰で水量調節されながら，本丸東堀に排出される。

本丸跡東側石垣，本丸跡南側石垣では排水口は石垣上部にあるが，本丸跡東側石垣は，排水口が石垣下部の堀の水面に近いところしかない。本来この石垣は，城山とは反対側にあることから，最も排水が集中するはずである。しかし，この石垣の目立つところには排水口は設けず，排水は外御庭か北御門土橋側に流している。絵図②～④・⑥・⑦では，北御門側には柵もしくは塀や番所が描かれており，城下町と主要街道が通る本丸東側からはみえなかった可能性がある。また，本丸跡南側石垣は，外御庭の閉塞石垣内側にあり，この石垣の排水口本丸外側からはみえない。さらに，古写真①・②では，本丸東

側堀の下に段差があり,城下町側は一段低くなっている。このことにより，城下町側からは本丸跡東側石垣は現在よりも高く感じられるとともに，石垣下側の排水口はみえない。つまり，城下町から見て正面である本丸跡東側石垣からは，排水を排出する様子は一切見せないようにしており，美観を保つ努力が窺える。

（７）外御庭の堀と近代化事業のための土地利用

現在の県立図書館付近は，当初は二之丸の中心であった。しかし，二之丸の整備を進めた第８代薩摩藩主島津重豪によってその中心が寛政４（1792）年に現在の市立美術館がある南側の御下屋敷に移ったことにより，この地に空地が生まれた。そのため，その空き地を利用して整備されたのが外御庭である。

今回の調査区は，絵図⑦では，「外御庭」と書かれていると同時に堀や蔵が描かれ，絵図⑧では，「堀」と書かれる。この堀は，明治 35（1902）年に埋め立てられている。

外御庭跡は，昭和 52 年度に調査され，社殿，書蔵，外御庭茶屋，溜池とともに，井堰遺構を伴う堀の南側が確認された。堀は，長さ約 15m，高さ３m（内犬走状石段１m),奥行き３m（内犬走状石段１m）の規模であった。

今回の調査では，堀には，塀の台座や本丸・二之丸と本丸東堀を塞ぐ閉塞石垣，水量を調節する井堰が伴うことが確認された。井堰の間を抜けた水は，排水溝を通って本丸東堀に抜けている。今回の調査と昭和 52 年度の調査結果をまとめた図（第 148 図）をみると，外御庭跡の堀は，本来の堀が果たすべき役割である防御，排水機能以外の目的が付加されてと考えられる。井堰や水門によって水を溜め，利用する必要があったこと，階段を設置することで堀に出入りする利便性が高められていること，南に隣接する建物・井戸・螺旋状石畳等の遺構と結びついた一体の行動がとれる場所であったことである。また，井堰遺構と閉塞石垣の積み方が異なることから，井堰遺構は，後世に何らかの目的で新たに造られた可能性がある。二之丸には，嘉永６（1853）年第 11 代薩摩藩主島津斉彬によって庭中池中に「水泳場」が設置されており，上記のことから考えるとこの堀が「水練場」に改造された池であった可能性がある。

この堀は，絵図②～④では，城山から始まり、本丸と二之丸の間を通って，二回折れながら本丸東堀に至っている。しかし，絵図⑤になると，二回折れる堀は，折れ部から南側が地中で途切れ，絵図⑦では，堀は外御庭に中で終わっており，堀の西側には本丸と二之丸を結ぶ階段と門が描かれる。絵図への記載から，18 世紀段階で，元々城山から本丸東堀にあった堀の大部分が埋め立てられ，堀は外御庭の中だけに残ったと考えられる。

昭和 52 年度の調査では，外御庭跡で複数の建物跡が確認されている（鹿児島県教育委員会 1991)。しかし，その時は十分に遺構が検討されておらず，その性格等は不明な部分もあった。

今回は，その建物跡に絵図⑧の施設名を当てはめ，その性格について考察する。

天明５（1785）～寛政４（1792）年に二之丸が山下屋敷に移った後，外御庭は，御台所跡を含め御花園地区と呼ばれた。第 11 代薩摩藩主島津斉彬は，「御茶屋ノ様」と呼ばれ，外御庭御茶屋を生活の拠点としながら，この地区で鍛錬や試作品を製造し，焼き物やガラス製造等はここで試験運用し集成館で発展させるなど，集成館事業の実験を行った。

外御庭には,糒（ほしいい）製造を行った御台所や家臣に訓示をした御稽古所焼き物の実験と新たな釉薬を作って磯窯に資料提供を行う御茶屋，水中訓練をする水泳場などを外御庭御茶屋周辺に整備し，天保通寶や琉球通寶の鋳造実験や蒸餅やビスケット作り，新たな釉薬作り，ガラスの製作等を自ら先導している（徳永 2010)。昭和 52 年度の発掘調査では，大砲の炸裂弾や球弾，銃弾も出土しおり,多種多様な実験場となっていることが窺える。

『鹿児島県史料　市来四郎一玉里島津家資料補遺』では，「二人の役人を付け，建物には，漆喰を敷き詰めた土間もあり，乾燥した軍用の食料年数百石を作り大量に貯えている。(「糒製造ハ御台所ニ於テ製造ス　中略　白木綿ノ袋ニ弐升ツ，ヲ容レ，其尽沸湯に浸シ飯トシ，食用ニ充ツルノ仕掛ケ・・・」とあることから，昭和 52 年度の調査時のレンガ積遺構は，糒作りの焚き窯場と考えられ，石製水槽や大樽等を使用している。

また，昭和 52 年度の調査では，御茶屋の建物跡が外御庭中央で確認され，西側に，井戸跡や排水溝と組合せ，螺鈿形の傾斜した石畳が発見されている。嘉永４(1851) 年市来四郎日記（『鹿児島県史料　市来四郎一玉里島津家資料補遺』）には，「陶磁器ノ製造改良シ玉フ　陶磁器ノ製造ヲ好ミ玉ヒ，御徒然ニハ外御庭御茶屋内ニ製造器ヲ置レ，御手自製アラセラレシコトモアリタリ，特ニ，苗代川又ハ竪野等に製造所奨励セラレ」との記載があり，この場所で陶磁器製造を行っていたことがわかる。また，書庫なども確認されている。

このように，外御庭跡は，第 11 代薩摩藩主島津斉彬が生活拠点とし，日本の近代化を推し進めた実験場であったと考えられる。

（８）能舞台跡橋掛り跡

絵図⑧では，昭和 53・54 年度の調査では確認できなかったが，能舞台があることが記される。

今回の調査では，能舞台跡の橋掛りを確認した。橋掛りは，断面を逆半円形に掘りくぼめ，その上から漆喰を敷き固めるなど，音響効果を意識した構造をしており，全国的に少ない近世の能舞台の構造を明らかにする上で重要な調査成果である。

第３節　鹿児島城跡周辺における近代化について

本節では，鹿児島城の城域（範囲）のうち，主に本丸・二之丸を区画する堀，道（通り）の幅員の変遷に関する資料蒐集を行い，検討した結果を記述する。

１　本丸北堀周辺

(1) はじめに

北御門跡石垣修復工事に伴う発掘調査の結果，本丸北堀の外岸の石垣に関し，布崩し積み石垣（石垣Ａ）以降の積み直しの履歴と，堀幅の変遷について一定の解明をみることができた（第Ⅲ章第３節・第Ⅳ章第１節～第２節参照）。

本丸北堀における堀幅の変遷等の調査成果を補完することを目的として，明治時代以降，近代化の中で作成され，現存する諸記録（絵図・図面・古写真）を蒐集・照合・分析した結果の一部を時系列で列挙する。

(2) 館馬場から北御門，岩崎谷口通り

北御門北側に位置する御厩跡は，明治２（1869）年の薩摩藩医学校とされて以来，基本的に医療機関や教育施設が置かれ続け現在に至っている。御厩跡における土地利用の変遷については，（原口 1981）に詳しい。

御厩と北御門の間を岩崎谷口へ向かう通りは，現在，鹿児島市道城山・草牟田線となり，国道 10 号線との接点は城山入口交差点と名付けられている。

明治初期の古写真「鶴丸城　北ノ御門」（東京大学史料編纂所・鹿児島県歴史・美術センター黎明館蔵）（第 147 図③）には，御兵具所（多聞櫓）から北御門方向が捉えられている。本丸北側の石垣と御厩の間には，北御門へ向かう通りがあり，路面には階段状の構築物を確認できる。なお，本丸北堀に面して土居と考えられる微高な盛り上がりも観察できる。明治５（1872）年の『鹿児島勝景撮影』（撮影匠藤崎直高）に収録された古写真「旧城並操練場」には，写真右端中央に隅欠，御厩の間の通り入口と石塀が捉えられている。これら明治初期における古写真からは，北御門へ向かう通りにはさほど幅員がなく，本丸北堀の堀幅についても現状の堀幅と変わりない状況を看取できる。

明治 34（1901）年，本丸跡に官立第七高等学校造士館が開校する。当時を捉えた古写真（絵葉書：製作年代は明治 33（1900）年以降。複数残存）等から把握できることは，「鶴丸城　北ノ御門」にあった階段状の構築物が見られなくなり，本丸東堀と北堀に面したと考えられる土居部分に植栽が行われている点である。造士館が開校した時点で，北御門に向かう通りの路面に変化が生じていることから，少なくとも明治５（1872）年から明治 34（1901）年造士館開校までの間に通りの改修が行われた可能性がある。なお，明治 32（1899）年の『鹿児島土産』「鹿兒嶋勝景」の項では，明治 29（1896）年 12 月に設立された鹿児島尋常中学校造士館が画稿されており，造士館と市立病院間の通りには階段状の構築物が描かれており，路面が改修された時期の傍証となろう。

大正８（1919）年，近代的な街づくり目的とする「都市計画法」が制定され，大正 12（1923）年には鹿児島市に適用される。この際，第七高等学校造士館から岩崎谷口通りの幅員を 15m とする方針が打ち出されている。通りに鹿児島電気軌道株式会社（現鹿児島市電）による軌道線路敷設工事が計画され，昭和２（1927）年の工事図面「上町線々路平面圖」から推定すると，道路幅員は約 10m であることがわかる（『鐵道省文書　十　地方鐵道及軌道　三　軌道　鹿兒島市營（元鹿児島電気）大正十一年　昭和三年　巻五』）

その後，大正 12（1923）年の「都市計画法」に沿った街づくりは，第二次世界大戦後の昭和 20 年 10 月，鹿児島市が打ち出した「戦災復興計画構想」によって本格化する。第七高等学校造士館（城山交差点）から岩崎谷口を結ぶ道路の幅員はあらためて 15m に決定され『鹿児島市戦災復興誌』（1982　鹿児島市戦災復興誌編集委員会・鹿児島市）ている。しかし，拡幅工事着手まで時間を要しており，昭和 26 年の「上町線七高前停留所勾配変更平面圖」・「同断面図」では，本丸跡（旧第七高等学校造士館）と私学校跡（鹿兒島縣立病院）間の道路幅員は 10.8m のままとなっている。

なお，本丸東堀（御楼門）に面する館馬場通りは，明治６（1873）年に「鹿児島街道」として一等道路に指定され，その後拡幅がはかられていくことになる。

明治 18（1885）年には，東京（日本橋）から鹿児島に達する別路線として第三十八號線の指定を受け，昭和 27 年には一般国道 10 号線に改称されている。

昭和 30 年の国道 10 号線拡幅工事に伴い，国道に面する私学校跡の石塀を北西に後退する工事が行われている。併せて，私学校跡石塀の高さまで，石塀内側の地盤嵩上げも実施され，私学校跡南面の石塀も北側へ後退させる工事が行われている。この結果，幅員 15m とした戦災復興計画（都市計画法）で決定した規格の道路が完成する。第 14 代鹿児島市長勝目清氏の『勝目清回顧録鹿児島市秘話』（1963　南日本新聞社）において，私学校跡の石塀を西へ 13m 後退させたことが述懐されている。後退の規模については，昭和 44 年「旧土地台帳附属地図」（鹿児島地方法務局提供）及び「上町線仮設工事実測平面図」（鹿児島市交通局提供）からも追認できる。城山入口交差点～長田町間の道路幅員は，最狭幅員 13.2m（北御門前）～最大幅員 26.4m（交差点入口）となるが，基本 15m が踏襲されている。

さらに，国道 10 号線と私学校跡間に道路拡幅に伴い，国有地となった土地境界線が確認できる。原図の縮尺は 1200 分の１で，図面上で 11mm ある。メートル法で換算

すると 13m となることから『勝目清回顧録　鹿児島市秘話』の記載と一致する 。

昭和 52 年に西日本新聞社が撮影した空中写真「鹿児島県庁全景」（西日本新聞フォトライブラリー）では，鹿児島県庁の西側に国立南九州中央病院建築に伴い，造成された更地を確認できる。岩崎谷口へ通じる道である市道城山・草牟田線は北側へ拡張されていく状況が看取される。

さらに，昭和 60 年，鹿児島市電上町線の廃線に際して作成された「市営電気軌道（併用区間）移設認可願いについて」に添付された「国道 10 号（城山交差点）」図では，城山交差点の幅員は 25m となっている。

調査成果から 17 世紀以降，本丸北堀の堀幅には大きな変更がなかったことが確認されており，近代以降の諸記録を分析した結果，本丸北堀と御厩を北御門に向かう通りの拡幅は，北側へ向けて行われ続けたことを確認することができた。

２　二之丸南堀周辺

令和２年度に，国指定史跡を目指す発掘調査において興業館（明治 16（1883）年創建）の南側（現在の照國公園敷地）において発掘調査を実施した結果，二之丸長屋の南西端で，長屋に伴うと考えられる排水溝を確認した（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2022）。

調査の目的は，二之丸南堀や南泉院馬場の痕跡を把握することにあった。調査の結果，二之丸南堀に結びつく成果は得られなかったものの，これまで研究者の間で指摘されてきたように，翻って二之丸南堀が調査地点よりもさらに南に位置する可能性を高めることになった。本報告書での成果報告はないが，近代資料調査という視点から，本稿で報告する。調査結果と絵図⑦等の絵図，明治以降に撮影された古写真等の照合を行い，二之丸南堀周辺において把握できた成果について時系列で列挙する。

明治５（1872）年の『鹿児島勝景撮影　撮影匠藤崎直高』（東京国立博物館蔵）の「照國神社之辺　十四」・「照國神社」は，南泉院馬場（現在の照国通り）を捉えた古写真である。左端に二之丸南堀の北面に沿う土塁と木々を確認できる。土塁の側面は，直線的に立ち上がっており，同じく『鹿児島勝景撮影』に収録され，吉野堀に架かる新橋を捉えた古写真「新橋　廿三」撮影匠藤崎直高東京国立博物館蔵）の土塁の形状と特徴が一致する。土塁の側面に腰石が積まれ，同様の構造であったことがわかる。中央左には照國神社（元治元（1864）年創建），中央に鶴峯神社（明治２（1869）年創建），右端に二之丸南端の長屋が捉えられている。なお，両神社の正面には，石造の階段が３か所設置されているが，『照國神社誌』の「明治 36 年川添為博寫」には階段が２か所描かれており相違が認められる。

大正３（1914）年の桜島大噴火時に撮影された古写真「興業館前降灰ノ景」（鹿児島県立博物館蔵）には，降灰の中，旧南泉院馬場（現在の照國大通り）を往来する人々とともに，照國神社正面が撮影されている。写真左端には，明治５（1872）年の「照國神社ノ辺　十四」（『鹿児島勝景撮影』撮影匠藤崎直高）で捉えられていた二之丸南堀や土塁が見当たらないものの，写真左奥に工事中である様子と二之丸南堀が埋め立てられた痕跡を確認することができる。少なくとも大正３（1914）年の時点には，二之丸南堀が照國神社境内の手前まで埋め立てられていたことを確認できる。

照國神社の由来等，関係資料を蒐集して編纂された『照國神社誌』（2005）には，神社境内地の変遷を写した諸図が収録されている。これらの図面に共通する特徴は，二之丸南堀が照國神社正面から南西へ直角に折れる形で描かれていることにある。現在，照國神社正面から大手口方向へ流れる水路は，照國大通りに沿って西北西を向き（現在は暗渠となっている），神社正面から（開渠となって）南西へ向きを変えている。『照國神社誌』の諸図とは，照國神社正面からの方向を異にする。なお，同書「昭和二年境内図」の左下には「旧地濠大正五年二埋立」との添書があり，「水源地と市上水道」の項においても「舊招魂社前お濠は大正５年の埋立なり」の記述をみることができる。二之丸南堀が直角に折れていた点については，絵図⑦に描かれた二之丸南堀の形状とも合致する。

明治 16（1883）年には，二之丸役所曲輪の南端（南泉院馬場の北側）に興業館が建設されている。同年，「第弐回九州沖縄聯合共進會」（共進会：地方博覧会）の展示館としてこけら落としされる。

古写真（絵葉書）「鹿児島勝景　興業館」は，興業館を南東から捉えており，写真右側中央に二之丸南堀の土塁や腰石を確認することができる。土塁の高さには違いがあるものの，明治５（1872）年の『鹿児島勝景撮影撮影匠藤崎直高』収録の「新橋　廿三」に写る吉野堀沿いの土塁と特徴が共通する。写真中央には，長屋風の建物があり，明治 32（1899）年の「第十回九州沖縄八縣聯合共進會」の開催に伴い増設された第四陳列舘に該当する。同年刊行の『鹿児島土産　附共進會案内』に会場見取図とともに建物の詳細な俯瞰図が掲載されており古写真と合致する。絵葉書の写真の撮影年代については，私製絵葉書の使用が認可された明治 33（1900）年から照國神社境内地手前の二之丸北堀が埋め立てられる大正３（1914）年の間に収まる可能性が高い。

二之丸南堀周辺における近代化（土地利用履歴）の変遷をたどることで，二之丸南堀の位置や形状，埋め立てられた時期を絞り込むことにつながった。

第４節　遺物について

遺物の大半は，近代以降の造成土から出土した。遺物は中世～近代のものまで多岐にわたるが，ここでは，各種の遺物の特徴についてまとめる。また，瓦については，金子智氏に玉稿をいただいたため別項を設ける。

（１）陶磁器（第 150 図・第 151 図）

陶磁器は，中世～近代までのものが大量に出土した。今回は，一連の鶴丸城跡保全整備事業に伴う発掘調査で出土した陶磁器を中心に，大まかな変遷を示す。

① 14 世紀～ 16 世紀

14 世紀～ 16 世紀のものとしては，少量だが中国の龍泉窯系青磁や景徳鎮窯系青花，漳州窯系の青花がみられる。

これらの多くは鹿児島城築城以前のものであることから，伝世品と考えられ，鹿児島城以前の御館である内城から持ち込まれた可能性がある。

② 17 世紀

17 世紀代に引き続き，景徳鎮窯系や漳州窯系の青花が少量含まれる。碗や皿が多いが，大皿もみられる。朱印船貿易等の海外交流や琉球を通した交易によって入手した可能性がある。

少量ではあるが，1630 ～ 40 年代を中心とした初期伊万里の磁器碗・皿がみられる。また，古武雄と呼ばれる肥前の陶器も出土している。

陶器では，御角櫓跡を中心に薩摩の竪野系の茶入が多く出土した。薩摩茶入は，唐津と呼ばれる肥前陶器とともに慶長年間（1596 ～ 1614 年）初期から茶会記に記録があり，九州の中でも特に茶会等で用いられた茶陶である。竪野系の花入れも出土した。また，茶陶と考えられるものには，高取焼と呼ばれる筑前の陶器や肥後人吉の陶器などが出土した。これらは，大名間での贈答品としてもたらされた可能性がある。

薩摩では，17 世紀後半～ 18 世紀前半に加治木・姶良系の姶良市山元窯や初期龍門司窯で焼かれたと考えられる半陶・半磁の碗や元立院窯で焼かれたと考えられる皿等が出土した。苗代川系では，堂平窯で焼かれた可能性がある碗が出土した。

③ 18 世紀～ 19 世紀

少量だが，18 世紀の清朝磁器（青花）が含まれる。これらも琉球との関係で持ち込まれたものと考えられる。

18 世紀になると，肥前や肥前系の磁器が増えはじめる。

18 世紀前半には，外青染付や京焼風の磁器などもみられ器種は碗・皿が中心だが，18 世紀後半～ 19 世紀前半にかけては肥前有田の色絵磁器や大型の鉢，壺，蓋物などがみられるようになり，器種・量ともに豊富となる。

陶器では，18 世紀代の琉球陶器がみられる。特に目立つのは，壺屋の三彩もしくは二彩の土瓶である。これらは，鹿児島城下町でも出土することがある。また，少量だが，壺屋の甕も出土している。琉球陶器は，特定の機種に偏ることから，これらは献上品などとしてもたらされた可能性がある。

18 世紀では，産地不明だが，ベトナムの安南染付を模倣した可能性のある陶胎染付碗などがある。

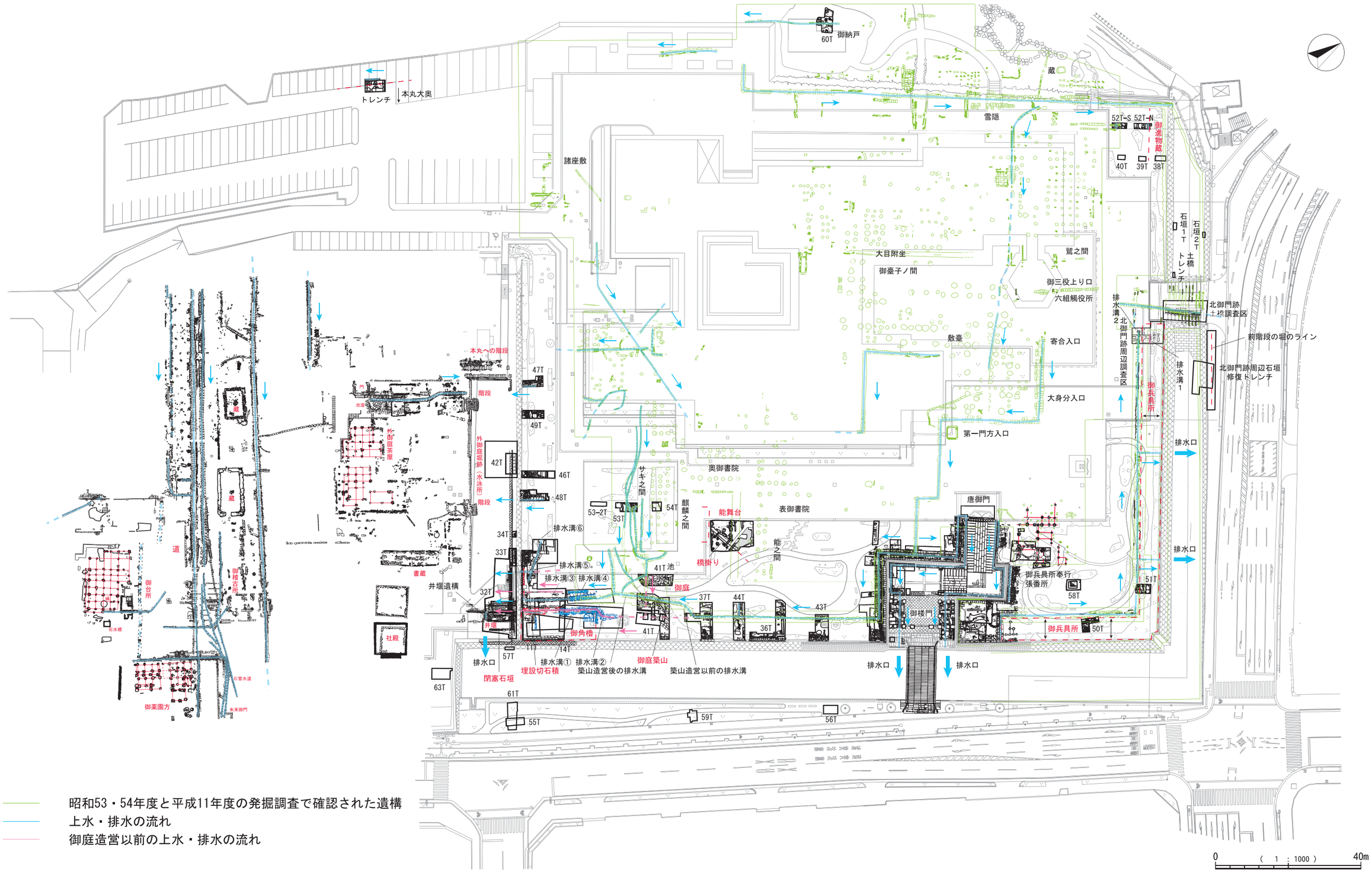
18 世紀後半～ 19 世紀にかけては，日置市南京皿山や薩摩川内市平佐大窯，姶良市日木山窯など，薩摩藩内で焼かれた薩摩磁器が多く入るようになる。薩摩磁器の特徴としては，厚手でやや青みがかった透明釉が掛けられている点である。外面に暦文と内面見込みに虫文が描かれる碗や内面見込みに楼閣山水文が描かれる皿などがみられる。碗・皿が中心だが，19 世紀になると，大皿や火入などの器種が増える。

薩摩の陶器では，加治木・姶良系の碗・皿・灯明台がみられる。18 世紀後半になると，龍門司窯を中心とした，白化粧土や黒化粧土をかける碗・皿類が中心となる。18 世紀代では，姶良市元立院窯で焼かれたと考えられる皿や同市龍門司窯等で焼かれたと考えられる製品が多く出土している。18 世紀後半以降では，赤褐色の胎土に化粧土と透明釉を掛け，内面見込みを蛇の目釉剥ぎするものが多くなり，白化粧土をかけた腰折れの千寿碗や緑黄色や緑色の化粧土をかけた碗，黒褐色の化粧土をかけた碗が多量にみられる。

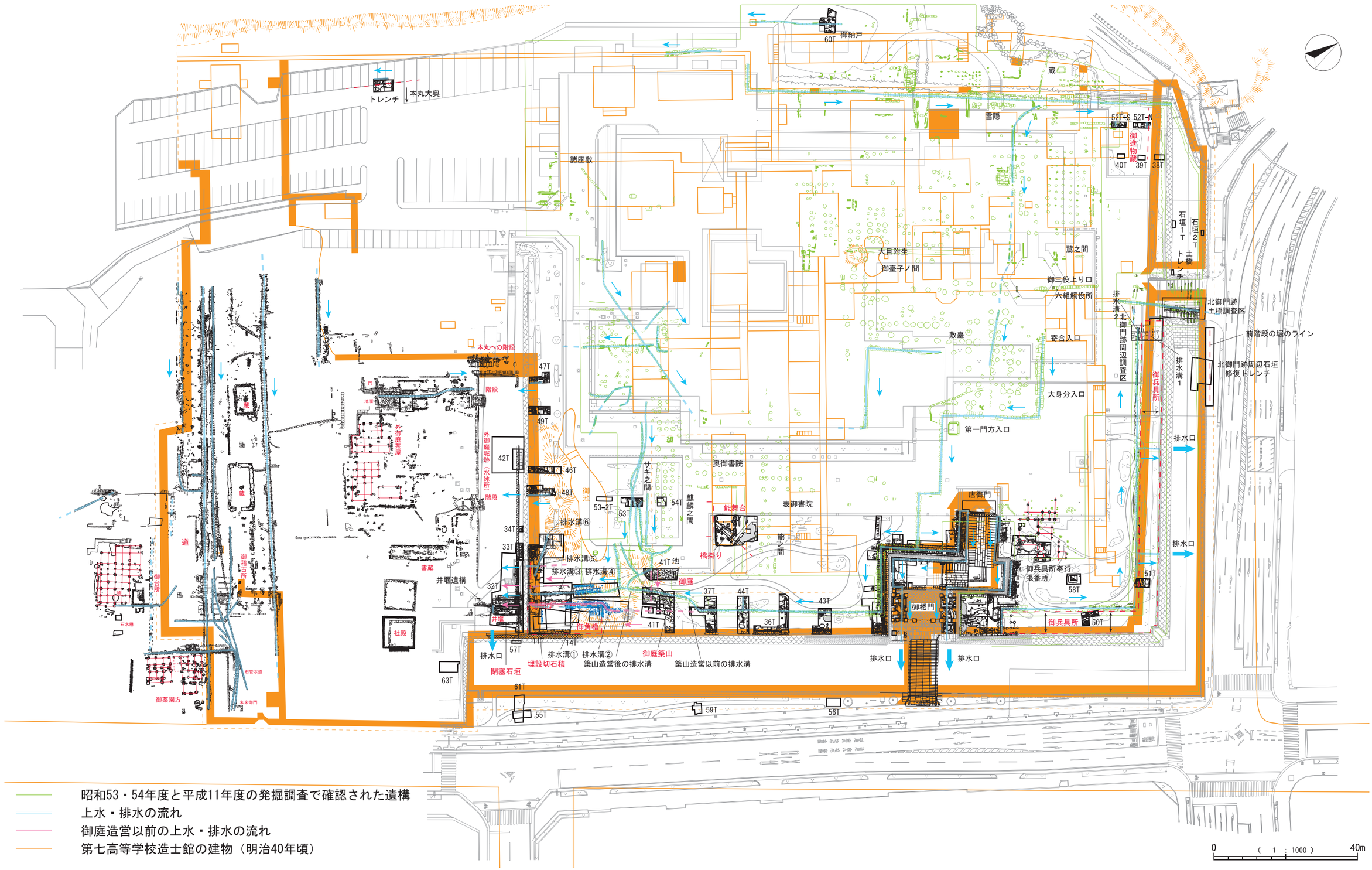
苗代川系は，17 世紀後半のものがわずかにみられるが，大半は 18 世紀以降である。製品は甕，鉢，擂鉢等の大物が出土した。また，薩摩土瓶も多く出土している。

竪野系の製品では，白薩摩と呼ばれる白色陶胎や灰色陶胎，宋胡録写や三島手と呼ばれる象嵌の製品が多くみられる。白薩摩と呼ばれる白色陶胎の製品では，小坏や碗等のほか，獅子等が彫られた脚が付く鉢や花入，型打ち成形の皿など多様な種類の製品がみられる。特に，薄手で，ものによっては見込みに貝目のある碗や皿についても他の遺跡での出土例がない鹿児島城跡独特のものである。また，水注や花瓶・香炉など茶陶も多い。

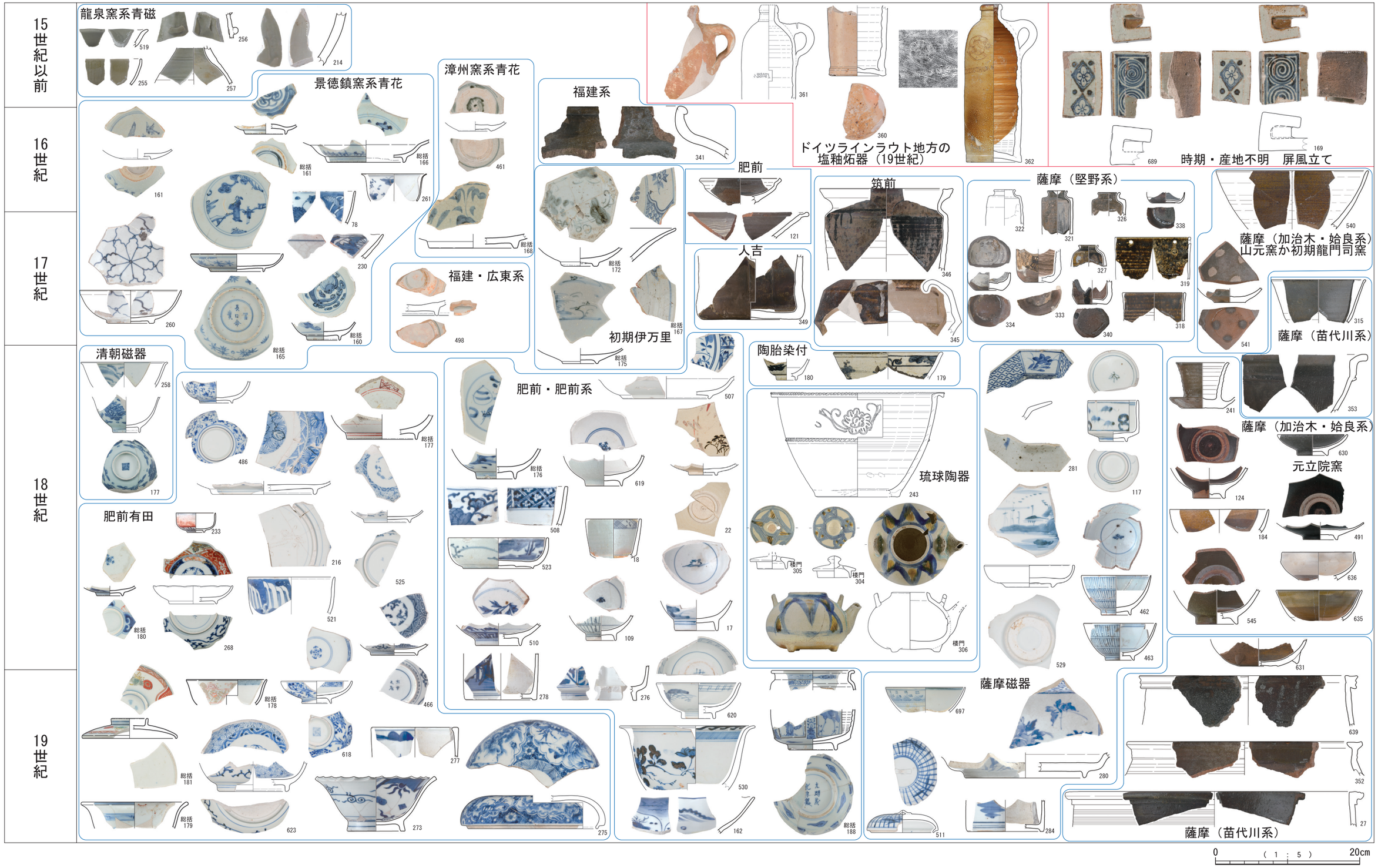
また，鹿児島城でしかみられない白色陶胎に黒色土をまぜ，文様状にした碗などもある。灰色陶胎の製品は，多量に出土している。大半が端反の碗もしくは小碗である。宋胡録写では，小瓶もしくは香炉といった小型製品のほか，鉢や脚付鉢等の大型品まで多様な種類がある。三島手と呼ばれる象嵌陶器では，碗や茶入等の小型品や壺か瓶などの大型品がある。近世末～近代初頭のものとしては，海外輸出用にも焼かれた錦手や金襴手とも呼ばれる色絵薩摩の瓶が出土した。これらの製品は，灰色陶胎や白色陶胎の端反の碗，皿を除き，ほとんどが同じ製品がない一点物であり，特に鹿児島城下町では少ない大型品が多く出土している。薩摩焼の竪野系の製品は，もともと島津家（鹿児島城）のための窯であり，１点物の他にはない製品も採算度外視で多く焼いていたと考えられる。



第 148 図　本丸・二之丸遺構配置図



第 149 図　本丸・二之丸遺構配置図と第七高等学校造士館配置図の重ね図



第 150 図　本丸跡出土陶磁器の変遷図

第 151 図　18 ～ 19 世紀の竪野系を中心とした薩摩の陶器

その他，産地・時期は不明だが陶器屏風立てが出土した。城内の荘厳するにふさわしいものである。

④ドイツ共和国ラインラウト地方の塩釉薬炻器

ヨーロッパ製のものとしては，これまで垂水・宮之城館跡出土のドーソン製品が知られていたが,本丸跡では，19 世紀のドイツのラインラウト地方の塩釉炻器が出土した。362 など，商標から製作年代が幕末以前と考えられるものも出土している。これら製品は，近代の陶磁器と見分けが困難である。これまでの産地不明品や未報告資料の中にも含まれている可能性があり，今後の精査が望まれる。また，御楼門跡周辺では，オランダの書物を参考にしたと考えられる石製日時計も出土するなど（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2020)，幕末の薩摩藩の海外交流の一端を示すものが出土している。

⑤小結

城内での生活を彩る多種・多様な陶磁器が出土した。漳州窯系や肥前，薩摩磁器の大皿や茶陶の豊富さは，武家儀礼や会食，茶の湯の席で利用が考えられ，薩摩藩主がいる城としてふさわしい機能を示すものである。

また，竪野系の大型品を含む器種の豊富さなどは，鹿児島城跡の特徴であると考えられる。

（２）土製品

土師器皿・坏は，胎土の色調から白褐色系と赤褐色系の大きく２系統がある。白褐色系は，底部の切離しは，回転篦切り（一部は回転糸切り）で体部の底部付近を面取りすることで，段ができ，口縁部付近は外反する。中には墨書がみられるものがある。赤褐色系の底部切離しは，回転糸切りで底部に糸切り痕が残る。底部がそのまま立ち上がるものが多い。多くは近世の造成土から出土したため，これらの差異が同時期の使い分けか時期差かは判断できなかった。国指定のための発掘調査が行われた本丸大奥跡の土坑２では，白褐色系のものが 17 世紀後半の陶磁器と共伴していることから，その時期は 18 世紀以前に遡ると考えられることが確認された。また，自然科学分析では，白褐色系と赤褐色系の土師器は，含まれる鉱物組成の違いから産地が異なることが確認されている（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2022)。

白褐色系の土師器皿･坏は，轆轤成形ではあるものの，底部の切離しが回転篦切り調整であること，白色系の胎土を選んでいると考えられることから，京都系土師器の模倣の可能性がある。

その他、焙烙や火鉢などが確認されている。

（３）石製品

石製品では，硯が出土した。県内で製作されたと考えられる黒褐色系のものが多いが，中には，山口県下関市の赤間硯（497）がある。

（４）木製品

木製品は，外御庭跡の堀から出土した。この堀は，明治 35（1902）年まであったこと，近代の遺物も混じって出土していることから，出土した木製品は．近世と近代の両方の可能性がある。金属部材も多く出土している。

また，全国的に珍しい左官道具が出土した。左官が壁に漆喰を塗る際に，漆喰などを乗せるための道具である羽子板型鏝板（661・662）や漆喰の入った桶から職人に漆喰を介添えするための鞘取り（663）が出土している。

（５） 金属製品

金属製品としては，銅銭のほか，角釘などの建築部材が出土した。建物のほか，大型のものに関しては，瓦釘として使用されていた可能性がある。

（６）近代化に関連する遺物か

琉球通寶や自然科学分析の結果，ガラスと考えられる付着物がみられる坩堝などが出土している。琉球通寶とは，文久２（1862）年に薩摩藩が琉球救済の名目で幕府に３年間の期限付きで鋳造する許可を得て同年８月に鋳造した。半朱は文久３（1863）年に鋳造され，１両の 32 分の１の額面をもつ銅銭である。

第Ⅴ章第２節（７）外御庭跡は，集成館事業の実験等を行う場であり，琉球寶宝の試作もこの場所で行われている。こうした事業に関連する遺物の可能性がある。

（７）西南戦争関連遺物

御楼門跡周辺の石垣には，西南戦争の際のものと考えられる砲弾痕・銃弾痕（第二次世界大戦時のものも含まれると考えられる）が確認され，四斤三砲の砲弾片やエンフィールド銃とスナイドル銃の銃弾が確認されている（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2020)。これらは，鹿児島城跡が，明治 10 年の西南戦争で６月と９月に戦場になったことを物語る。特に９月は，御楼門前に新撰旅団が配置されており，砲撃が加えられた。今回は，外御庭で，御角櫓基礎石垣に銃弾痕が確認された。また，エンフィールド銃の銃弾（160，457）も出土している。

（８）ガラス製品・骨製品・プラスチック製品

ガラス製品は，第七高等学校造士館や鹿児島大学文理学部・医学部で使用されたと考えられる医薬品・薬品・医療器具・実験道具・日用生活用品が出土した。

第５節　遺跡の残存状況

鹿児島城跡の本丸跡周辺は，明治６（1873）年の大火や明治 10（1877）年の西南戦争，第二次世界大戦などによって多くの建物が失われた。また，近代以降も様々な施設として利用されてきたため，調査開始前は，遺構はあまり残存していないと考えられてきた。しかし，今回調査した地点では，多くの遺構が良好に残存していることが確認され，多量の遺物が出土した。さらに，今回の調査成果と過去の調査成果を合わせることで外御庭跡の役割など新たな発見につながった。今後は，残された遺構の継続的な保護と研究の深化が求められる。

第６節　鹿児島（鶴丸）城跡出土の瓦について

金子　智

はじめに

本稿では，鹿児島城跡から出土した瓦（ここでは屋根瓦及び海鼠瓦等の瓦質建築材料を含む）について，今回行った整理分類の方法を提示するとともに，現段階での所見を述べる。

日本の瓦は，中世以前には古代の都城や官衙に使用されたものを除けば，多くが寺院での使用に限られていた。これが大きく転換するのが，16 世紀以降の安土城を嚆矢とする織豊系城郭における瓦葺の隆盛である。畿内で始まった城郭での瓦の利用は瞬く間に全国に拡大し，現在，近世城郭には瓦葺のイメージが定着している。

鹿児島（鶴丸）城は，慶長６年（1601）あるいは７年（1602）の築造開始とされるが，これ以前は後背部の城山を中心とする中世的な城郭であった（上山城）。その後慶長末年までに，現在の本丸・二之丸を中心とした麓の居館部分が整備され，近世城郭としての威容が整えられていったと考えられている（鶴丸城御楼門建設協議会編 2021）。

これまでに鹿児島城跡では膨大な量の瓦が出土している。これらはいずれも 17 世紀以降の資料であり，慶長期以降の鹿児島城および近代以降当地に設置された造士館等の諸施設に使用された瓦と考えられる。これらの瓦は多くが灰色～黒色の日本風のいぶし瓦であるが，一部に陶製の瓦（陶器瓦）や，朝鮮系と推定されるタタキ目を有する独特な瓦を含む。

鹿児島城跡の出土瓦については，これまで鹿児島県・県立埋蔵文化財センター・鹿児島市による数々の発掘調査の際に紹介，分析が行われているが，今回，平成 26 年度からの調査（以下「今回の調査」）によって新たに多量の瓦が出土したことから，改めてこれの整理・分類を行った。

１　出土瓦の整理方法

今回複数地点の調査で出土した瓦については，一連の方針に基づいて整理作業を行った。その成果の一部は御楼門跡周辺の報告書（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2020a，以下「前報」）で報告されているが，ここで改めて今回行った瓦の整理方法について，その内容を記す。

通常，近世遺跡出土瓦の整理・報告においては，出土遺構・あるいは出土面ごとに瓦を分析して瓦当文様の抽出や年代比定等を行い，これを遺跡全体で統合・評価する形で作業を行う。しかしながら今回の調査においては，出土瓦の大半は造成土や近代以降の再堆積からの出土であり，遺構あるいは検出面ごとの分析が難しい状況であった。その原因は，今回の一連の調査が史跡保護を前提としたトレンチ調査であったこと，および調査地内の近代以降の撹乱が著しかったことによる。

以上の点から，今回の瓦の整理においては，まずは鹿児島城所用瓦の全体像を掴むことを優先し，基礎作業として軒瓦および文様を有する小菊瓦の瓦当文様の集成を行い，その分類および基準資料を設定することを主眼とした。そのため，膨大な量を占める軒瓦以外の瓦の，製作技法の検討を含めた分析については，物理的な制約もあって十分な検討を行うに至らず，概略を示すにとどめた。

前報ならびに今回の報告において考慮した点は，以下のとおりである。

○　出土した軒瓦（軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦）および棟込の小菊瓦について，可能な限り瓦当文様による分類を行い，識別可能なすべての笵型について，代表的な資料を図示する（基準資料の設定）。

○　平瓦・丸瓦・桟瓦等の地瓦，鬼瓦・伏間瓦等の道具瓦，その他の瓦種については，一部を形態による分類を行い，代表的な資料を図示する。

○　瓦に付された刻印については，モチーフによる分類を行い，すべての版について図示（拓影）する。

以上の作業を継続・拡充することにより，最終的には瓦当文様を中心とした鹿児島城，及び城下を含めた総合的な瓦のデータベース構築を目指したい。

２　出土瓦の分類

今回の一連の調査で出土した瓦の総量については把握できていないが，少なくとも重量数トンに及ぶ膨大なものである。17 世紀初頭から 20 世紀まで幅広い年代の資料が出土しており，本瓦葺の瓦とともに桟瓦葺の瓦，また門や櫓などに使用されたと考えられる調整の丁寧な大型のものから小型のものまで，調整の精粗も含め，さまざまな資料が含まれている。

瓦種についても多岐にわたり，大部分を占める地瓦（丸瓦･平瓦･桟瓦）をはじめ，それぞれに対応する軒瓦（軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦），鬼瓦や鯱瓦・熨斗瓦や輪違瓦・小菊瓦などの多様な棟瓦が出土している。この他，外壁に使用する海鼠瓦や，塀の屋根に使用される塀瓦など，特殊な用途に用いられた瓦も多数出土している。

①　分類

出土した瓦は，洗浄済みのものを簡単な接合後，瓦種ごとに分類して順次分類番号を付した。分類番号は，平成 26 年度の調査以降新たに設定したもので，城内における過去の調査で出土した資料についても，未分類のものについては，可能な限りこれに追加した。

過去の調査のものについては，現段階では報文掲載のものを対象とし，掲載図版・写真により判断したが，鹿児島県教育委員会および鹿児島県立埋蔵文化財センターの調査にかかるものの一部については，現物との対照も行っている（本丸・二之丸等）。

分類番号の設定は，軒瓦（一部隅瓦類や鳥伏間瓦を含む）及び小菊瓦については瓦当文様の笵型を基準に行った。分類番号の設定は，おおむね文様の六割程度が確認できた段階で行ったが，一部特異な資料で破片でも識別が可能なものについては番号を付したものもある。明らかに分類に含まれない資料であっても，小片については番号の設定を行っていないため，実際の笵型数はさらに多い。

軒瓦のうち軒平瓦と軒桟瓦については，軒平部の瓦当文様が軒桟瓦に踏襲されることから，軒平部の文様を基準に一連の分類番号とした。報文中識別可能なものは「軒平瓦」「軒桟瓦」，どちらか不明なものは「軒平・軒桟瓦」と表記した。

軒丸瓦，軒平・軒桟瓦については，早い段階で文様にいくつかのグループがあることが判明していたため，これを分類番号の冒頭にアルファベット大文字で付して，若干ではあるが識別の便を図った。

同笵で笵傷の進行が見られるもの，あるいは体部形状などが異なり明らかに製作時期の異なるものについては，小文字アルファベットによる枝番を付した。

軒瓦，小菊瓦以外の瓦種については，形態によって明らかに分類可能なものについてのみ分類番号を付した。多くの瓦種では，破片では分類困難な資料が多かったため，番号を付したものは顕著な特徴を有するものと，完形に近い資料に限定されている。また出土量の多い丸瓦・平瓦・桟瓦等については，十分な検討を加えることができなかったため，分類番号は設定しなかった。今回の分類が各瓦種の全容を示すものではない点は，ご了解いただきたい。

いずれの瓦種についても，分類番号の順序については一切の配慮は行わず，類似した瓦当文様（同文異笵を含む）や形態，推定製作年代の新旧についても無視し，大別の後は確認された順に単純に連番を付している（分類基準等については，前報「凡例」を参照）。

今回の報告では，前報以降新たに発見された分類を追加するとともに，前回分類資料のうち同一であることが判明したものについては若い番号に統合し，除外された番号については別分類のものを割り当てるなどの修正作業を行った（一部写真の誤植についても修正）。

② 各瓦種の概要〈() は表等で用いた略号〉

○ 軒丸瓦（NM）

瓦当文様により分類し，A 種（連珠三巴文），B 種（牡丹紋），C 種（その他の文様）に大別，分類番号を付した。連珠三巴文（A 種）は近世瓦に一般的に用いられる文様で，既製品に近い位置づけとなる。牡丹紋（B 種）は島津家の家紋瓦，他に朝鮮系や陶器瓦には独特な文様（C 種の一部）が見られる。

○ 軒平・軒桟瓦（NHS，軒平瓦（NH）および軒桟瓦（NS））

軒平部の瓦当文様により分類し，A 種（「大坂式」系統），B 種（A 種の変形・仮称鹿児島式），C 種（A 種に似た，散葉状に展開する均整唐草文），D 種（その他の文様）に大別，分類番号を付した。一部を除き均整唐草文で，大坂を中心に広く使用された「大坂式」文様（A 種）とその変形（B 種・C 種）が主流である。朝鮮系や陶器瓦をはじめ，独特な文様も見られる（D 種の一部）。

軒桟瓦には，軒丸部のないものが見られ，ここでは「鎌軒桟瓦」と呼んだ。軒丸部を有するものは，連珠三巴文が主体である。

○ 丸瓦

形状・規格とも多種が存在する。以下，特徴的な点を挙げる。

・17世紀代に黒色の胎土，凸面にタタキ目を有する朝鮮系の瓦が存在する。

・17世紀初頭と思われる資料に，凹面にコビキA（斜め糸切痕）の観察されるものが散見される。

・17世紀後半の陶器瓦にはロクロ成形（粘土紐巻上）のものが存在する。

・18世紀初頭の瓦に，凹面に布目の視認できないものが存在する。（おそらく瓦当貼付軒平瓦に伴うもの。）

・御楼門修補（天保15年頃）時のものは玉縁が短く，側縁面取りが浅い特徴がある。

○ 平瓦

形状に大きな違いは少ないが，規格はさまざまなものが見られる。以下，特徴的な点を挙げる。

・17世紀代に黒色の胎土，表面にタタキ目・布目を有する朝鮮系の瓦が存在する。

・17世紀後半の陶器瓦に桶巻きづくりと想定される資料が存在し，ロクロ目や布目・タタキ目が観察される。

・19世紀代の資料には，熨斗瓦としての使用痕（漆喰痕）が伴うものが含まれる。

○ 桟瓦

18 世紀後半～ 19 世紀前半に出現する。桟部は向かって左側に位置し，左上（桟部）及び右下に切り込みを有する。

○ 鬼瓦・鯱瓦

鬼瓦では鬼面のものが非常に多く，18 世紀代と推定される状態の良い資料が目立つ点を含め特徴的である。城郭で多く見られる中心に家紋を配するタイプは少ないが，18 ～ 19 世紀と推定される牡丹紋のものが確認されている。

鯱瓦は少ないが，朝鮮系瓦と似た黒色の胎土の資料が確認されている。

○ 小菊瓦

瓦当を有し，その文様により分類番号を付した。周縁のある菊花文が多く，いずれも 18 世紀以降のものと考えられる。

○　海鼠瓦

釘穴を有する貼を海鼠瓦とした。釘穴位置や厚さによって分類番号を付したが，寸法のわかるものが少ないため，良好な資料の出現により細分可能と思われる。

○　塀瓦

側辺に目板状の桟部を有する大型資料が複数種確認されており，分類番号を付した。なお，瓦当を有するもの（塀軒平瓦等）は未確認である。

○　その他の瓦種

各種棟瓦類（熨斗瓦・伏間瓦・輪違瓦等），隅瓦類（隅軒丸瓦・隅軒平瓦等），袖瓦類（袖平瓦等）等様々な瓦種が確認されている。破片資料が多く，十分な分析に至らなかったため，代表的な資料の紹介にとどめた。なお，瓦当を有する瓦（隅軒丸瓦・鳥伏間瓦等）については，文様の笵型により軒瓦の分類に含めている。

3　考察

①　鹿児島における近世瓦の調査と研究

鹿児島城においてはこれまで多くの発掘調査が行われており，そのほとんどで瓦が出土している。瓦を紹介した主な調査報告には次のものが挙げられる。

○　本丸黎明館建設地点（鹿児島県教育委員会 1983）

本丸御殿部分の調査。多量の瓦が出土しており，報文には 82 点の図版が掲載されている。その多くは E-10・11 区の瓦溜および No.3pit，I・J-22 区から出土しているようである。資料の年代は 17 世紀から近代以降までと幅広い。

○　二之丸 B 地点（鹿児島県教育委員会 1992）

県立図書館・鹿児島県立視聴覚センター建設に伴う調査。報文には 89 点の図版（他に石製鬼瓦 2 点）が掲載されている。牡丹紋の軒丸瓦の良好な資料や，菊花文の小菊瓦が多く紹介されている。

○　二之丸 C 地点（鹿児島市教育委員会 1984）

市立美術館建設に伴う調査。報文には 46 点の図版が掲載されており，図書館等建設地の調査と共通するものも見られる。

○　二之丸 G 地点（鹿児島市教育委員会 2000）

宗教道場に伴う調査。報文には 67 点の図版が掲載されており，古様の瓦や陶器瓦が多く含まれる点が特徴的である。花十字紋を配するいわゆる「キリシタン瓦」が初めて発見されたことで注目された。

城下では名山遺跡（鹿児島市教育委員会 1998・2002）や琉球館跡（鹿児島市教育委員会 2003），御厩跡（鹿児島市教育委員会 2017），犬追物馬場・火除地跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2020b）等で調査が行われている。このうち犬追物馬場跡の最下層からは 17 世紀代の古様の瓦が出土しており，注目される。

この他，薩摩焼の窯で瓦を出土した遺跡として，下記のものが挙げられる。

○　堂平（どびら）窯（苗代川）

近世瓦の多くは地上式のだるま窯で焼成されるため（いぶし瓦）瓦窯の発掘例は古代と比べ多くないが，鹿児島では陶器瓦の瓦窯の調査例がある。1620 年代開窯・17 世紀後葉廃窯とされる堂平（どびら）窯（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006）がそれで，焼き締め系の薩摩焼の瓦と，わずかながら平瓦裏面にタタキ目を有する朝鮮系のいぶし瓦が出土している。

堂平窯の瓦は極めて特異な資料である。陶器瓦という点以外にも，一般的な近世瓦とは大きく異なる，以下のような特徴を有する。

・軒瓦の特異な文様

軒丸瓦は，外区に二組の均整唐草文，内区に圏線を有する三巴文を配した文様を主体とする。軒平瓦は，中央に左右非対称の中心飾り様の文様を配し，左右に樹枝状に展開する一見魚骨にも見える独特な唐草文である。軒平瓦は瓦当貼付による製品である点も特徴的である。

・丸瓦・平瓦の成作技法

丸瓦・平瓦ともに粘土紐巻き上げによるロクロ成形によるものが中心である。それぞれ横位にロクロ目を残すものが多いほか，平瓦に布目やタタキ目を有するものが多く見られる。

時期的には 17 世紀後半と位置付けられているが，朝鮮様式の瓦（いぶし瓦）については鹿児島城創建期のものである可能性が指摘されている。

窯跡の調査ではこの他宇都窯（古帖佐）から朝鮮系の瓦の出土が確認されている。平瓦の凹面にタタキ目，凸面に布目を有するという（鹿児島県姶良町教育委員会 2004・山崎 2008）。

鹿児島における近世瓦の研究は，報文中でなされた分析を除けば，さほど多くない。

これを真正面から取り上げたほぼ唯一のものとして，山崎信二による研究がある（「近世鹿児島の瓦」『近世瓦の研究』所収（山崎 2008））。山崎は鹿児島城本丸や二之丸，宇都窯，堂平窯等の瓦を分析し，初期の朝鮮系瓦や陶器瓦の存在，あるいは宝永 4 年（1707）の復興（氏のいうところの近世Ⅵ期中）段階における軒平瓦瓦当貼付の存在などを指摘した。ここで扱う鹿児島城所用瓦における研究課題の多くがここで取り上げられており，起点たる研究といえる。

この他，キリシタン瓦について触れた上田耕の研究（上田 2014）や，橋口尚武による石製鬼瓦に関する研究（橋口 2009）等があるが，さほど多くない。

②　鹿児島城跡出土資料に見る各年代の瓦の様相

ここでは年代ごとの鹿児島城跡出土瓦について考察する。上述のとおり，城内での出土状況による検討が難しい状況であるため，出土瓦の年代観を含めたその分析については，ほぼ瓦当文様の型式変化に頼っている。かな

り心もとないが，生産跡である堂平窯の資料，また長崎・大坂など他地域の瓦との比較や，わずかながら年代の推定できる資料によって検討した結果をここで述べる。

そのあらましについては，前報「総括」においても触れられているが，ここでは今次報告の資料を含め，若干の修正とともに改めて検討を加える。

○　17 世紀前半の様相（第 152 図）

鹿児島城で最初に瓦が使用されたのはいつか，という点については必ずしも明確でない。山崎信二は，前掲論文において名山遺跡第 1 次～ 3 次調査で出土した体部コビキ A の桐紋軒丸瓦を 1592 ～ 1600 年（氏の近世Ⅲ-1 期）段階に比定している。今回の調査においても同様に桐紋かつコビキ A の軒丸瓦（C-001 類）が出土しており（異笵），やはり最古段階の瓦と推定される。

その年代をいつに置くかということになるが，現段階では中世段階の島津氏の城郭，とりわけ鹿児島城に先行する上山城において瓦が出土したという事例は未確認である。桐紋という性格上，山崎の指摘する寺院用瓦の可能性については首肯しがたいが，技法的にはその製作年代については 16 世紀代に遡る可能性も否定しがたい。

丸瓦に残されるコビキ A（素材粘土板切り離しの際の糸切痕が粘土板に対し斜め方向になるタイプ）については，畿内周辺など多くの地域では天正末期（～ 1592）以降急速にコビキ B（糸切痕が粘土板に対し平行になるタイプ）に転換するとされ，慶長期に残る事例は少ないとされる（山崎 2008）。しかし例えば都市としての完成がほぼ 17 世紀に降る江戸遺跡でも出土が見られるなど，地域差がある。

ここで参考となるのが，昨年報告書の刊行された御楼門前の犬追物馬場跡からの出土品である（鹿児島県埋蔵文化財センター 2020b）。同調査では 17 世紀後葉～ 18 世紀前半の遺物の伴う最下層（Ⅵ層）からの出土品に多くのコビキ A の資料が見られた。コビキ A の資料は，今回図示していないが城内の出土品にも散見され，これらの瓦は鹿児島城内での所用品と考えるのが穏当であろうから，鹿児島城整備段階で使われていたものと考えられる。

ただし，これらの瓦の製作年代が鹿児島城整備段階と一致するかという点については，若干の疑念が残る。江戸遺跡の事例を見ると，城下の武家地から出土する初期の瓦に多くの搬入品が含まれており，鹿児島城においても初期の瓦に長崎からの搬入品が含まれていたことがわかっている。近世初頭において，たとえば伏見城由来に代表されるような織豊期の建築の移築は少なくなかったと考えられ，このような移築に伴う古瓦の移動も考慮する必要があろう。

ともかく，鹿児島城において瓦葺建物が出現するのは，鹿児島城整備時の慶長初年もしくはこれに近い 17 世紀の早い段階にはさかのぼりうるものと考える。

では，この段階に比定できる瓦は出土資料のどれにあたるかという点が問題となるが，ピンポイントでこれを指摘するのは難しい。先のコビキ A の資料は初期段階のものと認識できるが，ここではこれ以外の初期段階の資料として，17 世紀前半代と推定されるものを以下に挙げる。いずれも全体からみるときわめて少量であるため，当初の瓦葺建築はさほど多くなかったことが推測される。

本時期に該当する瓦としては，大きく 2 つのグループが想定される。

・日本風瓦のグループ

まずひとつは，やや焼成の甘い日本風の一群である。織豊期地方城郭の瓦は概して小型軟質で調整の雑なものが多いが，鹿児島城における 17 世紀前葉と推定される瓦はその延長線上にある印象である。

軒丸瓦では，一般的な連珠三巴文のほか，四七桐紋・五葉紋（カ）・花十字紋といった紋章の可能性が高い瓦当文様が見られる。連珠三巴文は 18 世紀以降のものでは，文様がある程度似通った印象となるのに対し，古様の資料はそれぞれの文様がまちまちな印象であり，巴の頭部が尖る（A-027 類・A-028 類），巴が細長い（A-018 類・A-043 類・A-047 類・A-049 類・A-065 類・A-066 類），巴に圏線を有する（A-027 類・A-047 類）などは（一部は次段階に降るが）当段階の資料の特徴と考えられよう。

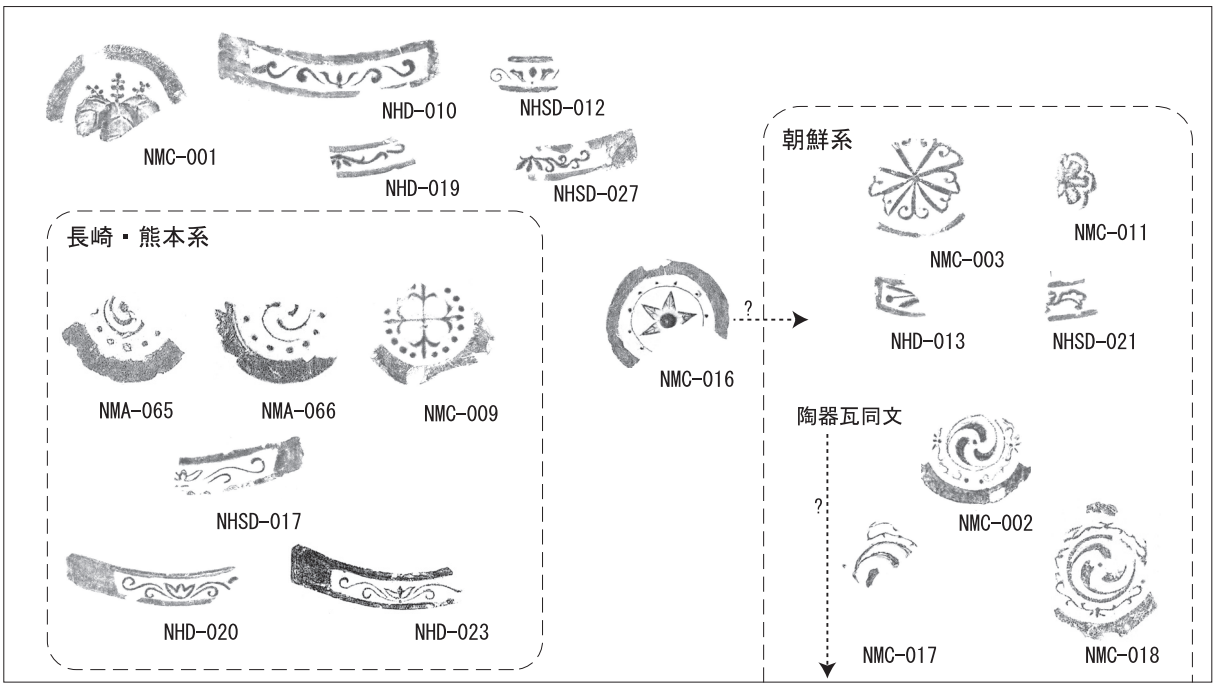
軒平瓦では，A 種とした「大坂式」およびその影響を受けているとみられる B 種や C 種といったのちに定型化されるものは見られず，いずれも D 種に含めた多種多様な文様構成のものの一部が，当段階のものと判断される。具体的には D-008 類・D-010 類・D-012 類・D-016 類・D-017 類・D-019 類・D-020 類・D-022 類・D-023 類・D-027 類・D-028 類・D-030 類・D-034 類・D-041 類・D-042 類・D-043 類がこれにあたる。いずれも均整唐草文であり，笵型数は多いが出土点数はいずれもわずかである。

これらに伴う他の瓦種であるが，古様の鯱瓦（前報御楼門跡 No. 235 ～ 237）は焼成の印象から同時期の可能性が高い。

上記の瓦のうち，花十字紋軒丸瓦を含む一部の資料については長崎周辺で同種（一部はおそらく同笵）の資料が出土しており（上田 2014 他），胎土分析の結果とも合わせ，当該地からの搬入品である可能性が高い。また，熊本・天草の富岡城の瓦（苓北町教育委員会 1986）が含まれるとの指摘もあり，これらの搬入品の導入については，当地での瓦生産の開始時期とも合わせ，十分検討する必要があろう。

・朝鮮系瓦のグループ

さて，鹿児島城の初期瓦と目されるもう一つのグルー



第 152 図　17 世紀前半の瓦

プは，朝鮮系と思われる一群である。特徴としては，①丸瓦表面・平瓦凸面にタタキ目を有する，②胎土は軟質で全体に黒色・あるいは橙色を呈する，③軒瓦の瓦当文様は特異であり，軒平瓦に左右の周縁が極端に狭いものが見られる，というような点が挙げられる。一見して他の日本風の瓦とは印象の大きく異なる製品である。

軒丸瓦では均整唐草三巴文の C-002 類・C-017 類・C-018 類，蝶文（カ）の C-003 類，花文（カ）の C-011 類がこれに比定される。C-002 類・C-017 類・C-018 類は後述する陶器瓦と同文で，17 世紀後葉に下がる可能性があるが，焼成の印象から一応この時期に含めた。C-003 類は表面褐色で特異な文様の資料である。

軒平瓦は，D-013 類・D-021 類をこのグループと判断した。いずれも黒色の胎土で，文様の独特な資料である。

この他に日本風とした一群の中でも軒平（・軒桟）瓦 D-030 類，D-034 類は胎土が黒色異質で，こちらのグループに含まれる可能性がある。

これらの一群は当時の朝鮮半島・李朝の瓦に特徴が類似しており，外来の技術によって製作された可能性が高い。破片資料でも表面の色調や，丸瓦部・平瓦部のタタキにバリエーションが見られ，軒瓦の文様の多様性からもいくつかのバリエーションがあるようである。類似品は宇都窯や堂平窯からの出土が知られており，山崎は「近世第Ⅲ -2 期」（1600 ～ 1651）に位置付けている。

鹿児島城の整備は，関ヶ原の戦い直後，慶長 6 年（1601）あるいは翌慶長 7 年（1602）頃からとされる。コビキ A など古様を呈する資料は，おそらくそこからほど遠くない時期に使用されていたものであろう。日本風の古様の瓦は，ここから 17 世紀中葉までの時期に比定したい。

一方，朝鮮系の瓦は特異な資料であるため，その年代設定には慎重を要する。多くの資料が黒色胎土軟質で，古風な印象を受けるが，同文の堂平窯の陶器瓦が報告の通り 17 世紀後半に降るとすれば，これらの朝鮮系の瓦（の一部）がその時期に降る可能性もある。

なお，瓦の刻印は，軒瓦等に伴わないものは年代の把握が難しいが，現在までのところ確実に当該期に属するものは確認されていない。

○　17 世紀後半の様相（第 153 図）

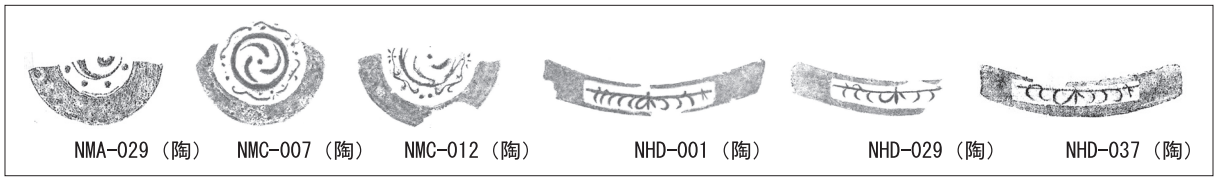
本段階の資料については明確に抽出し難いが，いくつか本時期と思われる瓦が指摘できる。概して 17 世紀代の瓦は定型化されていないため，年代の判断がしづらいが，前段階で日本風の瓦としたグループにはこの段階まで下がる資料が含まれる可能性がある。全国的に桟瓦の出現期にあたるが，鹿児島城跡の資料では確認されていない。

この時期に比定される瓦として，堂平窯に代表されるを陶器瓦の一群がある。

・堂平窯系陶器瓦のグループ

軒丸瓦では A-029 類，C-006 類，C-007 類，C-012 類，C-013 類，軒平瓦では D-001 類，D-011 類，D-029 類，D-031 類，D-037 類がこれにあたり，これらに伴う丸瓦・平瓦も多数出土しているが，他の瓦種については確認していない。

軒丸瓦は，連珠三巴文 1 種の他は均整唐草三巴文である。特異な文様で鹿児島以外で類品を見ないが，三巴を配しているところから，国内で創案されたものであろう。



第 153 図　17 世紀中葉～後葉の瓦

外区の唐草文は三葉の中心飾りから(おそらく外向きに)展開する均整唐草文 2 組が対となり，間に点珠 2 個ずつを配している。巴文の頭部は凹み，中心に点珠を配するなど独特である。

軒平瓦は,中心飾りを有する魚骨様の唐草文であるが，これも類例を見ない。

これらの瓦は,上述した堂平窯出土の資料に酷似する，焼き締め系施釉の薩摩焼で，表面暗褐色を呈するものである。上述した通り文様や成形技法などが特異であり，朝鮮半島由来の技術が用いられている可能性が高い。堂平窯出土の陶器瓦については，17 世紀後半の製作年代が与えられており，鹿児島城内で出土しているものがこれに比定できるとすれば，本段階のものと考えられる。

同種の瓦は田之浦窯（1652 ～）でも生産されていた可能性も指摘されている（山崎 2008)。丸瓦の施釉方法にバリエーションがあるとのことであるが，今回軒瓦については明確に識別できなかった。軒丸瓦に含まれる連珠三巴文の資料（A-029 類）や，丸瓦内面に布目を有し摸骨による製作が想定されるものなどの異なる特徴を有するものは，製作地が異なる可能性がある。

堂平窯では少数ながらいぶし瓦も出土している。これについて報文では「(鶴丸城本丸の）創建瓦の可能性」を指摘しており，山崎も一応これに従っている。軒丸瓦 C-002 類・C-017 類・C-018 類は堂平窯同文のいぶし瓦であるが，文様は陶器瓦と大きく変わりがない。今回同種のものは 17 世紀前半代と判断したが，陶器瓦と併行して製作された可能性も考慮すべきであろう。ただし，同文の軒平瓦が存在しない点は注目すべきである。

○　17 世紀末～ 18 世紀前半の様相（第 154 図）

瓦の使用が急激に増加したと考えられるのが本段階である。その契機はおそらく元禄 9 年（1696）の大火後の再建（宝永 4・1707 完成）と考えられる。その後城内は天保 14 年（1843）の御楼門の改築（もしくは大規模な改修）があるものの，明治 6 年（1873）の大火まで大規模な災害は被っていないと考えられることから，これらの瓦は明治段階まで使用されていた可能性がある。なお，今回の出土資料には，桟瓦で本段階に比定されるものは確認していない。

・軒平瓦瓦当貼付技法による一群

本段階に比定されるものとして，軒平瓦が瓦当貼付によって製作された一群がある。鹿児島城において，これ以前 17 世紀代の日本風の瓦は，成形・調整・焼成いずれも一般的な近世瓦の印象のものであるが，一転してこの一群はかなり独自色が強いものとなっている。全体的な特徴としては，製作は概して薄手，色調は白色味が強い。大型の資料が多いのも特徴で，門や櫓，多聞などの大規模建築に使用されていたものと推定される。

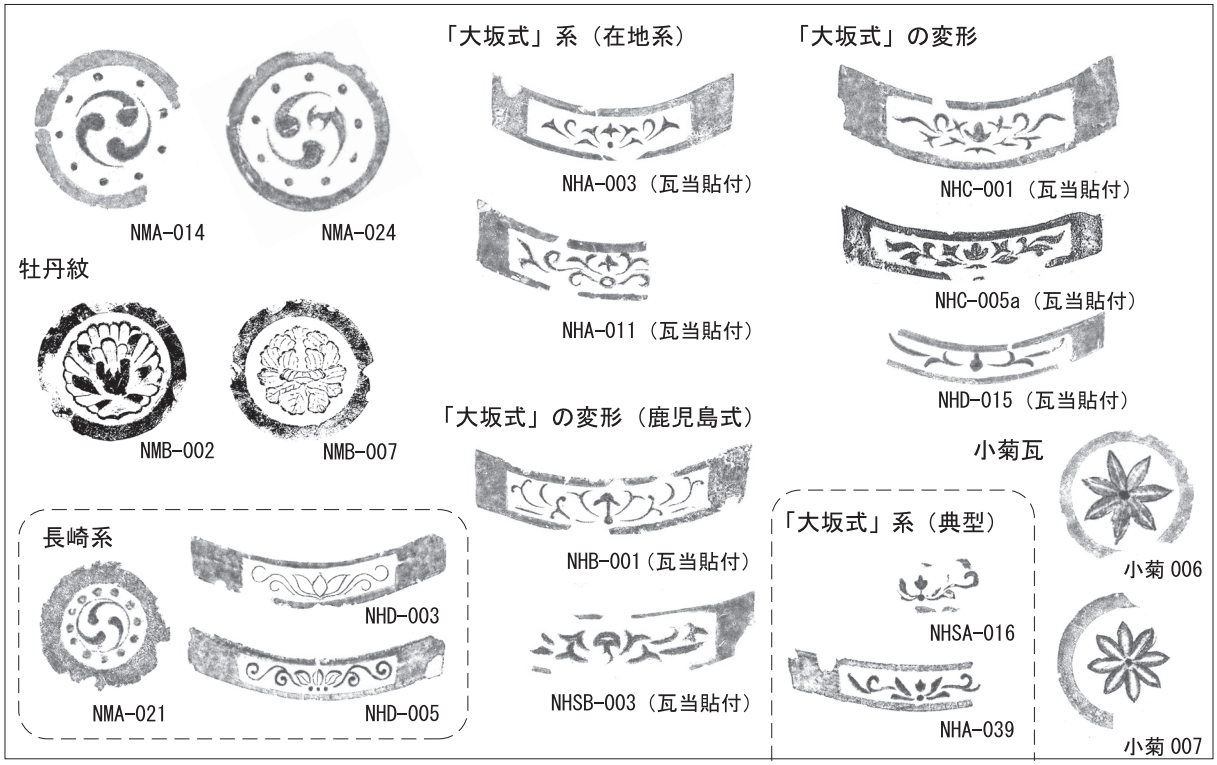
軒丸瓦では A-002 類・A-012 類・A-014 類・A-019 類，A-023 類・A-024 類・A-046 類・A-057 類・A-060 類，B-002 類・B-003 類・B-005 類・B-006 類・B-007 類・B-010 類・B-011 類・B-012 類・B-013 類・B-015 類・B-016 類が本群に属するものと推定される。

特徴としては，連珠三巴文（A 種）は①周縁が狭い，②珠文が小さい，③巴は頭部が大きい，といった点が挙げられる。一般的に 18 世紀以降の連珠三巴文は，周縁は徐々に広くなり，珠文は肥大化してある程度密に配されようになるが，本群の資料はまったくこれに当てはまらない。巴のみ頭部が肥大化した新しい傾向が見られるものの，かなり独自色が強いものといえよう。

牡丹紋軒丸瓦（B 種）の一部は，当初 18 世紀後半以降と想定していたものであるが，このグループに属する可能性が高い。鹿児島城の牡丹紋には 3 つのパターンがあり，A 蕊のある花弁が立体的に表現されるもの，B 花弁の中央が凹むもの，C 花弁が平坦で蕊が隆線で表現されるものがあるが，このうち B および C を体部の形状から本群に属するものと判断した。

軒平瓦では，C 種のすべて（C-001 類～ C-007 類）及び A 種および B 種･D 種の瓦当貼付技法の資料(A-003 類･A-006 類（陶質）・A-008 類・A-011 類・A-020 類・A-024 類・A-036 類・A-037 類・A-038 類・A-040 類・A-041 類・A-042 類・B-001 類・B-002 類・B-003 類・B-016 類・D-015 類・D-036 類）がこれにあたる。瓦当部が近世の軒平瓦に一般的な顎貼付ではなく，瓦当貼付となっており，異例である。文様も一見やや異質であるが，注意して見ると多くは「大坂式」文様から派生したものと判断できる。瓦当の高い資料がほとんどであるが，D-015 類のみは瓦当が低く，文様も特異である。

これらの瓦は前後の時期の瓦と比較しても異質な一群としてとらえられ，おそらくは 18 世紀初頭の大規模な造営にあたり（おそらくは山崎の指摘する通り元禄・宝永期の普請)，御用瓦として大量に注文生産されたものと考えられる。



第 154 図　17 世紀末～ 18 世紀前葉の瓦

・大坂系瓦の展開

18 世紀以降の鹿児島城の軒平瓦・軒桟瓦の瓦当文様には，大坂瓦の影響が顕著に感じられる。A 種として一括したものがその典型であるが，B 種や C 種としたものも文様的にはその派生とみて良い。

しかし，18 世紀前半代の資料のうち軒平瓦瓦当貼付技法のグループは，文様には大坂瓦の影響を受けているものの，製作が全く異なる。したがって，大坂からの搬入品とは考え難く，また技術的にも彼地のものが伝播したとは考えられない。おそらく当時瓦生産の先進地域であった大坂瓦の瓦当文様を模倣して，在地の技術によって生産されたものが，これらの一群であろう。

一方，本段階には大坂瓦の直接の影響をうかがわせる資料が,少数ながら存在する。軒平(軒桟)瓦 A 種のうち，軒平瓦 A-16 類，A-39 類，A-47 類がこれにあたる。軒平部の文様構成は，筆者か「大坂式」文様と呼んでいるもので,関西では「橘唐草文」とも称される一群にあたる。上記の資料はこのうちでもやや古式のものにあたり，市川創(市川 2015)が「祖型橘唐草文」と称したものである。櫻田小百合（櫻田 2017）の編年観では 18 世紀代の資料に比定されるものに近い。大坂式の瓦当文様は 19 世紀には，中心飾りの脇及び子葉の上部が Y 字に大きく開くようになるが，これらの文様はそれ以前の様相を示す。

これらが大坂産のものなのか，あるいは笵や技術の導入によって当地で生産されたものなのかは即断しがたいが，文様は本場のものと遜色なく，成形も瓦当部顎貼付の一般的な近世瓦といえる。

本段階は，鹿児島城での瓦使用が本格化するのに伴って，大坂瓦の影響が次第に顕著に現れ始める時期といえるが，いまだ技術的には在地のものが中心にあったと考えることができよう。

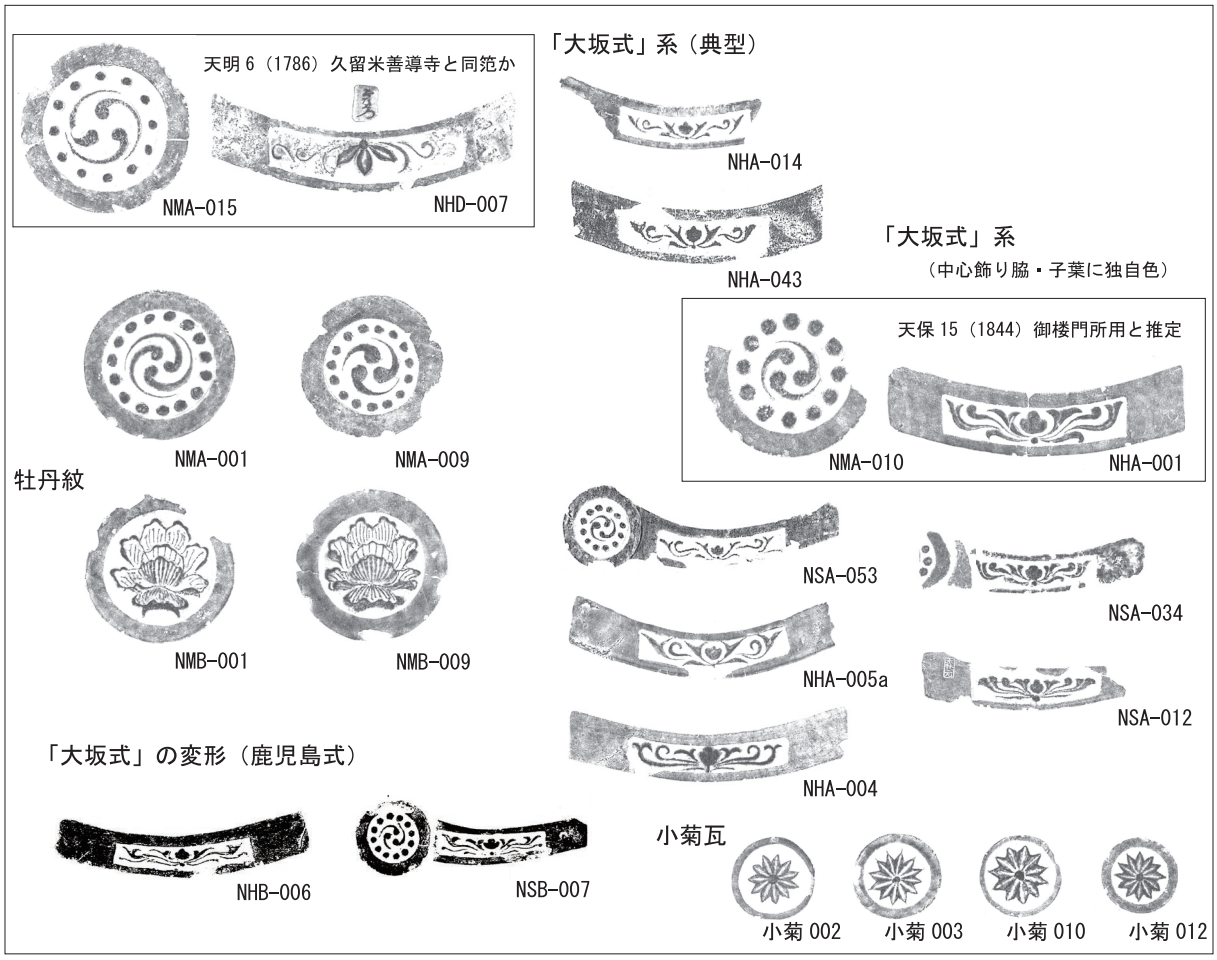
では，その技術の淵源はどこにあるのか。山崎も指摘しているが，前代の陶器瓦に採用された朝鮮系の技術が継承されている可能性が，ひとつ考えられる。堂平系の陶器瓦の軒平瓦はやはり瓦当貼付である。ただし，本段階の資料は，丸瓦や平瓦の製作技法は日本瓦に近く，焼成も大きく異なる。あるいは，鹿児島以外の地域で同様の技術が用いられていた可能性も考えられようか。現状では判断に苦しむところである。

なお，本段階にも長崎に類例の見られる瓦（軒丸瓦 C-021 類，軒平瓦 D-003 類・D-005 類）が散見される，19 世紀以降に独自様式が成立して，文様の画一化が進む以前は，大坂を中心とした他地域の影響をうけつつ多様な瓦が利用されていたことがうかがわれる。

○　18 世紀後葉～ 19 世紀以降の様相（第 155 図）

本段階は，鹿児島地域において瓦生産が本格化する時期と考えられる。瓦当文様には表現の変遷がうかがわれ，時期の細分も可能と思われるが，明確な指標が得られなかったため，ここでは無理に区分せず一括した。

この時期になると全般的に大坂瓦の影響が顕著となり，さらに軒平・軒桟瓦に「大坂式」文様をアレンジした独自の文様が見られるようになる。桟瓦が出現するの



第 155 図　18 世紀後半～ 19 世紀の瓦

もこの時期である。

・大坂系瓦当文様の展開と独自のアレンジ

鹿児島城でこれまでに確認した軒平瓦および軒桟瓦の瓦当文様の中では，A 種とした「大坂式」文様が圧倒的に多い。また B 種・C 種としたものもその影響下に生まれたものと考えれば，鹿児島城においては大坂瓦の影響が強いことがうかがわれる。そして確認される瓦当文様の大半は18世紀後葉以降に属するのものと考えられる。

前段階においては瓦当文様に大坂瓦の影響が見られるものについても技術的には独自のものが多く，技法的に大坂の影響を感じさせるものはさほど多くなかった。ところが本段階になると瓦当文様，また製作技法についても大坂瓦の影響を強く感じさせるものが多くなる。特に軒平瓦や軒桟瓦の軒平部に「橘唐草文」とも称しうる，中心飾りの中央が橘実状に膨らみ，脇が Y 字を呈するような典型的な大坂式文様に近いものが，多数確認されるようになる。

たとえば軒平瓦 A-015 類や軒平瓦 A-021 類，軒平瓦 A-043 類のように子葉の基部が唐草に接するようなパターンは 19 世紀代の大坂式に多く見られるものであり，これらの文様は一見するだけでは大坂周辺のものと区別がつかない。

一方，大坂周辺の瓦と同じ文様構成でも異なる要素が見られるものがある。軒平瓦 A-001 類，軒平・軒桟瓦 A-013 類，軒桟瓦 A-034 類などがこれにあたるが，その大きな特徴は，中心飾り脇および子葉の Y 字を呈する部分の切込みが，深く谷状に切れ込む点である。また，唐草は大坂のものは先端が尖るタイプが主流であるが，これらは丸みを帯びた球状となる。

同じ特徴は，同時期の軒平・軒桟瓦 B 種としたグループにも見られる。B 種の文様は大坂式文様の左右両端下方に唐草（飛び唐草）一対が付加されるもので，前代の瓦当貼付軒平瓦のグループにその萌芽が見られるが，隆盛するのは本期以降である。同様の文様構成の瓦は他地域には見られず，現在も市内の近代建築にも散見されることから見て，当地で創案され近世末以降鹿児島地域に広く普及した文様と考えられる。（「鹿児島式」文様と仮称したい。）

軒丸瓦についても，本段階と思われる連珠三巴文の資料には大坂瓦の影響が感じられる。例えば江戸瓦との比較でいえば，大坂瓦の連珠三巴文は概して巴が長めで，頭部は小さいながらも丸みを帯びる傾向があるが，鹿児

島城のものもこれと同様の印象を受ける。軒丸瓦 A-001 類・A-003 類・A-005 類・A-007 類（他多数）など，18 ～ 19 世紀代に比定される連珠三巴文軒丸瓦のかなりの部分が同様の特徴を示す。セット関係の明らかなものは少ないが，同様の刻印を有するなどの点からみて，「大坂式」軒平瓦（もしくは「鹿児島式」軒平瓦）と組み合うものとみてよい。

胎土分析の結果からは，これらの瓦の多くについて，在地産の可能性が指摘されている。大坂のものと思われる刻印瓦も存在することから，一定量搬入品が含まれる可能性があるが，微妙な印象の違いもあり，ほとんどの瓦は在地産で，大坂瓦を模範に独自のアレンジを加えて生産されたものと考える。技術的にも近しいものが感じられるが，一部の大坂瓦に酷似する文様のものについては，技術とともに笵の移入も考慮する必要があるかもしれない。

このような大坂瓦の影響は 17 世紀代に遡る可能性があるが，19 世紀以降の瓦当文様にも，（中心飾りが橘様になるなど）同時期の大坂瓦との共通性があることから，早くに導入されたもの（文様あるいは技術）が鹿児島でその後独自に発展を遂げていったというよりは，ある程度恒常的に大坂瓦の影響を受け続けて，それを都度消化して地元で生産しているものと考えたい。

・御楼門天保修補に伴う瓦

2021 年に再建された，鹿児島城本丸表門である御楼門は，明治 6 年（1873）の火災で焼失したが，このとき存在したものは天保 15 年（1844）の修補（再建か）と考えられている。今回の再建にあたって，この修補時に使用された瓦がどのようなものであったのかが検討されたが，軒瓦については軒丸瓦 A-010 類と軒平瓦 A-001 類をこれに比定した（鶴丸城御楼門建設協議会編 2021）。

その根拠は，①規格が大型で御楼門の規模に見合い，周辺からかなりの量の出土が確認されること，②文様から天保 15 年前後（19 世紀前葉）に比定されること，③鹿児島城の正門として製作・調整が丁寧な良品であること，等の理由による。またこれらの資料については「短冊枠に「太喜」（または「太宗」）」の刻印を有するものが多く，御楼門の特徴である同刻印の大型の海鼠瓦（前報御楼門跡 5 類）が存在したことも根拠の一つとなった。

これらは，暦年代の特定される資料が少ない鹿児島城の瓦の中で，一つの定点として重要な資料群である。

・その他の系統の瓦

前報でも触れているが，本段階の資料に福岡県久留米の重要文化財善導寺本堂と同笵と考えられる資料が確認されている。軒平瓦 D-007 類がそれであるが，大型の資料で中心飾りに下向き三葉を配するものである。

善導寺本堂のものは笵の左右がカットされ，第二唐草の大部分が失われているため，鹿児島城のものよりも後出のものであることが確実である。善導寺本堂は天明 6 年（1786）の建築であることから，鹿児島城のものはこれ以前，おおよそ 18 世紀第 2 ～第 3 四半期前後とみるのが穏当であろうか。

この瓦は，軒平部の瓦当は大きいが，前代に見られた瓦当貼付ではなく，文様も独特である。やや離れた地でこれが確認されることは，笵や職人が移動したのか，瓦自体が動いているのかは不明であるが，興味深い事例である。この他にも出所不明の瓦が散見されるが，現段階ではその年代も含め，詳細不明である。

・桟瓦の出現

桟瓦の発明は 17 世紀後葉といわれ，江戸遺跡等では 17 世紀末～ 18 世紀初頭には出現しているが，鹿児島では軒桟瓦の瓦当文様からみて，本段階まで下る可能性が高い。

鹿児島城の桟瓦は桟部が向かって左側に付され，確認できた資料では，向かって右下部（平部下端）にも切り込みを有する。近世の桟瓦としては一般的な形状のものである。

軒桟瓦は，軒丸部に連珠三巴文を配するもののほか，軒丸部瓦当文様のないもの（鎌軒桟瓦）が存在する。軒平部の文様には A 種（大坂式），B 種（鹿児島式）が多いが，他（D 種）のものもある。

年代については明確にしえないが，軒桟瓦 A 種の文様では中心飾りがいずれも橘状に変化しており，初現は 19 世紀に降る可能性がある。また文様を見ると鎌軒桟瓦の方がやや時期が下がる印象がある。

・大量に出土する小菊瓦

本段階で特徴的な資料に小菊瓦がある。棟飾りとして使用される小菊瓦は織豊期から盛行し，伏見城などの城郭や江戸遺跡などでは 17 世紀代に多く見られるが，鹿児島城の小菊瓦は一部の大型のもの（18 世紀の瓦当貼付軒平瓦に伴うか）を除けば，18 世紀後葉以降に降るものが多い。

これらの小菊瓦はいずれも小径で，周縁を有し，花弁端の尖った独特の文様が使用されている。本丸・二之丸を中心にかなりの数が出土しており，江戸後期に広く使用されていたものと思われる。明治初年の城内を写した古写真「旧御本丸御座之景一・二」（鶴丸城御楼門建設協議会編 2021 参史 -4・5）には，桟瓦葺や平木葺の棟にこれらが使用されている様子がうかがわれる。

鹿児島城跡からは，近代の瓦も多数出土している。無文の軒丸瓦や軒桟瓦等は明らかに近代以降のものであるが，そこには現在も在地の瓦産地として知られる「日置瓦」等の刻印が見られる。他にも中心飾りに菊文を配する軒平・軒桟瓦（D-040 類）は瀬戸内地方に多く見られるものに近似しており，近代以降販路を拡大したとされる菊間瓦（愛媛県）の可能性がある（刻印瓦の出土が確

認されている)。

③　瓦が使用された建物について

鹿児島城の瓦には大小さまざまなものが存在するが，軒平瓦の瓦当幅が 9 寸～ 1 尺近い（27 ～ 30cm）大型のものが多く見られる。

17 世紀前半代の資料には含まれないようだが，18 世紀前葉と考えている軒平瓦 B 種の一部や C 種としたものは大型のものが中心であり，同様の規格のものは御楼門天保修補時と考えている 19 世紀初頭の資料（軒平瓦 A-001 類）まで長く存在する。これらの瓦はいずれも本瓦葺の瓦であり，門や櫓あるいは多聞等の頑強かつ大規模な建物に使用されたものと考えられよう。

一方，軒丸瓦・軒平瓦の小型の資料は比較的少ない。このことから，本瓦葺が中心であった 18 世紀前半以前は,門などの建物以外は瓦葺きでなかった可能性がある。おそらく御殿建築には檜皮葺等が用いられたものと考えられる。

軒平瓦で小型のものとして堂平窯系の陶器瓦がある。これについては，きわめて特殊なものであり，寒冷地でない鹿児島において一般的な建物に使われたとは考え難い。仙台藩では鉄釉の瓦が霊廟建築に使用された可能性が指摘されており（笠原信男 1996），その色調の意味も合わせ，何らかの特別な施設に使うために製作された可能性を指摘しておきたい。

18 世紀後半以降に出現する桟瓦は，一般的な規格のものが多いようである。桟瓦の誕生により，御殿空間の建物が檜皮葺から桟瓦葺に替わったともいわれるが，鹿児島城においてもその登場とともに城内建物の瓦葺への転換が進んだとも考えられよう。

④　瓦の刻印について

鹿児島城の瓦には刻印資料が多い。17 世紀代とみられる資料には少ないが，幕末に近くなると，かなり多くの瓦に刻印が押されている。

刻印のモチーフも多様であり,記号的なものから文字,具体的な人名や地名を配したものまで，形も円形や方形の他短冊形のものまでさまざまである。同じモチーフの刻印でも，形や書体が酷似するもののほか，全く異なる場合もある。必ずしも同じ工房で作られたものばかりではないようである。

一方で類似した刻印が，全く違う瓦当文様の軒瓦に使われる例や，同笵の瓦に複数の刻印が付されたものもある。これらの刻印が工房を示すものなのか，職人を示すものなのか，それとも何か他の目的を有するものなのかなど疑問点は多いが，現段階でははっきりしない。

18 世紀代と思われる資料の一部（瓦当貼付の軒平瓦に伴うものなど）には大型の刻印が見られる。人名を配したものが多く，平瓦の表面に押されている点も含め，珍しい。先年刊行された近世瓦の刻印の全国集成（埋蔵文化財研究会編 2017）と対照すると，熊本城などに類例がみられ，九州に特徴的なものかもしれない。

なお，軒瓦に大坂瓦の影響が強く見られる点は上述したが，刻印の押捺方法（大坂では丸瓦の玉縁の付け根，平瓦の小口端部に押される例が多い）は必ずしも一致しないようである。

まとめ

鹿児島城跡においては，17 世紀前葉の瓦の出土が確認され，近世城郭としての整備にあたってある程度の瓦葺き建物が造られていた可能性が高い。

初期の瓦には，朝鮮系と思われる独特な資料と，一般的な日本風の瓦が見られ，胎土分析からは前者は鹿児島周辺（国内），後者は鹿児島周辺の他に長崎周辺からの搬入品が含まれることが指摘されている。

17 世紀後半の資料には焼締系施釉の陶器瓦が含まれる。その文様は特異であり，朝鮮系と推定される瓦と共通するものが多く見られる。同様の資料は 17 世紀後葉の薩摩焼・堂平窯からの出土が確認されており，同笵の可能性もある軒瓦もみられる。ただし，釉の掛け方など調整の違いも指摘されており，また製作技法にもバリエーションが見られることから，複数の系統が存在する可能性もある。

18 世紀初頭の瓦では，山崎信二の指摘した軒平瓦瓦当貼付の資料群が注目される。大型資料が多く，元禄期以降の普請に伴う可能性が高い。調整も含め特徴な一群であり，その出自に興味が持たれる。この時期以降，大坂系の瓦当文様が多出する点も注目される。

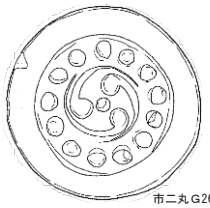
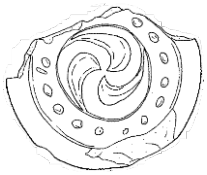
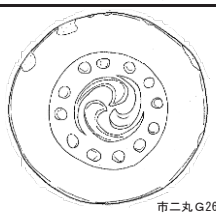
桟瓦の出現時期は，鹿児島城では 19 世紀に降る可能性が高い。この時期の軒桟瓦軒平部の瓦当文様には，中心飾り中央が橘様に見える，18 ～ 19 世紀代の「大坂式」に酷似するものが見られるほか，大坂式文様をアレンジした独自の文様が出現し，以降近・現代まで継続する。

「大坂式」の文様構成でも，中心飾り脇や子葉の Y 字を呈する部分が太く中央に沈線が深く入るものは，当地独特の表現と考えられる。全国的に 18 世紀以降，在地における瓦生産の活発化に伴い瓦当文様に地域色が生じるが，鹿児島においても同様の傾向がうかがわれることは興味深い。

第 42 表　軒丸瓦分類表 1

分類	図版	特徴・法量（mm）等	分類	図版	特徴・法量（mm）等
A-001 挿No. 掲No. 43 130 楼門45-1・2・3	 楼門3	地区 130：御楼門跡南側石垣周辺 楼門45-1～3：御楼門周辺 区層 130:N-17 43T七高瓦溜り 楼門1：J・K-241 造成土 楼門2：H・I-24 楼門3：J・K-24 ：造成土 瓦経× 文経× 内径mm 130：161×113×72 楼門1：162×114×72 楼門2：160×114×72 楼門 3：166×118×73 文様 右巻15珠 掲載 本丸952 刻印 玉水堂（刻印005） 中（刻印037-2） 推定年代 18-19C 珠文やや大。巴太身で長い。右上，珠文-周縁間2ヶ所に笵傷。文様区面取。	A-002 挿No. 掲No. 楼門45-4	 金子先生提供	地区 楼門45-4：御楼門跡周辺 区層 H-24H・I-24造成土 瓦経× 文経× 内径mm 176×130×81 文様 右巻9珠□ 掲載 刻印 － 推定年代 18C 周縁狭い。珠文小さく散漫。巴間隙広い。
A-003 挿No. 掲No. 楼門45-5	 楼門5	地区 楼門45-5：御楼門跡周辺 区層 L-27埋土 瓦経× 文経× 内径mm 155×100×68 文様 右巻15珠 掲載 市二丸G156・157? 二丸444 刻印 吉（刻印041-1） 推定年代 18-19C 周縁広い。巴頭部丸く長い。体部タタキ密。上・左下，巴-珠文間に笵傷。全長441，体長414，径152，穴径17（×2）	A-004 挿No. 掲No. 楼門45-6	 楼門6	地区 楼門45-6：御楼門跡周辺 区層 L-26埋土 瓦経× 文経× 内径mm 148×101×55 文様 左巻12珠 掲載 刻印 － 推定年代 17-18C 周縁広い。珠文やや大きい。巴間隙広く散漫で，巴頭部丸く胴部細い。
A-005 挿No. 掲No. 楼門45-7・8	 楼門7	地区 楼門45-7・8：御楼門跡周辺 区層 楼門45-7:K-27 楼門45-8:L-27埋土 瓦経× 文経× 内径mm 楼門45-7: 156×104×65 楼門45-8: 154×105×65 文様 右巻14珠 掲載 本丸955 刻印 平（刻印052） 推定年代 18-19C 珠文大きい。巴太身で長い。右上-中央-左下5か所に笵傷。穴2ヶ所（径26）	A-006 挿No. 掲No. 119 558 楼門46-9	 楼門9	地区 558：外御庭跡 楼門46-9：御楼門跡周辺 区層 558:L-1'堀埋土 楼門49-9:H-24造成土 瓦経× 文経× 内径mm 558:－×－×24 楼門46-9:162×110×72 文様 右巻16珠 掲載 本丸953 刻印 峯（刻印063-1）， 金（刻印050），目（刻印141） 推定年代 18-19C 珠文やや大きい。巴頭部丸くやや長い。体部タタキ目立つ。下方巴尾-胴部間に笵傷。笵傷進行品は上部珠文-周縁間にも笵傷。
A-007 挿No. 掲No. 総括66-76 楼門46-10	 楼門10	地区 総括64-76：64トレンチ 楼門46-10：御楼門周辺 区層 楼門46-10：M-28焼土 瓦経× 文経× 内径mm 総括64-76：：－×－×－ 楼門46-10:159×115×65 文様 右巻16珠 掲載 刻印 － 推定年代 18-19C 周縁広い。珠文やや大。巴頭部丸くやや長い。下方巴-巴尾間に笵傷。	A-008 挿No. 掲No. 楼門46-11	 楼門11	地区 御楼門周辺 区層 K-27埋土 瓦経× 文経× 内径mm 149×102×62 文様 右巻(15)珠 掲載 刻印 － 推定年代 18-19C 中型。文様中心に小点。巴頭部丸くやや細身で，やや間隙広い。上部周縁-珠文間に笵傷。
A-009 挿No. 掲No. 16 34 楼門46-12	 楼門12	地区 34：北御門跡周辺 楼門46-12：御楼門周辺 区層 34:c・d-36 石塁側排水溝埋土 楼門12:H-24 造成土 瓦経× 文経× 内径mm 34:152×91×60 楼門46-12:150×95×58 文様 右巻15珠 掲載 本丸954 刻印 － 推定年代 18-19C 周縁きわめて広。巴頭部丸く尾は細め。文様区内にチヂレ目立つ。全長445，体長413。鳥伏間あり。	A-010 挿No. 掲No. 楼門46-13・47-14	 金子先生提供	地区 楼門46-13:N-26・27 楼門47-14：I-21 区層 楼門46-13:瓦溜Ⅰ層下 楼門47-14： － 瓦経× 文経× 内径mm 楼門46-13:177×127×64 楼門47-14:180×131×65 文様 右巻12珠 掲載 刻印 太宗（刻印003） 推定年代 19C 珠文巨大（径23）。巴はやや小さい。軒平瓦A-001類とセット。
A-011 挿No. 掲No. 43 131 楼門46-15	 131	地区 131：御楼門跡南側石垣周辺 楼門46-15：御楼門周辺 区層 131:M-17 43 瓦溜り 楼門15:M-20排水溝内 瓦経× 文経× 内径mm 131:158×102×58 楼門15:157×111×57 文様 右巻13珠 掲載 刻印 － 推定年代 18-19C 周縁やや広い。珠文大きい。巴頭部丸く長め。	A-012 挿No. 掲No. 16 35 43 132 楼門46-16	 35	地区 35:北御門跡周辺 132:北御門跡石塁修復 楼門46-16:御楼門跡周辺 区層 35:石塁背面 132:N-17 43T 七高瓦溜り 楼門46-16:I-20 造成土 瓦経× 文経× 内径mm 35:149×116×83 132:148×118×82 楼門49-16:146×112×78 文様 左巻（9）珠 掲載 刻印 － 推定年代 18C 中型。周縁やや狭い。珠文小さい。巴やや短い。
A-013 挿No. 掲No. 楼門46-17	 楼門17	地区 楼門46-17：御楼門跡周辺 区層 I-23排水溝内 瓦経× 文経× 内径mm 150×100×55 文様 左巻12珠 掲載 刻印 － 推定年代 17-18C 周縁広い。巴頭部丸く，尾が後巴に接する。	A-014 挿No. 掲No. 43 134 85 363 楼門46-18	 楼門18	地区 P1113：御楼門跡南側石塁周辺 P1157：御角櫓跡 楼門46-18：御楼門跡周辺 区層 P:1113:N-17 43T七高瓦溜り P1157：御角櫓一括 楼門18：N-25・26 Ⅲ 瓦経× 文経× 内径mm P1113：163×127×77 P1157：長軸：200×134×80 短軸：170×134×80 楼門46-18:169×134×80 文様 右巻9珠 掲載 刻印 － 推定年代 18C 鳥伏間有（363）。文様全体に散漫。A-002類に似るが，巴やや小さい。
A-015 挿No. 掲No. 楼門47-19	 楼門19	地区 楼門47-19：御楼門周跡辺 区層 M-25造成土 瓦経× 文経× 内径mm 180×131×80 文様 左巻12珠 掲載 刻印 － 推定年代 17-18C 大型。珠文やや小さく散漫。巴大きく，やや細身で間隙広い。胎土に白雲母・白色粒目立つ。	A-016 挿No. 掲No. 16 36 楼門47-20	 楼門20	地区 P1027：北御門跡周辺 楼門47-20：御楼門跡周辺 区層 P1027:c-36 造成土 楼門47-20：I-24排水溝内ベルト 瓦経× 文経× 内径mm P1027:170×126×77 楼門47-20:166×128×78 文様 右巻12珠 掲載 本丸956 刻印 休（刻印039-1） 推定年代 17-18C 珠文やや小さく散漫。台形状のもの多い。珠文周囲に粘土押込痕残るもの多い。巴大きく，やや細身で間隙広い。

第 43 表　軒丸瓦分類表２

分類	図版	特徴・法量（mm）等	分類	図版	特徴・法量（mm）等
A-017 挿No.　掲No. 楼門47-21	 二丸451	地区：楼門47-21：御楼門跡周辺 区層：M-27造成土 瓦経×文経×内径mm：(172)×124×83 文様：左巻（12）珠 掲載：二丸451 刻印：－ 推定年代：17-18C 珠文小さく高い。巴大きく頭部丸い。胎土硬質で，灰・白色粒（0.5-3）3%。	A-018 挿No.　掲No. 楼門47-22	 楼門22	地区：楼門47-22：御楼門跡周辺 区層：I-27造成土 瓦経×文経×内径mm：(160)×(110)×(-) 文様：右巻（13）珠 掲載： 刻印：－ 推定年代：17C 珠文小さく散漫。軒平瓦D-012類とセットの可能性大。
A-019 挿No.　掲No. 43　135 楼門47-23	 二丸443	地区：135：御楼門跡南側石垣周辺 楼門47-23：御楼門跡周辺 区層：135：N-17 43T 七高瓦溜り 楼門47-23：H・I-24 造成土 瓦経×文経×内径mm：135：178×32×95 楼門47-23：174×129×92 文様：右巻8珠 掲載：二丸442・443 市二丸G262 刻印：－ 推定年代：17-18C 珠文小さく散漫。巴大きく，中央間隙狭い。左上巴-周縁間に薄い笵傷。体部に布目なし。	A-020 挿No.　掲No. 楼門47-24	 楼門24	地区：楼門47-24：御楼門跡周辺 区層：I-24造成土 瓦経×文経×内径mm：171×121×85 文様：右巻16珠 掲載： 刻印：－ 推定年代：18-19C 珠文やや大。巴長い。
A-021 挿No.　掲No. 56　220 85　366 楼門47-25	 楼門25	地区：220：御楼門跡南側石垣周辺 366：御角櫓跡 楼門47-25：御楼門跡周辺 区層：220：N-11 37T カクラン 366：L-3 11～14T 楼門47-25：I-1 表土 瓦経×文経×内径mm：220：(-)×(-)×(-) 366：(-)×(-)×(-) 楼門47-25：139×83×58 文様：左巻12珠 掲載： 刻印：－ 推定年代：17C 周縁広い。巴先端尖り，尾は次の巴に接する。胎土砂質。古様。	A-022 挿No.　掲No. 85　367 楼門47-26	 楼門26	地区：367：御角櫓跡 楼門47-26：御楼門跡周辺 区層：367：御角櫓跡一括 楼門47-26：H・I-24の間のベルト 造成土 瓦経×文経×内径mm：367：長軸：205×107×59 短軸：170×107×59 楼門47-26：164×108×61 文様：右巻15珠 掲載： 刻印：－ 推定年代：18-19C 鳥伏間有(367)。文様高い。巴やや小。
A-023 挿No.　掲No. 楼門48-27	 楼門27	地区：楼門48-27：御楼門跡周辺 区層：H・I-24 瓦経×文経×内径mm：170×133×79 文様：左巻(9)珠 掲載： 刻印：－ 推定年代：18C 周縁狭い。珠文小さく散漫。巴頭部大きい。	A-024 挿No.　掲No. 8　9 51　188 楼門48-28	 楼門28	地区：9：御造物蔵跡 188：御楼門跡南側石垣周辺 楼門48-28：御楼門跡周辺 区層：9：D-33・34 52Tカクラン 188：W・N-12・13441瓦廃棄土坑 楼門48-28：J・K-24 検丸 3 瓦経×文経×内径mm：9：(-)×(-)×(-) 188：168×140×88 楼門48-28：174×141×85 文様：左巻9珠 掲載：市二丸G158・159 刻印：－ 推定年代：18C 周縁狭い。珠文小さく散漫。A-23類に似るが巴太身。巴胴部に笵傷。
A-025 挿No.　掲No. 総括90-140 市二丸G32-253	 総括90-140	地区：総括90-140：吉野堀 市二丸G32-253：A－1 区層：総括90-140：Ⅱ層 市二丸G32-253：Ⅰ 瓦経×文経×内径mm：127×89×50 文様：右巻13珠 掲載：市二丸G32-253 刻印：－ 推定年代：18-19C 小型。珠文。巴ともに太い。	A-026 挿No.　掲No. 市二丸G32-260	 市二丸G260	地区：市二丸G32-260：C-1 区層：黒褐砂混 瓦経×文経×内径mm：128×93×51 文様：左巻13珠 掲載：市二丸G260 刻印：－ 推定年代：18-19C 小型。巴中心に点珠。
A-027 挿No.　掲No. 市二丸G32-261	 市二丸G261	地区：市二丸G32-261：A-1 区層：堅固下黒砂 瓦経×文経×内径mm：123×88×54 文様：右巻（16）珠 掲載：市二丸G32-261 刻印：－ 推定年代：17C 小型。珠文小。巴先端尖る。尾部は圏線と接する。	A-028 挿No.　掲No. 市二丸G32-263	 市二丸G263	地区：市二丸G32-263：B-3 区層：黒土，瓦集中 瓦経×文経×内径mm：143×85×50 文様：右巻12珠 掲載：市二丸G263 刻印：－ 推定年代：17C 周縁広。巴先端尖る。
A-029 挿No.　掲No. 85　364 本丸116-1010	 364	地区：364：御角櫓跡 本丸116-1010：本丸 区層：364：L・M-3 排水溝③ 本丸116-1010：本丸一括 瓦経×文経×内径mm：364：(-)×(-)×(-) 本丸116-1010：復元径：(-)×(-)×(-) 文様：右巻(8)珠 掲載：本丸1010 刻印：－ 推定年代：17C 陶器瓦。小型。周縁極めて広。珠文小さい。巴細い。堂平窯系か。	A-030 挿No.　掲No. 楼門48-29	 楼門29	地区：楼門48-29：御楼門跡周辺 区層：N-25・26 瓦経×文経×内径mm：179×123×81 文様：左巻12珠 掲載： 刻印：－ 推定年代：17-18C 大型。巴大きくやや細身で，間隙広い。A-015類に似るが，巴やや外開。文様中心に小点。
A-031 挿No.　掲No. 16　37 楼門48-30	 楼門30	地区：37：北御門跡周辺 楼門48-30：御楼門周辺 区層：37：土橋3T 堀 楼門48-30：－ 瓦経×文経×内径mm：37：(-)×(-)×(-) 楼門48-30：167×111×79 文様：右巻9珠 掲載： 刻印：－ 推定年代：17-18C 珠文小さい。巴先端尖る。	A-032 挿No.　掲No. 85　370 楼門48-31	 楼門31	地区：370：御角櫓跡 楼門48-31：御楼門跡周辺 区層：370：御角櫓跡一括 楼門48-31：N-25 造成土 瓦経×文経×内径mm：370：(-)×140×80 楼門48-31：185×133×82 文様：右巻12珠 掲載： 刻印：－ 推定年代：17-18C 大型。瓦当厚い。珠文周囲に粘土押込痕残る物多い。A-016類に似るが，巴中央間隙広い。鳥伏間あり。

第 44 表　軒丸瓦分類表３

分類	図版	特徴・法量（mm）等		分類	図版	特徴・法量（mm）等	
A-033	楼門32	地区 楼門48-32：御楼門跡周辺	区層 I-23排水溝内	A-034	本丸957	地区 楼門48-33：御楼門跡周辺	区層 I・J-23・24造成土
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 158×103×67		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 157×119×65	
		文様 右巻15珠	掲載			文様 左巻13珠	掲載 本丸957
		刻印 -	推定年代 18-19C			刻印 -	推定年代 17-18C
楼門48-32		周縁広い。巴頭大きく，稜線明瞭。		楼門48-33		珠文小さい。巴小さい。	
A-035	楼門34	地区 楼門48-34：御楼門跡周辺	区層 H-24造成土Ⅳ層より下	A-036	二丸452	地区 楼門48-35：御楼門跡周辺	区層 M～O-19・20造成土
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm (162)×116×71		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm (150)×97×56	
		文様 右巻15珠	掲載 二丸446			文様 左巻12珠	掲載 二丸452
		刻印 大（刻印036-1）	推定年代 18-19C			刻印 -	推定年代 18C
楼門48-34		瓦当厚い。珠文大きい。上部巴異形。瓦当面雲母目立つ。		楼門48-35		小型。周縁やや広い。巴やや小さい。	
A-037	楼門36	地区 楼門48-36：御楼門跡周辺	区層 I-25造成土	A-038	楼門37	地区 楼門48-37：御楼門跡周辺	区層 H-25造成土
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm (172)×171×74		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 137×94.5×55	
		文様 左巻(8)珠	掲載			文様 右巻13珠	掲載
		刻印 -	推定年代 17-18C			刻印 -	推定年代 18-19C
楼門48-36		珠文小さく散漫。巴先端尖る。		楼門48-37		小型。左周縁-珠文間３ヶ所，巴-珠文間１ヶ所に笵傷。瓦当面に雲母目立つ。	
A-039	楼門38	地区 -	区層 -	A-040	楼門39	地区 楼門49-39：御楼門跡周辺	区層 -
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm (182)×(138)×(78)		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 147×110×65	
		文様 右巻(12)珠	掲載			文様 左巻8珠	掲載
		刻印	推定年代 17-18C			刻印 -	推定年代 17-18C
楼門48-38		A-016・A-032類に似るが，巴の配置異なる。巴大きく，中央間隙広い。		楼門49-39		中型。珠文やや大きい。	
A-041	楼門40	地区 楼門49-40：御楼門跡周辺	区層 J・K-24瓦集中部造成土	A-042	楼門41	地区 楼門49-41：御楼門跡周辺	区層 J・K-24瓦集中部造成土
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 158×114×65		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 152×108×66	
		文様 右巻12珠	掲載 二丸447・448			文様 右巻15珠	掲載
		刻印	推定年代 18-19C			刻印 休（刻印039-1）	推定年代 18-19C
楼門49-40		珠文大きい。		楼門49-41		A-003類に似るもやや大きく。笵傷なし。全長457，体長422，径160，穴径17（×2）。	
A-043	楼門42	地区 楼門49-42：御楼門跡周辺	区層 I-12	A-044	楼門43	地区 楼門49-43：御楼門跡周辺	区層 3TⅤ層
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm (-)×(-)×(-)		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 179×128×82	
		文様 右巻	掲載			文様 左巻(12)珠	掲載
		刻印 -	推定年代 17C			刻印 -	推定年代 18-19C
楼門49-42		黒色胎土。古様。朝鮮系か。		楼門49-43		大型。	
A-045	楼門44	地区 楼門49-44：御楼門跡周辺	区層 J・K-24瓦集中部造成土	A-046	133	地区 133：御楼門跡南側石垣周辺 楼門49-45：御楼門跡周辺	区層 133：N-17 43T 瓦溜り 楼門49-45：M-26 造成土
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 145×99×54		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 133：171×124×80 楼門49-45：(176)×(130)×(66)	
		文様 左巻15珠	掲載	43	133	文様 左巻9珠	掲載
		刻印 -	推定年代 17-18C			刻印	推定年代 18C
楼門49-44		中型。珠文丸く，周囲に粘土押込痕残るもの多い。		楼門49-45		珠文小さく尖るが，巴は平坦。A-012類に似るが珠文帯幅広い。	
A-047	楼門46	地区 楼門49-46：御楼門跡周辺	区層 ナンキンハゼ29号周辺	A-048	楼門47	地区 楼門49-47：御楼門跡周辺	区層 K-22表土
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm (-)×(-)×(-)		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 130×93×54	
		文様 右巻	掲載			文様 右巻16珠	掲載
		刻印 -	推定年代 17C			刻印 -	推定年代 17-18C
楼門49-46		圏線あり。中型。古様。		楼門49-47		小型。巴小さく，外に開く。	

第 45 表　軒丸瓦分類表４

分類	図版	特徴・法量（mm）等		分類	図版	特徴・法量（mm）等	
A-049		地区 89:北御門跡石垣修復 楼門49-48:御楼門跡周辺	区層 89:a・b-38・39 ３段区層 楼門49-48:J-28カクラン	A-050		地区 -	区層 -
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 89: (-) ×(-)×49 楼門49-48: (-) ×(-)× (-)		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 125×82×43	
31 89		文様 左巻	掲載			文様 右巻12珠	掲載
		刻印 -	推定年代 17C			刻印 -	推定年代 18-19C
楼門49-48	89	周縁広い。珠文小さい。巴盛り上がる。中型。古様。		本丸108-958	本丸958	小型。珠文丸い。巴やや小さい。	
A-051		地区 -	区層 -	A-052		地区 -	区層 -
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 長軸：(116)×70×43 短軸：108×70×43		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 長軸：(-)×79×50 短軸：(110)×79×50	
本丸116-1005		文様 右巻16珠	掲載 本丸1005	本丸116-1006		文様 右巻15珠	掲載
		刻印 -	推定年代 18-19C			刻印 -	推定年代 18-19C
	本丸1005	資料は隅軒丸瓦。巴やや小さい。文様区面取り。			本丸1006	資料は隅軒丸瓦。珠文やや大きい。巴太身。	
A-053		地区 -	区層 -	A-054		地区 -	区層 -
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 長軸：127×72×39 短軸：(105)×72×39		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 〈140×97×47〉	
本丸116-1007		文様 右巻12珠	掲載 本丸1007			文様 右巻12珠	掲載 二丸449
		刻印 -	推定年代 18-19C			刻印 -	推定年代 18-19C
	本丸1007	資料は隅軒丸瓦（体部は伏間状）。珠文大きい。巴やや小さい。			二丸449	小型。珠文やや大きい。巴小さく，頭部丸く尾長い。	
A-055		地区 -	区層 -	A-056		地区 -	区層 -
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 〈138×95×60〉		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 〈長軸：134×63×35 短軸：115×63×35〉	
		文様 右巻12珠	掲載 二丸450			文様 右巻11珠	掲載 二丸456
		刻印 石（か）？	推定年代 18-19C			刻印	推定年代 18-19C
	二丸450	小型。珠文やや大きい。巴やや太身。上部２ヶ所，右下２ヶ所珠文-周縁間に笵傷。			二丸456	資料は隅軒丸瓦。小型。珠文やや大きい。巴やや小さい。	
A-057		地区 190:御楼門跡南側石垣周辺	区層 M・N-12・13 44T 瓦廃棄土坑	A-058		地区 189・369：御楼門跡南側石垣周辺 192：御角櫓跡	区層 189：M・N-12・13 44T 瓦廃棄土坑 369：M・N-3 カクラン
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 172×123×87		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 189:156×102×60 369:155×105×61 192:152×103×60	
51 190		文様 右巻(8)珠	掲載	51 189		文様 右巻14珠	掲載
		刻印 -	推定年代 17-18C	85 369		刻印	推定年代 18-19C
	190	珠文小さく散漫。巴頭部大きい。		51 192	369	中型。瓦当厚い。瓦当面に雲母目立つ。珠文大。	
A-059		地区 191：御楼門跡南側石垣周辺	区層 M・N-12・13 44T 瓦廃棄土坑	A-060		地区 194：御楼門跡南側石垣周辺	区層 M・N-12・13 44T 瓦廃棄土坑
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 171×126×73		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 200×160×85	
51 191		文様 右巻(10)珠	掲載	51 194		文様 左巻(9)珠	掲載
		刻印	推定年代 18-19C			刻印	推定年代 17-18C
	191	珠文小さく散漫。巴間隙広く，外開で稜線が入る。瓦当周縁に板目跡。			194	大型。珠文小で散漫。巴大。台形状のもの多い。珠文周囲に粘土押込痕残るもの多い。	
A-061		地区 559：外御庭跡	区層 N-1造成土	A-062		地区 641：外御庭跡	区層 D・E-1' 42T 堀埋土
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm (-) ×(-)× (-)		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 136×(-)×(-)	
119 559		文様 右巻	掲載	125 641		文様 右巻(12)珠	掲載
		刻印	推定年代 17C			刻印 谷山製（刻印153）	推定年代 18-19C
	559	中型。珠文小さい。圏線あり。巴尾長く圏線に連続する。珠文・巴ともに薄く平坦。古様。			641	小型。珠文大きい。巴小さい。	
A-063		地区 560:外御庭跡	区層 L-1' 造成土	A-064		地区 193:御楼門跡南側石垣周辺	区層 M-N-12・13 44Ｔ瓦溜
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 135×(-)× (-)		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm (-)×(-)×(-)	
119 560		文様 右巻(12)珠	掲載	51 193		文様 右巻	掲載
		刻印	推定年代 18-19C			刻印	推定年代 17-18C
	560	小型。瓦当面に雲母目立つ。珠文大。			193	中型。珠文小。巴細く長い。古様。	

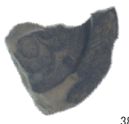
第 46 表　軒丸瓦分類表５

分類	図版	特徴・法量（mm）等	分類	図版	特徴・法量（mm）等
A-065 挿No. 119 85 掲No. 561 368	 561	地区 561:外御庭跡 368:御角櫓跡 区層 561:N-1' 造成土 368:L-1・2 瓦経× 文経× 内径mm 561: (-) ×(-)× (-) 368: (-) ×(-)× (-) 文様 左巻(12)珠 掲載 刻印 推定年代 17C 周縁広い。珠文小さい。巴先端はやや尖り，細長い。瓦当裏面の周縁は、強いナデにより一段低くなる。古様。	A-066 挿No. 85 掲No. 371	 371	地区 371:御角櫓跡 区層 L-3 カクラン 瓦経× 文経× 内径mm 138×93×52 文様 右巻(13)珠 掲載 刻印 推定年代 17C 周縁広い。珠文小さい。巴の間の間隔はやや広い。瓦当裏面の周縁は、強いナデにより一段低くなる。古様。
A-067 挿No. 85 掲No. 365	 365	地区 365:御角櫓跡 区層 M-1排水溝③ 瓦経× 文経× 内径mm 長軸：125×78×50 短軸：110×78×50 文様 右巻13珠 掲載 本丸1007 刻印 推定年代 18-19C 資料は隅軒丸瓦（体部伏間状）。珠文やや大。巴長い。	B-001 挿No. 85 掲No. 379 楼門49-49・50	 楼門49	地区 379:御角櫓跡 楼門49-49・50：御楼門跡周辺 区層 379:M-1 排水溝①埋土 楼門49-49：I-24 造成土 楼門49-50：N-26造成土 瓦経× 文経× 内径mm 379:165×118×ー 楼門49-49:162×118×96 楼門49-50:158×115×98 文様 牡丹紋 掲載 刻印 推定年代 18-19C 花弁やや尖り，襞凸線で表現。花芯・弩右下がり。隅軒丸瓦あり。
B-002 挿No. 楼門50-51 掲No.	 二丸435	地区 楼門50-51：御楼門跡周辺 区層 H-24造成土 瓦経× 文経× 内径mm 191×140×128 文様 牡丹紋 掲載 二丸435 刻印 瓦（刻印072-1） 推定年代 18-19C 大型。花弁襞隆起。B-006類に似る。体部布目なし。	B-003 挿No. 130 51 119 掲No. 665 195 562 楼門50-52	 楼門52	地区 195:御楼門跡南側石塀周辺 665:能舞台跡 562:外御庭跡 楼門50-51:御楼門跡周辺 区層 15:M-12 44Tカクラン 665:I-12焼塩り 562:L-1' 瓦埋土 楼門50-51:H-25造成土 瓦経× 文経× 内径mm 15:173×130×ー 665: (-) ×(-)× (-) 562:116×(-)× (-) 楼門50-51:191×140×128 文様 牡丹紋 掲載 二丸436 刻印 推定年代 18-19C 周縁やや狭い。花弁襞隆起。花芯に丸み。文様中央上部左右非対称。文様区面取り。隅軒丸瓦あり。
B-004 挿No. 44 125 掲No. 136 642 楼門50-53・54	 楼門54	地区 136:御楼門跡南側石塀周辺 642:外御庭跡 楼門50-53・54：御楼門跡周辺 区層 136:N-17 43T七高瓦溜り 642:E-1' 42T瓦埋土 楼門50-53: I-23 楼門50-54:一括 瓦経× 文経× 内径mm 136: (-) ×(-)× (-) 642: (-) ×(-)× (-) 楼門50-53: (156)×(124)× (112) 楼門50-54:(-)×(-)×(121) 文様 牡丹紋 掲載 本丸965 刻印 推定年代 18-19C 花弁襞凸線で表現。B-001類に似るも，花弁に丸みあり。	B-005 挿No. 85 掲No. 377 楼門50-55・56	 楼門55	地区 377:御角櫓跡 楼門55・56：御角櫓跡 区層 377:御角櫓跡一括 楼門50-55：C-36 上層 楼門50-56：N-15 36T造成土 瓦経× 文経× 内径mm 377: (-) ×141× (-) 楼門50-55:170×115×107 楼門50-56: (-) ×(-)× (-) 文様 牡丹紋 掲載 刻印 推定年代 18-19C 花弁襞不明瞭。花芯上部凹む。
B-006 挿No. 楼門50-57 掲No.	 楼門57	地区 楼門50-57：御角櫓跡周辺（平成11年度調査） 区層 - 瓦経× 文経× 内径mm 168×129×110 文様 牡丹紋 掲載 刻印 推定年代 18-19C 瓦当厚い。花弁襞隆起。花芯平坦で上部凹む。B-002類に似る。	B-007 挿No. 楼門50-58 掲No.	 二丸439	地区 楼門50-58：御楼門跡周辺 区層 M-1排水溝出口付近 瓦経× 文経× 内径mm 184×134×123 文様 牡丹紋 掲載 二丸439 刻印 推定年代 18-19C 大型。花弁襞葉脈状。
B-008 挿No. 楼門50-59 掲No.	 楼門59	地区 楼門50-59：御楼門跡周辺 区層 楼門50-59:L-1 撹乱②一括 瓦経× 文経× 内径mm 194: (-) ×(-)× (-) 楼門50-59: (200)×(146)× (134) 文様 牡丹紋 掲載 刻印 推定年代 18-19C 大型。花弁襞を葉脈状の太線で表現。	B-009 挿No. 楼門50-60 掲No.	 楼門60	地区 楼門50-60：御楼門跡周辺 区層 H・I-25区境，瓦集中部①，その他 瓦経× 文経× 内径mm 162×109×101 文様 牡丹紋 掲載 刻印 推定年代 18-19C B-001類・004類に似る。花弁やや丸く，襞凸線で表現。
B-010 挿No. 楼門50-61 掲No.	 楼門61	地区 楼門50-61：御楼門跡周辺 区層 N-25造成土 瓦経× 文経× 内径mm 180×147×125 文様 牡丹紋 掲載 二丸437 刻印 推定年代 18-19C 花芯４つに割れる。周囲花弁出入り少なく，円形に近い。文様区経にばらつきあり。	B-011 挿No. 楼門51-62 掲No.	 二丸438	地区 楼門51-62：御角櫓跡周辺（平成11年度調査） 区層 - 瓦経× 文経× 内径mm (-) ×122×108 文様 牡丹紋 掲載 二丸438 刻印 推定年代 18-19C 花弁襞隆起。花芯下方平坦。
B-012 挿No. 楼門51-63 掲No.	 二丸440	地区 楼門51-63：御角櫓跡周辺（平成11年度調査） 区層 - 瓦経× 文経× 内径mm 〈198×143×133〉 文様 牡丹紋 掲載 二丸440 刻印 推定年代 18-19C 大型。B-008類に似る。花弁襞葉派状。	B-013 挿No. 100 掲No. 493 楼門51-64	 楼門64	地区 493:御角櫓跡西側石塀周辺 楼門51-64:御楼門跡周辺 区層 493:F・G-1 48T 瓦溜り 楼門51-64:I-24 造成土 瓦経× 文経× 内径mm 493: (-) ×(-)× (-) 楼門51-64:(190)×(126)×(96) 文様 牡丹紋 掲載 刻印 推定年代 18-19C 花弁襞隆起。

第 47 表　軒丸瓦分類表６

分類	図版	特徴・法量（mm）等		分類	図版	特徴・法量（mm）等	
B-014	楼門65	地区 楼門51-65：御楼門跡周辺	区層 H-24 Ⅳ層下	B-015	楼門66	地区 楼門51-66：御楼門跡周辺	区層 J-K-24瓦集中部 造成土
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm (150)×95×79□		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 176×121×110	
楼門51-65		文様 牡丹紋	掲載	楼門51-66		文様 牡丹紋	掲載
		刻印	推定年代 18-19C			刻印	推定年代 18-19C
		小型。花弁襞葉派状。				花弁襞隆起。花芯V字状で大きい。	
B-016	P1155	地区 375・378御角櫓跡 総括54-47:場外	区層 375:御角櫓跡一括 378:L-1 排水溝③造成土 総括54-47:R・S-1' 61T 表土	C-001	楼門67	地区 楼門51-67：御楼門跡周辺	区層 K-28 造成土
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 375:長軸：(−)×(−)×(−) 短軸：(−)×(−)×(−) 378:(−)×(−)×(−) 総括54-47:(−)×(−)×(−)		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm (150)×(104)×(90)	
85 375 85 378 総括 54-47		文様 牡丹紋	掲載	楼門51-67		文様 四七桐紋	掲載
		刻印	推定年代 18-19C			刻印	推定年代 17C
		大型。隅軒丸瓦あり（体部伏間状）。花弁襞葉派状。				葉は異形。きわめて古様。体部コビキA。	
C-002	楼門68	地区 楼門51-68：御楼門跡周辺	区層 J-29 カクラン	C-003	楼門69	地区 楼門51-69：御楼門跡周辺	区層 M-20 造成土
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm (126)×(90)×(80)		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm (130)×(100)×(84)	
楼門51-68		文様 均整唐草三巴文	掲載	楼門51-69		文様 螺紋か	掲載
		刻印	推定年代 17-18C			刻印	推定年代 17C
		外区に２珠で区画した均整唐草文２組を配する。三巴中央に珠点。焼成悪く，胎土黒色。堂平窯系陶器瓦と同文。				異形文様。表面褐色で，胎土・焼成も異質。朝鮮系か。	
C-004	楼門70	地区 楼門51-70：御楼門跡周辺	区層 K-21 上面Ⅱ	C-005	本丸964	地区 楼門51-71：御楼門跡周辺	区層 -
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm (132)×90×80		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm (130)×(−)×(−)	
楼門51-70		文様 三巴文	掲載	楼門51-71		文様 桐紋	掲載 本丸964
		刻印	推定年代 18-19C			刻印 目（刻印141）	推定年代 18C
		小型。珠文なし。				きわめて大型。	
C-006	楼門72	地区 楼門51-72：御楼門跡周辺	区層 H-27 造成土	C-007	楼門73	地区 楼門51-73：御楼門跡周辺	区層 J-1・2瓦溜り1 シラス混じり
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm (142)×(90)×(80)		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 135×89×83	
楼門51-72		文様 均整唐草三巴文	掲載	楼門51-73		文様 均整唐草三巴文	掲載
		刻印	推定年代 17C			刻印	推定年代 17-18C
		陶器瓦。小型。瓦当面に灰色釉。外区に２珠で区画した均整唐草文２組を配する。唐草太い。圏線あり。三巴中央に珠文。巴は頭部先端尖り，尾は次の巴に接する。胎土は赤褐色。堂平窯系か。				陶器瓦。小型。瓦当面に灰色釉。外区に２珠で区画した均整唐草文2組を配する。唐草細く，中心飾り葉長。太い圏線あり。三巴中央に珠文。胎土は赤褐色。堂平窯系か。	
C-008	楼門74	地区 楼門51-74：御楼門跡周辺	区層 L-28 造成土	C-009	楼門75	地区 381:御角櫓跡 楼門51-75:御楼門南側石垣周辺	区層 381:M-1 排水溝②埋土 楼門51-75:K-7・8 拡張
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm (−)×(−)×(−)		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 381:(−)×(−)×(−) 楼門51-75:(75)×94×88	
楼門51-74		文様 雲文	掲載	85 381 楼門51-75		文様 連珠花十字文	掲載 市二丸Ｇ298/299/300/301
		刻印	推定年代 古代か			刻印	推定年代 17C
		狭い圏線内に圏線。雲文を配する。雲文は中央半球状で，外向き対のものが上下左右に展開するものと思われる。薄手異様な作りで，丸部表面に縄タタキ。様式的には古代楽浪郡の瓦に似る。朝鮮系か。				小型の連珠帯内に花十字文を配する。長崎産と推定。	
C-010	楼門76	地区 楼門51-76：御楼門跡周辺	区層 J-29 カクラン	C-011	楼門77	地区 楼門51-77：御楼門跡周辺	区層 I-27造成土
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 146×(−)×(−)		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm (−)×(−)×(−)	
楼門51-76		文様 無文	掲載	楼門51-77		文様 六弁花か	掲載
		刻印	推定年代 19-20C			刻印	推定年代 17C
		無紋。近現代の資料。				不明文。古様。朝鮮系か。	
C-012	楼門78	地区 246：御楼門跡南側石垣周辺 楼門51-78:御楼門跡周辺	区層 246:K-9 41T 拡張部カクラン 楼門51-78:I-28 撹乱	C-013	本丸1009	地区 -	区層 -
挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm 246:(−)×(−)×(−) 楼門51-78:146×89×83		挿No. 掲No.		瓦経×文経×内径mm (−)×(−)×(−)	
63 246 楼門51-78		文様 均整唐草三巴文	掲載	本丸116-1009		文様 均整唐草三巴文	掲載 本丸1009
		刻印	推定年代 17-18C			刻印	推定年代 17-18C
		陶器瓦。外区に２珠で区画した均整唐草文２組を配する。巴に太圏線があり，尾に連続。唐草細く，中心飾りに丸み。巴頭尖り中央に珠点。堂平窯系か。				陶器瓦。外区に２珠で区画した均整唐草文２組を配する。巴に圏線あり，尾に連続。堂平窯系か。	

第 48 表　軒丸瓦分類表 7

分類	図版	特徴・法量（mm）等		分類	図版	特徴・法量（mm）等	
C-014	137	地区 137:御楼門跡南側石垣周辺	区層 N-17　43T七高瓦　溜り	C-015	 380	地区 380：御角櫓跡	区層 L-1造成土
挿No. / 掲No.		瓦経×文経×内径mm　172×129×91		挿No. / 掲No.		瓦経×文経×内径mm　(-)×(-)×(-)	
44 / 137		文様 三巴文	掲載	85 / 380		文様 牡丹紋か	掲載
		刻印	推定年代 18-19C			刻印	推定年代 17-18C
		珠文なし。巴上面平坦。				小型。珠文有。花弁襞葉派状。	
C-016	犬追69	地区 -	区層 -	C-017	犬追70	地区	区層
挿No. / 掲No.		瓦経×文経×内径mm　〈128×(-)×(-)〉		挿No. / 掲No.		瓦経×文経×内径mm　(-)×(-)×(-)	
		文様 連珠五葉文	掲載 犬追69・154			文様 均整唐草三巴文	掲載 犬追70
		刻印	推定年代 18-19C			刻印	推定年代 18-19C
		小型。珠文ごく小さい。半球状中心に五葉。古様。				外区に均整唐草文。三巴先端尖り，中央に珠点。焼成悪く，胎土黒色。堂平窯系陶器瓦と同文。	
C-018	P055	地区 総括45-16：唐御門跡	区層				
挿No. / 掲No.		瓦経×文経×内径mm　(-)×(-)×(-)					
総括 45-16		文様 均整唐草三巴文	掲載				
		刻印	推定年代 17C				
		外区に２珠で区画した均整唐草文２組を配する。巴頭部凹む。三巴中央に珠点。焼成やや軟。堂平窯系陶器瓦と同文。					

主要引用・参考文献（遺物）

瓦関係

市川創 2015「徳川期大坂城の瓦」『大阪文化財研究所研究紀要』第 16 号大阪文化財研究所

上田耕 2014「鹿児島（鶴丸城）二之丸跡から発見の花十字紋瓦とその背景―近代以前の鹿児島県内のキリスト教関連遺物―」『新田栄治先生退職記念論文集』

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006『堂平窯跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第（106）

鹿児島市教育委員会 1984『鹿児島（鶴丸）城二之丸跡』鹿児島市文化財発掘調査報告書第５集

鹿児島市教育委員会 1988『名山遺跡－屋内運動場建設事業等に伴う第１次～３次緊急発掘調査報告書－』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書第８集

鹿児島市教育委員会 2000『鹿児島（鶴丸）城二之丸跡 G 地点』鹿児島市教育委員会発掘調査報告書第 28 集

鹿児島市教育委員会 2002『名山遺跡－名山小学校校庭誠意事業に伴う第５次埋蔵文化財確認調査報告書－』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書第 38 集

鹿児島市教育委員会 2003『鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書－共研公園・琉球館跡－』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書第 39 集

鹿児島市教育委員会 2017『鹿児島（鶴丸）城御厩跡』鹿児島市教育委員会発掘調査報告書第 82 集

笠原信男 1996「仙台藩の瀬戸瓦」『東北歴史資料館研究紀要』第 22 巻東北歴史資料館

金子智 1988「近世瓦の刻印」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 43 号第４分冊早稲田大学大学院文学研究科

金子智 2014「江戸時代における造瓦技術の変遷」『考古学ジャーナル』No652 ニューサイエンス社

川口洋平 2015「南蛮屏風に描かれた瓦」『故高野晋司氏追悼論文集』高野晋司氏追悼論文集刊行会

桜田小百合 2017「徳川期大坂城瓦の編年試案」『大阪文化財研究所研究紀要』第 18 号

長崎県教育委員会 2004『長崎奉行所（立山役所）跡・炉粕町遺跡』長崎県文化財調査報告書第 177 集

長崎県教育委員会 2005『長崎奉行所（立山役所）跡・岩原目付屋敷跡・炉粕町遺跡』長崎県文化財調査報告書第 183 集

西野元勝 2021「考古学からみた近代窯業技術伝播の一様相」『原点回帰・南の考古学　前迫亮一代表還暦記念論集』南九州縄文研究会

橋口尚武 2009「鹿児島県内の石製鬼瓦の研究」『南九州縄文通信 No.20　南の縄文・地域文化論考　新東晃一代表還暦記念論文集』下巻

宮下雅史 2003「花十字紋瓦考」『西海考古』第５号西海考古同人会

埋蔵文化財研究会編 2017『幕藩体制下の瓦　発表要旨・資料集』第 6 回埋蔵文化財研究集会

山崎信二　2008 『近世瓦の研究』同成社

苓北町教育委員秋 1998『富岡城跡Ⅲ』苓北町文化財調査報告第６集

苓北町教育委員会 1986『調査報告書　富岡城（城の歴史と城跡）』

陶磁器

※陶磁器の産地・年代観については，佐賀県立九州当時文化館大橋康二先生、鹿児島大学法文学部渡辺芳郎教授，公益財団法人鹿児島県文化振興財団上野原城文の森関明恵氏より多大な御教示を賜った。

姶良町教育委員会 1995『元立院窯跡』姶良町埋蔵文化財発掘調査報告書第６集

第 49 表　軒平瓦分類表 1

分類	挿No	掲No	地区/区・層	瓦当幅(mm)	文様区幅(mm)	瓦当高(mm)	文様区高(mm)	平/桟	瓦当貼	文様	掲載	刻印	年代	特徴	図版
A-001	楼門 52-79		I-23 21T	313	193	70	40	平	×	大坂式		「短冊に「太宗」」刻印001/短冊に「太喜」刻印002/短冊に「太宗」刻印003(左/右周縁)	19C	大型。中心飾り中央だるま状で肥大。中心飾り脇および子葉はY字をなし，切れ込み深い。刻印は2種で付されないものあり。	楼門80
	楼門 52-80		御楼門跡周辺I-23	315	194	66	40								
A-002	楼門 52-81		M-2 排水溝③ 造成土	(241)	172	55	33	平		大坂式			17－18C	大型。中心飾り中央が三角を呈し尖る。唐草先端尖る。	楼門81
A-003	楼門 52-82		I-20 コーナー 瓦溜まり 造成土	251	157	58	33	平	○	大坂式			17－18C	中心飾り中央が鳥形を呈し，下部珠文大きい。中心飾り脇・脇下は中央と離れる。唐草先端尖る。子葉やや外開き。文様硬直化。A-020類に似るが唐草巻き込み強。	楼門82
A-004	楼門 52-83		L-26	295	166	50	28	平	×	大坂式			19C	大型。中心飾り中央肥大。唐草・子葉長く伸び，基部は中心飾りに達する。子葉は若葉状に開く。	楼門83
A-005	86	382	御角樋跡	－	－	65	33	平	×	大坂式		四角に「吉」(刻印041)(左周縁)	19C	大型。瓦当低い。文様やや肥大。中心飾り中央大きい。唐草先端尖る。子葉基部は唐草に接し大きい。左右周縁広い。隅軒平瓦あり(382)。	382
A-005a	楼門 52-84		H-25 造成土	325	154	50	27	平	×	大坂式			19C	大型。瓦当低い。A-005類の中心飾り脇及び子葉が改笵肥大し，左子葉先端は文様区角に接する。左右周縁広い。	楼門84
	楼門 52-85		I-25 造成土	－	－	45	25								
A-006	楼門 52-86		K-27 枡形排水溝 エリア⑱	－	－	52	34	(平)	○	大坂式			17－18C	焼締系陶器瓦。中心飾り中央上部W形に切れ込む。中心飾り脇・脇下は矮小で中央と離れる。子葉は二つに分離する。	楼門86
	楼門 52-87		K-27 枡形排水溝 エリア⑱	－	－	50	33								
A-007	楼門 52-88		K-27 枡形排水溝 エリア⑱	(192)	(114)	(50)	28	平	×	大坂式		丸に「大」刻印036-1(左周縁)	19C	中心飾り中央肥大し，珠文は茎状に変化，脇下小さい。唐草・子葉長く伸び，基部は中心飾りに達する。子葉外開き。	楼門88
A-008	楼門 53-89		I-21 8T 攪乱 瓦集中部	(240)	(181)	64	(41)	平	○	大坂式			17－18C	大型。中心飾り中央が十字形を呈し，下珠文大きい。中心飾り脇下Y字状に開く。唐草先端尖る。子葉やや外開き。体部裏面に×字状条線(2単位)。	楼門89
A-009	楼門 53-90		―	(210)	(88)	－	24	桟	×	連珠三巴右11珠+大坂式	本丸969		18－19C	軒丸部あり。子葉に沈線。	本丸969
A-010	楼門 53-91		L-28 造成土	－	－	40	21		×	大坂式			19C	中心飾り中央肥大し，下部は茎状となる。子葉基部は唐草に接する。	楼門91
A-011	38	112	兵具所跡/K・L-34・35 51T 表土	－	－	59	42	平	○	大坂式	二丸472か		17－18C	大型。硬質。中心飾り中央鳥形，下部珠点きわめて大，脇下先端の尖る下向唐草を呈する。唐草先端尖。子葉異形で，外枝大きく外反し，内枝もやや外反。	112
	楼門 53-93		L-27 造成土	(180)	(143)	57	41								
A-012	楼門 53-94		34T	(205)	132	40	23	桟	×	(無)+大坂式		隅丸方形に「森元」刻印020(左周縁)	19C	鎌軒桟瓦。瓦当は桟部側高い。中心飾り脇切込深い。脇下下方二枝に分かれる。唐草先端玉状。子葉は大きく，切れ込み深い。	楼門94
	楼門 53-95		I-27 造成土	(210)	130	40	23								

第 50 表　軒平瓦分類表２

分類	挿No	掲No	地区／区・層	瓦当幅(mm)	文様区幅(mm)	瓦当高(mm)	文様区高(mm)	平／桟	瓦当貼	文様	掲載	刻印	年代	特徴	図版
A-013	86	383	御角櫓跡／M･N-1　11T造成土	－	－	44	21		×	大坂式		丸に「大」刻印036-1／丸に「吉」刻印040-7（右周縁）	19C	中心飾り中央やや大きい。唐草長く先端玉状。子葉大きく切込深い。角軒平瓦あり（P1220）。	楼門96
	楼門53-96		楠木根回し	(132)	(79)	―	22								
	楼門53-97		K-28瓦集中部②	―	(106)	39	22								
A-014	楼門53-98		34T東側楠木根回しⅠ～Ⅴ	162	(194)	47.5	26	平	×	大坂式		小判に「(不明篆書)」刻印083-1（左周縁）/丸に「金」刻印050（左周縁）/丸に「小」刻印038-1（右周縁）	19C	中心飾り中央やや大きい。唐草小さく，先端尖る。周縁広い。子葉基部唐草に接する。	楼門99
	楼門53-99		I-25造成土	―	132	43	25								
A-015	楼門53-92		I-24瓦集中部①	304	150	(45)	27	平	×	大坂式		「右？」(篆)刻印098(左周縁)/丸に「休」刻印039-1(右周縁)/四角に「荒瓦安」刻印0009(左周縁)	19C	中心飾り中央やや大きく，宝珠形。唐草小さく先端尖る。子葉やや大きく，基部唐草に接する。周縁広い。左右文様区両側に縦方向笵傷（深浅あり）。体長328。釘穴1（径9-10）。	楼門92
	楼門53-100		N-25造成土	(146)	(90)	―	28								
A-016	楼門53-101		H･I-27	―	―	53	32		×	大坂式			17－18C	中心飾り中央小さく，脇Y字にならず凹みとなる。やや古様。	楼門101
A-017	楼門53-102		―	(175)	118	41	22.5	桟	×	(無)+大坂式			19C	鎌軒桟瓦。中心飾り下茎長く，脇小さい。唐草先端丸い。子葉大きく切込深い。	楼門102
A-018	楼門53-103		天文観測室中央基礎	―	(82)	42	22		×	大坂式			18－19C	唐草小さく，先端丸い。	楼門103
A-019	楼門54-104		H-25 9T造成土	―	―	55	32	平	×	大坂式変		山に「西」刻印043-1,/小判に「(不明篆書)」刻印085（左周縁）	18－19C	大坂式だが，唐草がY字を呈し，中心飾り-唐草間に小子葉が追加される。子葉はY字状とならない。	楼門104
	楼門54-105		J･K-24瓦集中部	(152)	(68)	―	30								
A-020	楼門54-106		J-23Ⅱ	―	―	50	36	平	○	大坂式			17－18C	やや大型。中心飾り鳥形で下方にやや大きい珠点。唐草先端尖る。子葉が外開き。A-003類に似るが，唐草巻込弱い。	楼門107
	楼門54-107		L-27埋土	(260)	160	52	36.5								
A-021	楼門54-108		J-22造成土	(135)	(76)	41	20	平	×	大坂式				中心飾り中央やや大きく，茎あり。子葉基部唐草に接する。唐草先端尖る。周縁広い。	楼門108
A-022	楼門54-109		I-24造成土	(130)	(66)	35	22.5		×	大坂式		丸に「石」刻印047-1（右周縁）	18－19C	中心飾り脇，唐草小さい。脇下下方二枝に分かれる。唐草先端丸い。体部薄手。	楼門109
A-023	楼門54-110		I-27造成土	(125)	(67)	38	23	桟	×	(無)+大坂式			19－20C	鎌軒桟瓦。中心飾り中央逆瓢箪形。中心飾り脇と子葉は切込深く，脇下は線状となる。唐草先端丸い。瓦当左小口にネジ跡(-)2あり。	楼門110
A-024			I-27造成土	(187)	(133)	57	38	(平)	△	大坂式			17－18C	大型。中心飾り鳥状でやや幅広。唐草先端尖る。A-008類に似るが唐草長い。	楼門111
A-025	楼門54-112		I-21瓦集中部攪乱	(147)	(70)	(45)	25	平	×	大坂式		四角に「吉」(刻印041)（左周縁）	18－19C	中心飾り中央上尖る。唐草・子葉やや小さい。唐草先端尖る。体長301。	楼門112

第 51 表　軒平瓦分類表３

分類	挿No	掲No	地区／区・層	瓦当幅(mm)	文様区幅(mm)	瓦当高(mm)	文様区高(mm)	平／桟	瓦当貼	文様	掲載	刻印	年代	特徴	図版
A-026	―		―	(188)	(93)	43	25	桟	(×)	連珠三巴右12珠+大坂式	二丸484・485・488		18－19C	軒丸部巴は角ばる。中心飾りクローバー形。唐草・子葉長く伸びる。唐草先端丸い。左子葉文様区に接する。軒丸部径86。	二丸488
A-027	―		―	(211)	(95)	21	43	桟	(×)	連珠三巴左12珠+大坂式	二丸492	丸に「金」刻印050/丸に「渡」刻印057（右周縁）	18－19C	軒丸部巴細身で角ばる。中心飾り中央大きい。唐草小さく先端丸い。子葉長く伸びる。軒丸部径88。	二丸492
A-028	―		―	(122)	(42)	(34)	20	桟	(×)	連珠三巴右12珠+大坂式	二丸495		18－19C	小型。軒丸部小さい。唐草長く伸び直線的で，先端丸い。軒丸部径53。	二丸495
A-029	楼門54-113		L-27 撹乱	―	(77)	45	27	桟	×	(無)+大坂式		四角に「池田」（刻印017）（左周縁）	19C	鎌軒桟瓦。中心飾り中央だるま形。中心飾り脇と子葉は切込深い。子葉大。中心飾り脇下は線状となる。唐草小さく先端丸い。	楼門113
A-030	楼門54-114		L-28 瓦集中部②	―	(93)	43	24	桟	×	(無)+大坂式		四角に「前」（左周縁）	19C	鎌軒桟瓦。中心飾り中央下珠文大きい。中心飾り脇下は線状となる。唐草小さく先端丸い。子葉は大きく，切込深い。	楼門114
A-031	楼門54-115		N-26・27 造成土	―	(113)	38	23	桟	×	(無)+大坂式			19C	鎌軒桟瓦。中心飾り中央-脇間広い。中心飾り脇下は線状となる。中心飾り脇と子葉は切込深い。唐草先端丸い。子葉大きい。	楼門115
A-032	楼門54-116		M-28 造成土	―	(132)	43	26	桟	×	大坂式			19C	鎌軒桟瓦。中心飾り中央雪だるま形。中心飾り脇下は線状となる。中心飾り脇と子葉は切込深い。唐草先端丸い。子葉大きい。	楼門116
A-033	119	564	外御庭跡/M-1' 造成土	-	-	43	24	桟	×	大坂式			19C	鎌軒桟瓦。中心飾り中央瓢箪形。中心飾り脇は分離気味で，脇下は線状となり長い。子葉は大きく，切込深い。	楼門117
	楼門54-117		I・J-23・24 造成土	―	―	42	26								
	楼門54-118		調査区2 造成土	―	(117)	―	27								
A-034	楼門54-119		I-25 9T 造成土	―	(130)	40	27	桟	×	連珠三巴+大坂式	本丸1016	丸に「渡」刻印057（右周縁）	18－19C	A-013類に似る。中心飾り中央大きい。中心飾り脇，子葉は切込深い。唐草先端丸い。	楼門119
	楼門54-120		J-21 造成土 撹乱	―	―	―	26								
A-035	楼門54-121		J-29 テニスコート	―	―	―	26		×	大坂式			18－19C	中心飾り中央雪だるま形。中心飾り下茎長。中心飾り脇下に斜め沈線。中心飾り脇小さい。唐草先端丸い。子葉は大きく，切込深い。	楼門121
A-036	楼門54-122		H-25 造成土	―	―	53	35	(平)	○	大坂式			17－18C	焼締系陶器瓦。A-006類・A-037類同文。中心飾り中央上部W形に切込，脇上二重線となる。中心飾り脇外寄りに沈線。唐草先端尖る。子葉は内外分離し，外側はY字状。	楼門122
A-037	楼門54-123		L-27	300	177	52	34	平	○	大坂式			17－18C	大型。硬質。A-006類・A-036類同文。中心飾り中央上部W形に切込，脇上二重線となる。下は大きめの点珠。中心飾り脇外寄りに沈線。唐草先端尖る。子葉は内外分離し，外側はY字状。	楼門123
A-038	楼門55-124		J・K-21 造成土	―	―	55	35		○	大坂式			17－18C	大型。A-008類・A-024同文。中心飾り鳥状でやや幅広。下珠文大きい。唐草先端尖る。A-008類に似るが唐草長い。	楼門124
	楼門55-125		N-27 排水溝内	―	―	57	37								